

大阪府茨木市所在

玉櫛遺跡Ⅱ

—大阪府営茨木玉櫛住宅(建て替え)新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2003年3月

財団法人 大阪府文化財センター



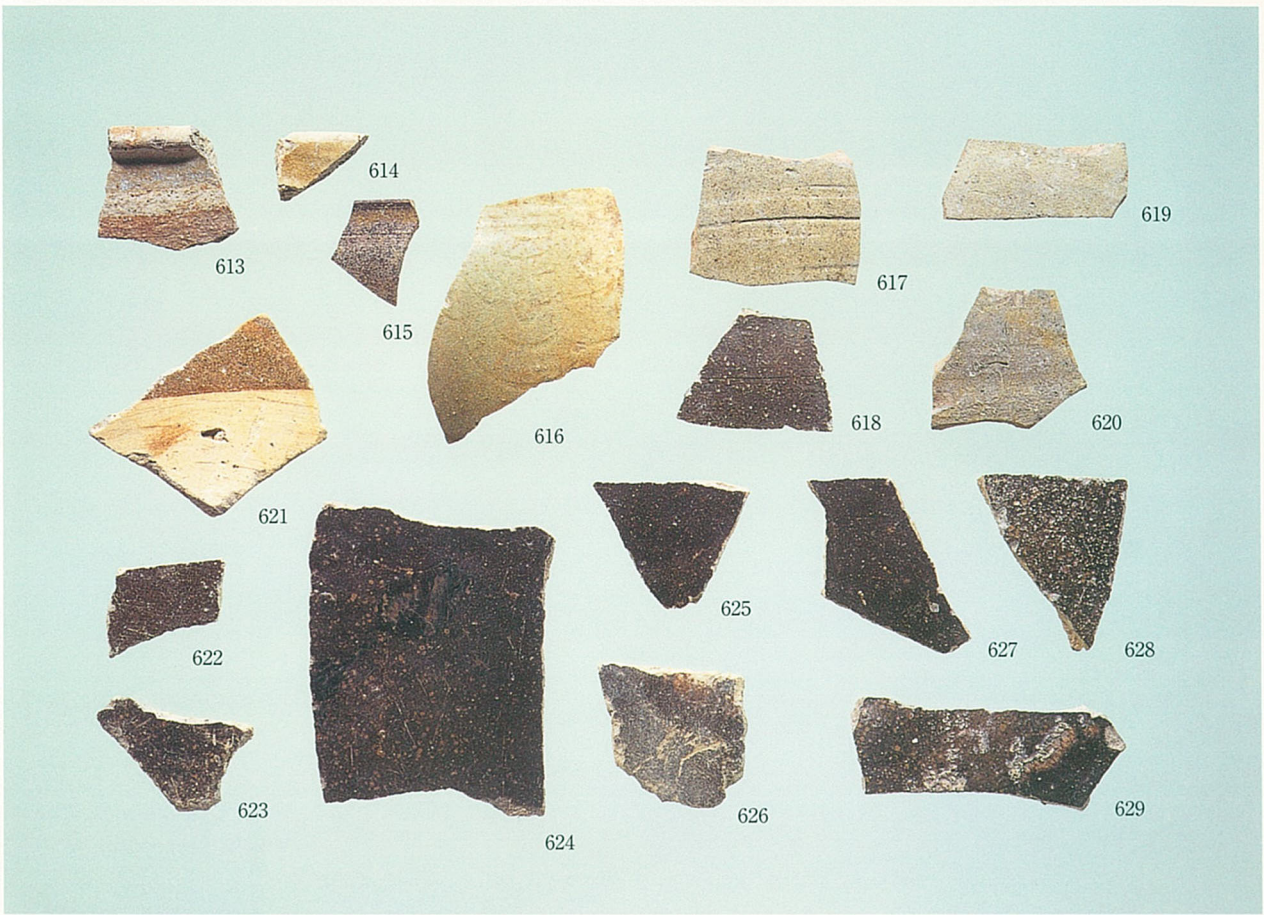
土坑90062出土遺物



輸入陶磁器



福建省產黃釉鐵繪盤



輸入陶器 (表)



輸入陶器 (裏)



白磁



青磁



白磁合子蓋



青白磁合子

序 文

玉櫛遺跡は大阪府茨木市の南部の平野部に位置する遺跡です。

遺跡の存在が知られるようになったのはそう古いことではなく、1990年に府営住宅の建て替えに伴って大阪府教育委員会が実施した確認調査によって多くの遺物が出土したことによります。その後大阪府教育委員会あるいは当センターが、府営住宅の建て替えに伴う調査を4次にわたり実施して参りました。

その結果、遺跡は中世の集落、生産域であることが確認され、遺跡のすぐ西側に広がる東奈良遺跡が弥生時代中期を中心とする拠点集落であることと著しい対比をなすことが明らかになって参りました。東奈良遺跡に比べて玉櫛遺跡がかなり低地に位置し、その湿潤さゆえ開発が遅れたことがその最大の要因であると考えられますが、いずれにせよ隣接しながら遺跡の性格が大きく違うことは非常に興味深いことといえましょう。

今回の調査では弥生時代後期の土器や、古墳時代中・後期の集落の一部を確認しました。このことは、遺跡の初源がこれまでの知見より大きく遡ることを確かなものとすると同時に、安威川下流域の低湿地の開発に初めて臨んだ人々の姿を明らかにし得たといっても過言ではありません。

さらに古代末から中世にかけては、実に多様な遺構、遺物を層位的に確認しました。それらは度重なる洪水に屈せず続けられた土地利用の変遷を如実に示しているといえるでしょう。特に京都尊勝寺出土瓦と同一範の瓦の出土は、従来撰関家あるいはその氏社である春日神社の影響力が強大であった同地に彼らと協調しつつも院勢力が進出してきたことを示しています。律令の古代から諸権門のせめぎ合う中世へ、まさに歴史のうねりを彷彿とさせます。

今回の調査は奇しくも二つの世紀にわたっての実施となり、私たちは激動の中、新しい世紀を迎えました。この名実とも歴史の変換点とでもいえる現代がどう位置づけられるのか、本書が新たな世紀の、あるいは新たな千年紀の歴史学にどう貢献し得るのか、その判断は後世の史家に委ねざるを得ません。弥生時代、古墳時代そして院政期に玉櫛に生きた人々同様、私たちも新たな時代を大いなる不安と期待の中で迎えている、今、彼らに伝え得ることはその程度でありましょうか。

調査に際しましては大阪府教育委員会文化財保護課、大阪府建築都市部住宅整備課あるいは地元関係者各位には、多大なご指導・ご協力をいただきました。記して感謝するとともに、今後とも当センターの事業に一層のご支援を賜るようお願いする次第です。

2003年3月

財団法人 大阪府文化財センター
理事長 水野 正好



例 言

1. 本書は、大阪府茨木市玉櫛所在玉櫛（たまくし）遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は大阪府営茨木玉櫛住宅（建て替え）新築工事に伴い、大阪府建築都市部住宅整備課の委託を受け、大阪府教育委員会指導のもと、財団法人大阪府文化財センターが実施した。
3. 現地調査は、本センター北部調査事務所調査第一係技師 駒井正明、山元 建、専門調査員 鈴木雅美を担当者として、（その3）を2000年11月30日から2001年3月31日まで、（その4）を2001年4月13日から2002年3月29日までおこなった。引き続き遺物整理は、同第一係技師 駒井正明、専門調査員 小野亜由美を担当者として、2002年5月31日から2003年3月31日まで実施した。
4. 調査中に出土した砥石については京都教育大学名誉教授井本伸廣氏にご教示を得、人形代付着物の分析は独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所高妻洋成氏、京都工芸繊維大学名誉教授佐藤昌憲氏にお願いし、金属製品の蛍光X線分析に際しては奈良大学西山要一氏にご高配を得た。また動物遺体については大阪市立大学安部みき子氏に、河道の変化と条里水田の開発については大阪府教育委員会阪田育功氏に、呪符木簡については中野麻理子氏に玉稿を賜った。
5. 調査・整理にあたっては、大阪府建築都市部住宅整備課をはじめ、以下の方々からご協力・ご教示を得た。記して感謝の意を表す（五十音順、敬称略）。
阿部幸一、上原真人、尾野善裕、尾上 実、狭川真一、佐藤亜聖、重金 誠、島野 穰、西田善一、西本安秀、服部聡志、濱野俊一、平尾政幸、藤澤典彦、古川久雄、村上知美、免山 篤、森岡秀人、森村健一、吉川義彦
6. 樹種鑑定は本センター中部調査事務所 山口誠治に、粒度分析は同 井上智博に依頼した。
7. 現場撮影は調査担当者が、遺物撮影は上野貞子がおこなった。
8. 現地調査ならびに整理作業では、以下の方々のお世話になった（五十音順）。
（現地調査）阪田信男、田中正子、辻本ゆりね、中川寿美、二宮栄子、樋口玲子、平田麻希、前田千津子、山田久美
（整理作業）立岩美津子、田中正子、野口佳子、中川寿美、二宮栄子、樋口玲子、平田麻希、前田千津子、松岡聖美、八十千里、山田久美
9. 本書の編集実務は駒井・小野がおこない、文責は目次に記した。
10. 2001年度までの調査は本センターの前身である（財）大阪府文化財調査研究センターがおこなったが、本文では（財）大阪府文化財センターに統一した。
11. 出土遺物ならびに調査・整理の過程で作成した資料類は、本センターで保管している。

凡 例

1. 本書に掲載した遺構実測図に付された北方位は、すべて国土座標第Ⅵ座標系の座標北を示す。
2. 国土座標および緯度・経度は、調査時に用いた日本測地系で表記した。
3. 本書で用いる標高はすべて東京湾平均海面で、図中では原則的にT.P.+を省略した。
4. 遺構図に記入した座標値の単位kmはすべて省略した。
5. 土色は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』2000年度版を用いた。
6. 本書の本文・挿図・写真図版の遺構・遺物番号はすべて一致する。
7. 出土遺物は原則的に、土器・瓦類を縮尺1/4、金属・石製品を縮尺1/3、木製品については挿図中のスケールを参照されたい。
8. 土器・瓦類の断面については、須恵器・陶磁器を黒塗り、瓦器・瓦質土器・瓦を網掛け、その他を白抜きとした。
9. 初出の遺構を太明朝体で表現し、対応する遺物掲載ページを（ ）内に記載した。
10. 各トレンチ名称は第1図および第11図中に表記した。また特に必要な場合は、その都度図中にトレンチ名を記載した。
11. 第Ⅳ章・第Ⅴ章を除く各章は、文字・語句の統一を図った。
12. 調査時と本書の遺構番号は一致する。

目 次

序文
例言
凡例

第Ⅰ章 調査にいたる経過	……………(阪田)	1
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境		
第1節 遺跡を取り巻く環境	……………(鈴木)	2
第2節 既往の調査成果	……………(駒井)	9
第Ⅲ章 調査成果		
第1節 調査の方法	……………(駒井)	10
第2節 整理の方法	……………(小野)	11
第3節 層序	……………(駒井)	12
第4節 検出遺構	……………(駒井)	23
第5節 出土遺物	……………(小野・駒井・鈴木)	83
第Ⅳ章 分析		
第1節 緒言	……………(駒井)	140
第2節 玉櫛遺跡の花粉・珪藻・プラントオパール分析	……………(パレオ・ラボ)	141
第3節 古墳時代須恵器のX線回析試験および化学分析試験	…(第四紀地質研究所)	171
第4節 玉櫛遺跡(その4)樹種鑑定結果	……………(山口)	178
第5節 玉櫛遺跡出土動物遺体について	……………(安部)	183
第6節 9Dトレンチ第Ⅳ-1包含層出土不明金属製品の蛍光X線分析結果について	……………(小野)	184
第Ⅴ章 考察		
第1節 緒言	……………(駒井)	186
第2節 玉櫛遺跡周辺における河道の変化と条里水田の開発	……………(阪田)	187
第3節 玉櫛遺跡(その4)で検出された流路堆積物の検討	……………(井上)	195
第4節 玉櫛遺跡出土須恵器の生産地について	……………(山元)	201
第5節 玉櫛遺跡(その3・4)出土遺物の検討	……………(小野)	203
第6節 玉櫛遺跡の集落変遷について-出土遺物の分布より	……………(小野)	210
第7節 玉櫛遺跡出土の呪術的遺物と「まじなひ」	……………(鈴木)	215
第8節 出土蘇民将来札の検討	……………(中野)	220
第9節 中世茨木における集落動向(試論)	……………(鈴木)	224
第Ⅵ章 まとめ	……………(駒井)	233
遺物観察表		

挿 図 目 次

- 第1図 遺跡位置図
第2図 周辺の地形
第3図 周辺の遺跡分布図
第4図 1C・2Cトレンチ断面
第5図 1D・2D・4D・5Dトレンチ断面
第6図 3D・6Dトレンチ断面
第7図 7Dトレンチ断面
第8図 7D・9D・10Dトレンチ断面
第9図 8Dトレンチ断面
第10図 標準断面模式図
第11図 第Ⅰ遺構面全体図
第12図 1Dトレンチ 土坑群
第13図 第Ⅱ遺構面全体図
第14図 第Ⅱ-2遺構面全体図
第15図 3Dトレンチ 溝30016
第16図 3Dトレンチ 溝30016内水利施設
第17図 10Dトレンチ全体図(左)・柱穴列100003(右)
第18図 8Dトレンチ 溝80147付近
第19図 9Dトレンチ 土坑90032・土坑90033
第20図 10Dトレンチ 土坑100001
第21図 第Ⅲ-1遺構面全体図
第22図 第Ⅲ-2(上)・第Ⅲ-3(下)遺構面全体図
第23図 自然流路30019内杭列
第24図 自然流路30019内杭列1・杭列2
第25図 自然流路30019内杭列3・杭列4
第26図 自然流路30019内杭列5・杭列6・杭列7
第27図 自然流路30019内杭列8・杭列9
第28図 7Dトレンチ東半全体図
第29図 9Dトレンチ 溝90144遺物出土状況
第30図 4Dトレンチ 第Ⅲ-1遺構面全体図
第31図 4Dトレンチ 土器群1(左)・土器群2(右)
第32図 9Dトレンチ 土坑90062
第33図 9Dトレンチ 柱穴90065
第34図 10Dトレンチ全体図
第35図 9Dトレンチ 柱穴列90068
第36図 9Dトレンチ 基壇状遺構
第37図 4Dトレンチ 第Ⅲ-2遺構面全体図
第38図 4Dトレンチ 第Ⅲ-2遺構面 土坑40036・
掘立柱建物40046
第39図 第Ⅳ-1遺構面全体図
第40図 3D・6Dトレンチ 遺構群
第41図 9Dトレンチ 遺構群
第42図 7D・10Dトレンチ 遺構群
第43図 第Ⅳ-2遺構面全体図
第44図 3D・6Dトレンチ 遺構群
第45図 3Dトレンチ 溝30024遺物出土状況
第46図 第Ⅳ-3遺構面全体図
第47図 6Dトレンチ北半全体図
第48図 9Dトレンチ西端全体図
第49図 7D・10Dトレンチ 遺構群
第50図 第Ⅴ遺構面全体図
第51図 1Dトレンチ 溝10175遺物出土状況
第52図 8Dトレンチ 溝80305杭検出状況
第53図 9Dトレンチ 溝90209杭検出状況
第54図 8Dトレンチ 第Ⅴ-2遺構面 轍検出状況
第55図 6Dトレンチ北半全体図
第56図 第Ⅵ遺構面全体図
第57図 第Ⅶ遺構面全体図
第58図 8Dトレンチ 掘立柱建物80405
第59図 8Dトレンチ 掘立柱建物80312
第60図 6Dトレンチ 柵状遺構(1)
第61図 6Dトレンチ 柵状遺構(2)
第62図 6Dトレンチ 柵状遺構(3)
第63図 第0、Ⅰ包含層出土遺物
第64図 第Ⅱ遺構面出土遺物(1)
第65図 第Ⅱ遺構面出土遺物(2)
第66図 第Ⅱ遺構面出土遺物(3)
第67図 第Ⅱ包含層出土遺物
第68図 第Ⅲ-1遺構面自然流路30019出土遺物(1)
第69図 第Ⅲ-1遺構面自然流路30019出土遺物(2)
第70図 第Ⅲ-1遺構面自然流路30019出土遺物(3)
第71図 第Ⅲ-1遺構面出土遺物(1)
第72図 第Ⅲ-1遺構面出土遺物(2)
第73図 第Ⅲ-1遺構面出土遺物(3)
第74図 第Ⅲ-1遺構面土坑90062出土遺物(1)
第75図 第Ⅲ-1遺構面土坑90062出土遺物(2)
第76図 第Ⅲ-1遺構面出土遺物(4)
第77図 第Ⅲ-2遺構面出土遺物
第78図 第Ⅲ-3遺構面出土遺物
第79図 第Ⅲ包含層出土遺物
第80図 第Ⅳ-1遺構面出土遺物
第81図 第Ⅳ-1包含層出土遺物(1)
第82図 第Ⅳ-1包含層出土遺物(2)
第83図 第Ⅳ-1包含層出土遺物(3)
第84図 第Ⅳ-2遺構面出土遺物
第85図 第Ⅳ-3遺構面出土遺物(1)
第86図 第Ⅳ-3遺構面出土遺物(2)
第87図 第Ⅳ-3包含層出土遺物
第88図 第Ⅴ遺構面出土遺物
第89図 第Ⅵ包含層出土遺物

- 第90図 第Ⅶ遺構面出土遺物
 第91図 第Ⅶ包含層出土遺物
 第92図 側溝出土遺物
 第93図 弥生土器（1）
 第94図 弥生土器（2）
 第95図 墨書土器（1）
 第96図 墨書土器（2）
 第97図 錢貨
 第98図 土製品・金属製品・石製品
 第99図 滑石製品
 第100図 砥石（1）
 第101図 砥石（2）
 第102図 砥石（3）
 第103図 瓦
 第104図 木製品（1）
 第105図 木製品（2）
 第106図 木製品（3）
 第107図 木製品（4）
 第108図 木製品（5）
 第109図 木製品（6）
 第110図 木製品（7）
 第111図 木製品（8）
 第112図 木製品（9）
 第113図 木製品（10）
 第114図 木製品（11）
 第115図 土壌サンプル採取地点図
 第116図 3 Dトレンチ堆積物中の珪藻化石分布図
 第117図 6 Dトレンチおよび5 Dトレンチ第Ⅶ包含層における堆積物中の珪藻化石分布図
 第118図 7 Dトレンチ西壁における珪藻化石分布図
 第119図 8 Dトレンチ南壁における珪藻化石分布図
 第120図 8 Dトレンチ東壁における珪藻化石分布図
 第121図 9 Dトレンチ南壁における珪藻化石分布図
 第122図 3 Dトレンチの花粉化石分布図
 第123図 6 Dトレンチの花粉化石分布図
 第124図 7 Dトレンチ西壁の花粉化石分布図
 第125図 8 Dトレンチ東壁の花粉化石分布図
 第126図 8 Dトレンチ南壁（試料1）の花粉化石分布図
 第127図 9 Dトレンチ南壁（試料6）の花粉化石分布図
 第128図 3 Dトレンチの植物珪酸体分布図
 第129図 5 Dトレンチの植物珪酸体分布図
 第130図 6 Dトレンチの植物珪酸体分布図
 第131図 3 Dトレンチの機動細胞珪酸体分布図
 第132図 5 Dトレンチの機動細胞珪酸体分布図
 第133図 6 Dトレンチの機動細胞珪酸体分布図
 第134図 7 Dトレンチの機動細胞珪酸体分布図
 第135図 8 Dトレンチ東壁の機動細胞珪酸体分布図
 第136図 8 Dトレンチ南壁の機動細胞珪酸体分布図
 第137図 9 Dトレンチの機動細胞珪酸体分布図
 第138図 三角ダイヤグラム位置分類図
 第139図 菱形ダイヤグラム位置分類図
 第140図 Mo-Mi-Hb三角ダイヤグラム
 第141図 Mo-Ch、Mi-Hb菱形ダイヤグラム
 第142図 Qt-Pl図
 第143図 SiO₂-Al₂O₃図
 第144図 Fe₂O₃-MgO図
 第145図 K₂O-CaO図
 第146図 TiO₂-MnO図
 第147図 3 Dトレンチ杭類の年輪数と杭径について
 第148図 9 Dトレンチ出土不明金属製品
 第149図 a-①定成・定量分析結果
 第150図 b-①定成・定量分析結果
 第151図 玉櫛遺跡周辺の地割と河川流路
 第152図 安威川と茨木川の合流
 第153図 調査区と周辺の地割（昭和23年撮影）
 第154図 10世紀から14世紀の河川流路
 第155図 玉櫛遺跡7 Dトレンチ断面模式図
 第156図 粒度分析結果
 第157図 玉櫛遺跡出土の古墳時代須恵器
 第158図 トレンチ別口縁部形態の数量比
 第159図 口縁部形態分類
 第160図 玉櫛遺跡出土瓦器塊
 第161図 弥生土器の分布状況
 第162図 須恵器の分布状況
 第163図 古代の遺物分布状況
 第164図 黒色土器の分布状況
 第165図 瓦器塊（Ⅰ・Ⅱ段階）の分布状況
 第166図 瓦器塊（Ⅲ・Ⅳ段階）の分布状況
 第167図 楠葉型瓦器塊の変遷
 第168図 中世陶器の分布状況
 第169図 14世紀以降の陶磁器の分布状況
 第170図 藤原摂関家<九条流>略系図
 第171図 茨木市平野部の中世前半集落等分布図

表 目 次

表 1	各トレンチ花粉分帯対照表
表 2	各トレンチ珪藻分帯対照表
表 3	放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果
表 4	胎土性状表
表 5	化学分析表
表 6	組成分類表
表 7	樹種鑑定一覧表 (1)
表 8	樹種鑑定一覧表 (2)
表 9	出土動物遺体一覧表
表 10	大阪府下人形集成一覧表
表 11	出土蘇民将来札一覧表

写 真 目 次

写真 1	珪藻化石顕微鏡写真 (1)
写真 2	珪藻化石顕微鏡写真 (2)
写真 3	産出した花粉化石 (1)
写真 4	産出した花粉化石 (2)
写真 5	3Dトレンチの植物珪酸体
写真 6	須恵器断面電子顕微鏡写真
写真 7	堆積層 H・G
写真 8	堆積層 C・F
写真 9	堆積層 C・E
写真 10	堆積層 D

巻 頭 図 版 目 次

巻頭図版 1	土坑90062出土遺物
巻頭図版 2	輸入陶磁器・福建省産黄釉鉄絵盤

巻頭図版 3	輸入陶器 (表) (裏)
巻頭図版 4	白磁・青磁・白磁合子蓋・青白磁合子

図 版 目 次

図版 1	調査地周辺 (1948年撮影)
図版 2	第II遺構面 (1)
図版 3	第II遺構面 (2)
図版 4	第III遺構面 (1)
図版 5	第III遺構面 (2)
図版 6	第III遺構面 (3)
図版 7	第III遺構面 (4)・第IV-1遺構面
図版 8	第IV-2遺構面
図版 9	第IV-3遺構面
図版 10	第V遺構面 (1)
図版 11	第V遺構面 (2)
図版 12	第VI遺構面 (1)
図版 13	第VI遺構面 (2)
図版 14	第VII遺構面 (1)
図版 15	第VII遺構面 (2)
図版 16	第VII遺構面 (3)
図版 17	第II遺構面出土遺物 (1)
図版 18	第II遺構面出土遺物 (2)
図版 19	第III-1遺構面出土遺物 (1)
図版 20	第III-1遺構面出土遺物 (2)
図版 21	第III-1遺構面出土遺物 (3)
図版 22	第III-1遺構面出土遺物 (4)
図版 23	第III-1遺構面出土遺物 (5)
図版 24	第III-1遺構面出土遺物 (6)
図版 25	第III-1遺構面出土遺物 (7)
図版 26	第III-1 (8)、III-2・3遺構面出土遺物
図版 27	第III-2・IV-1遺構面出土遺物 (1)
図版 28	第IV-1遺構面出土遺物 (2)
図版 29	第IV-2遺構面出土遺物
図版 30	第IV-3・V遺構面出土遺物 (1)
図版 31	第V遺構面出土遺物 (2)
図版 32	包含層出土遺物 (1)
図版 33	包含層出土遺物 (2)
図版 34	包含層出土遺物 (3)
図版 35	包含層出土遺物 (4) - 須恵器・弥生土器
図版 36	側溝出土遺物・墨書土器 (1)
図版 37	墨書土器 (2)
図版 38	土製品・銭貨・金属製品 (1)
図版 39	金属製品 (2)・石製品
図版 40	砥石
図版 41	瓦
図版 42	木製品 (1)
図版 43	木製品 (2)
図版 44	木製品 (3)

第I章 調査にいたる経過

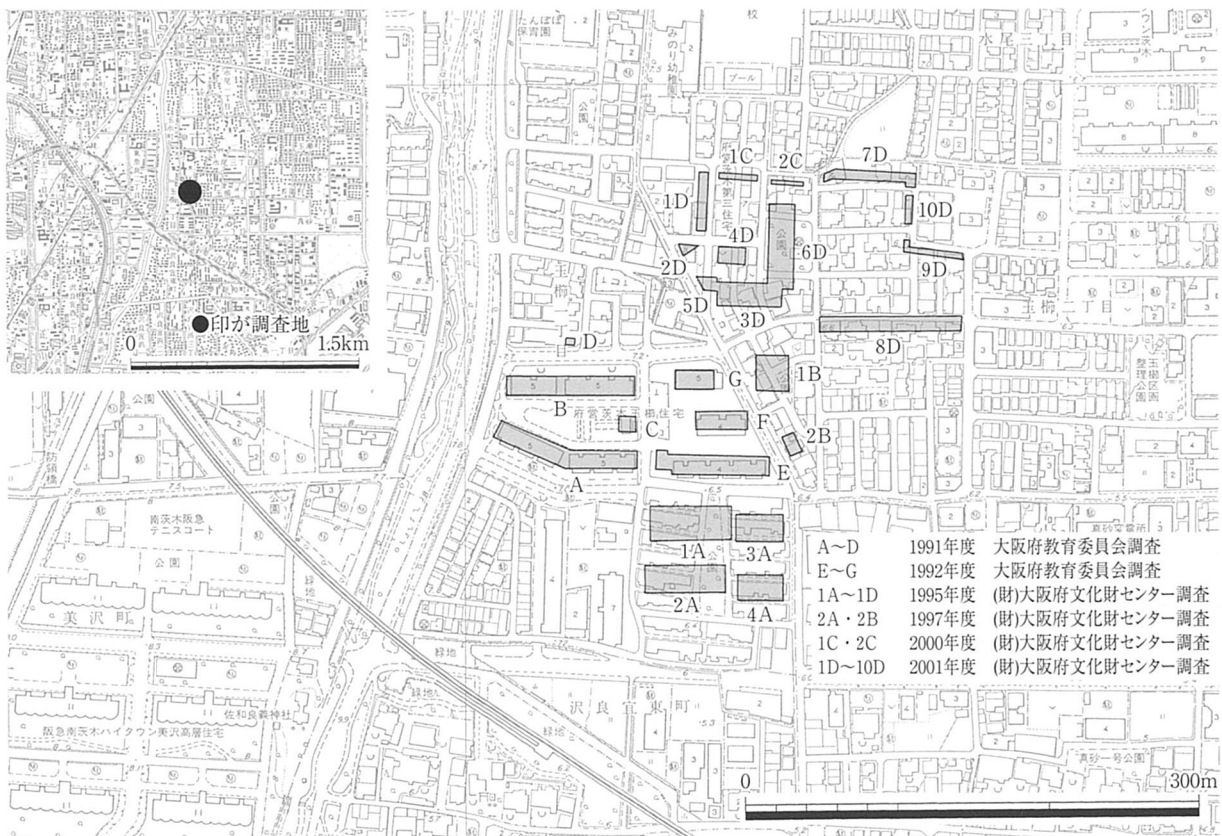
玉櫛遺跡は大阪府北部茨木市玉櫛1丁目・2丁目付近に所在する。この地域は千里丘陵の南東部の縁辺に位置し、西には茨木川（現在は廃川となって公園と道路になっている）、東には安威川が流れ、北摂の山地から流れ下る河川の形成した沖積低地にあたる。茨木川をはさんだ遺跡の西側には、銅鐸鑄型などを出土し、弥生時代のこの地域の拠点集落として著名な東奈良遺跡が所在する。

玉櫛遺跡が発見されたのは1990年のことである。大阪府建築都市部住宅整備課が計画した大阪府営茨木第3住宅建て替えに先立ち、文化財保護課が実施した試掘調査によって、中世や古墳時代の遺物が発見された。この試掘結果に基づき、府営住宅一帯は玉櫛遺跡と命名され遺跡として周知されることとなった。

住宅建て替えに先立つ発掘調査は、1991・1992年度に大阪府教育委員会によって7箇所、1995・1997年度に（財）大阪府文化財センターによって6箇所実施されている。

今回発掘調査を実施したのは、府営住宅用地の北東隅にあたる区域である。本格的な調査に先立ち、1999年11月に大阪府教育委員会文化財保護課によって4箇所の確認調査が実施された。それぞれの調査区で瓦器・須恵器などが出土したが、北東部の調査区では多量の中世遺物が出土し、集落の存在を予測させた。

この結果をうけて今回（財）大阪府文化財センターが、当該区域のうち住棟部分・付属施設部分・周辺道路部分における発掘調査を実施することとなり、2000年度に2箇所、2001年度に10箇所の発掘調査を実施した。



第1図 遺跡位置図

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡を取り巻く環境

1. 地理的環境

玉櫛遺跡は茨木市玉櫛1丁目・2丁目に所在する。茨木市は大阪府の北東部に位置し、市域は南北に長い。東は高槻市、南と南西は摂津市・吹田市、西と北西は箕面市・豊能郡豊能町、北は京都府亀岡市に接する。市域の南東には南西方向に淀川が流れる。

茨木市はその地勢から、山間・山麓部を中心とする北半部と平野部を中心とする南半部に大別できる。

北半部は、標高300m前後の緩やかな隆起準平原で北摂山地の一部である老ノ坂山地が連なり、その裾部にかけては丘陵や段丘が発達する。

南半部は第2図のとおりである¹⁾。西部分には標高50～100m前後の千里丘陵が広がる。北摂山地に源を有する佐保川・勝尾寺川・安威川・茨木川（現在大部分廃川、以下廃川部分を元茨木川と記す）が、千里丘陵の裾部と富田台地の縁辺にある低位段丘末端部に挟まれた谷部分を流下する。佐保川・勝尾寺川・茨木川と安威川上流部では河岸段丘や扇状地がみられ、元茨木川と安威川中流域以下では三島平野と呼ばれる沖積平野が形成されている。また富田台地の西辺部には高低差10m程の段丘崖がある。西辺部が緩やかな斜面を形成する台地の南辺部と様相が異なるのは、安威川の侵食によるものであろう。

玉櫛遺跡は元茨木川と安威川に挟まれた標高5～10mの沖積平野に位置し、その標高は6.5m前後である。当遺跡は元茨木川の左岸に広がる後背湿地に立地し、かつてより元茨木川の影響を多く受けてきた。玉櫛遺跡周辺の地形を鑑みると、千里丘陵の谷部分からはきだされた砂礫によって形成されたと思われる扇状地状の地形があり、元茨木川の手前でその地形と平野部の境目となる傾斜変換点を有す。そのため元茨木川はコンターにやや平行して長距離を流下しているように見え、安威川のようにコンターと川の流れが直交するような流路と対照的である。そこで周辺地形を検討する過程で茨木川を人工河川と考える意見も出ている。また元茨木川の両岸を比べると、千里丘陵を西方に控える右岸に比べ、左岸は地勢と元茨木川の自然堤防との影響によって1m以上低い。そして元茨木川が廃川となるまで、元茨木川と安威川に挟まれた地域は両河川の共同河川氾濫と悪水滞留による被害に悩まされてきた。この地域はもともと低湿地で排水性が悪く、特に悪水に伴う争いが絶えなかったことは近世文書からもうかがえる²⁾。それが破堤を活発に繰り返す元茨木川を「暴れ川」といわしめた所以であり、川の東側に氾濫が多くこの地域が水害を受け易かったのも、自然的な特性であろう。現在はほとんど宅地化しているものの、戦前は泥田もしくは水田に利用できない湿地が多く広がっていた³⁾。

2. 歴史的環境

旧石器時代 表面採集や後世の遺物包含層からナイフ形石器や有舌尖頭器が1点ないし数点、山麓部の初田遺跡、丘陵裾部の太田遺跡・安威遺跡・耳原遺跡・郡遺跡などで発見されている。また、平野部の東奈良遺跡・新庄遺跡からナイフ形石器が数点出土している。

縄文時代 まだ明確な遺構を残す遺跡は少なく、今後の調査が期待される。草創期～中期にかけては希薄でその大半が山間部での採集資料である。発掘調査によって出土したものでは東奈良遺跡の前期末

(大歳山式)のC字の爪形文土器、西福井遺跡^{にしふくい}では中期～後期の、初田遺跡・太田遺跡では後期の縄文土器がある。また、郡遺跡出土の石刀は後世の遺物包含層からのものであるが後期～晩期の所産であろう。最近の調査では宿久庄北遺跡より茨木市最古の押形文土器(高山寺式)が出土した⁴⁾。

市域の縄文時代遺跡は晩期が中心で、中でも滋賀里Ⅲ式～長原式の甕(深鉢)棺16基を検出した耳原遺跡が著名である。また東奈良遺跡では大洞AまたはA'式の浮線文土器と石棒、船橋式と長原式の深鉢片が出土し、総持寺遺跡^{そうじじ}では滋賀里Ⅲb式～船橋式の甕(深鉢)棺墓と思われる土器群を検出した。牟礼遺跡^{むれ}では少量ながら滋賀里Ⅲ～Ⅳ式・船橋式もしくは長原式の土器を含む自然流路に架された井堰とそれに関連するであろう水田を検出し、最近の調査で長原式の土器と弥生時代前期前半の土器が共伴している。このほか五日市東遺跡^{いつかいちひがし}でも、堅穴住居の可能性の高い大形落込みから多くの長原式の深鉢・浅鉢とともに弥生時代前期前半の壺または甕の破片が出土した。

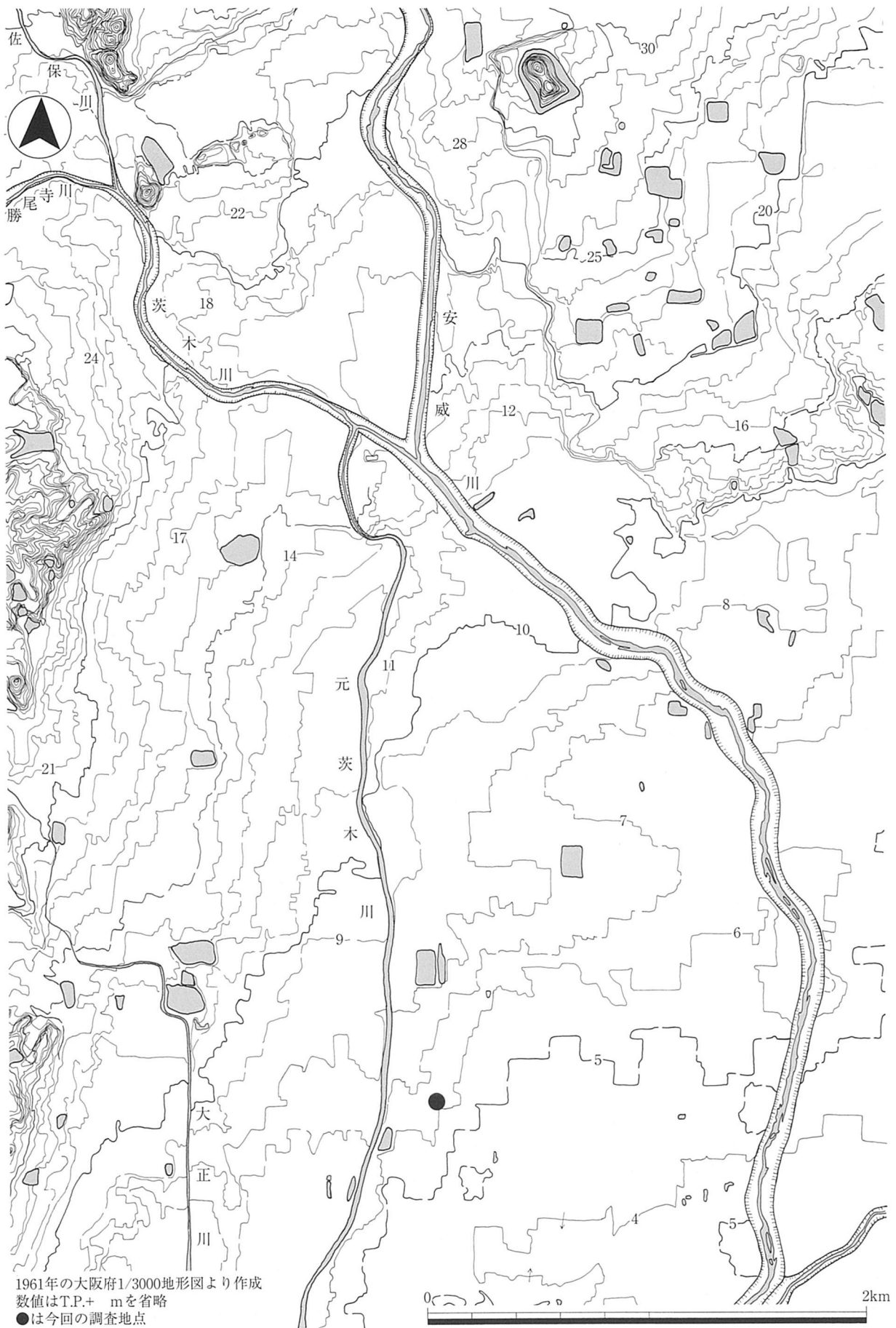
弥生時代 前期前半に東奈良遺跡・目垣遺跡^{めがき}・総持寺遺跡^{みぞくい}・溝昨遺跡・新庄遺跡の集落が形成される。総持寺遺跡では、前期前半の壺を利用した大形の土器棺を検出した。なお最近の調査で出土した溝昨遺跡の前期前半の土器群は、三島地域において最も古い様相を呈す。

続いて前期末に耳原遺跡・郡遺跡の集落が形成される。

中期～後期になると遺跡数は急増する。中期には東奈良遺跡や目垣遺跡や郡遺跡などの集落規模が拡大し、見付山遺跡^{みつけやま}・中条小学校遺跡^{ちゅうじょうしょうがっこう}(以上Ⅱ様式)、倍賀遺跡^{へか}(Ⅲ～Ⅳ様式)、中河原遺跡^{なかがわら}・春日遺跡^{かすが}・太田遺跡・玉櫛遺跡(以上Ⅳ様式)などで新たに集落を形成する。中条小学校遺跡は東奈良遺跡から、中河原遺跡・倍賀遺跡は郡遺跡から集落規模を拡大して形成された遺跡である。中でも前期から継続する東奈良遺跡ならびに目垣遺跡は、高槻市安満遺跡^{あま}と同じく淀川中流域における拠点集落として名高い。東奈良遺跡では石製の銅鐸鑄型や土製の銅戈鑄型、ガラス製勾玉の土製鑄型などが出土し、青銅器及びガラスの鑄造生産が知られる。目垣遺跡では石庖丁など多くの粘板岩原材や加工途中の未製品が出土し、石器生産および流通への関わりを明らかにした。また人面付土器の出土は著名である。後期になると新たに宿久庄遺跡^{しゅくのしょう}・安威遺跡^{かみほづみ}・上穂積遺跡^{いしどがおか}、不明な点が多い高地性集落の石堂ヶ丘遺跡などの集落が形成されるが、小規模な遺跡が多い。

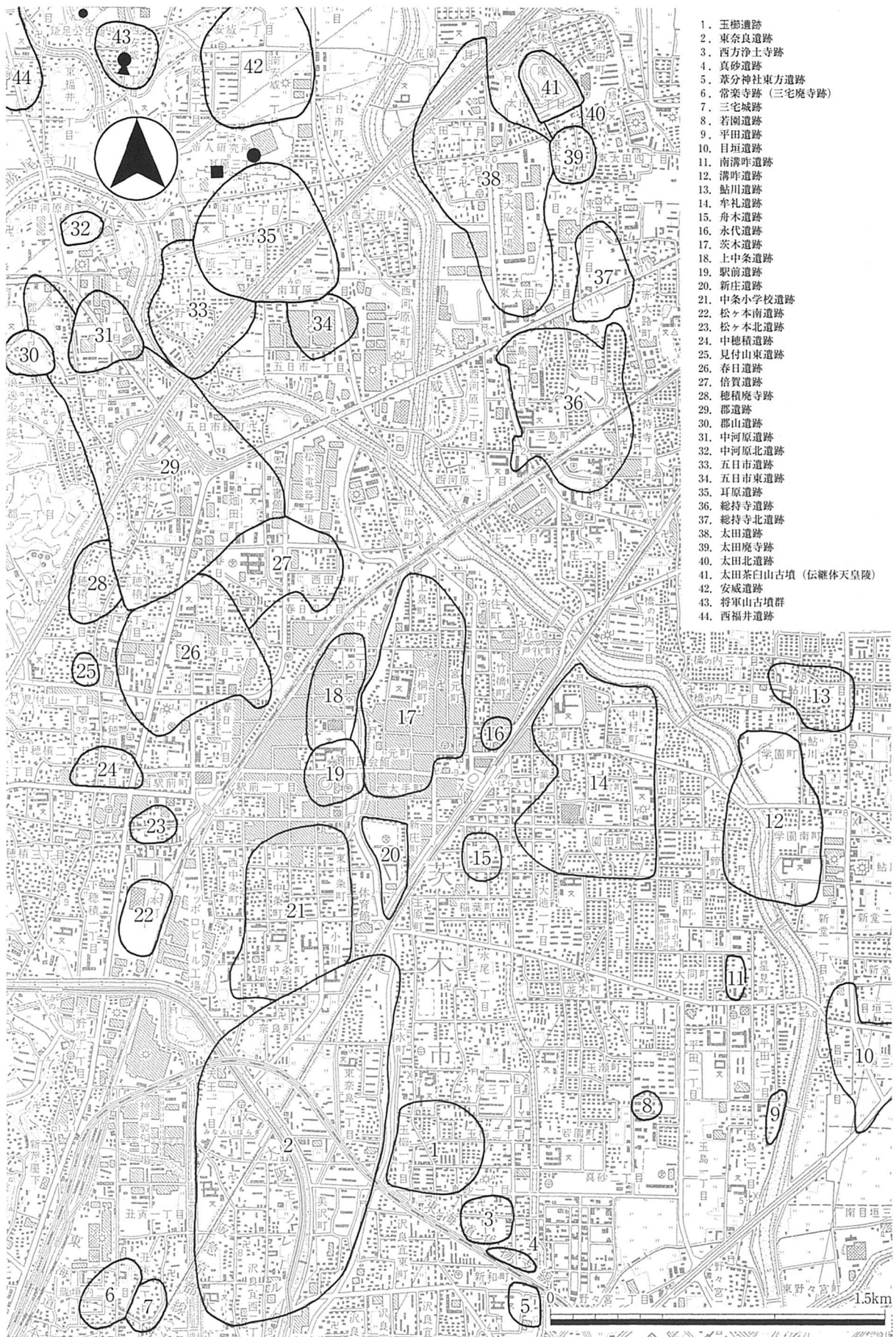
古墳時代 集落遺跡としては、前期初頭に再び規模を拡大する東奈良遺跡をはじめ、郡遺跡・倍賀遺跡・宿久庄遺跡・太田遺跡・溝昨遺跡・中条小学校遺跡・玉櫛遺跡などが弥生時代から引き続き形成し、新たに上中条遺跡^{かみちゅうじょう}が成立する。特に溝昨遺跡では古墳時代前期の関東・東海・山陰・瀬戸内からの搬入土器がみられ、交易の広さがうかがえる。

一方、古墳は北部の山麓部や千里丘陵裾部に多く築造される。前期には仿製三角縁神獸鏡9面を含む12面の鏡・貝製の鋏形石・車輪石・武具・筒形銅器など多種多様の副葬品を出土した紫金山古墳^{しきんざん}、将軍山古墳^{しょうぐんやま}などの後円部中央に堅穴式石槨を備えた全長100mの前方後円墳が築造される。いずれも和歌山県紀ノ川、徳島県吉野川流域にみられる結晶片岩を用いて堅穴式石槨を構築するのが特徴で、これら地域との交流がうかがえる。前期末には直径10mの円墳の安威0号墳、全長45mの前方後円墳の安威1号墳が築造される。安威1号墳は石釧、車輪石の副葬品が出土したほか、粘土槨内面に水銀朱の遺存が認められる。中期では全長226mの三島最大の前方後円墳の太田茶臼山古墳(伝継体天皇陵)や、それに先行する太田石山古墳^{おくだいしやま}がある。後期になると、三島最大の巨石墳である耳原古墳^{みなみづか}をはじめ南塚古墳・海北塚古墳、市内でいち早く横穴式石室を導入した青松塚古墳^{せいしょうづか}、カマド塚である上寺山古墳^{じょうじやま}が築造される。それとともに山麓部を中心として新屋古墳群^{にいや}・安威古墳群^{あゐ}・将軍山古墳群^{しょうぐんやま}・長ヶ淵古墳群^{おさがふち}とい



1961年の大阪府1/3000地形図より作成
 数値はT.P.+ mを省略
 ●は今回の調査地点

第2図 周辺の地形



第3図 周辺の遺跡分布図

った横穴式石室主体の群集墳が築造される。後期末～終末期古墳としては、7世紀代の周濠をもつ方墳の耳原鼻摺古墳をはじめ初田1・2号墳や阿武山古墳がある。

また、平野部の駅前遺跡・郡遺跡・春日遺跡や富田台地上の総持寺遺跡などから、後世に墳丘部を削平された5～6世紀前半築造の円墳や方墳、いわゆる埋没墳が多く検出されており、後期群集墳に先行する木棺直葬墳墓群と考えられている。最近の調査では郡遺跡の土器棺墓から管玉・ガラス玉とともに小形の仿製重圈文鏡が出土した。

飛鳥時代～平安時代前期 かつて「凡河内国」とよばれていた現大阪府、兵庫県東部一帯は、難波津の存在からいつしか「津の国」と呼ばれるようになった。律令体制の整備に伴い「摂津国」として国境が確定したのは、『日本書紀』（以下、『紀』と略す）天武十三（685）年十月辛巳（三日）条⁵⁾に「遣伊勢王等、定諸國堺」とみえるこの頃であろう。中でも北摂地域は「三嶋」と『紀』雄略天皇九年条に文献上に初見するように、大化以前から「ミシマ」と呼ばれていた。この三島の称は「津の国の御島」（『伊予国風土記』）とあるように、「御島」の表記から「三島」とする説が有力である。「三」は「ミ」の音を表記するのであって必ずしも数字の3を意味しない。故にのちの嶋上・嶋下・豊嶋の三郡をもって「三島」とするのは時代的な誤りがある。「三嶋郡」の成立は評（郡）制が施行された大化改新以降であり、先の『紀』天武十三年十月辛巳条頃もしくは律令の制定によって嶋上郡と嶋下郡の二郡に分離したと考えるが、正確な時期は不明である。茨木市が属する嶋下郡の文献上初見は、『続日本紀』和銅四年（711）正月丁未（二日）条の「攝津國嶋上郡大原驛、嶋下郡殖村驛」である。『和名類聚抄』によれば、嶋下郡は新屋・宿人（久）・安威・穂積の4郷からなる。嶋下郡衙は地名や山陽道との関係から郡遺跡周辺に推定される。郡遺跡では複数の掘立柱建物のほか、越州窯青磁や「大」と刻書した平安時代前期の須恵器小壺が出土した。近年の調査では中穂積遺跡で一辺80cmの掘方をもつ奈良時代の掘立柱建物を検出した。また見付山東遺跡からは、奈良時代～平安時代前期の掘立柱建物4棟のほか、多数の土師器坏や須恵器横瓶・甕底や製塩土器とともに吉祥句を墨書した土師器坏3点などを伴う井戸を検出した。そして三嶋路に面し、穂積廢寺跡の南に隣接するという立地条件は、官道沿いに郡寺・郡衙といった位置関係に通じ注目される。

この時期の集落遺跡としては、東奈良遺跡・郡遺跡・宿久庄遺跡・宿久庄西遺跡・総持寺遺跡・総持寺北遺跡・新庄遺跡・西福井遺跡などがある。特に新庄遺跡では、方位に規制された平安時代前期～中頃の建物とともに多くの緑釉陶器・越州窯青磁が出土した。

古代寺院としては、飛鳥時代～奈良時代創建の穂積廢寺跡・太田廢寺跡・三宅廢寺跡などがあり、穂積氏や中臣氏系の中臣太田連・中臣藍連や三宅氏など在地の有力氏族の活発な活動がうかがわれる。特に太田廢寺跡では塔心礎および舎利用具一式、複弁蓮華文軒丸瓦・忍冬唐草文軒平瓦などが出土した。平安時代前期には三宅廢寺跡以外の寺院は衰亡し、総持寺・忍頂寺が建立され発展していく。玉櫛遺跡南東には西方浄土寺跡があるとするが、未調査のため詳細不明である。その他、安威の大職冠山では凝灰岩製の石櫃から三彩釉有蓋壺の蔵骨器を発見している。

平安時代中期～中世 積極的な荘園開発に伴い藤原摂関家の支配が及んでいた茨木市域には、摂関家領が多く存在する。摂関家領としては安井（威）庄・福井庄・沢良宜庄・新屋庄・三宅庄などがあり、玉櫛周辺にも摂関家領の荘園が広がっていた。『茨木市史』によれば玉櫛はもともと、『紀』の「玉櫛姫」の記述（玉櫛の初見）があるように早くから開けていた地とする⁶⁾。のちにこのうち沢良宜庄・新屋庄、福井庄などを近衛家、安威庄を九条家が伝領した。平安時代末期になり摂関家の勢力が衰退してくると、

その氏神・氏寺である春日社や興福寺に摂関家領が寄進され始める。玉櫛周辺もまた例外ではなく、鎌倉時代には沢良宜庄・新屋庄・溝杭（昨）^{みぞくい}庄⁷⁾など近衛家伝領の荘園は興福寺大乘院領となっており、その荘園支配は室町時代まで続いた。

摂関家領以外の荘園としては、三宅氏と関係の深い井於庄^{いお}⁸⁾、中宮式領宿久庄、仁和寺領忍頂寺辺五箇庄、総持寺領散在所領（寺辺領）、長講堂領溝杭庄、造酒司領太田保、国衙領茨木などがある。

その頃の集落遺跡は、元茨木川右岸域に東奈良遺跡・中条小学校遺跡、同左岸域に舟木遺跡^{ふなき}・新庄遺跡・玉櫛遺跡^{あしわけじんじゃとうほう}・葦分神社東方遺跡^{まさご}・真砂遺跡などがある。東奈良遺跡では流路から隆平永寶・富壽神寶・寛平大寶と12世紀初頭の瓦器塊・土師器皿・須恵質土器小皿が一括で出土し、祭祀を想定させる。また新庄遺跡では鎌倉時代中頃～後半の建物から小形滑石製地鎮具を、葦分神社東方遺跡では地鎮遺構を検出した。

また、安威川流域の鮎川遺跡^{あゆかわ}・溝昨遺跡^{みぞくいみなみ}・溝昨南遺跡^{みぞくいみなみ}・目垣遺跡^{ひらた}・平田遺跡、勝尾寺川流域の郡遺跡・見付山東遺跡・中河原遺跡・西福井遺跡・宿久庄遺跡・宿久庄北遺跡、富田台地上の総持寺遺跡・総持寺北遺跡・太田遺跡など、集落遺跡は平野部だけでも市内随所にみられる。なお、山間部には栗栖山砦跡^{くるすやまとりで}・クルス山中世墓地^{ふせはら}や伏原中世墓地などが点在し、忍頂寺元享元年（1321）銘五輪塔や大岩八幡神社文安三年（1446）銘五輪塔や佐保・八坂神社の石槽など、鎌倉時代後半から室町時代前半の中世石造品が多く残る。

中世末～近世初頭 戦乱の増加に応じ茨木城^{みずお}・水尾城^{みずお}・三宅城^{みずお}・福井城^{いずはら}・泉原城^{さお}・佐保城^{さお}などの中世城郭が築城された。中でも茨木城は有岡城（伊丹城）・池田城・芥川城・高槻城とならび北摂地域の主要な総構えの城郭の1つである。戦国時代には中川清秀・片桐且元の本城として茨木地域で中核的存在をなしていたが、元和元年（1616）の一国一城令発布に伴い廃城となった。茨木城は現在にいたるまで発掘調査はほとんどされておらず、外郭の堀が一部検出されただけで正確な位置や縄張りも不明な部分が多い。今後の調査が期待される。

註

- 1 現況の地形図では本来の地形が捉えにくいいため、1961年の大阪府の1/3000地図をもとに作成した。ただし、安威川と茨木川の現時点合流は1937年の河川改修による。その際、茨木川の大部分は廃川となった。その河川数は現在緑地化され、市道宇野辺下中条線（桜通り）となっている。ちなみに1791（寛政3年）に、実現しなかったものの、同様の計画案が出され、廃川後の旧河道に300石の新田開発をしようとしていたことが近世文書（『水尾区有文書』）より知られる。
なお川の形成はじめマクロな地形環境については第V章第2節で詳論するので、そちらを参照されたい。
- 2 近世文書については茨木市所蔵『水尾区有文書』や『神安水利史』本文編・『神安水利史』史料編上巻 1978 神安土地改良区などを参照されたい。なお「水尾区有文書」は『水尾区有文書目録』が茨木市教育委員会（1999）より刊行されている。
- 3 現在においても玉櫛遺跡周辺は水尾、内瀬、真砂など水に関わる地名も多く、また島という地名や葦分神社の社名などからかつての地形をうかがうことができる。また、玉櫛遺跡に限らず近辺の遺跡では、調査中においてよく水が湧き、水はけがよくなかったことはこの事実からも傍証し得る。
- 4 未報告。濱野俊一氏のご教示による。
- 5 二月甲子朔日条に「…（前略）…普求國郡縣、遂於三嶋郡藍原、」とあるが、このころはまだ評（郡）制はしかれていないため『紀』作成時の認識と思われるが、北摂地域が三島と呼ばれていたのは間違いのないと思われる。

- 6 神武天皇即位前記に「三嶋溝欄耳神女玉櫛媛」とあり、その名前のもととなる「三嶋」「溝欄(昨)」「玉櫛」はいずれもこの地域に残る地名であることを根拠とする。しかしながら、これをもって「玉櫛」の地名の初見とするのは文献史学の立場からいえば記事の信憑性に疑問がもたれ、いささか困難であろう。この点についての解釈は(財)大阪府文化財調査研究センター『溝昨遺跡(その3・4)』2000に詳しい。
- 7 溝杭庄は春日社ないしは興福寺領のほか、長講堂領(院領)の溝杭庄も存在しているが、両者は全く別のものである。
- 8 大治五(1130)年条に「井於庄遣使雑色常季」と源師時(村上天皇玄孫)著の『長秋記』にみえ、この頃師時が皇后権大夫であったことから皇室領であった可能性が高いとされる。しかしながら、井於庄の三宅氏は系譜を辿ればもともと中臣氏系の氏族であること、16世紀初頭、井於庄内の井於神社に三宅氏によって春日四神の一神である天児屋根命が勧請されていることから、必ずしも藤原氏や春日社との関係がなかったとはいえない。

参考文献

- 茨木市史編纂委員会『茨木市史』 1969
- 茨木市教育委員会『わがまち茨木 城郭編』 1986
- 茨木市教育委員会『わがまち茨木 地名編』 1987
- 茨木市教育委員会『昭和60年度発掘調査概報』 1988
- 茨木市教育委員会『昭和61年度発掘調査概報Ⅰ』 1989
- 茨木市教育委員会『昭和61年度発掘調査概報Ⅱ』 1989
- 茨木市教育委員会『平成元年度発掘調査概報』 1990
- 茨木市教育委員会『平成2年度発掘調査概報』 1991
- 茨木市教育委員会『平成3年度発掘調査概報』 1992
- 茨木市教育委員会『倍賀遺跡発掘調査概要報告書—平成4年度発掘調査概報Ⅰ—』 1993
- 茨木市教育委員会『平成6年度発掘調査概報Ⅱ 葦分神社東方遺跡発掘調査概要報告書』 1995
- 茨木市教育委員会『平成7年度発掘調査概報』 1996
- 茨木市教育委員会『平成8年度発掘調査概報』 1997
- 茨木市教育委員会『平成9・10年度発掘事業報告 付 目垣遺跡(第97-1次・98-1次)発掘調査概要』 1999
- 茨木市教育委員会『平成11年度発掘調査概報』 2000
- 茨木市教育委員会『平成12年度発掘調査概報』 2001
- 茨木市教育委員会『平成13年度発掘調査概報』 2002
- 茨木市教育委員会『わがまち茨木 古墳編』 1990
- 茨木市教育委員会『わがまち茨木 水利編』 1991
- 茨木市教育委員会『わがまち茨木 石造物編』 1999
- 大阪府教育委員会『玉櫛遺跡発掘調査概要・Ⅰ』 1993
- 大阪府教育委員会『新庄遺跡 府立茨木高等学校建替えに伴う発掘調査概要』 1996
- (財)大阪府文化財調査研究センター『玉櫛遺跡』 1998
- 濱野俊一「三島地域における石庖丁生産と流通—大阪府茨木市目垣遺跡における石庖丁生産問題からの二、三の提起—」
『古代学研究』159 2002
- 平凡社『大阪府の地名』 1986

第2節 既往の調査成果

玉櫛遺跡は、1990年から始まった大阪府営茨木第3（茨木玉櫛）住宅建て替え工事に伴って発見された遺跡である。大阪府教育委員会はこの建て替えに先立ち、元茨木川東側に東奈良遺跡が広がっていることを考慮し、それまで遺跡が周知されていなかった予定地内に試掘調査を実施した。4箇所の特レンチを調査したところ、中世土器や中近世の水田遺構を検出したため、1991～1992年度予定地内の調査を実施した。

1991年度（第1次調査）は建て替え部分の西半分（A・B・C・D特レンチ）を、1992年度（第2次調査）は同東半分（E・F・G特レンチ）を対象地とした（第1図）。その成果は次の通りである。玉櫛遺跡の開発は、第2次調査F特レンチで検出した6世紀頃の杭列（第6面：T.P.+3.1m）を嚆矢とする。しかし本格的な開発は調査区全体で検出した10世紀代の水田跡である（第5面：T.P.+3.5～4.0m）。F・G特レンチで検出した畦畔はほぼ正方位にのっており、その頃には条里制地割であったことがうかがえる。しかし10世紀末以降一帯は河川の氾濫にさらされる。特に顕著な痕跡としては、E・F特レンチ検出の11世紀中頃～12世紀中頃の南流する自然流路、E・G特レンチ検出の13世紀前半～14世紀前半の南東流する自然流路がある。その一方で12～14世紀にかけて、水田とともに建物や屋敷墓、祭祀遺構が営まれ、一部が集落域を形成していたことが明らかとなった。

1995・1997年度同住宅の建て替えに伴い、（財）大阪府文化財センターが調査を担当することとなる。1995年度の調査は第2次調査地点の南側（1A・2A・3A・4A区）、1997年度の調査は第2次調査地点の東側（1B・2B区）である。第1・2次調査同様、奈良時代以前の生活痕跡は3A区にて非常に断片的な資料を得たにとどまった（第9遺構面：T.P.+3.4mあるいは第8遺構面：T.P.+3.7m）。本格的な痕跡は3A区の第7遺構面（T.P.+3.9m）や4A区の第6遺構面（T.P.+4.0m）検出の10世紀後半～11世紀代に営まれた水田遺構を端緒とする。ここでも、当該期に条里制が施行されていたことを示す正方位に則った畦畔を検出した。11世紀末になると掘立柱建物数棟からなる小規模集落が出現し、その後この集落は14世紀中葉にかけて規模を拡大しつつ連綿と営まれ、屋敷地の堀と思しき大溝も検出したが、時期を限定するにはいたっていない。15世紀以降集落はさほど遠くない場所へ移動し、一帯には耕作地あるいは墓域が広がっていたと推定する。

1999年11月大阪府教育委員会は、今次の調査対象地に4箇所のグリット（第1区～第4区）を設定し試掘調査を実施した。調査の結果、全地点で中世の遺物包含層を確認するとともに、第2区（3D特レンチ東端）では古墳時代の須恵器が少量ながら出土した。担当者は中世に一帯が耕地であったこと、最も遺物の多かった第4区（7D特レンチ東端）に屋敷地が存在した可能性が高いことを指摘した。

以上が玉櫛遺跡の調査歴である。このように過去4回の調査を経て、おもに10世紀以降15世紀にいたる遺跡であることが明らかとなった。頻りに繰り返す河川の氾濫の中で、500年にもおよぶ集落活動を維持したのである。しかし1990年の試掘調査の契機となった東奈良遺跡との関連は、未だ明らかになっていない。さらに古墳時代以降の営みについても、まだまだ未知の遺跡である。

参考文献

『玉櫛遺跡発掘調査概要・Ⅰ』 1993 大阪府教育委員会

『玉櫛遺跡－大阪府営茨木玉櫛住宅建て替えに伴う発掘調査報告書－』 1998 （財）大阪府文化財調査研究センター

第Ⅲ章 調査成果

第1節 調査の方法

1. 調査区の呼称

2000年度の調査区は市道部分、2001年度の調査区は、住宅棟、防火水槽、受水槽・ポンプ室・電気室、市道といった諸施設予定地からなり、市道予定地は現市道によって8箇所に分断されていた。先に本センターが刊行した報告書では、玉櫛遺跡第1次調査地を「A」、第2次調査地を「B」で表現し、アルファベットの前にトレンチ番号を付してトレンチ名を表現した。そこで本書もそれに倣い、玉櫛遺跡第3次調査地（2000年度調査）を「C」、第4次調査地（2001年度調査）を「D」で表わし、各々にトレンチ番号をつけた。2000年度調査地は「1C・2Cトレンチ」の2箇所、2001年度調査地は「1D～10Dトレンチ」の10箇所、計12箇所を調査対象とした。

2. 地区割り

本報告では、当センターの前身の一つである（財）大阪文化財センターが定めた「遺跡調査基本マニュアル」に則り、国土座標第Ⅵ系を基準として使用する。まず第Ⅰ区画として1/10000地形図で府下全域を縦6km・横8kmを1区画として分割する。その際南西端を基点として、縦軸A～O・横軸0～8で表示する。第Ⅱ区画は、大阪府が発行する1/2500地形図を利用し、第Ⅰ区画を縦1.5km・横2.0kmに16分割する。南西端を1、北東端を16と表示する。第Ⅲ区画は第Ⅱ区画内を100m単位で区画するもので、縦15・横20に区分し、北東端を基点に縦a～j・横1～10となる。第Ⅳ区画は、第Ⅲ区画内を5m単位に4分割したもので、北東側をⅠ・北西側をⅡ・南東側をⅢ・南西側をⅣと表示する。第Ⅴ区画は遺物取り上げの際の基準となる。

3. 面と層の呼称法

各トレンチは、機械掘削完了後人力によって調査される最初の面を第1面とし、以下順に面の番号を付す。層名は第1面と第2面との間の層を第1層とし、面と同様順に番号を与える。ただし今回の調査では、機械掘削停止面から第1面までの層を人力掘削したので、これを第0層と称する。なお本報告での「第〇層」とは、あくまでも掘削と遺物取り上げの単位であり、それが土層観察結果「〇層」に細分されることがある。なお本書では、各トレンチの成果を本章第2節のようにまとめ、以降それに拠る。

4. 遺構番号

2000年度調査分はトレンチ番号を千の位で表わし、2001年度調査分はトレンチ番号を万の位に表わし、以下遺構の種類に関わらず発見順に1から番号を付与した。つまり溝80305とは、8Dトレンチでみつかった305番目の遺構を、土坑100001とは、10Dトレンチでみつかった1番目の遺構を表わす。掘立柱建物や柱穴列は、それを構成する柱穴のうち最も若い番号で表記した。ただ例外として、3Dトレンチ検出の自然流路30019は、その規模・方向などから他トレンチでの識別が容易と判断し、6D・7Dトレンチ検出時にも同じ遺構番号をつけた。

第2節 整理の方法

遺物はコンテナ約170箱、総破片数約61,500点出土した。これらのうち、遺構より出土した土師器・須恵器・瓦器などは、全体の20%以上残存し口径を復元できるものを抽出し、図化掲載した。また、包含層から出土した土師器・瓦器は遺構出土のものと同様のため省き、点数が少ない器種、その包含層が形成された時期を明確にあらわすものに重点をおいて掲載した。陶磁器類は図化が可能なものはできるだけ図化した。

遺物編は、土器・陶磁器類は出土遺構面、包含層ごとに記述し、弥生土器、墨書土器、金属製品、石製品、瓦、木製品はまとめて掲載した。

遺物の編年・分類は、主に以下の文献を参考にし、分類名・調整などの用語も做った。

弥生土器：森田克行「摂津地域」『弥生土器の様式と編年 近畿Ⅱ』木耳社 1990

須恵器：田辺昭三『陶邑古窯址群』平安学園高校 1966

中村 浩『陶邑Ⅲ』大阪府教育委員会 1978

古代以降の土師器：小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号（財）京都市埋蔵文化財研究所 1996

瓦器塊：尾上 実・森島康雄・近江俊秀「瓦器塊」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社 1995

国産陶器：藤澤良祐・伊藤 晃他「中世陶器」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社 1995

（財）瀬戸市埋蔵文化財センター『研究紀要』第5輯 1997

輸入陶磁器：山本信夫『大宰府条坊址XV－陶磁器分類編』太宰府市教育委員会 2000

遺物の調整などの記載は下記のとおりである。

瓦器塊の内面調整については、見込み部や、ヘラミガキが退化して暗文状になっているものについては「格子状暗文」や、「渦巻き状暗文」というように呼称した。

図化にあたって、調整の境目と屈曲の稜線が明確なものは実線、やや屈曲しているものは一点破線、あるいは二点破線で示した。また、須恵器などの回転ヘラケズリの単位は一点破線で表現している。

なお、陶磁器類の編年については大宰府での年代観と関西での年代観にずれがあると考え、共伴遺物より考えられる年代を示した。

参考文献

岩本芳幸「草戸千軒遺跡出土の鼻線」『草戸千軒』No. 137 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1984

上原真人「古代末期における瓦生産体制の変革」『古代研究』13・14号（財）元興寺文化財研究所 1978

佐藤一郎「宋代の陶磁と瓦の文様－博多出土の軒丸瓦と黄釉鉄絵盤の花弁文をめぐって－」『博多研究会誌』第4号 博多研究会

田口昭二『美濃焼』考古学ライブラリー17 ニューサイエンス社 1983

松本洋明・服部伊久男『十六面薬王寺遺跡』奈良県立橿原考古学研究所 1988

橋本久和「大阪北部の古代後期・中世土器様相」『高槻市文化財年報 昭和63・平成元年度』高槻市教育委員会 1991

平尾政幸・上村憲章編『古代の土器2 都城の土器集成Ⅱ』古代の土器研究会 1993

平尾政幸・上村憲章編『古代の土器3 都城の土器集成Ⅲ』古代の土器研究会 1994

橋本久和『上牧遺跡発掘調査報告書』高槻市教育委員会 1980

間壁忠彦『備前焼』考古学ライブラリー60 ニューサイエンス社 1991

水野忠雄「日本石硯考－出土品を中心として－」『考古学雑誌』第70巻第4号 日本考古学会 1985

森田 稔「東播系中世須恵器生産の成立と展開－神出古窯跡群を中心に－」『研究紀要』第3号 神戸市立博物館 1986

第3節 層序

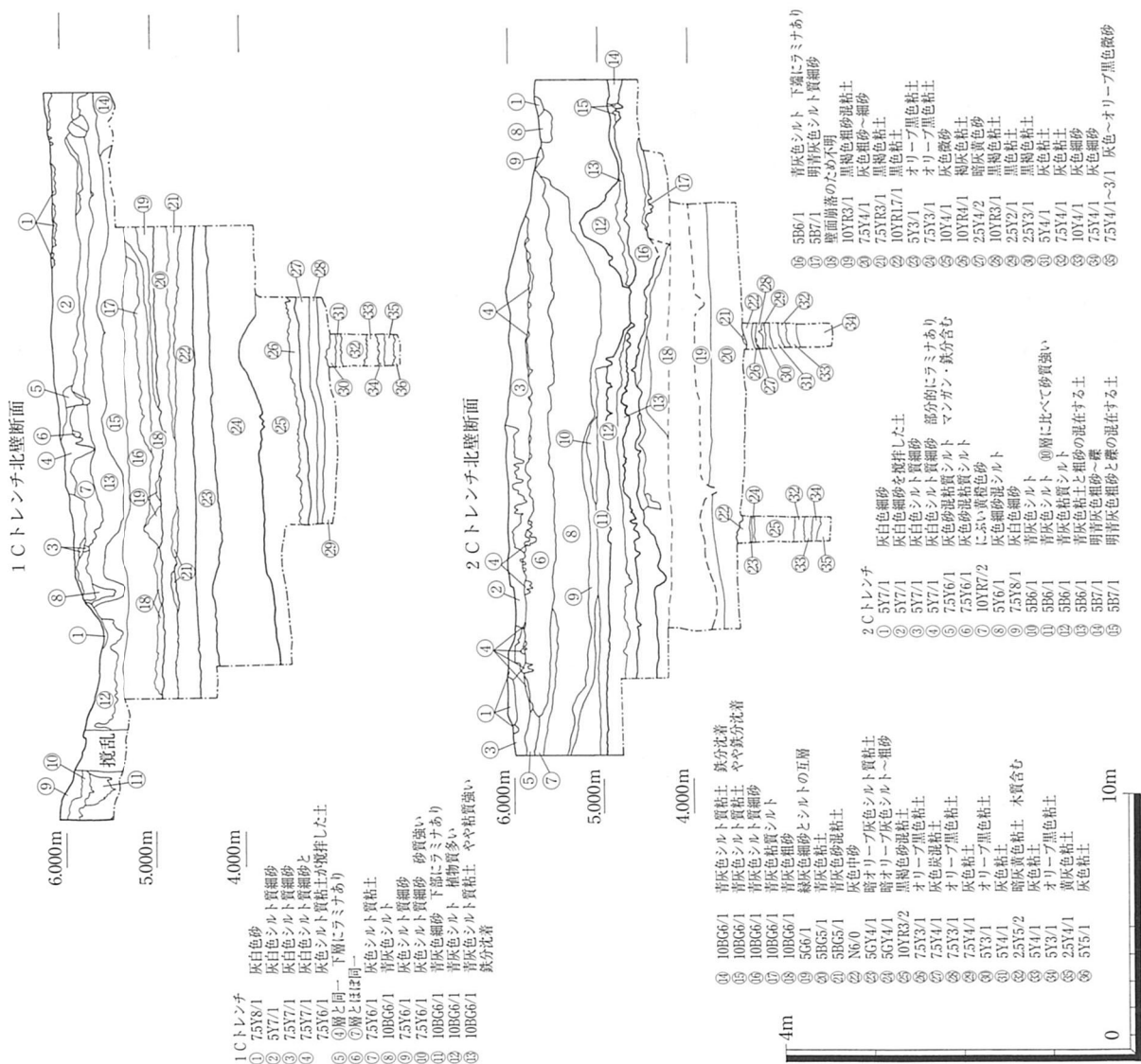
1. はじめに

ここでは、まず最初に12箇所に分かれるトレンチ個々の堆積状況を説明する。その際2000年度調査分(1C・2Cトレンチ)は、第I面・第II面・・・、第I層・第II層・・・とローマ数字を用い、2001年度調査分は第1面、第2面・・・、第1層・第2層・・・とアラビア数字で順次表記した。続く全トレンチ共通の標準土層断面の説明では、標準化した遺構面名(ローマ数字を用いて第○遺構面と記す)や土層名(ローマ数字を用いて第○包含層と記す)で記述する。

2. 各トレンチの層序

1Cトレンチ

- 0層 ①層。盛土、旧耕作土ならびに耕作土直下の砂層(第0層)のみ機械掘削を実施。
- I層 ②～④層。
- II層 ⑦・⑨・⑩層。



第4図 1C・2Cトレンチ断面

- Ⅲ層 ⑬～⑳層。㉑層はⅣ層直上を覆う洪水砂層。
 Ⅳ層 ㉒～㉓層。㉓層はかなり攪拌を受ける。
 Ⅴ層 ㉔層。
 Ⅵ層 ㉕層。溝1014埋土。
 Ⅷ層 ㉖層。㉖層は非常に粘質の強い褐色土。
 Ⅸ層 ㉗層。㉖層の下部に部分的に堆積する粘質土。
 Ⅹ層 ㉘層。下層については、矢板強度の関係上ごく一部分のみ調査を実施した。

2 C トレンチ

- 0層 ①層。機械掘削土の残り。
 Ⅰ層 ②～④層。④層はⅡ層を覆う洪水砂層。
 Ⅱ層 ⑥～⑧層。落込み状の窪みに堆積した土層。
 Ⅲ層 ⑨・⑩層。
 Ⅳ層 ⑫～⑮層。
 Ⅴ層 ⑯層。
 Ⅵ層 ⑰・⑱層。溝2022埋土。
 Ⅷ層 ⑲・⑳層は非常に粘質の強い褐色土。
 Ⅹ層 ㉑層。1 C トレンチと同様、下層については矢板強度との関係上一部のみ調査を実施。

1 D トレンチ

- 第0層 ①～⑦層までの機械掘削層。旧府営住宅建設時の盛土（①層）や旧耕作土（②層）など。
 第1層 ⑧～⑱層まで第1-1層。⑲・⑳層は第1-2層。21・22層は第1-3層。⑧～⑬層は第1-1面長方形土坑群に充填された細砂層。各層最下部にはわずかながら洪水砂層が残る（⑯・⑳・㉑層）。
 第2層 ㉒・㉓層は第2-1層。㉔層は第2-3層。この第2-3層上面（第2-3面）に南北に蛇行する溝10127を検出した。
 第3層 ㉕層は第3-1層。北半では第4面溝10175に堆積した洪水砂層の影響で、層厚が数cmと著しく薄い。㉖層は第3-2層。洪水砂層であるが、土壤化が著しく進んだ南端付近でピット群を検出した。第4面畦畔10176を境に洪水砂層と土壤化層に分れる。
 第4層 ㉗～㉙層。㉚・㉛層は第4面溝10175埋土。
 第5層 ㉜～㉞層からなる。特に㉜層は全トレンチで確認できる褐色系の非常に粘質の強い層。これに対し㉝層は同色ながら砂質が強い。㉞層は南端でわずかに残る洪水砂層。
 第6層 ㉟～㉫層。調査区中央から北側にかけて、この第6層が落ち込む。

2 D トレンチ

- 第0層 ①～⑦層までの機械掘削層。
 第1層 ⑨～⑪層は第1-1層で、⑧層は第1-1面上の耕作溝埋土。⑫～⑮層は第1-2層。⑮層は第2面を覆う洪水砂層。

第2層 ⑰・⑱層。⑱層は北に向かうにつれて急に砂粒少なくなる。

第3層 ⑲・⑳層。㉑層は第4面を覆う洪水砂層。

第4層 ㉒・㉓層。このうち㉓層は第5面を覆う洪水砂層の名残。

第5層 ㉔層。

第6層 トレンチの安全度から、第5層を全面掘削できなかつたので、部分的な確認にとどまつた。

3 D トレンチ

第0層 ①～㉑層。府営住宅建設時の盛土（①層）、旧耕作土（②層）に加え、近世以降の耕作土層も確認した（⑤～㉑層）。機械掘削層。

第1層 ㉒～㉓層。調査区中央付近では、第2-1面自然流路30019埋土が基盤層。

第2層 第2-1層は㉔～㉕層。㉖層は第2-1面自然流路30019埋土。㉗・㉘・㉙層は㉖層の自然流路30019と同一面で検出した遺構埋土。第2-2層は㉚～㉛層で構成。㉜層は自然流路30019初現時の埋土。

第3層 ㉜層。

第4層 ㉝・㉞層。

第5層 ㉟層は第5-1層を、㊱層は第5-2層をそれぞれ構成する。

第6層 ㊲層。場所によって土質が微妙に変化する。

4 D トレンチ

第0層 ①～⑨層。府営住宅建設時の盛土（①層）、旧耕土（②層）、近世以降の耕作土（⑤・⑥層）。いずれも砂質が強い。

第1層 ⑦～⑨層は第1-1層。⑩～⑫層は第1-2層で、⑩層は第1-2面土坑40066および落込み40065埋土。⑬層を第1-3層で、⑭・⑮層は第1-3面落込み40034の埋土である。⑯～⑲層は第1-4層。

第2層 ⑲層は第2-1層、⑳層は第2-2層、㉑・㉒層は第2-3層となる。

第3層 ㉓層。上面は踏み込みによる凹凸が著しい。

第4層 ㉔層。第3層に比べてやや粘質が強い。

第5層 ㉕層は第5-1層、㉖層は第5-2層。第5-1層に比べ第5-2層は砂質が強い。

第6層 ㉗層。砂質の強い部分、粗砂で構成される部分などが混在。㉘層は第6面溝40070埋土。

5 D トレンチ

第0層 ①～⑦層までの盛土（①層）や旧耕土（②層）、近世以降の耕作土（④～⑦層）を指す。機械掘削を実施。

第1層 ⑧・⑨層。

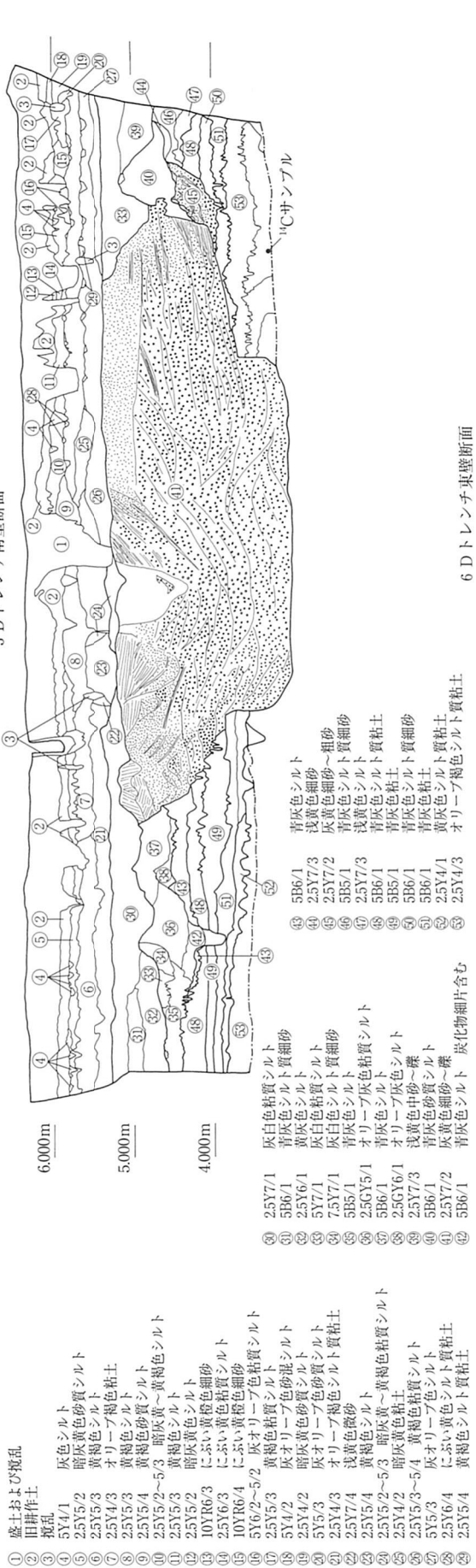
第2層 ⑩～⑫層。⑫層は西端付近に堆積した洪水砂層。

第3層 ⑬層。

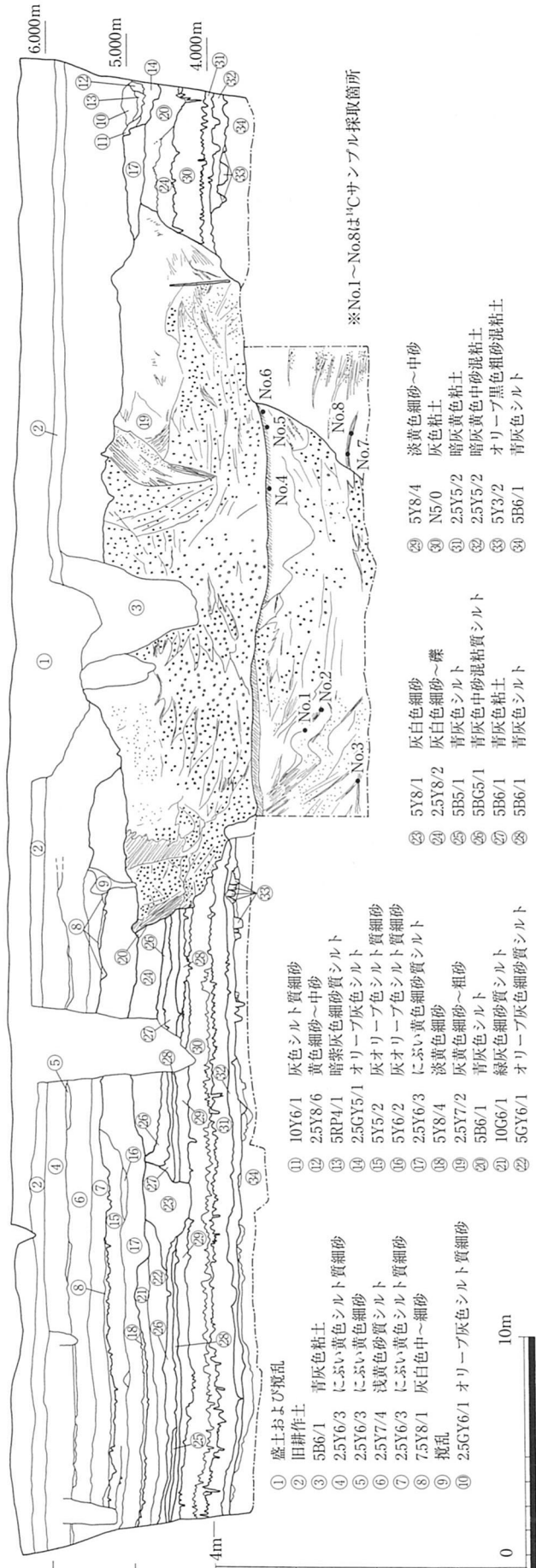
第4層 ⑭層。

第5層 ⑮層。中央部やや西よりでわずかに盛り上がる部分は、南北方向の第5面畦畔50022。

3 Dトレンチ南壁断面



6 Dトレンチチ東壁断面



※No.1~No.8は¹³Cサンブル採取箇所

第6図 3D・6Dトレンチ断面

第6層 ⑰層。

6 Dトレンチ

第0層 ①～⑭層までの盛土(①層)・旧耕土(②層)・近世以降の耕作土(④～⑦層)など。機械掘削の対象。なお③は自然流路30019の最終埋積層(溝60098)。

第1層 ⑮～⑱層。直上に洪水砂層(⑧層)が堆積。

第2層 自然流路30019(⑲層)の基盤層。北端付近の⑳～㉓層、自然流路北岸付近の㉔層、同南岸の㉕層が第2-1層の、また北端付近の㉖層、流路北岸の㉗層が第2-2層となる。

第3層 溝30102(㉘層)とその基盤層の流路北岸の㉙・㉚層、同南岸の㉛層が第3-1層、㉜層が第3-2層、㉝層が第3-3層、㉞層が第3-4層になる。流路南岸は分層できなかった。

第4層 ㉟層。

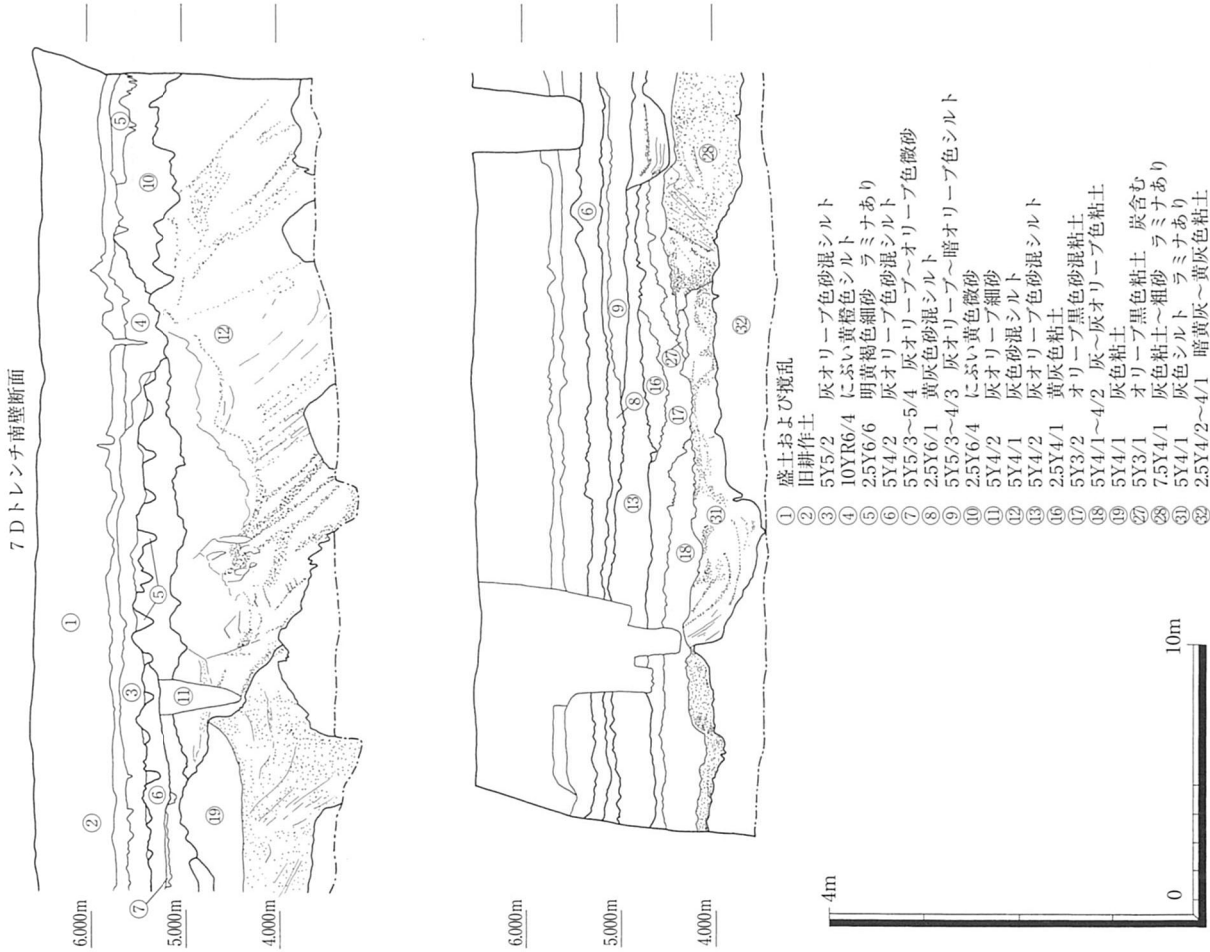
第5層 非常に粘り気の強い褐色系粘土層(㊱層)を第5-1層とし、やや砂質がかった部分(㊲層)を第5-2層とした。

第6層 ㊳層。古墳時代遺構面の基盤層。場所によって土質が変化する。

7 Dトレンチ

第0層 ①～⑤層。盛土(①層)・旧耕作土(②層)・近世以降の耕作土(③・④層)などを含む。

第1層 ⑥・⑩層。南北方向の耕作溝は窪んだ部分を洪水砂で埋め尽くす。



第7図 7 Dトレンチ断面

第2層 ⑧・⑨層。ただし⑨層は、第3面自然流路30019上では、第1面を構成する基盤層となる。

⑩層は桶を井戸枠とする井戸。

第3層 ⑬層。⑫層は自然流路30019埋土。

第4層 ⑭・⑮層。溝70005はこの第4層に掘り込まれた遺構で、⑯～⑳層はその埋土。㉘層は第4層の最下層に堆積したものか。

第5層 西壁の㉑～㉕層、南壁の㉗層がこれに該当する。全体的に炭の混入が著しい。

第6層 西壁の㉖層。

第7層 西壁の㉙層。

第8層 西壁の㉚層、西壁・南壁の㉛層。

第9層 褐色系の非常に粘質の強い㉜層。上面の洪水砂層㉝層によって、かなり深く抉られた箇所もある。東端付近の盛り上がりは第9面畦畔70033・70035である。

8Dトレンチ

第0層 ①～⑩層までの盛土（①層）や旧耕作土（②層）、近世以降の耕作土からなる機械掘削土層。

第1層 ⑪～⑲層。

第2層 ㉒～㉔・㉖層。㉒～㉓層は第2面溝80102埋土。㉘層は溝80015、㉙～㉚層は溝80147埋土。

第3層 ㉜～㉞・㉟層は第3-1層。東端付近の㉞層は第3-2層、同じく東端付近の㉟層は第3-3層。つまり第3層は東端付近のみ細分可能。

第4層 ㉛～㉝・㉟～㊱・㊲層で構成する。トレンチ中央部やや東寄りでは溝80305埋土が基盤層。

第5層 ㊳層は第5-1面溝80305埋土。㊴層が第5-1層、㊵層が第5-2層、㊶層が第5-3層、㊷層が第5-4層。

第6層 ㊸層。古墳時代遺構面の基盤層。場所によって土質が著しく変化する。

9Dトレンチ

第0層 ①～④層までの機械掘削土層。①は盛土、②は旧耕作土、③・④は近世以降の耕作土。

第1層 ⑤～⑦層。⑦層は西端でのみ確認した砂層。

第2層 ⑧・⑨層が第2-1層、⑩・㉑・㉒層が第2-2層。⑪～㉒層は第2-2面土坑90062埋土。また北端の㉑層は同面溝90144埋土。

第3層 ㉓～㉔層。

第4層 ㉕～㉖層が第4-1層。㉗～㉘層が第4-2層。㉙層は第4-2面溝90209埋土。

第5層 褐色系粘質土の㉚層が第5-1層、㉛層が第5-2層。

第6層 発掘停止面が第6層上面にあたる。

10Dトレンチ

第0層 ①・②層の機械掘削土層。①は盛土、②は旧耕作土。

第1層 ③層。

第2層 ④層。

第3層 トレンチ北半の⑤層。同南半の⑦～⑬層は溝100041埋土。また中央の⑤・⑥層は井戸100103

埋土。第3層以下第5層にかけて、北半と南半では対照的な堆積状況を示す。

第4層 トレンチ北半の②⑥・②⑧・③⑩層。埋土に炭が混入。南半の③①・③②層。③①層は第4面溝100104埋土。

第5層 ③③～③⑥層。③⑥層は第6層直上を覆う洪水砂層。

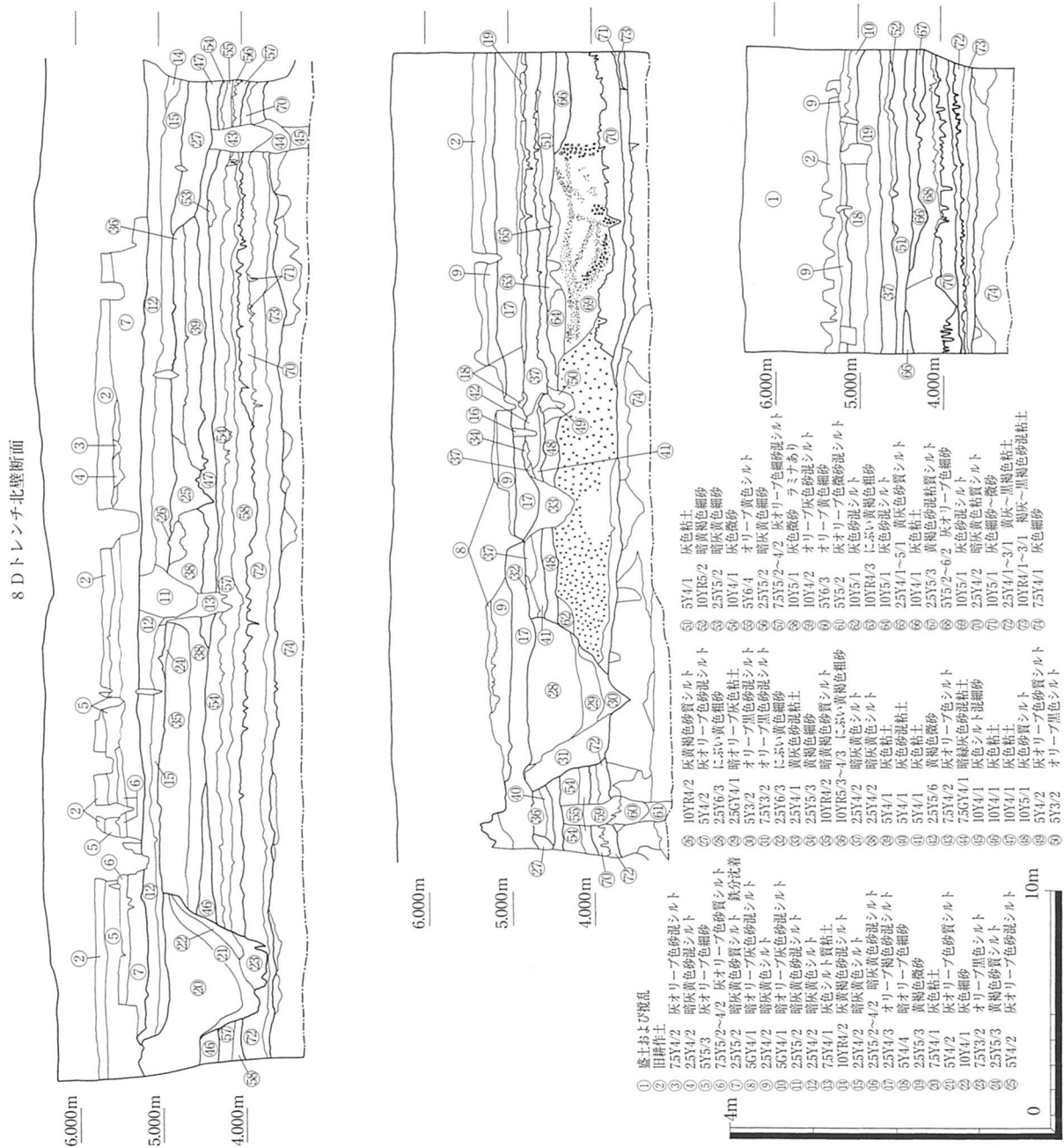
第6層 ③⑦～④①層。④①層は第7層直上を覆う洪水砂層。

第7層 ④①・④②層。粘質の強い④①層を第7-1層、④②層を第7-2層。

第8層 発掘停止面が第8層上面となる。

3. 標準断面の設定

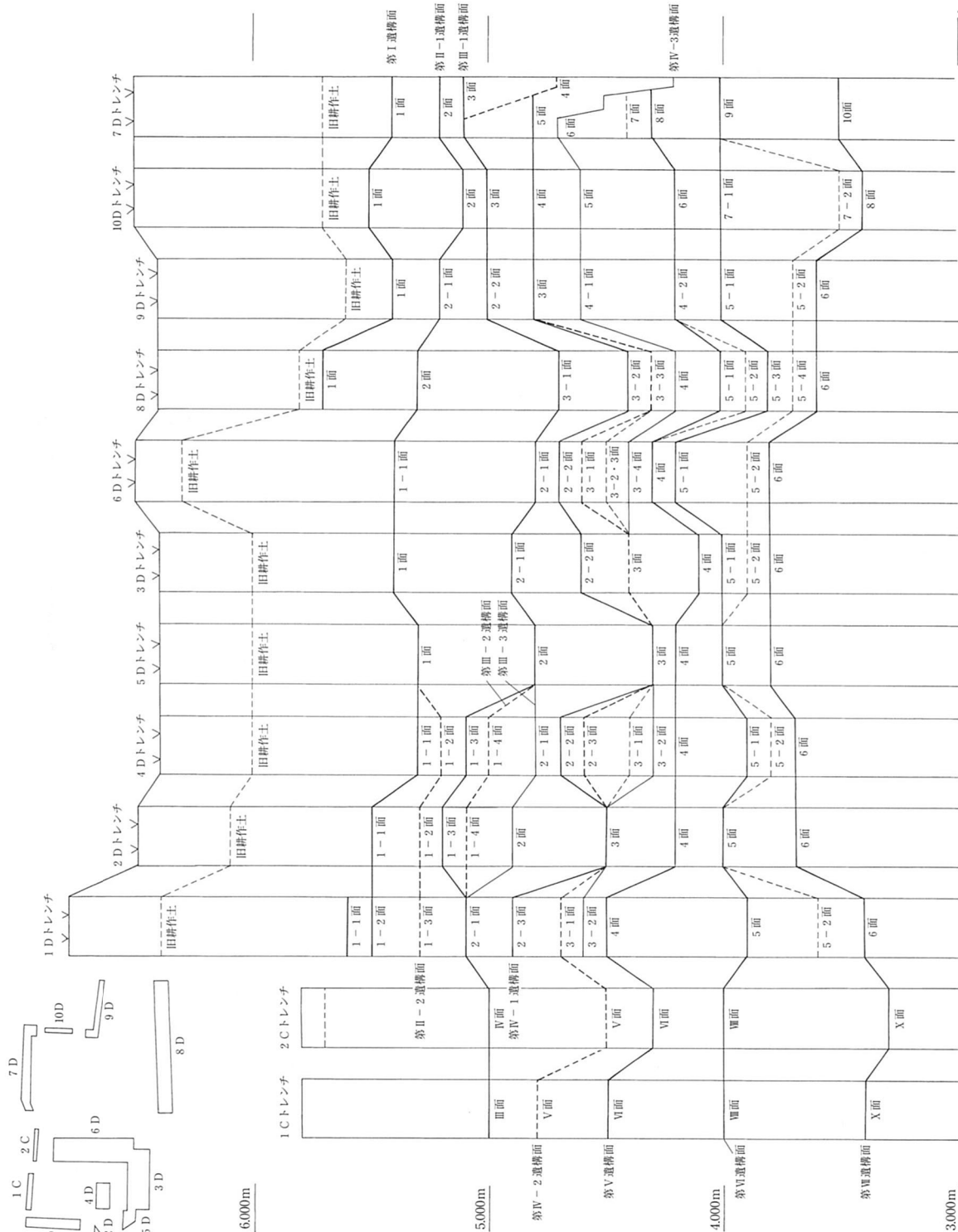
2箇年度にわたって実施した玉櫛遺跡の調査は、約17,000㎡という広大な用地内に、住宅棟・防火水



第9図 8 D トレンチ断面

槽・道路などにあたる大小様々な計12箇所のトレンチを設定した。いうまでもなくこれらのトレンチは非連続であるため、同一遺構面＝同時代性の認定は、それぞれのトレンチで確認した堆積層相互の検討－各トレンチで認定した遺構面のレベル、遺構面の基盤層はもちろん前後の堆積層の様子（特に洪水砂層の有無）、さらに遺構面に穿たれた遺構や各層に含まれる遺物の時期の検討－を経て初めて想定可能となる。それらを総合化し作成したのが、第10図標準断面模式図である。

2000年度調査を実施した1C・2Cトレンチは、周辺の堆積状況を全く把握できていなかったため旧



第10図 標準断面模式図

耕作土以下を調査対象としたが、2001年度調査ではその成果を踏まえ現表土以下約1mまでを機械掘削の対象とした。よって全域で確認した土層・遺構面は、次に記述する第Ⅱ遺構面以下である。

調査地は、戦後府営住宅建設に際して耕作地に平均70cmの盛土を施した結果、ほとんど高低差のない平坦地となっていた。しかし盛土を除去し現れた旧耕作土面は、1D・6Dトレンチ北西側ほど高く南東側ほど低いという状況であった。特に8Dトレンチの同面は、旧耕作面に設置された南北方向の水路を東へ向けて横断するたびに低くなる状況であった。このような旧耕作土層検出高の差異は、調査地西半のように第Ⅰ遺構面を低めに認定せざるを得ない箇所と、調査地東半のごとく第Ⅰ遺構面の高めに認定せざるを得ない箇所に反映した。この旧耕作土の層厚は平均15cmを測る。

第Ⅰ包含層 概して4D・6D・7Dトレンチという調査区北半では灰オリーブ色系の、調査区南半では暗オリーブ色系の砂質シルトを基本とする。西半の1Dトレンチと東半の7D～10Dトレンチの同層上面で第Ⅰ遺構面を検出した。検出レベルは6.0～4.7mで1Dトレンチ側が高く、南東側つまり8Dトレンチ東端が最も低い。第Ⅰ遺構面は、調査区東半で耕作関連の遺構を、西半では長方形土坑群を検出したが、出土遺物にはわずかながら近世陶磁器を含む。

第Ⅱ包含層 主として砂質シルトで構成され、東半の7D・10D・9Dトレンチ一帯では鉄分の沈着が著しい。検出レベルは5.5～5.2mで、8Dトレンチ東端では4.7mを測る。同層上面で第Ⅱ遺構面を検出したが、1D～3Dトレンチでは東西・南北方向の耕作溝が顕著であった。さらに1D・2D・4Dトレンチ間では上下2層に細分することが可能で、それぞれの上面で遺構を検出した。上から順に第Ⅱ-1遺構面、第Ⅱ-2遺構面と呼称する。出土遺物は14世紀末頃から15世紀初頭の遺物を含む。

第Ⅲ包含層 検出レベルは5.1～4.5mで、やはり東南部が最も低い。同層上面を第Ⅲ遺構面としたが、3D・6D・7Dトレンチでは自然流路の検出面であり、今回の調査では遺構・遺物の密集度の高い遺構面である。第Ⅱ包含層同様、2D・4Dトレンチでは3層に細分可能で、各層上面で第Ⅲ(-1)遺構面、第Ⅲ-2遺構面、第Ⅲ-3遺構面を形成する。出土遺物は14世紀代の瓦器を含む。

第Ⅳ包含層 検出レベルは1D・4D・6D・7D・10Dトレンチで4.8m前後を測るが、2D・3D・5D・8Dトレンチでは平均4.5m、低い箇所では4.1mまで下がる。さらにほぼ全域で第Ⅳ包含層を3層に細分することが可能で、各上面で遺構を検出した。出土遺物は12世紀代の瓦器を含む。

第Ⅴ包含層 若干の差異はあるものの、灰色系のシルトあるいはシルト質粘土層である。この層の平均レベルは4.4m。北半の4.3～4.5mに対し、南半は4.0～4.1mとやや低い。第Ⅴ包含層の時期を決定する遺物はほとんど出土しないが、上面の第Ⅴ遺構面上の溝などから10世紀代の黒色土器A類が出土した。なお8Dトレンチでは、第Ⅴ包含層を上下に2分することが可能である。

第Ⅵ包含層 若干の差異はあるものの粘質の強い褐色系粘土層で、全域で容易に識別可能な層である。2D・5D・7Dトレンチを除く全域では、下層に砂質の強い褐色系粘土層を確認した。検出レベルは平均4m。6Dトレンチがやや高いのに対し、8Dトレンチは低めである。層厚は20～60cm。上面で畦畔を検出した(第Ⅵ遺構面)。出土遺物は少ないが、下層で古墳時代の須恵器・土師器が目立つ。

第Ⅶ包含層 灰色系の堆積土で全域で確認した。土質は細砂から粘土までさまざまである。上面の第Ⅶ遺構面で掘立柱建物・溝・土坑・柵状遺構などを検出したが、これら遺構は主として2D～6Dトレンチという3.7～3.8mの微高地に立地していた。第Ⅶ包含層自体には遺物はほとんど含まれず、それら遺構群では5世紀後半から7世紀前半の遺物が出土した。古墳時代後期の集落跡を検出した。

第4節 検出遺構

1. はじめに

本章第1・2節にて記したように、今回は2箇年度にわたって計12箇所のトレンチを調査した。その際隣接トレンチの土層との対応関係を考慮しつつ調査に臨んだが、必ずしも調査中に完全に把握するにはいたらなかった。トレンチ個別ごとに報告することも考えたが、今回調査分の全体像が不明瞭になると考え、第3節に示したようにそれらを再整理し遺構面ごとの変遷を追えるように努めた。以下遺構面ごとの説明では、第10図標準断面模式図をもとに作成した $S = 1/600$ の遺構全体図を提示し、必要に応じて地点ごとあるいは個別ごとの遺構図を掲載することとした。

各遺構面の記載に際しては、まず遺構面の標高あるいは全体的な遺構配置といった概要を記す。その中で特徴的な遺構については個別図示しつつ、最初に大形の遺構である流路・溝・落込みを、続いて水田（畦畔）・畑地といった耕作関連の遺構を記述し、最後には居住関係の遺構である土坑・井戸・建物・柵・柱穴を記述した。このうち畑地は、一般に「鋤溝」と称されることが多く、最近では「畝間溝」という名称が用いられつつある細長く、場合によっては数条～十数条並行する溝を耕作溝という名称で記載した。また掘立柱建物を構成する柱穴は、建物の中で記述した。今一度記述順序を示すと、流路⇒溝⇒落込み⇒水田（畦畔）・畑地⇒土坑⇒井戸⇒建物⇒柵⇒柱穴となる。なお原則的に遺構面ごとの遺物記載順序はこの遺構記載順序に対応する。

2. 第Ⅰ遺構面の概要

2000年度に調査した1C・2Cトレンチは、玉櫛遺跡の中でも全く未調査であった北辺に位置したこともあり、試掘的な意味合いをもたせ耕作土直下から調査した。その結果耕作土直下に堆積した土層は、近世以降に形成されたものであること、現地表面から約1mの深さまで堆積していることが判明した。

翌年度は、以上の成果を受けて地表下約1mまでを機械掘削の対象とし、それ以下で検出する遺構面について調査対象とした。第Ⅰ遺構面は、第11図に示したように全域で確認したわけではなく、1D・8D・9Dトレンチでのみ検出した遺構面である。ただ1Dトレンチのみは、耕作土除去後多数の方形土坑の輪郭を確認するにいたったため、急きょ調査対象とした。また8D・9Dトレンチは、旧耕作面が他のトレンチより深かったことから、それぞれ第Ⅰ遺構面を検出することとなった。

この第Ⅰ遺構面は全域で検出したわけではないが、1Dトレンチの標高は5.6m、8Dトレンチは5.7m、9Dトレンチは5.4mと、大きな差異は認められない。

8Dトレンチでは、調査区ほぼ中央あたりに南北方向の溝4～5条を検出したほかは、それによって東西に分断されたかのごとき長大な東西方向の数条の溝を確認した。これらの溝は、長いもので全長約40m・最大幅約70cmを測る。これらから出土した遺物は、瓦器・瓦質土器・土師器など25片を数えるが、近世陶磁器はなかった。

一方9Dトレンチでは、調査区東端付近で東西方向の5条からなる耕作溝を検出した。規模は検出長約10m・最大幅40cmを測り、8Dトレンチ検出の耕作溝に比べて小ぶりだ。出土遺物は瓦器・瓦質土器・中世陶器・瓦など25片を数えるが、やはり明らかな近世陶磁器はなかった。このほか9Dトレンチでは、調査区西端付近で耕作面の段差や、1Dトレンチでみられたような長方形土坑1基を検出した。この長方形土坑も、1Dトレンチ検出の長方形土坑群同様細砂～微砂を埋土とする。ただ土坑内の砂に

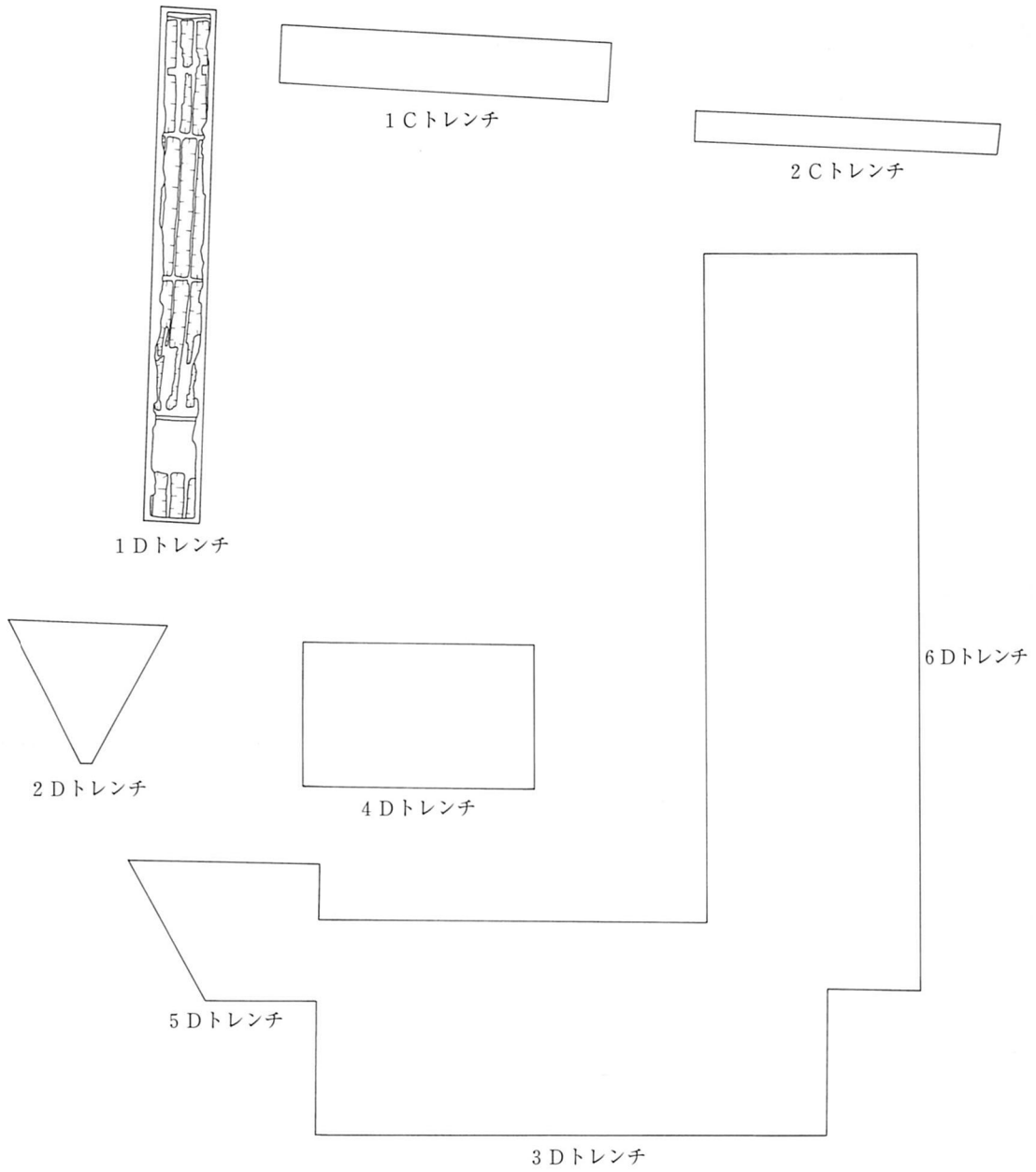
X = -133.060

Y = -38.840

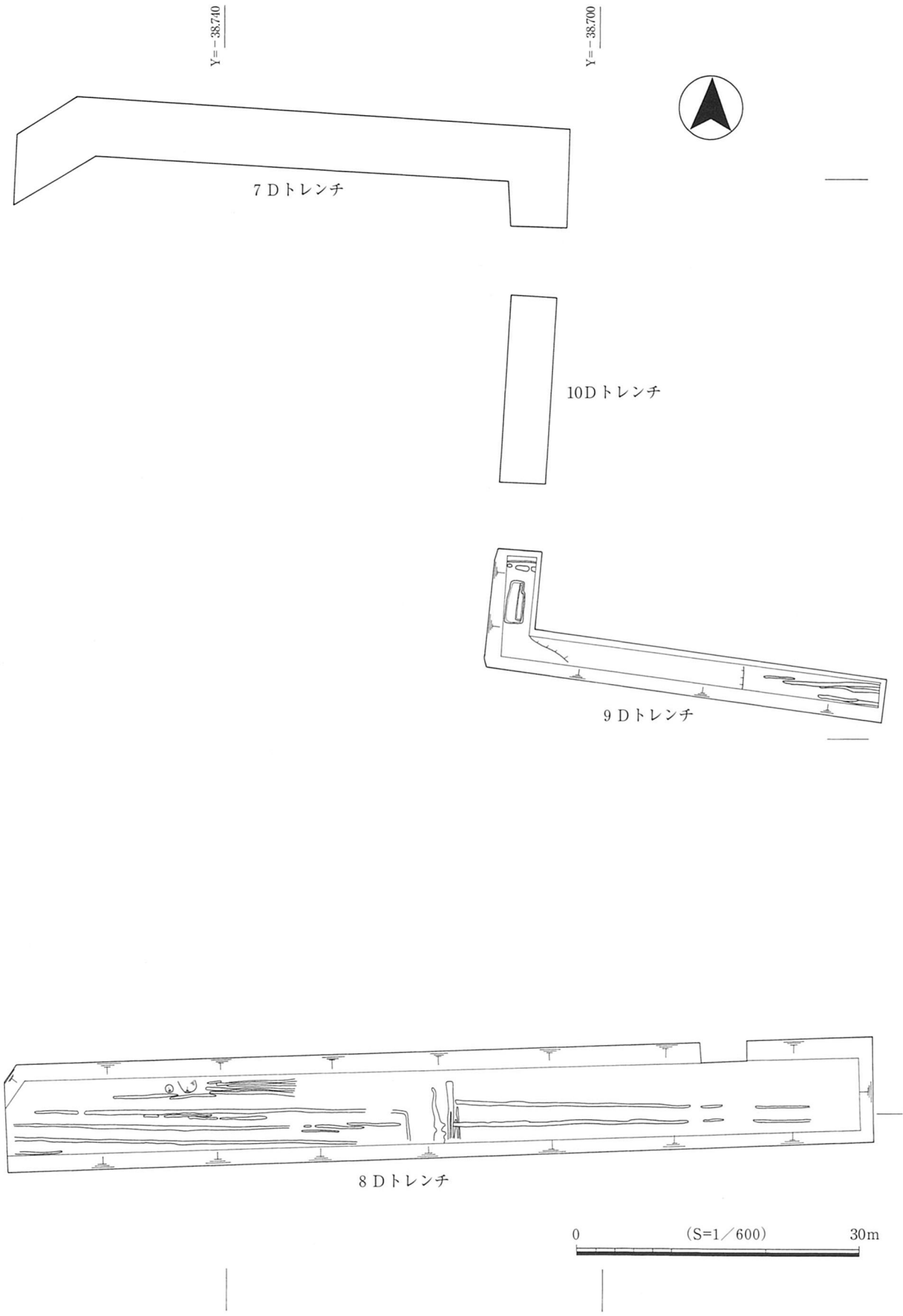
Y = -38.800

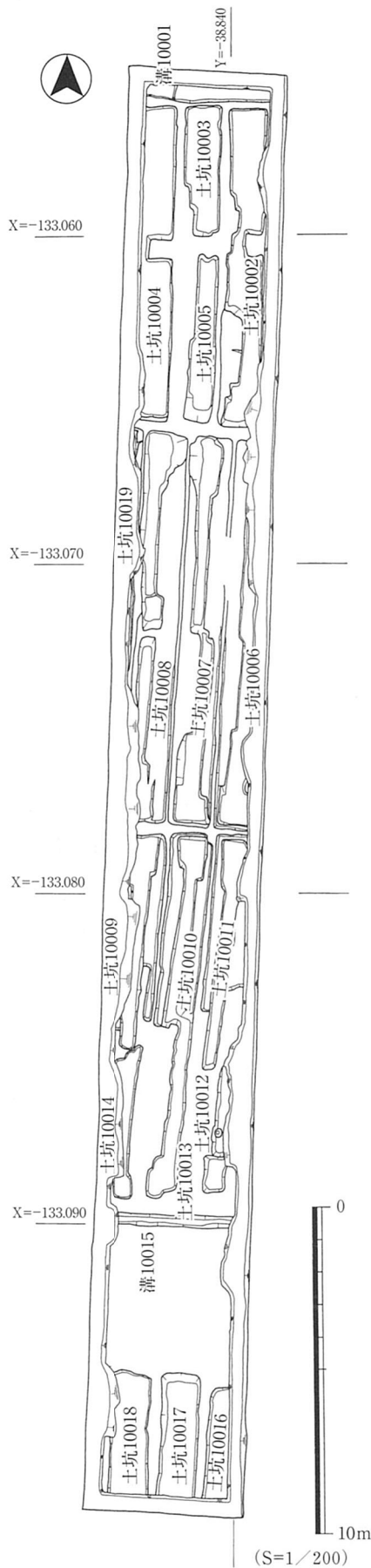
X = -133.120

X = -133.160



第11図 第I遺構面全体図





第12図 1 Dトレンチ 土坑群

はラミナが観察できたこと、土坑底面に拳大の円礫を敷きつめたような箇所があったこと、さらには単独で検出したことなど、1 Dトレンチの土坑群との相違点が目立つ。

2-1 1 Dトレンチ検出長方形土坑群

南北方向に穿たれた12基からなる長方形土坑群。調査区西辺・南辺には、側溝で半截された土坑があること、1 Dトレンチあるいは2 D・4 Dトレンチでは同様の土坑群を検出できなかったことから、本来はこれら1 Dトレンチ付近を東限とする一帯に存した可能性が高い(第12図)。

さてこの土坑群は次のような特徴を見出すことができる。全体的に主軸をN-5°-Eとし、規則正しく3列3段に掘削すること。南端付近では、5 m強の空白地帯を挟み同様に掘削する。平面形は一様に全長9~13m、幅1.3m前後、深さは浅い部分で2 cm前後、深い部分で30~40cmを測ること。東西に隣接する土坑間には全長・幅ともに差異はないが、南北に接する土坑間には全長に差がある。

個々の土坑は、長方形に掘削することを意識しつつも完掘したものはない。掘削状況は次のような特徴を指摘することができる。①長方形土坑の中央付近に掘り残しのあるもの(土坑10004、土坑10003・土坑10005、土坑10002)、②輪郭のみ長方形に掘削するがそれ以下は部分的に掘り下げたもの(土坑10006~10008)、③輪郭すら長方形に掘らずに部分的に掘り下げたもの(土坑10009・10014、土坑10010、土坑10011~10013)、の3種類である。これら①~③の特徴は東西に隣接する土坑間にもみ共通する。

次に土坑埋土に注目してみよう。埋土は、ところによっては鉄分が沈着して色調に差異があるものの、一様に細砂~微砂である。ただ流水堆積を示すラミナを確認することはできなかったため、自然堆積とするより人為的な埋め戻しを想定すべきであろう。

南端付近の空白地について触れておこう。先にも記したように空白地は幅5 mを測り、南辺では溝を検出することができなかったが、北辺に東西方向の溝1条がある。続く第Ⅱ・第Ⅲ遺構面でも東西方向の溝を検出しており、これらを側溝とみなすなら、長期間にわたって道路のような施設があった可能性がある。

3. 第Ⅱ遺構面の概要

今回の調査地ほぼ全域で遺構確認ができたのは第Ⅱ遺構面以下である。第13図に示したように同遺構面検出の遺構の多くは、耕作地として利用されていたことを示すものであり、居住域を示す柱穴・土坑といった遺構は、わずかに9 D・10 Dトレンチ周辺で確認したにとどまった（第17・19・20図）。

地形的には、調査地西半の1 D・2 Dトレンチが約5.5m（平均高、以下同じ）、4 D・5 Dトレンチが約5.3m、3 D・6 Dトレンチが約5.4mであるのに対し、調査地東半の8 Dトレンチは約5.3m、7 D・9 Dトレンチは約5.2m、10 Dトレンチは約5.1mを測る。3 D・6 Dトレンチの遺構面が高いのは、後述する河川に埋積した膨大な土砂に起因するものであろう。かような状態は、おおよそ西半が高く東半が低い、府営住宅建設前の状態に比較的近かったと考えてよい。

さて第Ⅱ遺構面は、調査地北西側に位置する1 D・2 D・4 Dトレンチで、さらに対応する遺構面を1面確認することができた。以下これを第Ⅱ遺構面の小期として区分するために、枝番を付して第Ⅱ-2遺構面と表記し（第Ⅱ遺構面を第Ⅱ-1遺構面と呼ぶこともある）、別途その部分のみ第14図に図示した。

調査区西半の1 D～6 Dトレンチの状況は、3 Dトレンチで検出した溝30016（p.84）を除けば、溝はすべて耕作溝であった。これらは主として南北方向に掘削する。1 Dトレンチ南端付近で、先に記した第Ⅰ遺構面検出長方形土坑群内の空白部分、およびその両端に掘削された溝に対応する遺構を検出した。第Ⅰ遺構面同様、道路状遺構とみなしてもよいのではないか。しかしこの東西方向の空白部分・溝を東へのぼしたあたりの6 Dトレンチでは、そのような痕跡は全くみつからなかった。南北方向の耕作溝は6 Dトレンチ北半で密集し、逆に3 Dトレンチや6 Dトレンチ南半では疎らであった。つまり後述する第Ⅲ遺構面自然流路30019を埋め尽くした大量の砂礫は、所によって耕作に不適だったのかもしれない。2 D・4 Dトレンチでは、南北方向の耕作溝に加え、西北西-東南東（W-20°-N）に指向する耕作溝が見つかった。両トレンチで検出した2方向の耕作溝の前後関係は一致せず、2 Dトレンチでは後者から前者へ、4 Dトレンチでは前者から後者への変遷が追える。

ここで、1 D・2 D・4 Dトレンチ第Ⅱ-2遺構面について触れておこう。第Ⅱ-2遺構面では、1 D・2 Dトレンチで南北方向の耕作溝を検出することができたが、4 Dトレンチでは続く第Ⅲ遺構面検出の落込み40034の名残と思しき不定形な落込み40065や土坑40064・40066を確認したにすぎず、それ以外に耕作溝などの明瞭な遺構をみつけることはできなかった。

調査区東半の7 D・8 D・9 D・10 Dトレンチにかけても、多くの部分で耕作関連の遺構を検出した。7 Dトレンチでは、第Ⅲ遺構面自然流路30019跡にあたるトレンチ西半で、南北方向に規則正しく並んだ10条余の耕作溝を検出したが、逆に東半部分では皆無であった。8 Dトレンチでは、調査区西端で溝80102（p.84）を、中央部に南北方向で溝80015（p.84）・80147（p.85）を、調査区南辺に東西方向の溝80143（p.84）を確認した。溝80015は溝80147を掘り直したもので、溝80143は溝を縦割りした状態で検出した。溝80147と溝80143が交わるあたりでは、護岸のためか打設された木杭が目立ち、掘り直した溝80015西岸においても木杭は顕著であった（第18図）。溝80015を除く溝は、埋土にほとんどラミナが認められず、ところどころでブロック土が観察できたことから、洪水など土砂による自然埋没ではなく一様に埋め戻した可能性がある。これに対し溝80015は、ラミナが顕著に観察できた。

なお8 Dトレンチでは、ほぼ中央を除く大半の箇所でも東西方向の耕作溝を検出した。ただ溝80102・溝80147（溝80015）に挟まれた一帯の第Ⅱ遺構面ベース層が、他に比べてやや軟弱であったため精査し

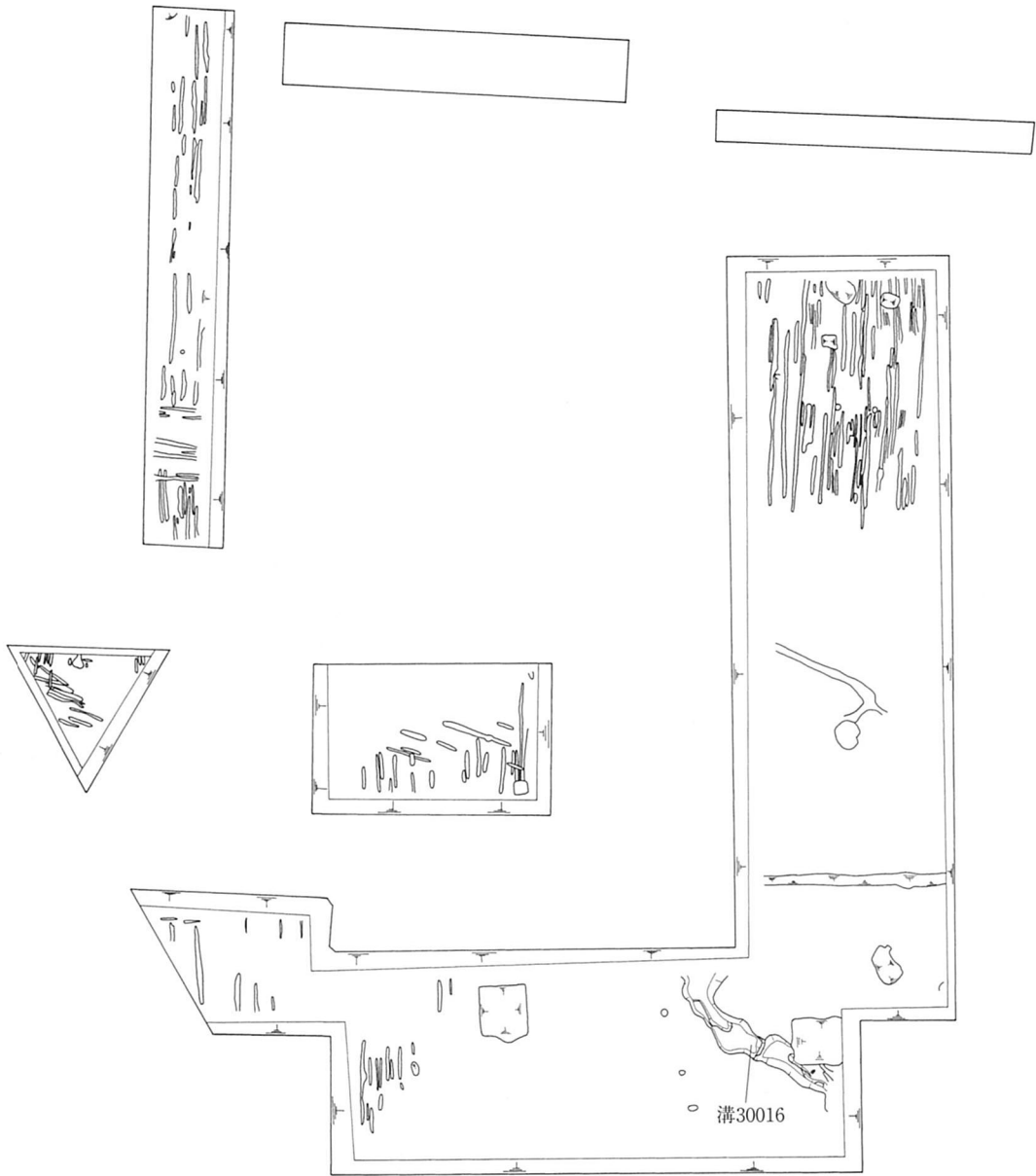
X = - 133.060

Y = - 38.840

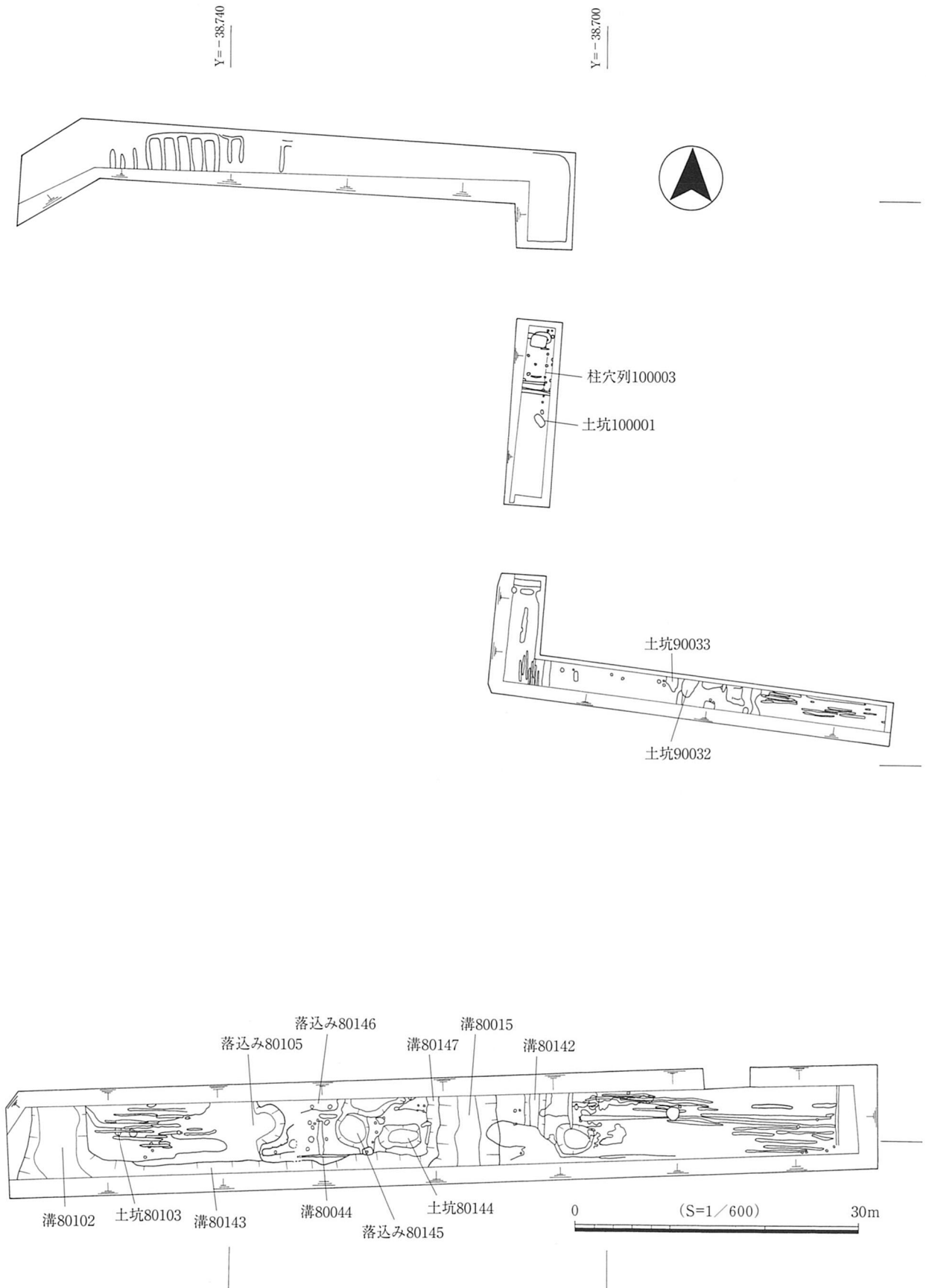
Y = - 38.800

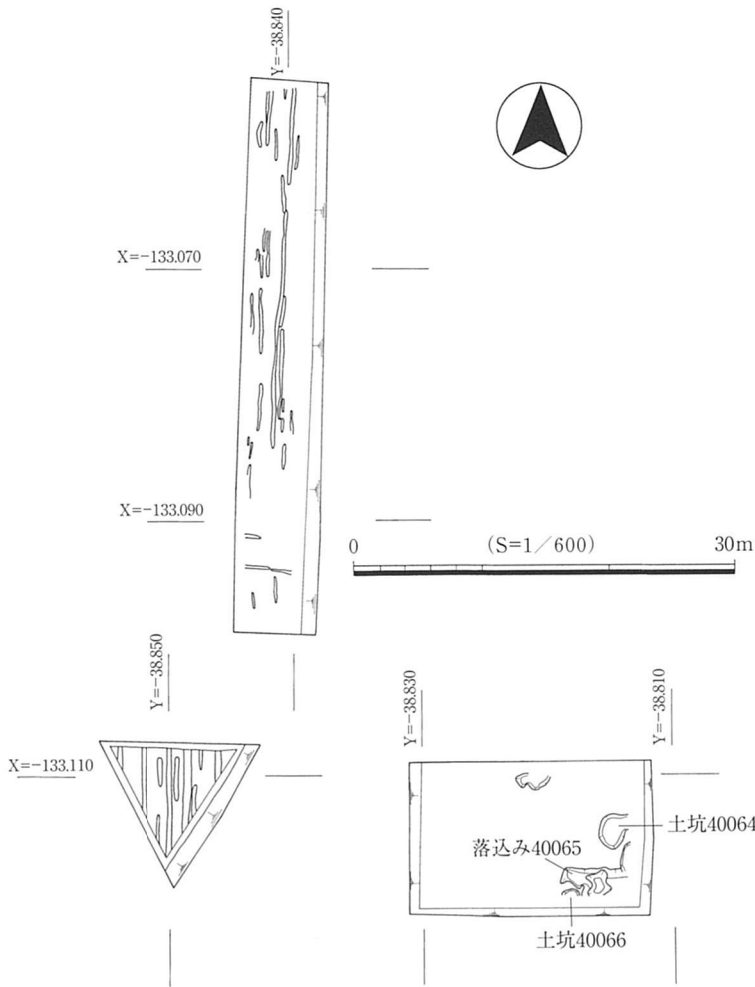
X = - 133.120

X = - 133.160



第13図 第Ⅱ遺構面全体図





第14図 第II-2遺構面全体図

たところ、不定形に窪んだ落込み80105 (p.85)・80145 (p.85)・80146 (p.86)を検出した。トレンチ中央部で検出した多数の小規模な柱穴は、建物を復元できるようなものではないものの、落込み80145・80146、土坑80144を取り囲むかのようであった。

9Dトレンチは、調査地中央部で数基の土坑や柱穴を検出したが、トレンチ西端付近では南北方向の耕作溝を、トレンチ東端付近では東西方向の耕作溝を確認し、多くの部分で9Dトレンチ一帯が耕作地として利用されていることが明らかとなった。

第II遺構面は総じて生産域としての色合いが濃厚であるが、唯一居住域としての遺構を検出したのが10Dトレンチである。14世紀前半の土師器皿を中心とした土器が、比較的完形に近い状態で出土した土坑100001

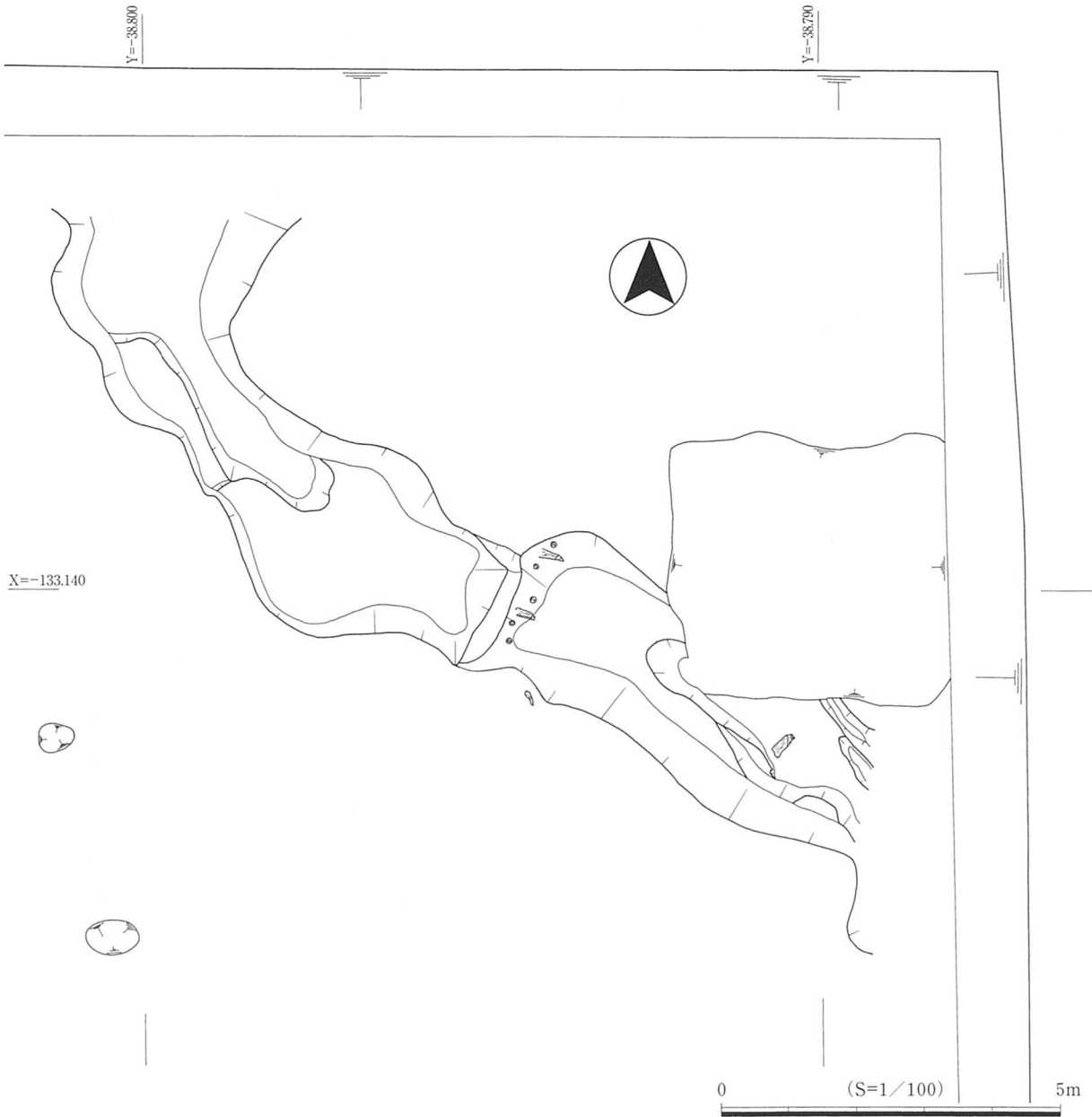
(p.86)、調査区の関係で3間分の柱列の検出でとどまった柱穴列100003など、後述する第III遺構面以下の濃密な遺構群ほどではないにしても、10Dトレンチ周辺は特徴的な地点である。

このように第II遺構面は、一部13世紀中頃から後半の遺構もあるが、主として14世紀から15世紀初頭にかけての遺構面と捉えることができる。その多くは生産域として利用されたが、一部は居住域として活用されていたようだ。

3-1 3Dトレンチ検出溝30016

溝30016は3Dトレンチ北東隅付近で検出した溝である。検出した溝の大半は、第III遺構面自然流路30019を埋め尽くした砂層をベースとし、わずかに東端付近のみが同30019左岸となったシルト質層である。詳細な全体図を第15図に示したが、溝幅・深さとも一定せず、全体的に蛇行気味である。さらに6Dトレンチなど周辺の調査地では、この溝30016を確認できなかった。

さて溝中央付近の溝底がやや盛り上がった箇所、7本打設した丸太杭を検出した(第16図)。立面図をみるとわかるように、その多くが欠損しているなか上流部からの水流がかなり強かったためか、杭2・5は斜めに倒れかけ、杭2の根元が折れている。杭上流部側では、あたかも板材を渡したかのごとき筋を確認したが、断面観察の結果これは細かな有機物が帯状に堆積したにすぎないことが判明した。本来は水流を制御するための横板が存在した可能性も、あるいは考慮すべきかもしれない。



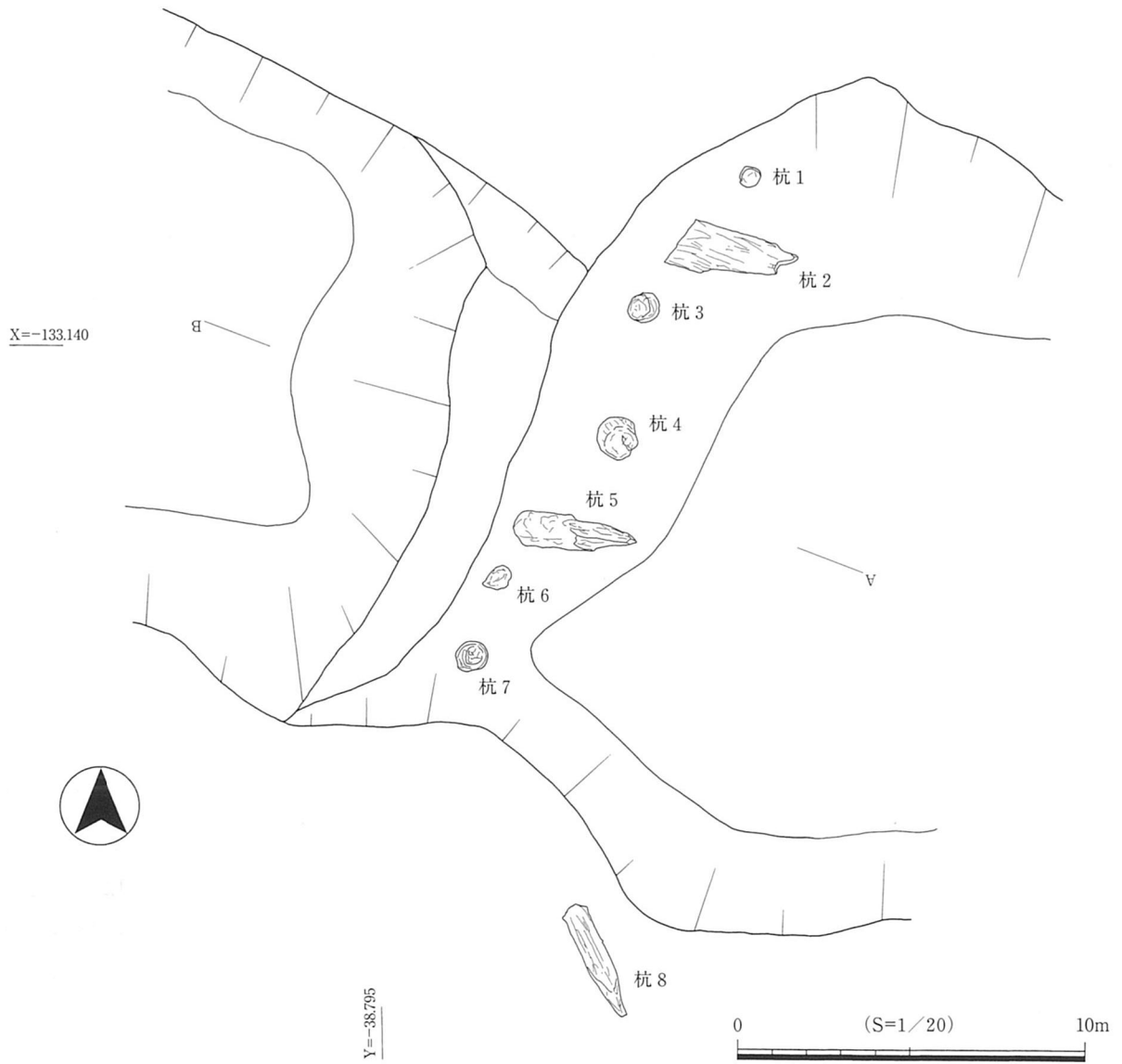
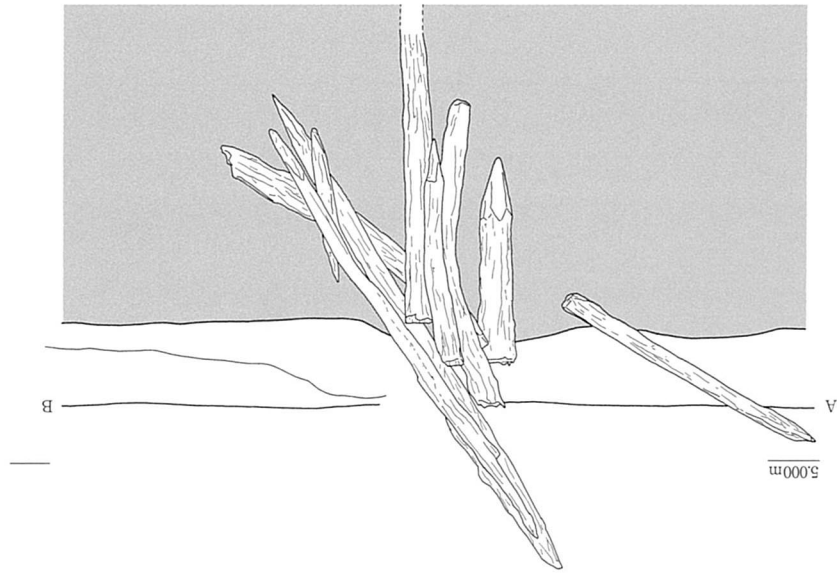
第15図 3Dトレンチ 溝30016

出土遺物は、13世紀中頃から後半の瓦器塊・土師器皿などがある。

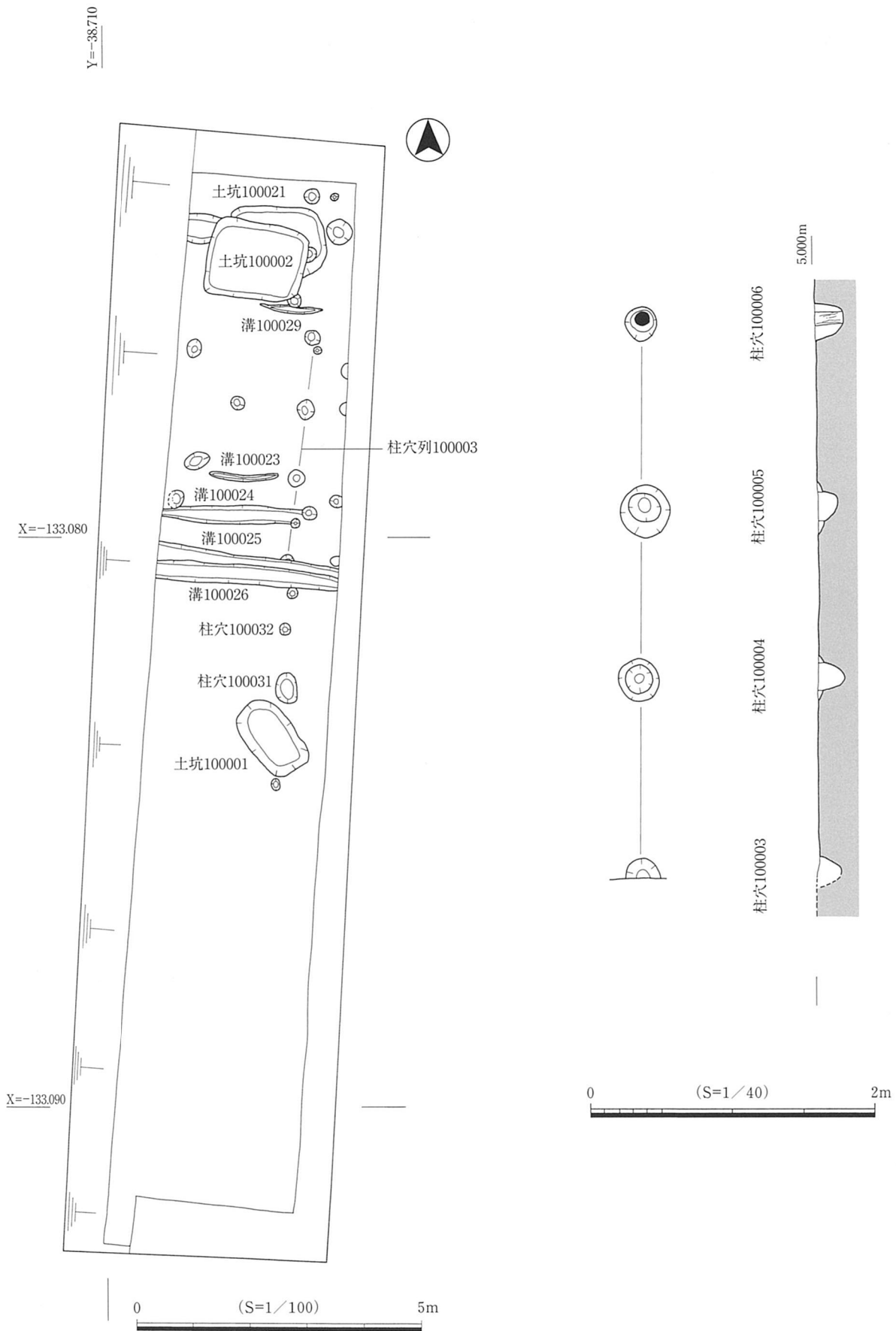
3-2 8Dトレンチ遺構群

第18図は8Dトレンチ中央部の拡大図である。トレンチ南辺に沿って東西方向の溝80143があり、中央に南北方向の溝80147とそれを掘り直した溝80015が重複する。先にも記したように、溝80015は意図的に埋めた溝80147を掘り直した溝で、両者の左岸はほぼ重なる。溝80147が幅6.8m・深さ1.2mに対し、溝80015は幅6m・深さ60cmとやや小振りになる。溝80015から14世紀以降の土器片が、溝80147から14世紀末頃から15世紀初頭の土器片がそれぞれ出土した。特に溝80147から、呪符木簡である「蘇民将来」札1枚がみつまっている。

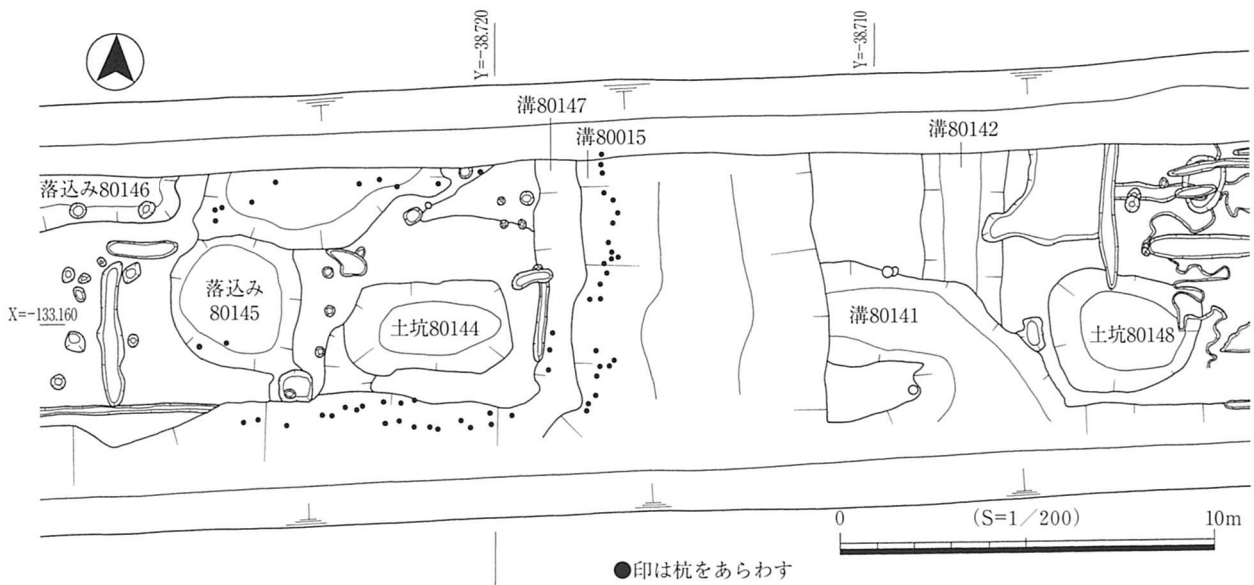
この溝80147・80015周辺では、不定形な落込みや土坑などを多数検出した。西側では、これら溝際に不定形でかつ調査区外に広がる落込み80105・80145・80146、隅丸長方形を呈する土坑80144が相接する



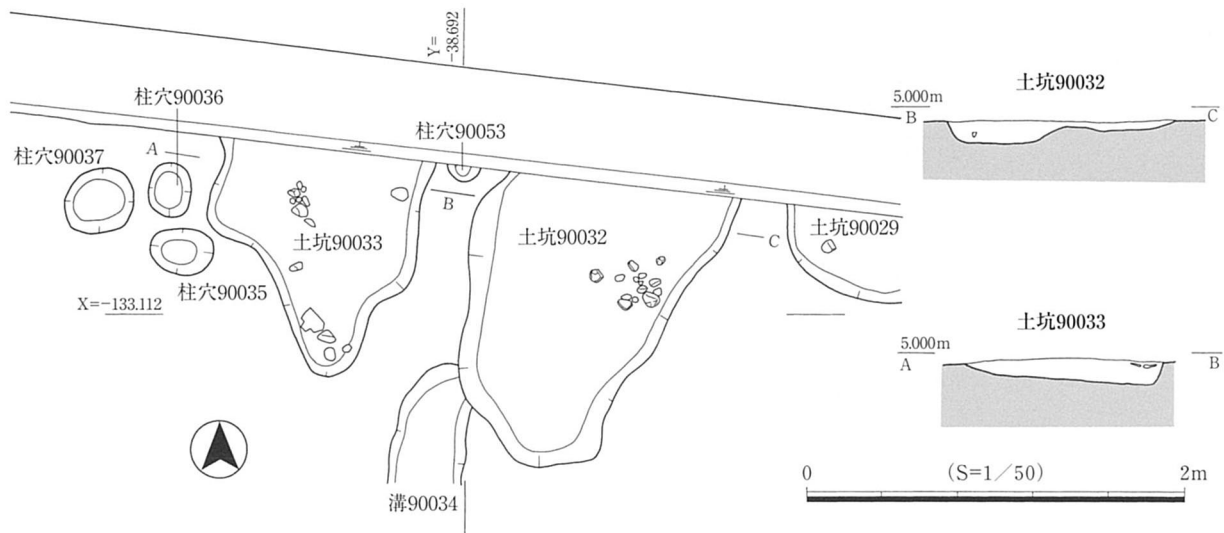
第16図 3Dトレンチ 溝30016内水利施設



第17図 10Dトレンチ全体図(左)・柱穴列100003(右)



第18図 8 Dトレンチ 溝80147付近



第19図 9 Dトレンチ 土坑90032・土坑90033

ように位置し、その隙間をぬうように径30cm前後の小規模な柱穴を20基余発見した。このうち落込み80105・80146や溝80044 (p.84) から、14世紀代の遺物が出土した。溝東側も同様に溝80141や南北方向の溝80142 (p.84) に土坑80148など、溝西側とよく似た様相を呈する。

3-3 9 Dトレンチ遺構群

9 Dトレンチは、中央部で土坑90032 (p.86) ・90033 (p.86) および柱穴数基を確認したが、その東・西側では一定の空白地を挟んで耕作溝を検出した。土坑90032・90033はいずれもその北側を側溝で切られているが、深さ20cm程度と比較的浅い土坑である。出土遺物からみて、ともに13世紀後半を主体とする遺構であろう。

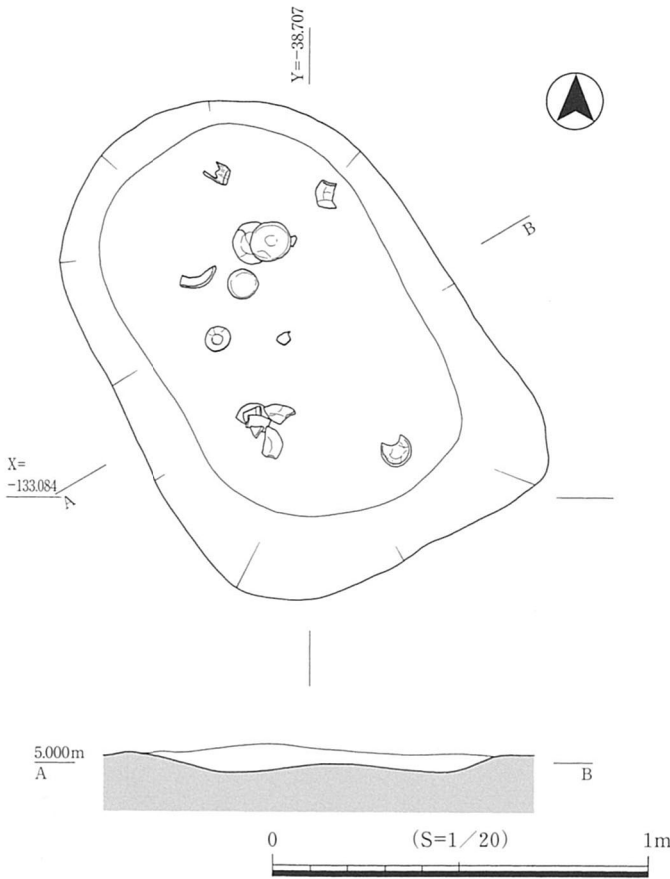
トレンチ西端および東端付近で多数検出した耕作溝は、時期を決するような遺物に恵まれなかった。このうちトレンチ西端の耕作溝群は南北方向を指向するが、東端付近の耕作溝群は、8 Dトレンチ検出の東西方向の耕作溝群とは異なり、むしろ2 D・4 Dトレンチ検出の溝群に近いやや北側に振る溝群で、やや斜行気味の9 Dトレンチに並行する (W-7° - N)。

3-4 10Dトレンチ遺構群

10Dトレンチの遺構はトレンチ北半に集中したが、第Ⅱ遺構面中で唯一居住域であったことを示すような遺構を検出することができた。しかしその痕跡は北側に接する7Dトレンチには及ばず、ごく限定された範囲だった(第17図)。

溝100024・100025・100026は、トレンチ中央付近で検出した東西溝である。溝100025・100026は重複しており、溝100026の方が新しい。いずれも幅30cm・深さ数cmと小規模である。その他にも耕作溝を思わせるような東西方向の溝2条を検出したが(溝100023・100029)、他の事例のように群在しない。

土坑は3基検出した。このうちトレンチ北端で検出した土坑100002と100021は重複するが、長辺1.7m・短辺1.3m・深さ10cmの土坑100002の方が新しい。これに対して、トレンチ中央部で検出した土坑



第20図 10Dトレンチ 土坑100001

100001は、長辺約1.3m・短辺約1m・深さ約10cmを測り、内部から14世紀前半の瓦器塊・土師器皿数個体分がある程度かたまって出土した。

柱穴は20数基検出したが、このうち溝100025に切られる柱穴100003をはじめ、柱穴100004・100005・100006はほぼ南北に等間隔で並ぶことから、柱穴列100003とした。これらの柱間は主軸をN-7°-Eにとり、芯々で1.2~1.4mを測る。今回は柱穴100003の南側に位置する柱穴100032あるいは柱穴100031を含めなかったが、場合によると一連の柱穴列だった可能性もある。

ところで柱穴列100003の西側には、対になるような柱穴をみつけることができなかったが、10Dトレンチの幅が約5mだったことを勘案すれば、調査地東側に広がりをもつ掘立柱建物の一部の可能性は十分ある。なお柱穴列を構成する各柱穴より遺物が出土しなかったので、詳細な時期は不明であるが、13世紀末頃から14世紀の遺物を出土した土坑100001などとさほど隔たるものではあるまい。

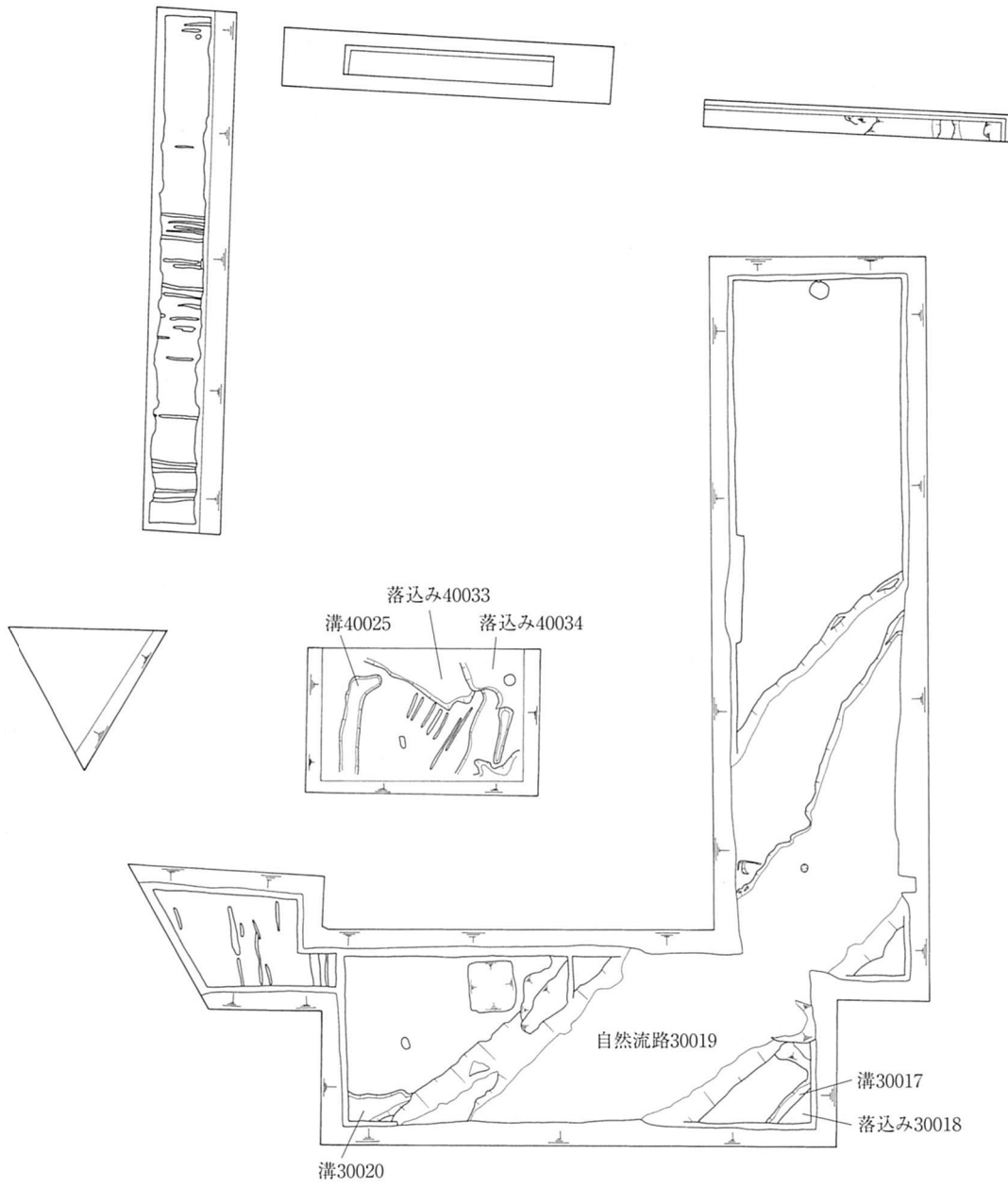
X=-133.060

Y=-38.840

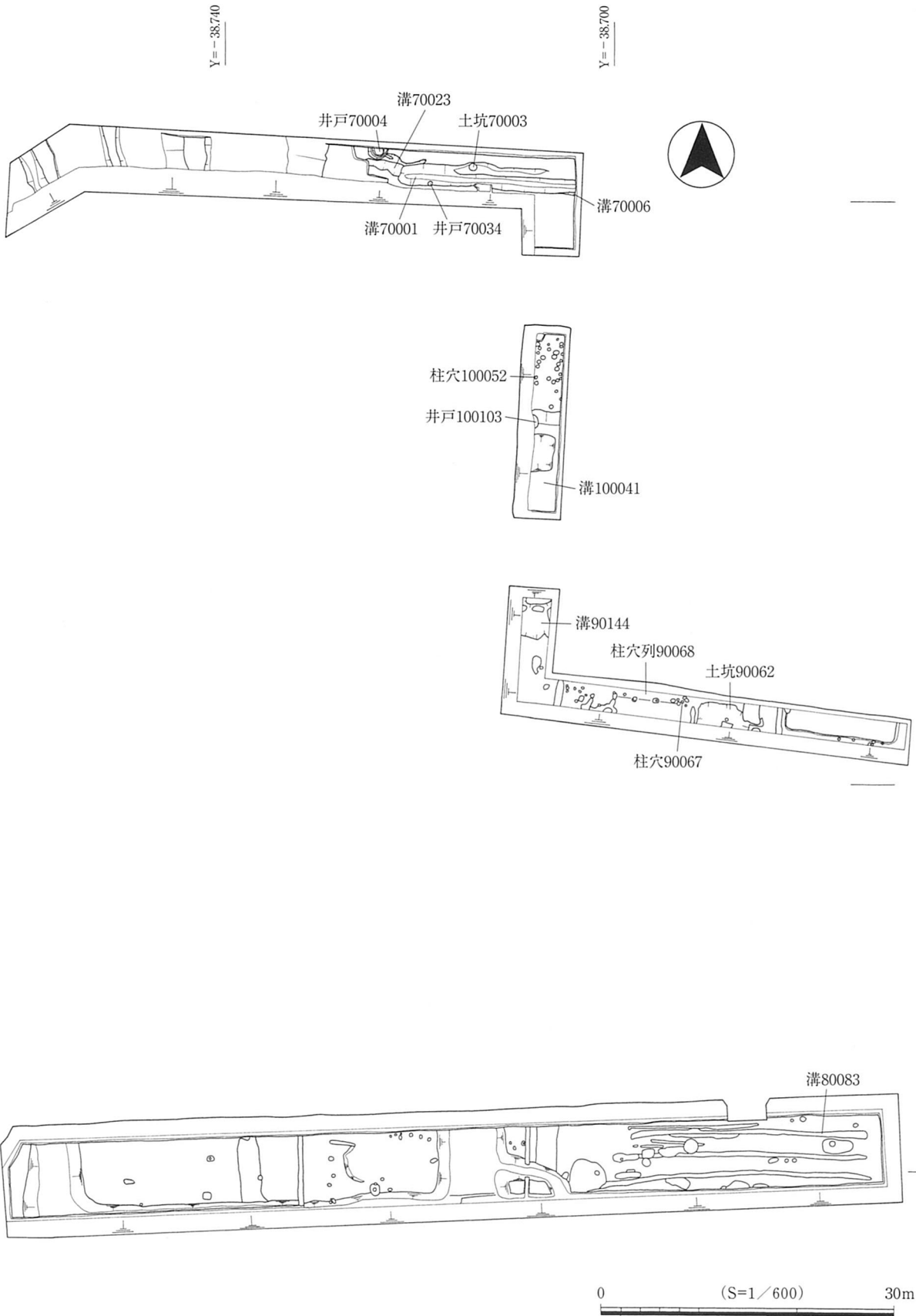
Y=-38.800

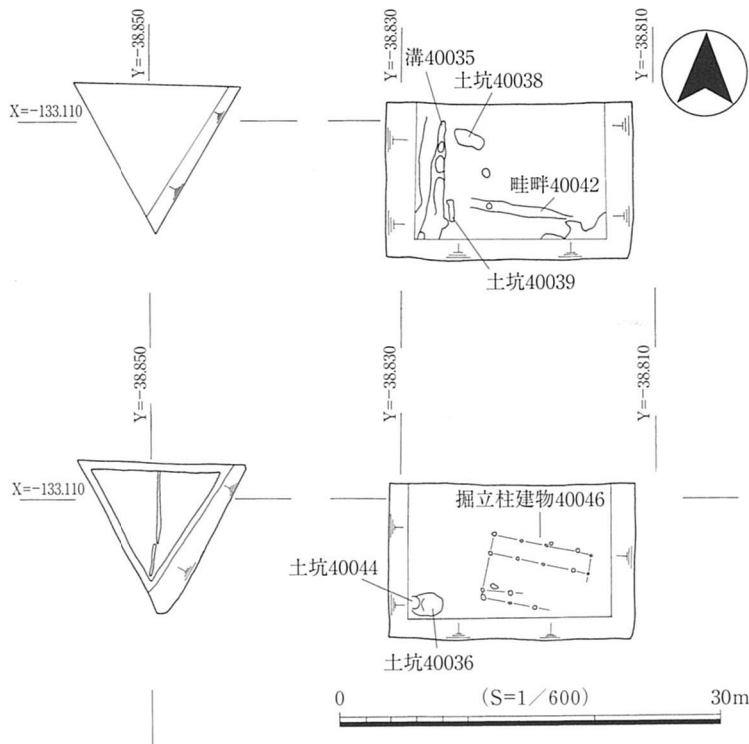
X=-133.120

X=-133.160



第21図 第三-1遺構面全体図





第22図 第三-2(上)・第三-3(下)遺構面全体図

4. 第三遺構面の概要

第三遺構面は、11世紀後半から12世紀初頭に始まり15世紀代ではほぼ終焉をむかえる玉櫛中世集落の、ちょうど半ばあたりに位置づけることができるとともに、活発な集落活動を語るかのように、遺物量の最も豊富な時期でもある。当該期の遺構は1C・2Cトレンチを除く全域で検出し、9D・10Dトレンチ帯を集落域、その他を生産域として利用した点で第二遺構面と変わらない。しかし当遺構面は、今回の調査地を最も特徴づけ、さらには第2次世界大戦終結直後に撮影された航空写真にその名残をとどめた自然流路30019

(p.88)を検出している(第21図)。

さらに第二遺構面と同様の2D・4Dトレンチで、第三遺構面に対応するであろう2時期の遺構面を検出した。これらも前例に倣って第三-2・3遺構面と称し(第三遺構面を第三-1遺構面と呼ぶこともある)、別図を用意した(第22図)。

各トレンチの第三遺構面検出高をみてみよう。調査地北西に位置する1Dトレンチや2D・4Dトレンチ、あるいは同北東に位置する7Dトレンチは、ともに5.1m前後、同じく北東部にある9D・10Dトレンチでは5.0m前後。これに対し3Dトレンチは4.9m前後、5D・6Dトレンチは4.8m前後、最も南に位置する8Dトレンチでは4.7m前後と、南東に向かって低くなる。

さて調査地西半は、自然流路30019を検出した3D・6Dトレンチを除く各トレンチで、比較的顕著に耕作溝を検出した。1Dトレンチは、主として調査区中央から南半にかけて幅20cm前後の耕作溝を22条検出した。主軸はおおむねW-7°-N。耕作溝ということもあり、時期を決するような出土遺物には恵まれなかった。なお南端付近では、第一遺構面にいたるまで踏襲される東西方向の道路状遺構を検出した。ただし、やはりこの地割は6Dトレンチでは検出できなかった。

これに対し2Dトレンチでは第二遺構面以降と大きく異なり、顕著な遺構を検出することができなかった。この傾向は、のちにも触れるように第三遺構面以前から踏襲されてきたものだ。

2Dトレンチのすぐ東側に隣接する4Dトレンチは、中央部でN-30°-Eに斜行する耕作溝を、北東側には落込み40033・40034(p.95)を、さらに西端では南北方向の溝40025をそれぞれ検出した。この溝40025は、幅1.5m・深さ10cmを測る。また落込み40034内では、2箇所をわたり土器集積を検出した。

2D・4Dトレンチは、第三遺構面と時期的に並行するが微妙に遺構面を異なる、第三-2・3遺構面とした遺構面が存在する。第三-2遺構面は、2Dトレンチで遺構検出することができなかったが、4

Dトレンチにおいて調査区西端で南北方向の溝40035 (p.99) や土坑40038・40039 (p.100) などを、中央部で東西方向の畦畔40042を検出した。なお溝40035は、第Ⅲ遺構面検出の溝40025と同一位置で検出した。

ところが第Ⅲ-3遺構面になると、2Dトレンチは南北方向の耕作溝を検出したにすぎなかったが、4Dトレンチは大きく様相を異にする。トレンチ南西端で土坑40036 (p.100) ・40044 (p.100) を、中央部で掘立柱建物40046を検出したのだ。土坑40036は調査区外に広がるため完掘することはできなかったが、13世紀前半から後半の土器とともに「蘇民将来」札が出土した。掘立柱建物40046は、不規則な2×3間もしくは2×4間の総柱建物である。しかし後述するように、第Ⅳ-1遺構面では集落痕跡を全く確認できなかったため、この集落は非常に短期間だったと想定することができよう。

5Dトレンチでは、南北方向の耕作溝数条を検出した。この南北方向の耕作溝は、当遺構面から第Ⅱ遺構面にかけてのみ検出することができた。耕作溝ということで、時期を決するような遺物には恵まれなかった。

3D・6Dトレンチは、北東から南西方向に流れる自然流路30019と、3Dトレンチ南端で溝30017・30020、落込み30018を検出したにとどまった。溝30017と落込み30018は、3Dトレンチ南東隅でわずかに検出したにすぎず、溝2条が切り合っているのかもしれない。一方同トレンチ南西端で検出した溝30020は、その一部が調査区外に広がり自然流路に流れ込む溝である。

調査地東半は、特に9D・10Dトレンチで集落活動が盛んだったようだ。7Dトレンチ西半で自然流路30019を検出した。左岸は検出できたが、右岸はトレンチ西端よりさらに西側にあるものと推察する。またトレンチ幅が5mと狭いために流路方向を決めかねるが、おそらく7Dトレンチ北側に広がる畑地の区画が流路右岸を反映するであろう。7Dトレンチ東半では、東西方向にのびる溝70001 (p.93) を検出。この溝は数回にわたる切り合いを想定することが可能で、溝70006 (p.93) ・70023 (p.93) は溝70001と同一とみなしてよい。このほかにも土坑70003や井戸70004 (p.98) や、特異な曲物を井戸枠に転用した井戸70034などを、さらに第Ⅲ-2遺構面溝70005 (p.99) などを検出した。

10Dトレンチは、調査区北半でピット群、南半で溝100041 (p.93) を検出した。また溝100041の肩部付近で、トレンチ西壁に接して曲物を3段に積んで井筒とした井戸100103が見つかった。

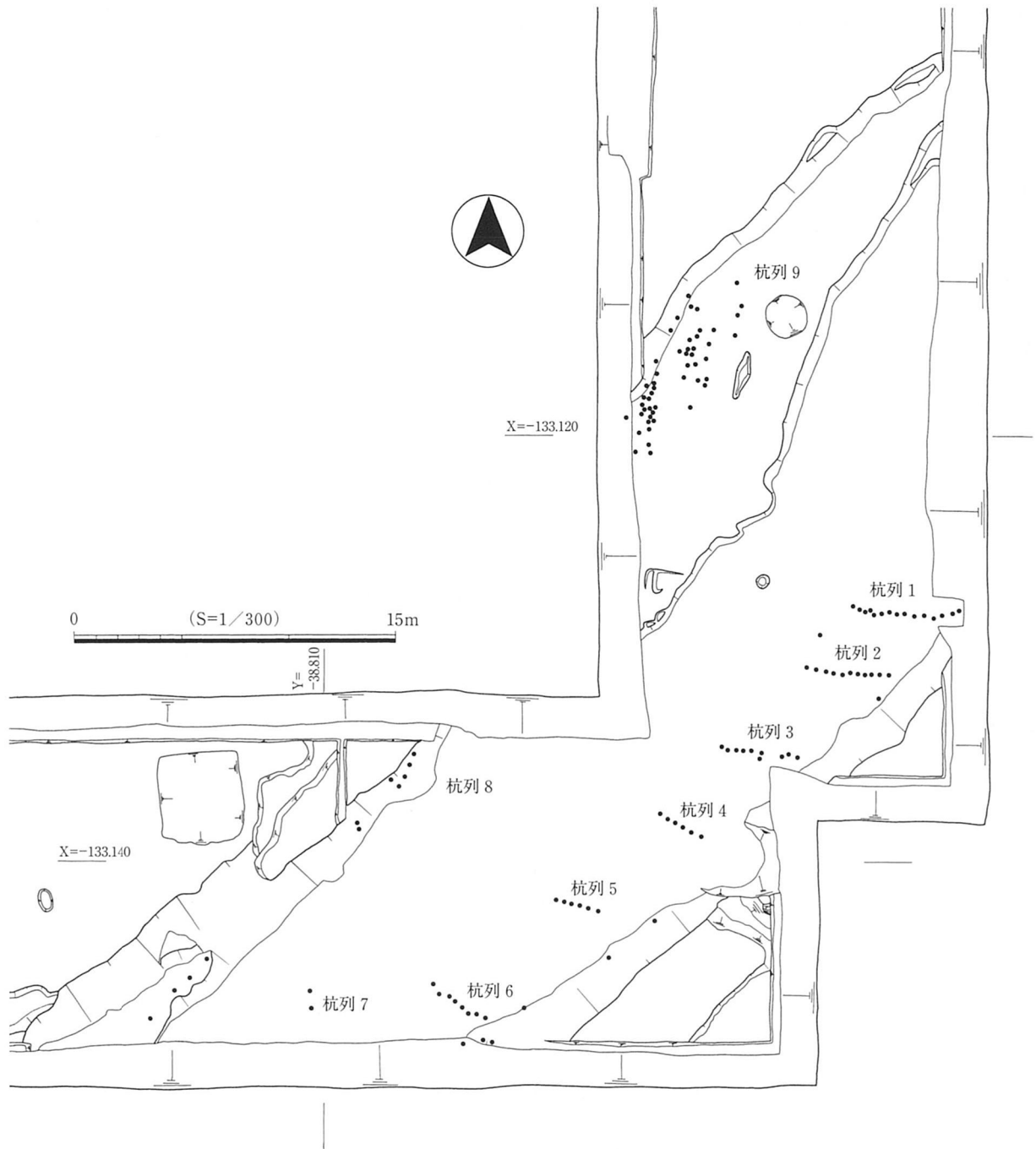
9Dトレンチは、調査地東半部分で最も集落活動が盛んなところである。トレンチ中央部では12世紀後半から13世紀・14世紀前半の土器を多量に投棄した土坑90062 (p.98)、掘立柱建物の可能性のある柱穴列90068、13世紀前半の瓦器輪花塀を出土した柱穴90067 (p.99) などを、トレンチ西端では瓦や土器を投棄した溝90144 (p.93) などを検出した。

8Dトレンチは、西半・東半で大きく土地利用が異なる。西半では第Ⅳ遺構面に続き、顕著な遺構がほとんど確認できなかった。これに対し東半は、溝80083 (p.93) をはじめとする東西方向の耕作溝が数条、その他土坑やピットを検出した。

このように第Ⅲ遺構面は、おおむね13世紀から14世紀にかけての遺構を検出した。以下主要遺構について詳述する。

4-1 自然流路30019

3D・6Dトレンチおよび7Dトレンチで検出した自然流路である。冒頭でも記したようにこの自然流路は、1948年アメリカ軍が撮影した航空写真に明瞭な痕跡を残していた。しかし近年の宅地開発に伴

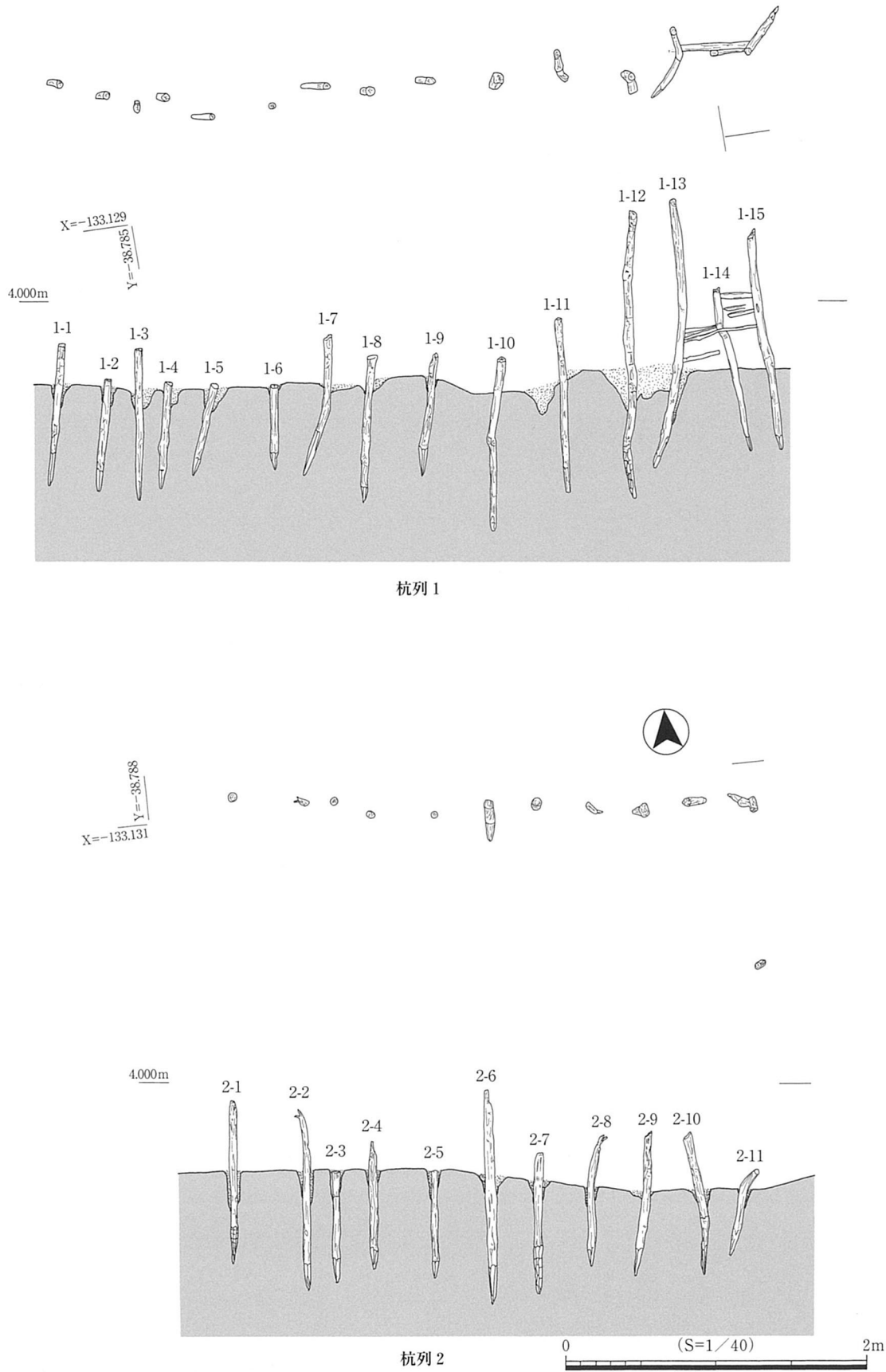


第23図 自然流路30019内杭列

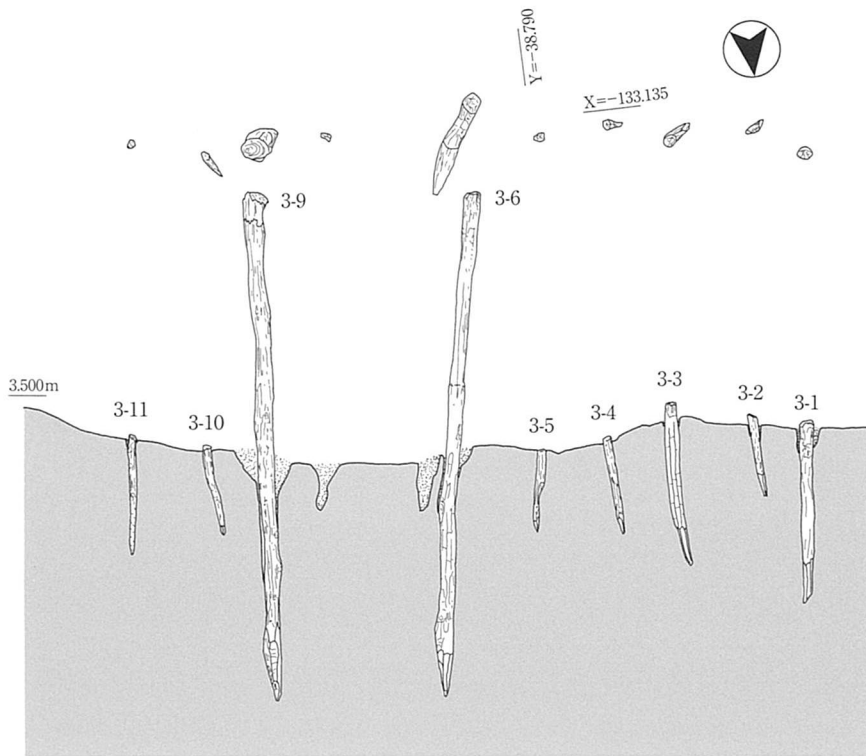
い一带の様相は激変し、現在では7 Dトレンチ北側の畑地の西側区画にわずかその痕跡をとどめるにすぎない。また第Ⅱ章既往の調査成果でも触れたように、大阪府教育委員会による玉櫛遺跡第2次調査において、自然流路30019の一部が検出されている。

3 D・6 Dトレンチにみる自然流路30019は、最大幅約22m、最深部は約1.7mを測る。河岸は比較的なだらかな右岸に対して、左岸は急激に深くなる。第Ⅴ章井上論文にあるように、この流路は数回の洪水によって微妙に流路方向を変えながら徐々に埋積し、最終的に第Ⅲ遺構面時に埋没したのである。

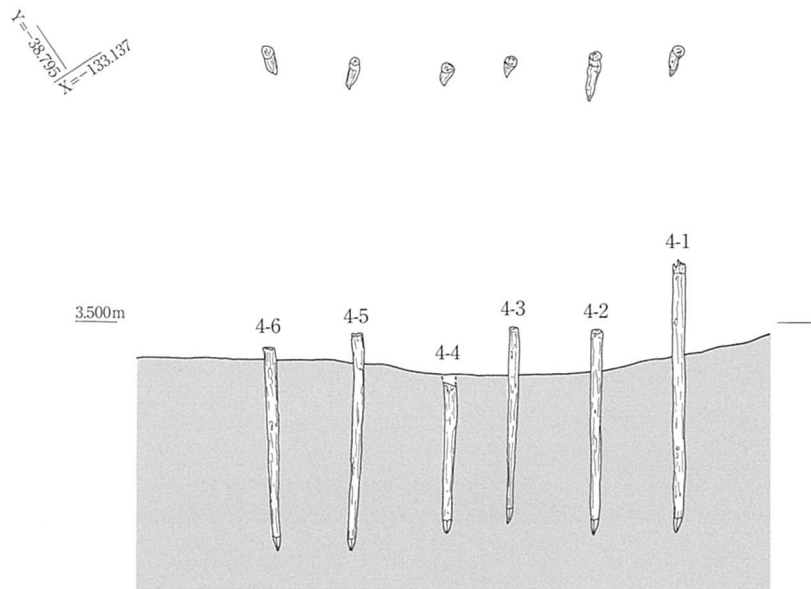
さて自然流路30019両岸には、多数の木杭が打設されていた。3 D・6 Dトレンチ右岸の木杭は特に規則性もないが、3 D・6 Dトレンチ左岸の木杭は先端を下流方向に向けて一列で打設されていた(第23図)。第24図～第27図は、主として左岸で検出した杭列の断面図である。これによれば、木杭間の間



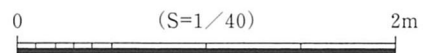
第24図 自然流路30019内杭列1・杭列2



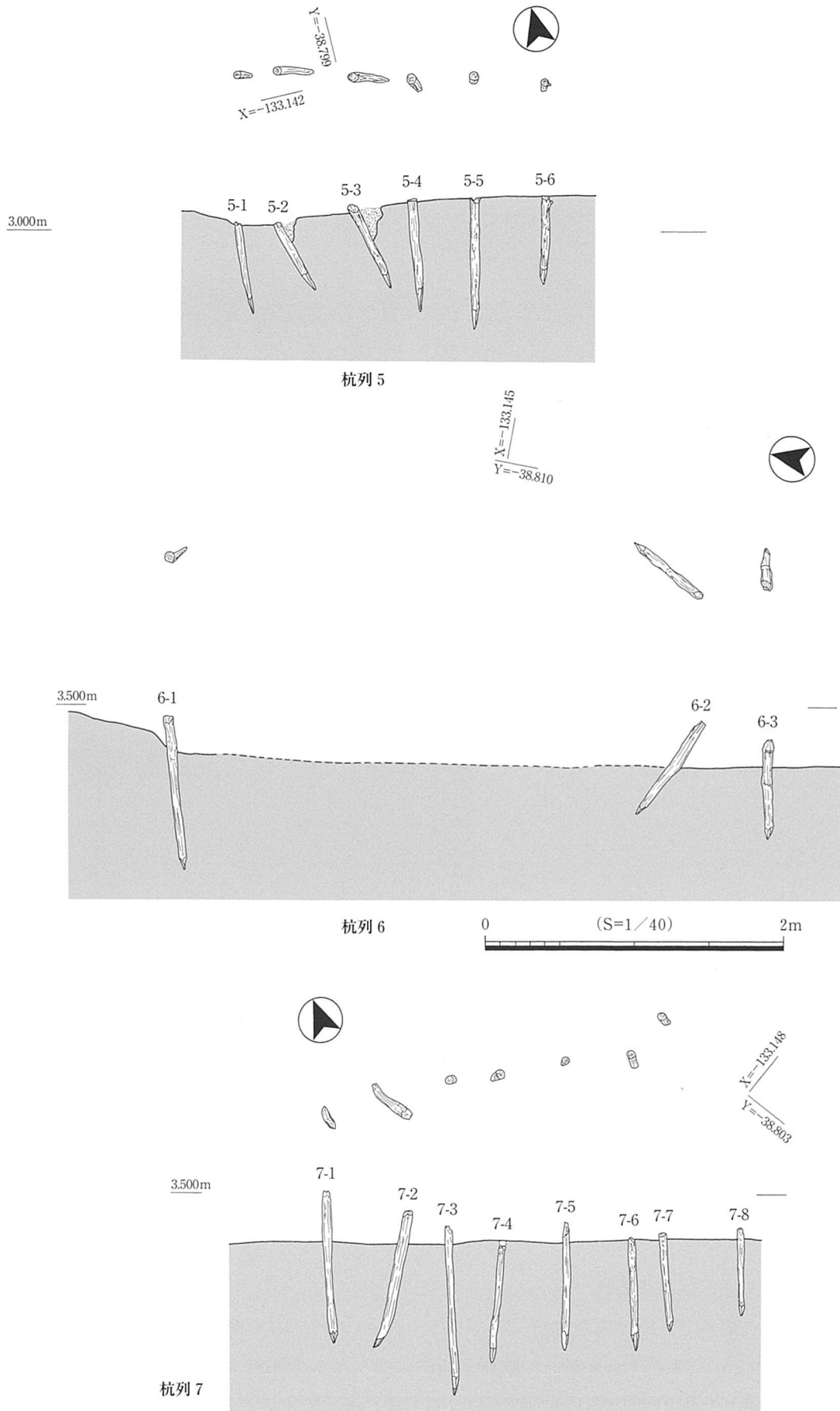
杭列 3



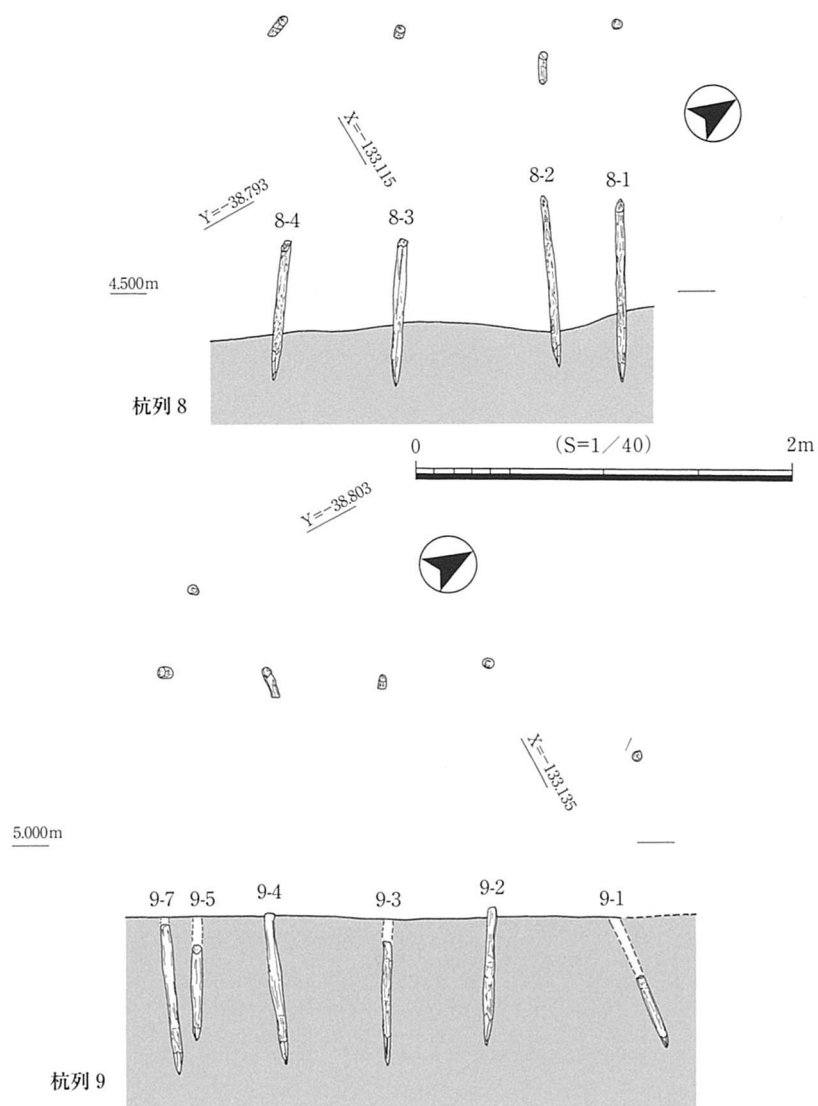
杭列 4



第25图 自然流路30019内杭列 3 · 杭列 4



第26図 自然流路30019内杭列5・杭列6・杭列7



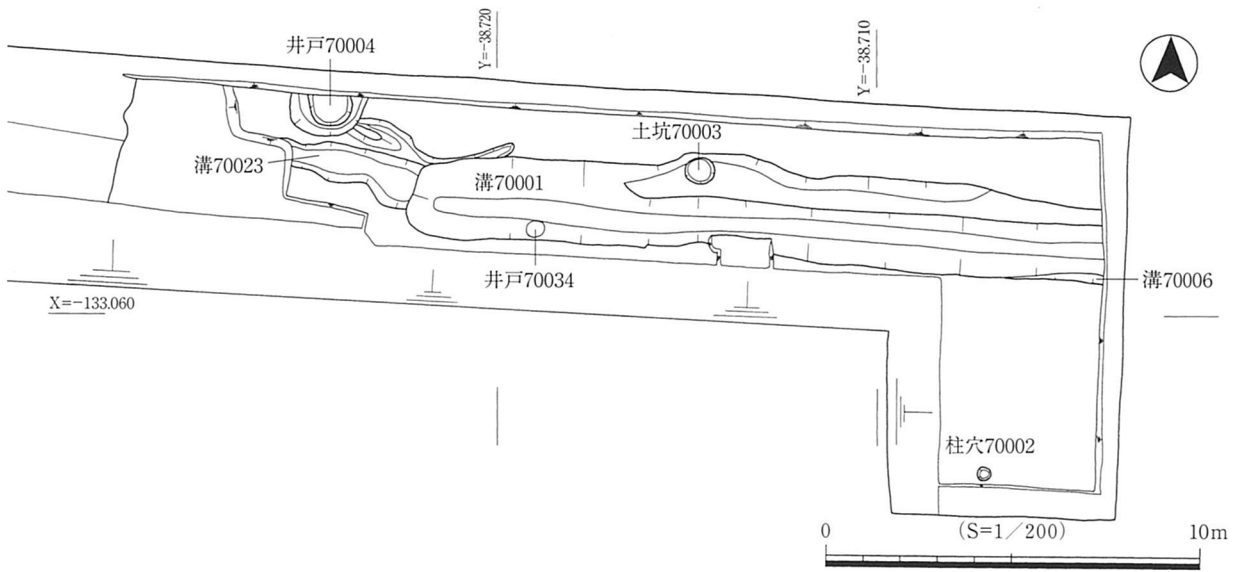
第27図 自然流路30019内杭列 8・杭列 9

隔は必ずしも一定ではないが、打ち込まれた木杭の先端部はおおよそ一定の深さで止まっている。第25図に示した杭列4などはその傾向が顕著である。つまり、ほぼ同じ長さに揃えた木杭を用意して打設した可能性が極めて高い。なお第25図にみえる杭列3の特に長く太い木杭（杭列3-6・3-9）は、舟を係留するための施設ともみなせるが、杭の抜けた痕跡のすぐ横に打設されていることから、補修用の杭とみなすことも可能である。

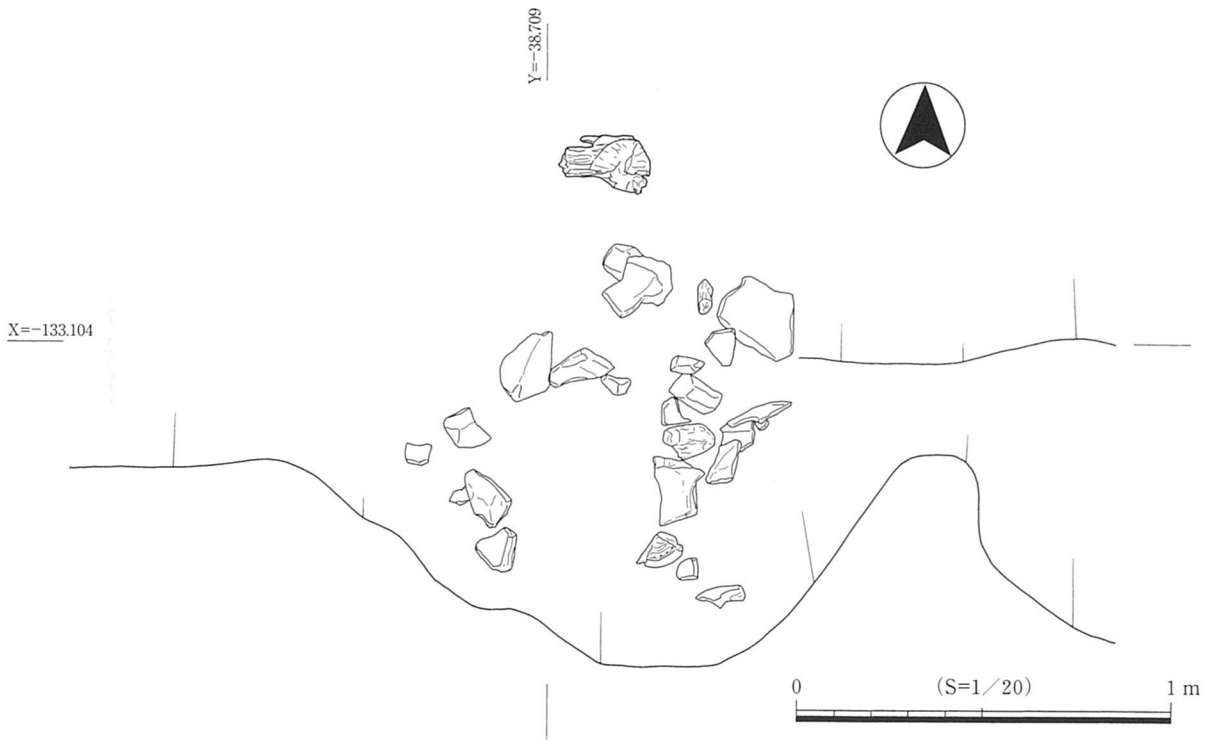
出土遺物から、12世紀前半には流路形成をし、14世紀前半には埋没したようである。

4-2 7Dトレンチ溝群

トレンチ東半で、ほぼ東西方向（ $W-5^{\circ}-N$ ）の溝70001を検出した（第28図）。検出長は約19m・最大幅約2.2m・深さ70cmを測り、断面は緩やかな「V」字形を呈する。この溝は幾度か掘り返されており、図示した溝70006あるいは溝70023は同じ溝と考えてよい。13世紀後半の遺物を主体とし、一部14世紀の遺物が混じる。



第28図 7 Dトレンチ東半全体図



第29図 9 Dトレンチ 溝90144遺物出土状況

4-3 9 Dトレンチ溝90144

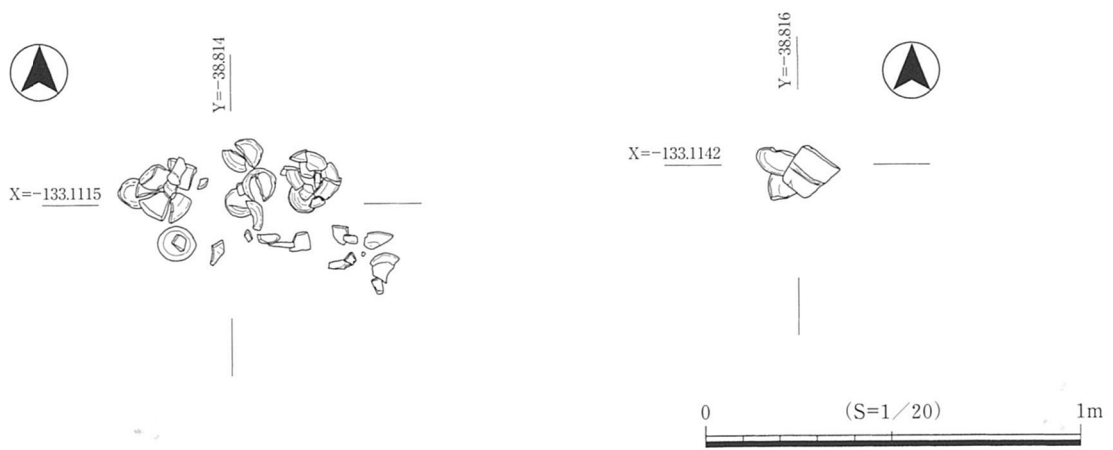
9 Dトレンチ北端で検出した東西方向の溝と思しき遺構であるが、形状は今一つはっきりとしない。第29図に示したように、若干の土器・瓦類が溝底部よりやや上方で出土した。

4-4 4 Dトレンチ落込み40034内土器群

4 Dトレンチ落込み40034内で土器集中地点を2箇所発見し、それぞれを土器群1・2としたが、特に土坑状の掘り込みは確認できなかった(第30・31図)。北東隅で検出した土器群1は、東西約1m・



第30図 4Dトレンチ 第三-1遺構面全体図



第31図 4Dトレンチ 土器群1(左)・土器群2(右)

南北約50cmの範囲内に集中し、比較的完形に復原できる13世紀後半を中心とする小形共膳具が多かったのに対し、落込み40034肩付近で検出した土器群2は、約30cm四方におさまる範囲内の広がり、破片数も少なく完形に復原できるものはなかった。

4-5 9Dトレンチ土坑90062

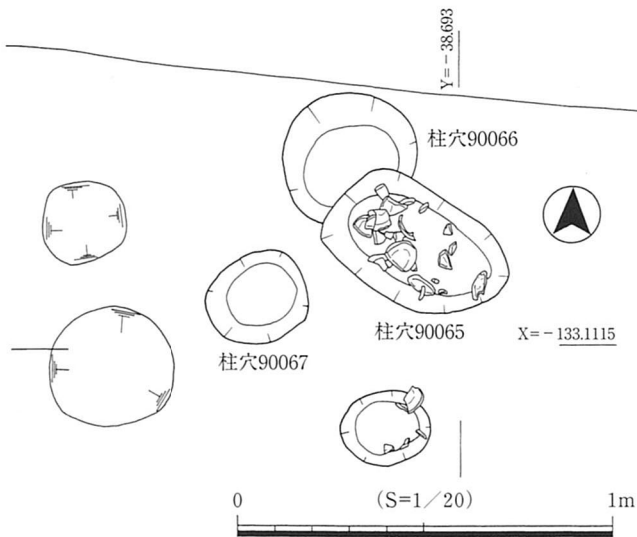
9Dトレンチのほぼ中央部で検出した土坑である。第II遺構面で遺構検出した際に、土坑埋土の炭層が一部で露出していたが、第II遺構面は土坑全体を覆う整地層上面で検出される遺構面であるので、土坑90062は明らかに第III遺構面からの掘り込みである。

土坑南半はトレンチ外にのびるが、平面形はほぼ方形と推定。北辺は東西約4m・南北2m以上を測り、東端は攪乱を受けるが約2mの不定形な突出部をもつ(第32図)。

北辺では土坑肩の内側30cm程度までは深さ20cm程度で、この位置に北辺と並行に杭が打ち込んであ



第32図 9Dトレンチ 土坑90062



第33図 9 Dトレンチ 柱穴90065

った。杭は板材と丸木杭のほかに竹材を使用しており、ほぼ等間隔に打設する。杭は垂直または斜めに打ち込んだものがあるが、おおむね土坑底部から40~60cmの深さにまで達する。杭は土坑底部より上部にあった部分が腐食してやせており、遺構内に露出する状態で機能していたと推測する。杭上部には横木を検出した部分がある。杭の内側はさらに一段下がり、深さ30cm程度となる。西辺には肩から約30cm離れた土坑底付近に土坑肩と並行に、先端を尖らした木杭（長さ1.5m・直径5cm）が水平に置かれてあった。

掘方は炭で埋まった部分よりさらに30cm程度西に張り出しており、この部分は砂質土で埋め、東辺も砂質土で埋めてあった。

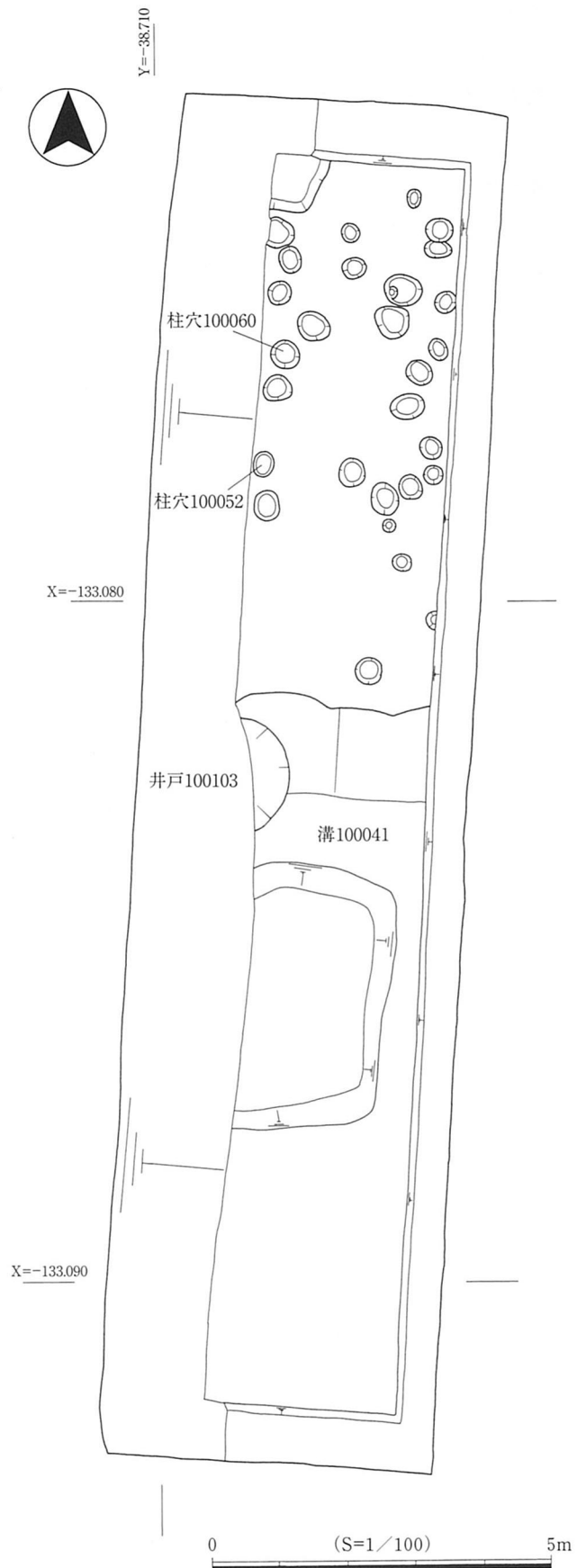
出土遺物は、瓦器塊・陶磁器類など13世紀後半から14世紀初頭のものが主体となる。

4-6 9 Dトレンチ柱穴90065

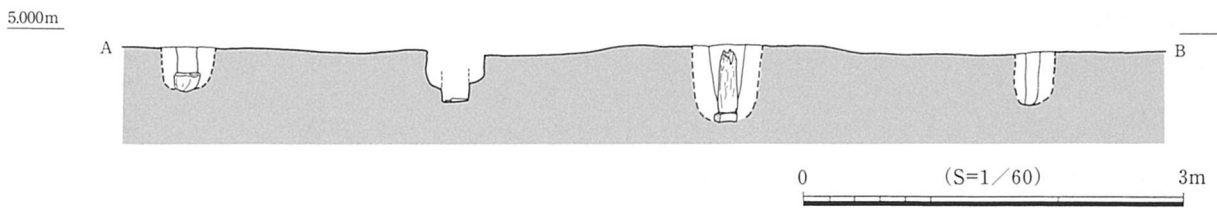
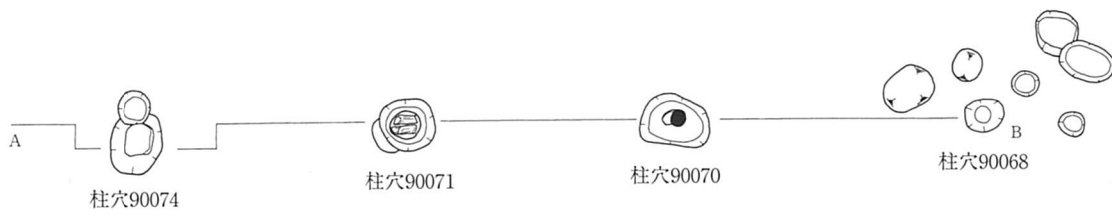
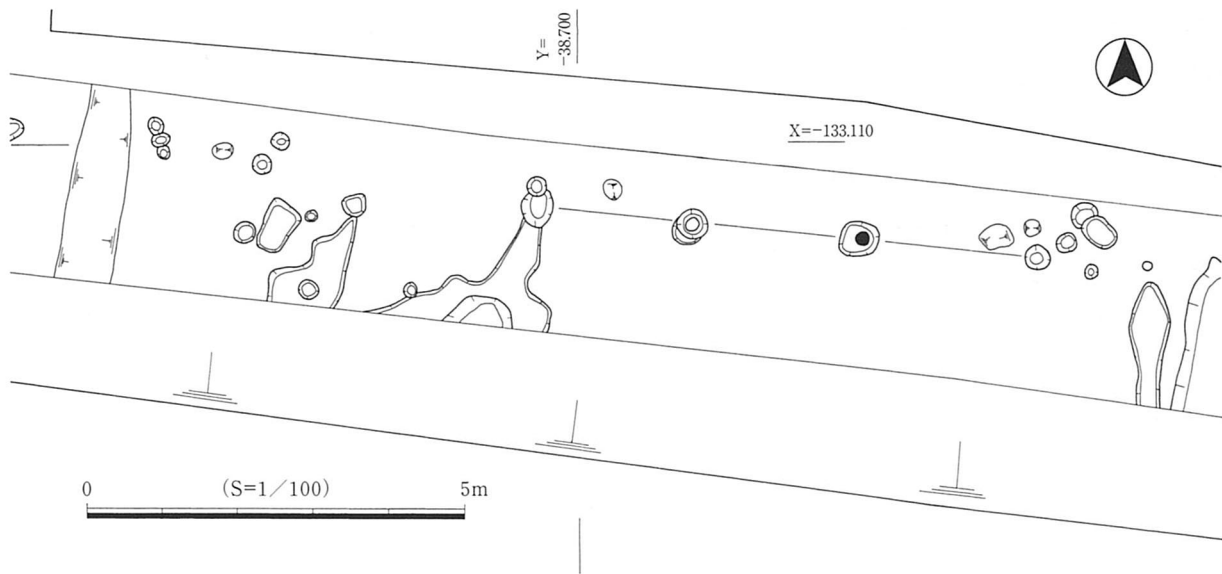
土坑90062の西側で検出した小形の柱穴で、柱穴90066を切る（第33図）。埋土中から完形に近い土師器・瓦器皿が出土した（p.98）。

4-7 9 Dトレンチ柱穴列90068

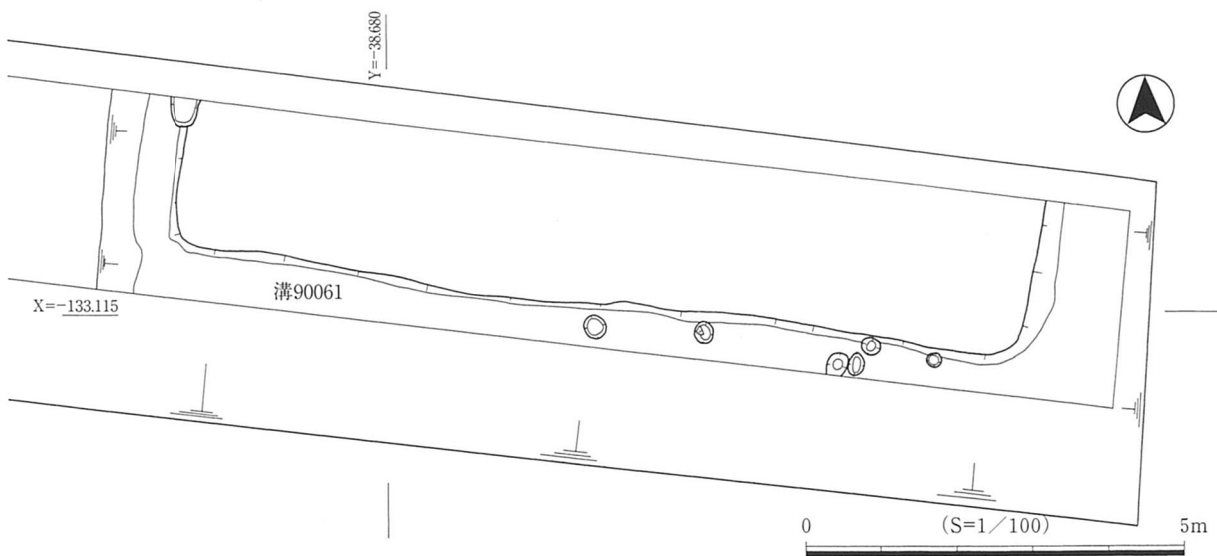
9 Dトレンチ第Ⅲ遺構面では、3間分の柱穴



第34図 10Dトレンチ全体図



第35図 9 D トレンチ 柱穴列90068



第36図 9 D トレンチ 基壇状遺構

列90068を検出。おそらく掘立柱建物の一部であろう。このうち柱穴90070・90074には根石が、柱穴90071には礎板が置かれており、柱穴90070の根石には、全面に煤が付着していた（第35図）。

4-8 9Dトレンチ基壇状遺構

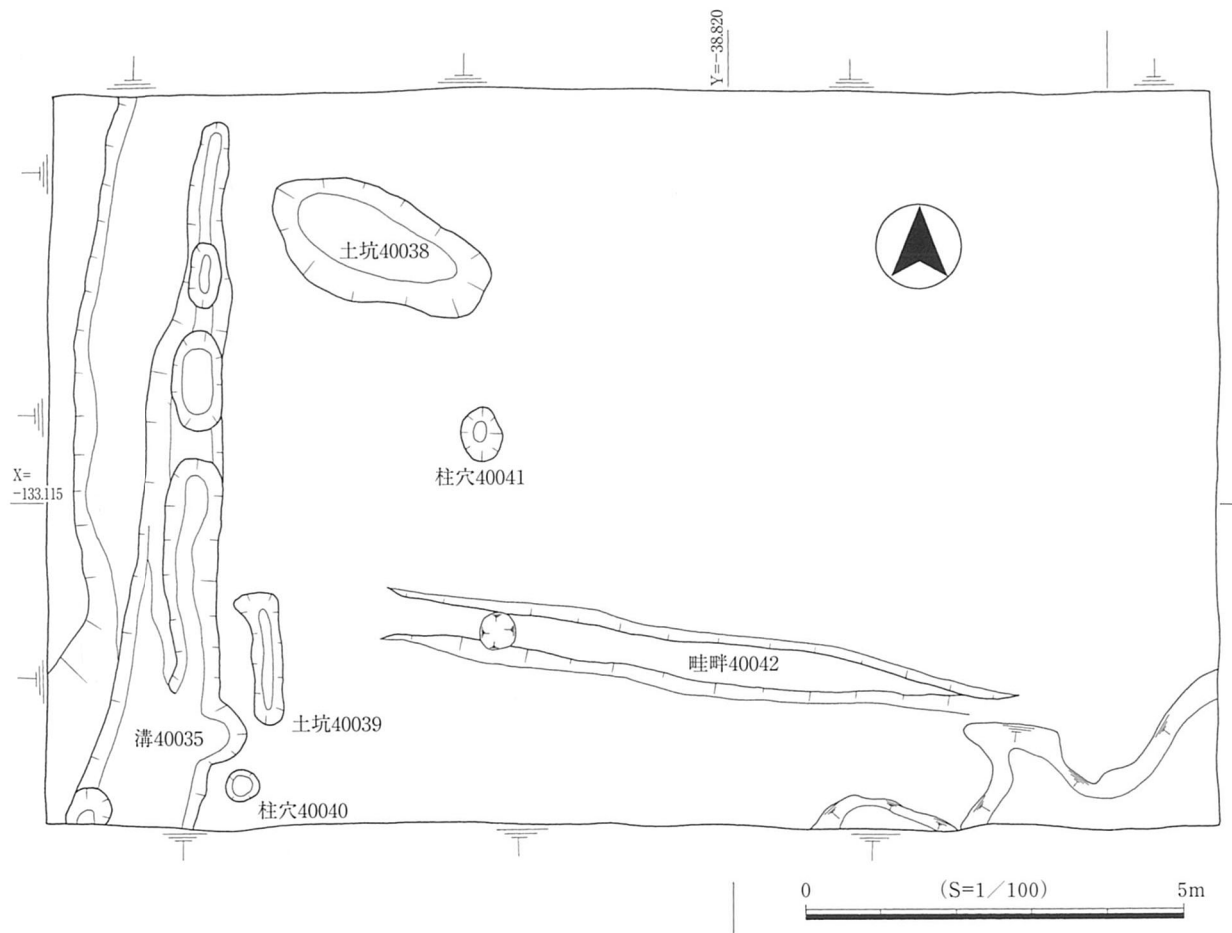
同じく9Dトレンチ東半では、「コ」字状にめぐる浅い溝90061を検出した。溝の幅については、調査区外あるいは攪乱のために不明である。深さは数cm程度。この溝90061底部では、小規模で不規則にならぶ柱穴を数基検出したが、溝内側に全く遺構がなかったことを重視し基壇状遺構とした（第36図）。

4-9 10Dトレンチ遺構群

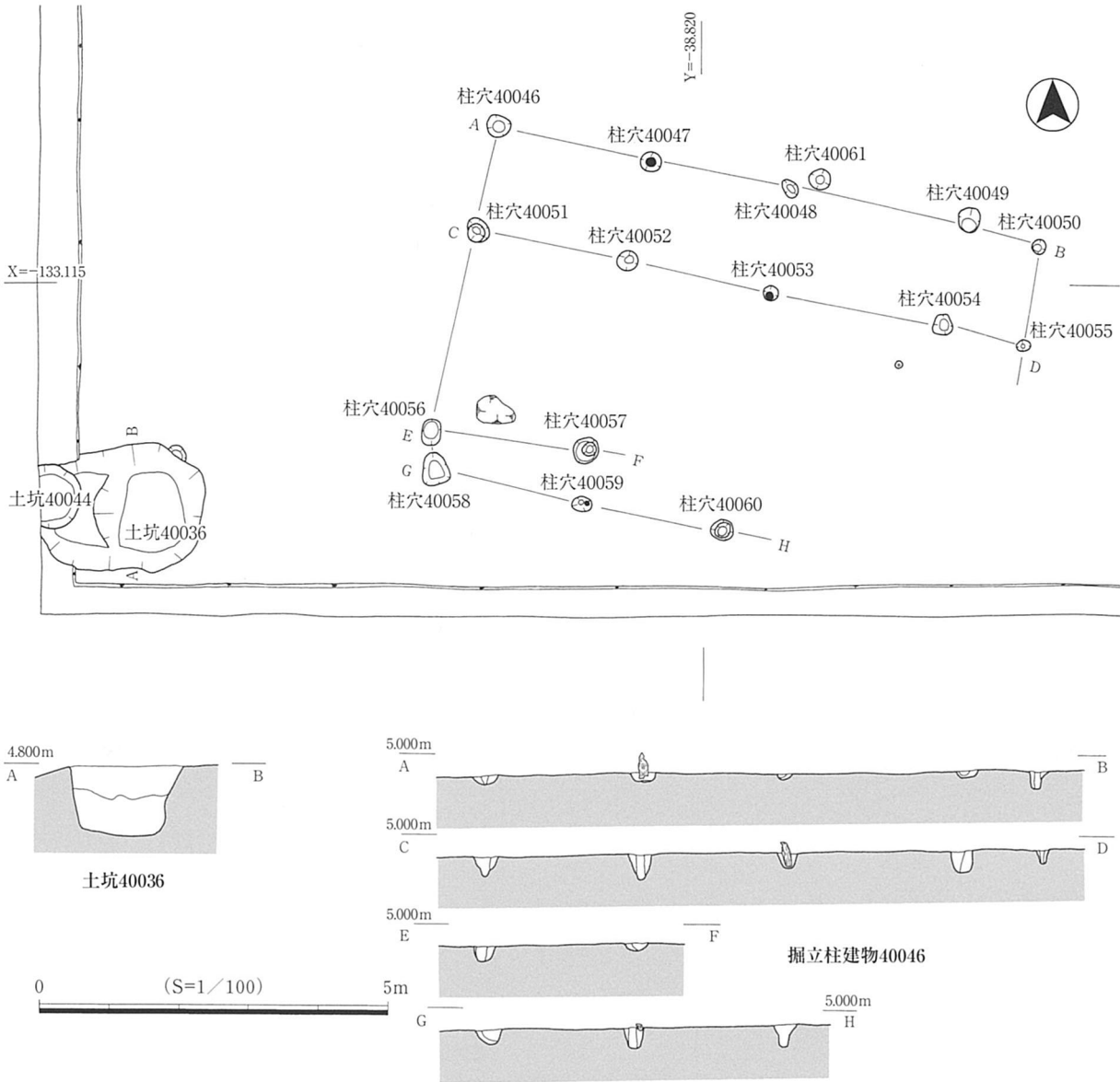
第34図は10Dトレンチである。トレンチ中央部に南側への大きな溝100041があり、その北側には柱穴群が存在する。この溝については、周辺のトレンチで関連しそうな遺構が未確認なため、性格は不明。埋土中から12世紀前半から14世紀初頭の遺物が出土。柱穴群はほぼ一様に検出したが、トレンチが狭く列をなすものを見出すことはできなかった。柱穴100060（p.99）から12世紀中頃の瓦器碗が出土し、柱穴100052には柱根が遺存した。

4-10 4Dトレンチ 第三-2遺構面検出遺構群

調査区西端からやや地形的に下がったところで検出した溝40035は、検出長約9.5m・最大幅約1.7m・



第37図 4Dトレンチ 第三-2遺構面全体図



第38図 4 D トレンチ 第三-2 遺構面 土坑40036・掘立柱建物40046

最深部で約20cmを測るが、底部は一定しない。溝40035の周囲には土坑40038・40039、柱穴40040・40041が散在する。この溝40035東方には、かなり顕著な踏み込み跡を確認した。その中に踏み込みのない部分があり、これを畦畔40042と捉えた。全長は約8.5m・最大幅約90cm・高さ約5cm（第37図）。

4-11 4 D トレンチ 第三-3 遺構面検出土坑40036・40044、掘立柱建物40046

第三-3 遺構面で検出した遺構で、土坑40036・40044は調査地南西端で、掘立柱建物40046は同中央で検出した。土坑40036は東西2.4m以上・南北約1.8m・深さ約1mで、土坑40044に切られる。出土遺物には、13世紀中頃から後半の瓦器などや「蘇民将来」札がある。土坑40044は一部が調査地外に広がる、径90cm・深さ85cmの円形土坑で、13世紀前半の瓦器片が出土した。

掘立柱建物40046は、建物を構成する柱穴すべてを検出できなかったが、南側に庇を有する2間×3間（4間）の規模を有する。柱穴は大きいもので径約30cm、小さいもので径約20cmを測り、一部柱根が残存する。柱穴40049 (p.100)・40051 (p.100)・40054 (p.101)・40060 (p.101) から13世紀前半の瓦器塊が、柱穴40056から煤の付着した石が出土した。

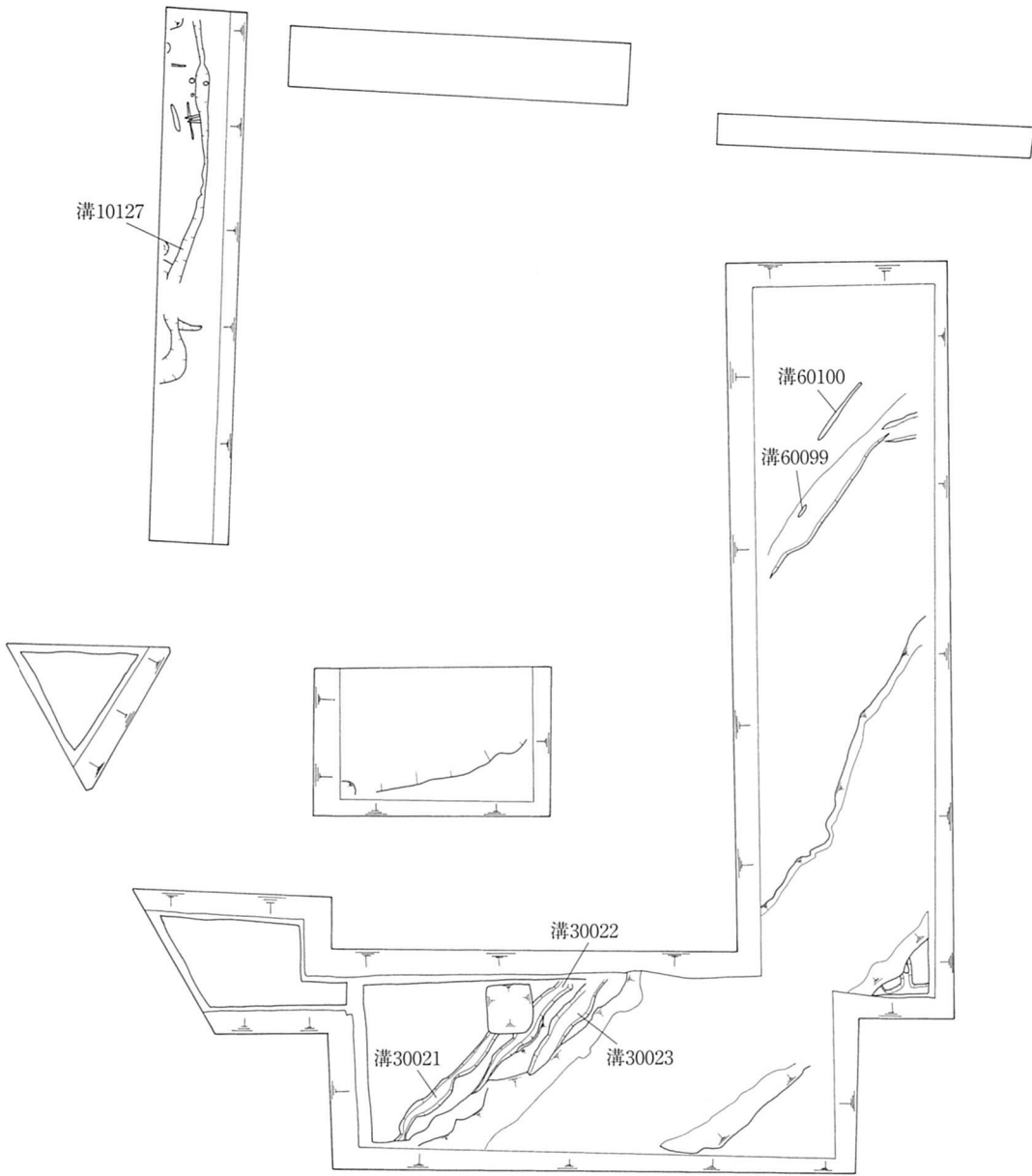
X=-133.060

Y=-38.840

Y=-38.800

X=-133.120

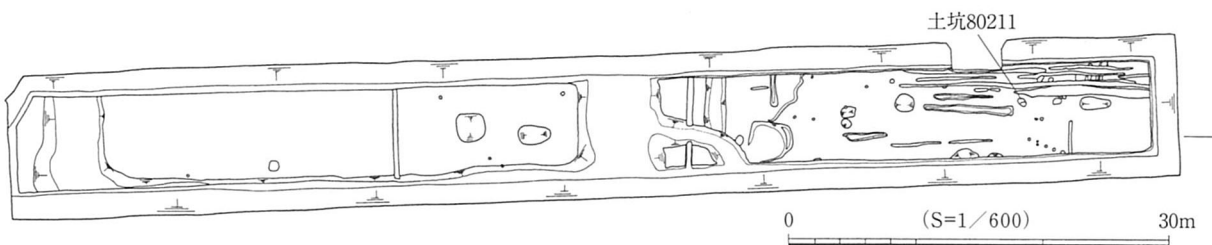
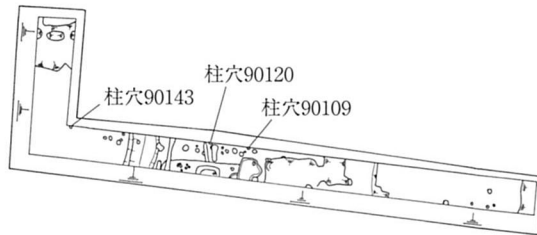
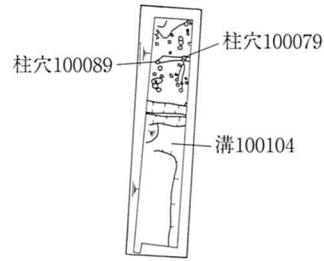
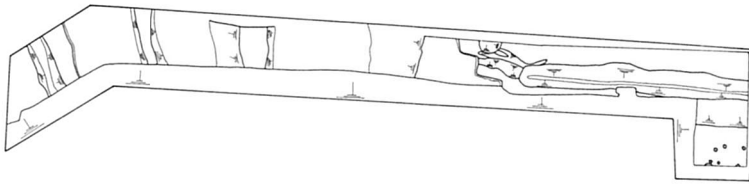
X=-133.160



第39図 第IV-1遺構面全体図

Y=-38.740

Y=-38.700



5. 第Ⅳ－1 遺構面の概要

第Ⅳ遺構面は、中世玉櫛集落の起源を探る上で重要な情報を我々に提供する。以下に詳しく述べるように当遺構面は3つの小期にわかれ、主として12世紀前半代の遺構で構成するが、まずここで述べる第Ⅳ－1遺構面では一部13世紀代の遺構も検出した。

第Ⅳ－1遺構面は、1C・2Cトレンチを除く全域で検出した遺構面である(第39図)。しかしながら検出した遺構は必ずしも明瞭な遺構とは限らず、当該期の遺構が検出できなかったトレンチもある。

トレンチ間の標高をみると、1Dトレンチが4.9m前後と最も高く、7D・9D・10Dトレンチが4.8m前後、4D・6Dトレンチが4.7m前後と続く。これに対して3Dトレンチは4.6m前後と1Dトレンチと比してかなり低くなり、8Dトレンチにいたっては4.4mと今次調査地では最低レベルとなる。2D・5Dトレンチでは第Ⅳ遺構面を一面として認識したため、第10図の模式図ではかなり窪んだ印象を与える。しかし実際は、確認できなかった第Ⅳ遺構面の小期があったとみるべきであろう。以下便宜的に調査地を東西に大別した上で、概略を記すこととする。

まず1D～6Dトレンチといった調査地西半。最終埋没時の自然流路30019の検出面である第Ⅲ遺構面の下面であるため、この時期の自然流路の起源を自身から探る手段は皆無に等しい。しかし、幸いなことに3D・6Dトレンチで自然流路に並行する溝を検出できたことは、自然流路30019の起源を探る手がかりを得ることになった。3Dトレンチ西側で、流路の肩に並行する溝30021・30022・30023を検出したのだ。さらに6Dトレンチ北半でも、自然流路に並行する溝60099・60100の2条が見つかった(第40図)。

1Dトレンチでは、他のトレンチとは異なりプライマリーな砂層をベースとする。この砂層の起源はやはり自然流路30019と考えるべきか。検出遺構は、トレンチ北半で南北方向にやや蛇行気味に流れる溝10127と、その周辺で検出した東西・南北方向の耕作溝数条と土坑・柱穴数基ずつである。しかし同ベース層が攪拌を受けたトレンチ南端付近では、遺構を検出することができなかった。

2D・4D・5Dトレンチでは顕著な遺構を検出することができなかった。ただ4Dトレンチでは、周辺部で比較的顕著な踏込み跡を確認している。

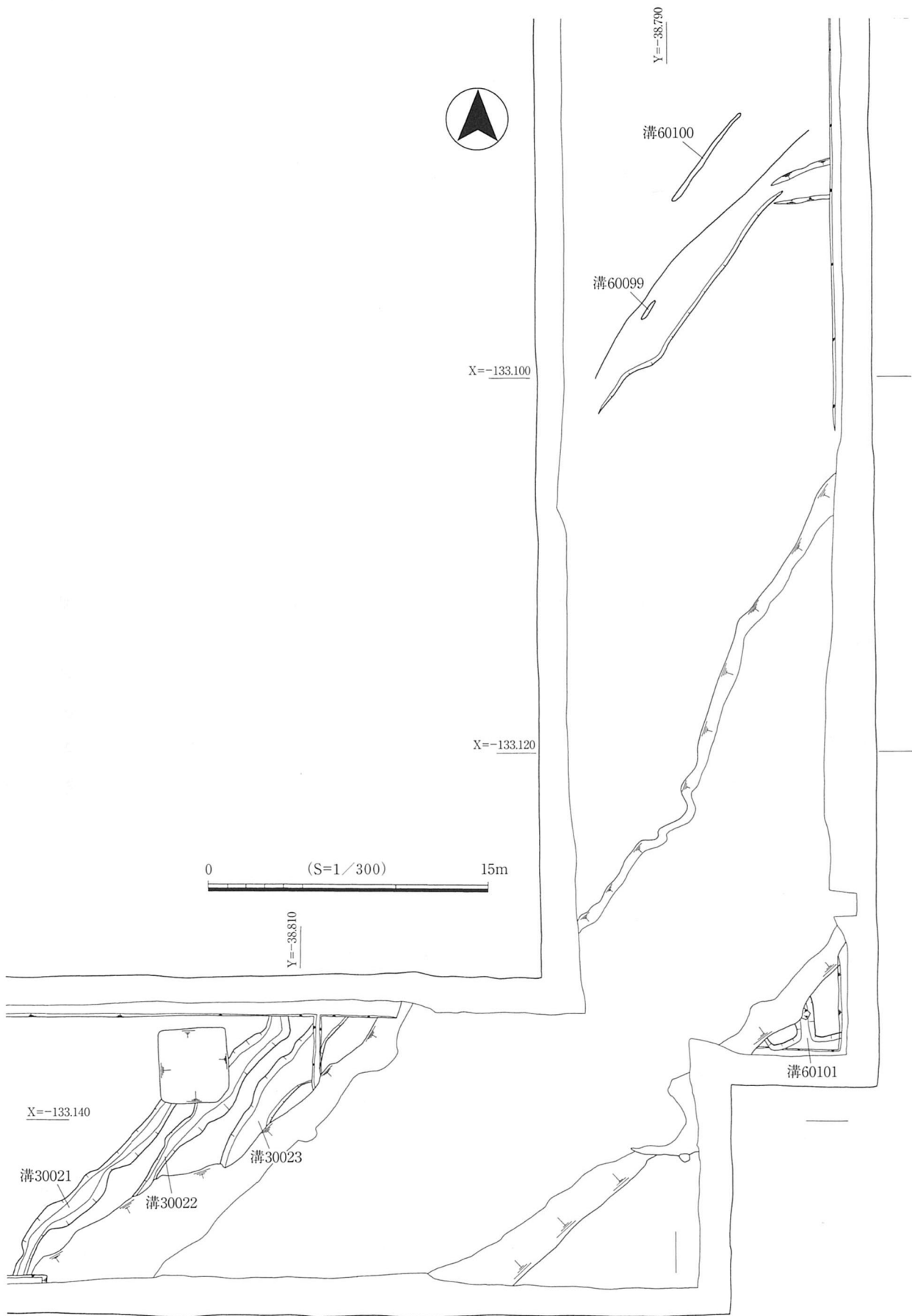
一方調査地東半では、7Dトレンチ南端から10Dトレンチ北半ならび9Dトレンチ中央部で、当該期としてはかなり顕著な居住痕跡が見つかった。

南東隅に位置する8Dトレンチは、第Ⅲ遺構面同様調査地西半に遺構はほとんどなく、東半に集中する。東半検出の遺構は、東西方向の耕作溝群と、その周辺で検出した大小さまざまな土坑・柱穴群である。しかしながら、それらをもって建物跡を復元するまでにはいたらなかった。いずれも時期を決する遺物が少ない中、土坑80211(p.103)では12世紀代の土師器皿が出土した。

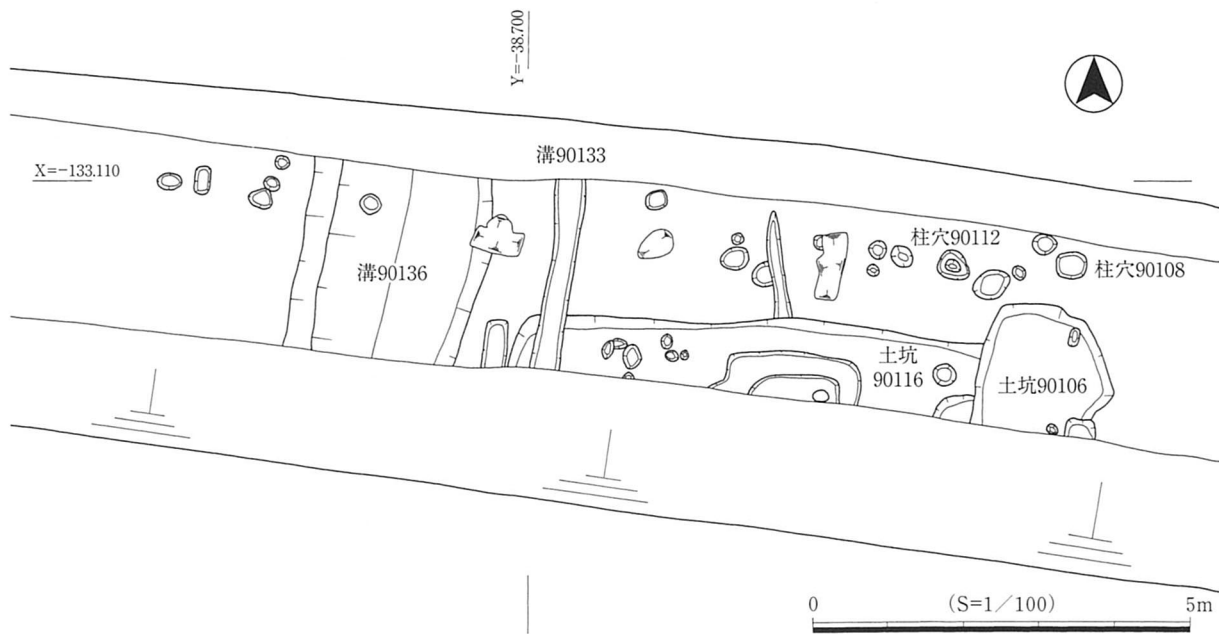
5－1 3D・6Dトレンチ検出溝群

3Dトレンチ流路右岸で検出した溝群のうち、溝30022・30023はその南端が流路跡に切られている。直接流路に注ぎ込んでいたか、あるいは流路と並行して注ぎ込まなかった可能性もある。深さは溝30021・30022が10cm前後、溝30023が20cm前後であった。ただ6Dトレンチではこの溝群を検出できなかった。かわって6Dトレンチでは、溝60099・60100という耕作溝2条を確認した。

一方流路左岸では、6Dトレンチ南東端で溝60101を検出。右岸の溝群と比較すると、いささか方向が異なるようである。



第40図 3D・6Dトレンチ 遺構群



第41図 9Dトレンチ 遺構群

5-2 9Dトレンチの遺構群

不明瞭な遺構が目立った第IV-1遺構面において、9Dトレンチは次に述べる7D・10Dトレンチとともに居住空間として利用されたことを示す遺構がかなり顕著にみつかった。この傾向は、第IV-3遺構面で萌芽し、第III遺構面でピークを迎え、第II遺構面ではほとんど衰退する。ここでは、それら遺構群を今少し詳しくみてみよう（第41図）。

当期、9Dトレンチ全体が居住空間として利用されていたわけではない。遺構が集中するのは、トレンチ中央部やや西寄り部分である。それ以外はどうだったのか。10Dトレンチに続く9Dトレンチ西端では、柱穴90143を1基検出したのみ。反対に9Dトレンチ東半では、第III遺構面検出土坑90062跡以外に数基の柱穴を確認したに過ぎない。繰り返し述べるが、遺構は特定部分—幅10m余の範囲—にのみ集中しているのである。

遺構集中部で検出した遺構は、柱穴30基前後、土坑2基、溝2条を数えるが、その中心はあくまでも柱穴である。トレンチ北側に沿って検出した柱穴の中には、あるいは列をなすものがあるかもしれないし、また調査区外に埋没する柱穴と組み合わせたり、掘立柱建物を構成するものが無きにしもあらずである。土坑はいずれもトレンチ南辺から調査区外へのびるが、2基とも深さ10~20cm程度と浅い。溝はともに南北方向に流れるもので、溝90136 (p.103) は幅2.3m・最大深度30cm、溝90133は幅30cm・深さ5cmと浅い。前者から12世紀代の遺物が出土した。この2条の溝を境に、西側には柱穴数基が存在するにすぎず、大半の遺構は溝東側に集中するのである。

出土遺物は必ずしも多くないが、ある程度器形の判別のつく個体が出土した。12世紀末頃から13世紀前半の土師器皿が柱穴90108 (p.104) ・90112 (p.104) から出土する一方で、12世紀代と思しき東播系須恵器壺が溝90136から出土し、土坑90106 (p.103) や土坑90116 (p.104) から12世紀代の土師器皿がみつかった。

このように第IV-1遺構面は、全域で12世紀代の遺構を検出するとともに、部分的ではあるが13世紀代の遺構もなお残存するといえよう。

5-3 7D・10Dトレンチ遺構群

7Dトレンチ南東隅から10Dトレンチ北半は、9Dトレンチとともに居住痕跡を顕著に残す地点である（第42図）。

当該期に属する7Dトレンチの遺構は、柱穴8基である。トレンチ東端に沿って南北3基の柱穴が、またトレンチ南辺に並行して3基の柱穴がそれぞれ並ぶために、明らかに掘立柱建物が存在したともみなせるが、ここでは可能性を指摘するにとどめる。

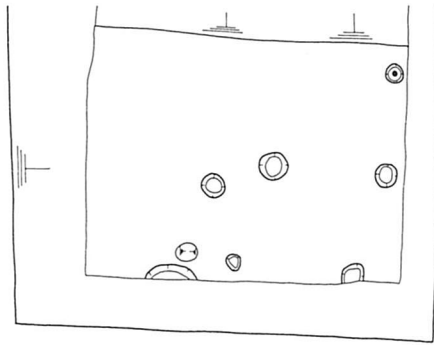
この7Dトレンチ第IV-1遺構面を形成する第IV-1包含層中から、12世紀代の多量の土器が出土した。

一方10Dトレンチでは、北半に柱穴群と東西方向の溝100071・100072（p.103）さらに土坑100099を、南半に第Ⅲ遺構面溝100041肩部に並行し、トレンチ東壁に沿って南へ曲がる溝100104（p.103）を検出した。

柱穴は全部で26基を数えるが、特に柱列を指摘しうるものはなかった。ただあえていうなら、トレンチ東端・西端に沿うものが目立ったことであろうか。柱穴100079・100089などには柱根が遺存した。

第Ⅲ遺構面溝100041底面で検出した溝100104は、最大幅約1.8m・深さ20cmを測り、両端とも調査地外へのびる。

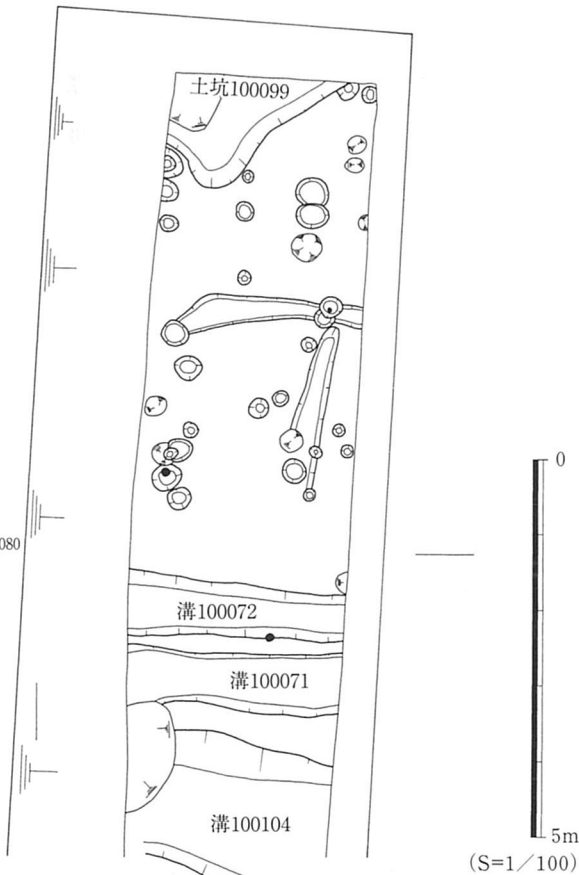
この溝100104から出土した遺物には、12世紀代の瓦器埴や土師器皿がある。後にも詳しく触れるように、内面に墨書した瓦器埴や、焼成後底部穿孔した土師器皿、外面一面に墨書した土師器皿など、「特殊な遺物」が目立つ。



Y=-38.710

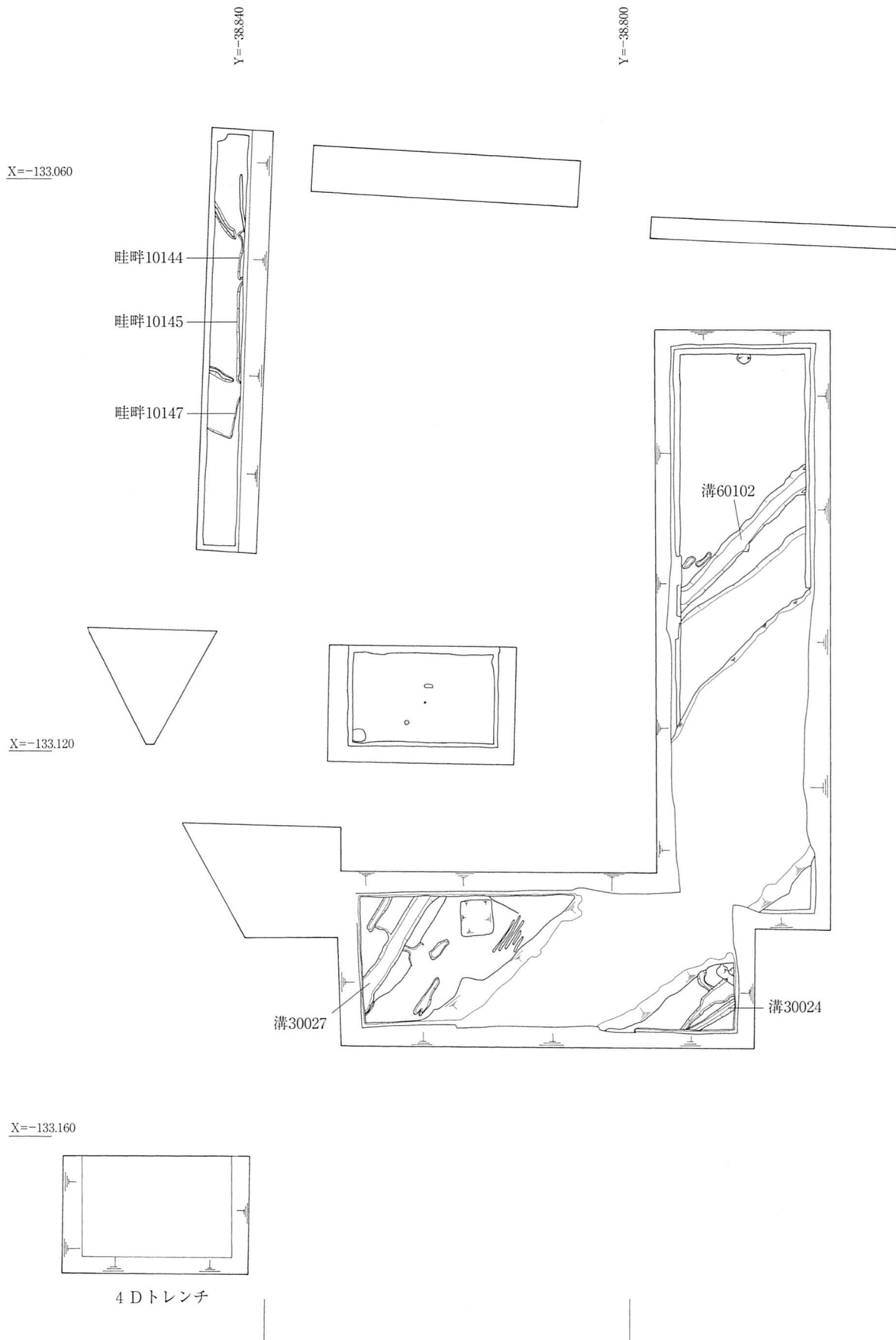


X=-133.070

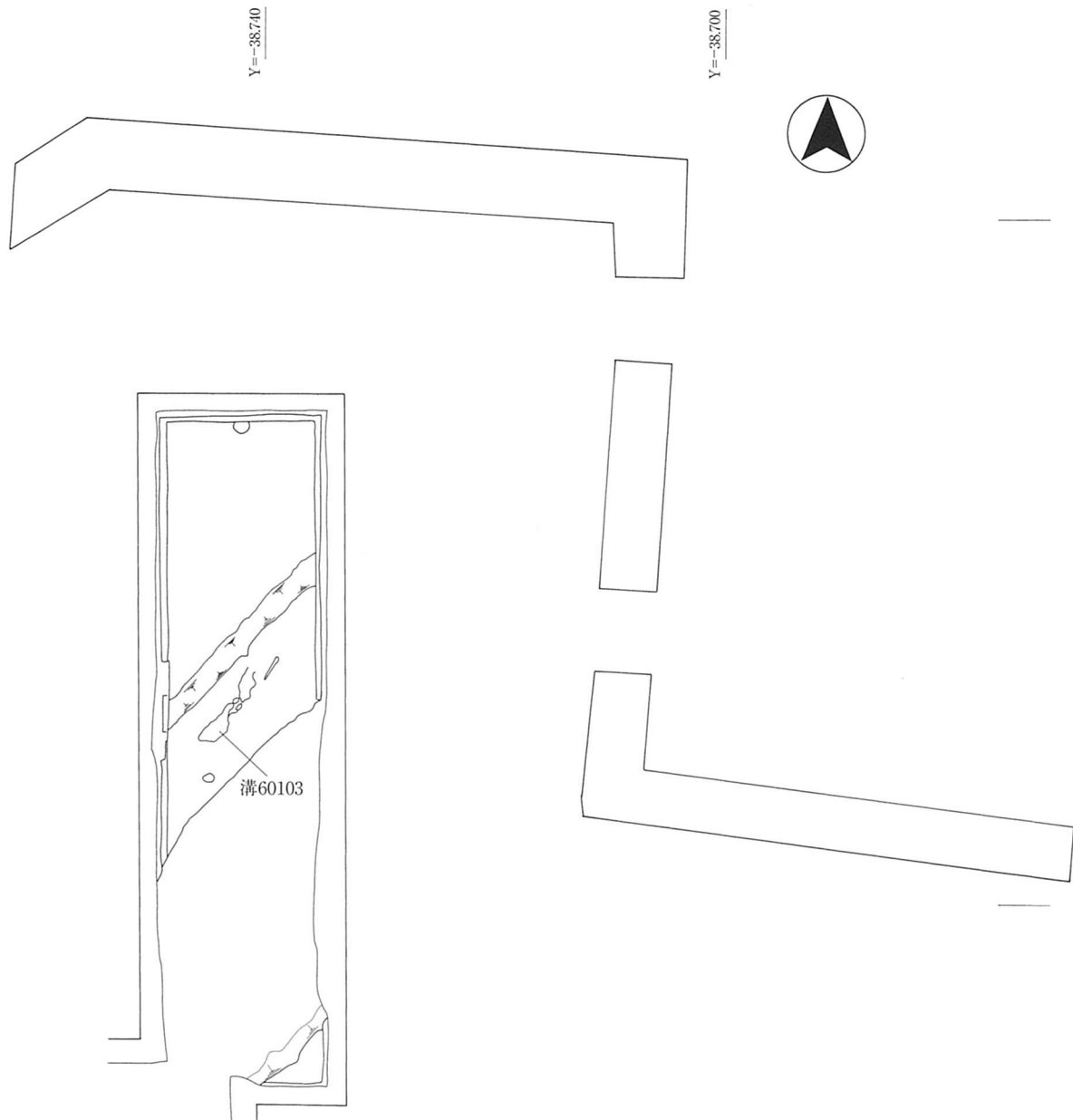


X=-133.080

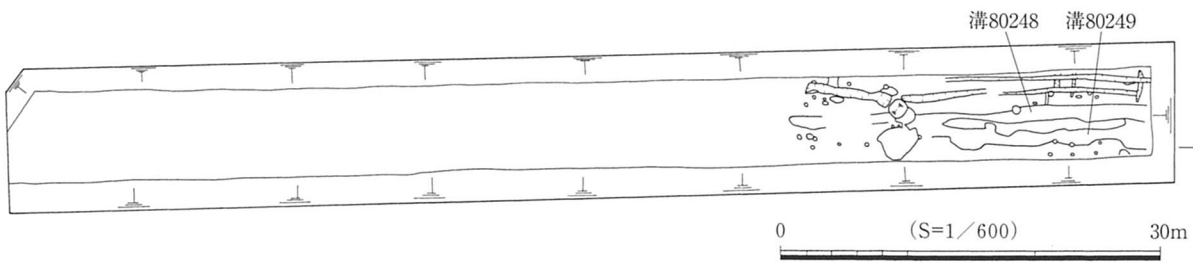
第42図 7D・10Dトレンチ 遺構群

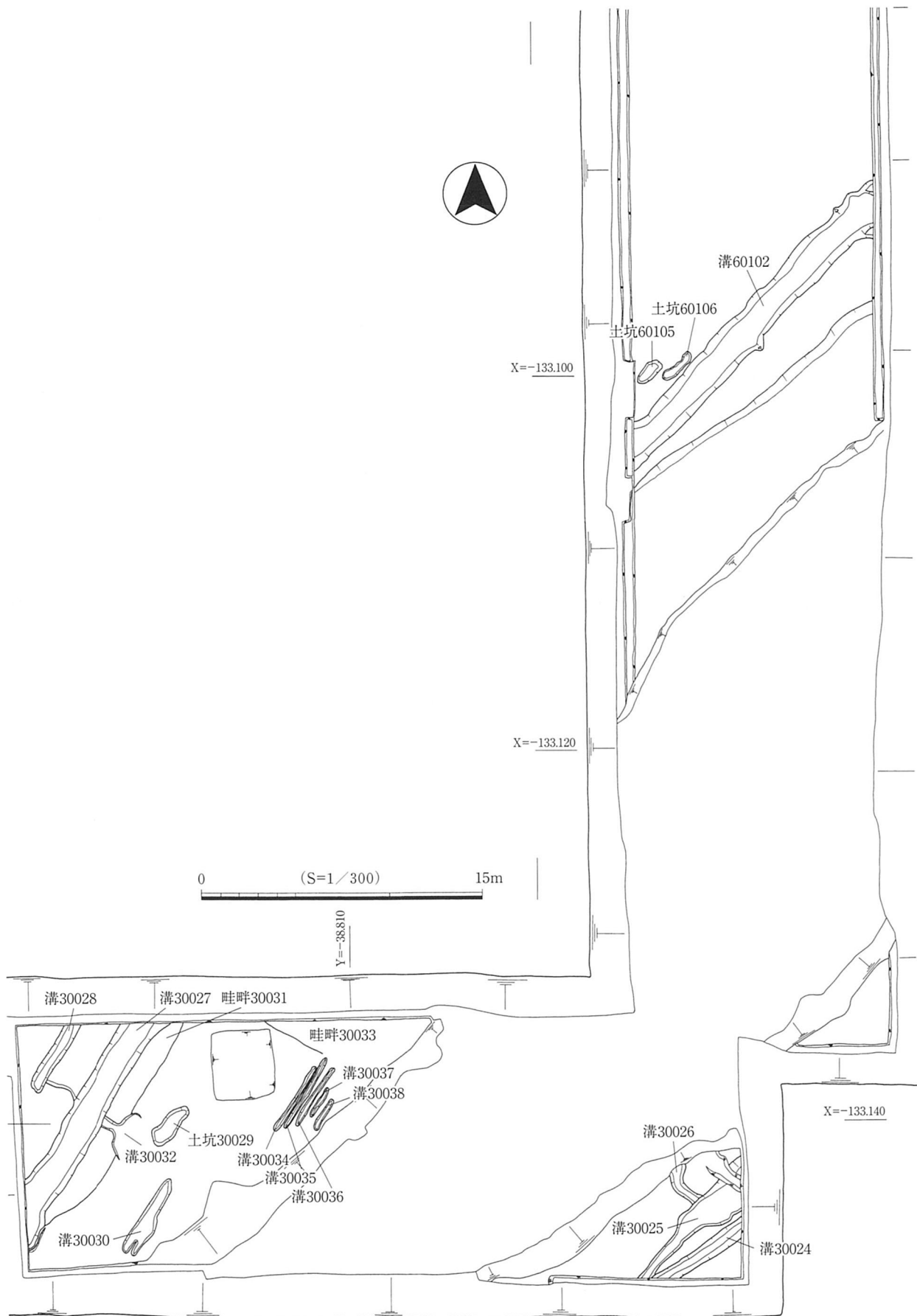


第43図 第IV-2遺構面全体図



6 D トレンチ





第44図 3D・6Dトレンチ 遺構群

6. 第Ⅳ-2遺構面の概要

大きく第Ⅳ遺構面と認識した中で2番目の小期である。第Ⅳ-2遺構面を検出したのは、1C・2C・1D・3D・4D・6D・8Dトレンチであり、4D・6Dトレンチではさらに細分可能な遺構面を確認した。各トレンチにおける遺構面検出高は、2C・1D・6Dトレンチといった北側に位置するトレンチで4.6~4.8m、3D・4D・8Dトレンチといった南側に位置するトレンチで4.3~4.4mを測る。つまり北側が高くて南側が低いのだ。以下調査地西半から記述を進める(第43図)。

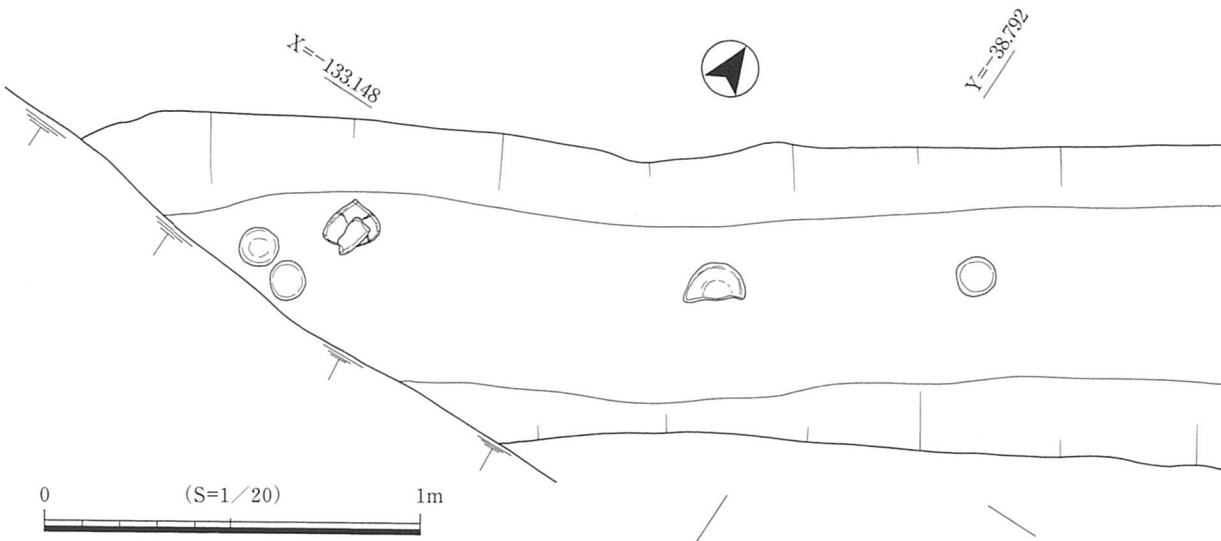
1Dトレンチでは、第Ⅳ-1遺構面ベース層である砂層を取り除くと、トレンチ東端に沿う南北畦畔およびそれに取りつく畦畔3条を検出することができた。しかし南へ向かうほど遺存状態は悪く、南端付近では検出不能であった。なお畦畔は、他のトレンチでは確認するにはいたらなかった。南北畦畔は検出全長22m・残存高4~22cmを測るが、排・取水口もしくは洪水時の破損のためか3条にわかれる(畦畔10144・10145・10147)。また南北畦畔に取りつく畦畔も、南へ向かうにつれ不明瞭になった。

3D・6Dトレンチでは第Ⅳ-1遺構面と同様、自然流路30019に並行する溝群を左右両岸で検出した。このうち11世紀後半から12世紀前半の土師器羽釜を出土した3Dトレンチ溝30027(p.108)は、溝幅・深さなどから判断して6Dトレンチ溝60102に繋がる可能性が高い(第44図)。同様に溝30027東側に接する畦畔30031は、溝60102東側で検出することができた。3Dトレンチ溝30034~30038や溝30030は耕作溝の可能性が高く、自然流路の際で耕作をおこなっていたことを示唆する。また3Dトレンチ溝30024(p.108)では、11世紀後半から末頃の瓦器塊を含む数個体の完形に近い破片が、溝底からやや上方で出土した(第45図)。しかし6Dトレンチ北半あるいは4Dトレンチで見られるように、自然流路30019から距離を隔てるに従い、同流路に並行する遺構群-おそらく耕作関係の遺構群-は姿を消す。

6Dトレンチでは、溝60102東側の畦畔が埋没したのち、不定形な溝60103をはじめとする数条の溝、数基の土坑を検出することができた。

なお1C・2Cトレンチについては、遺構面を確認しただけにとどまった。

調査地東半で第Ⅳ-2遺構面を確認したのは8Dトレンチ東半のみ。同トレンチ西半に遺構が皆無というのは、第Ⅳ-1遺構面と同様である。検出した遺構は、11世紀後半から12世紀前半の遺物を出土した溝80248(p.108)をはじめとする東西方向・南北方向の耕作溝数条、さらには土坑や柱穴などである。



第45図 3Dトレンチ 溝30024遺物出土状況

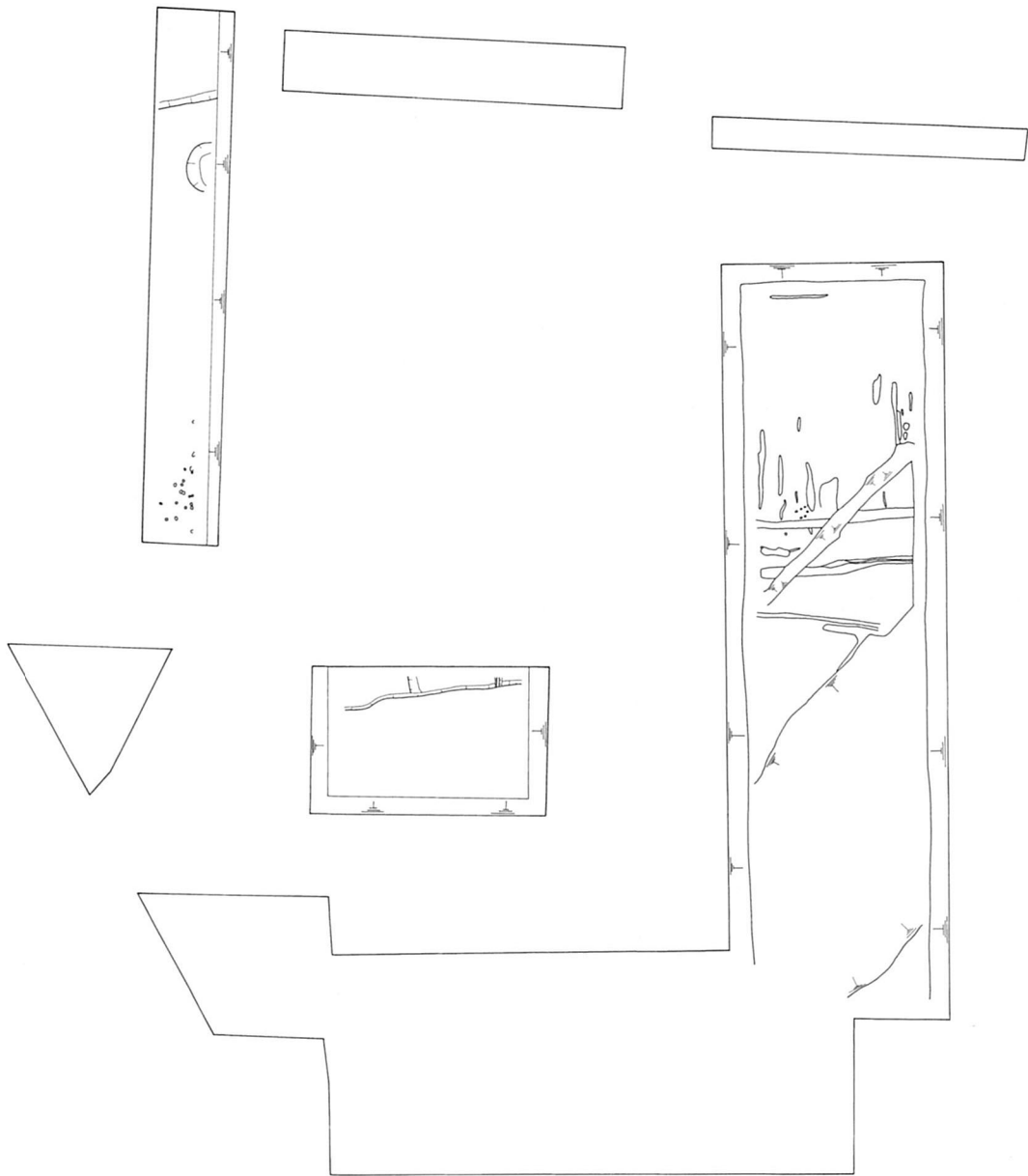
X=-133.060

Y=-38.840

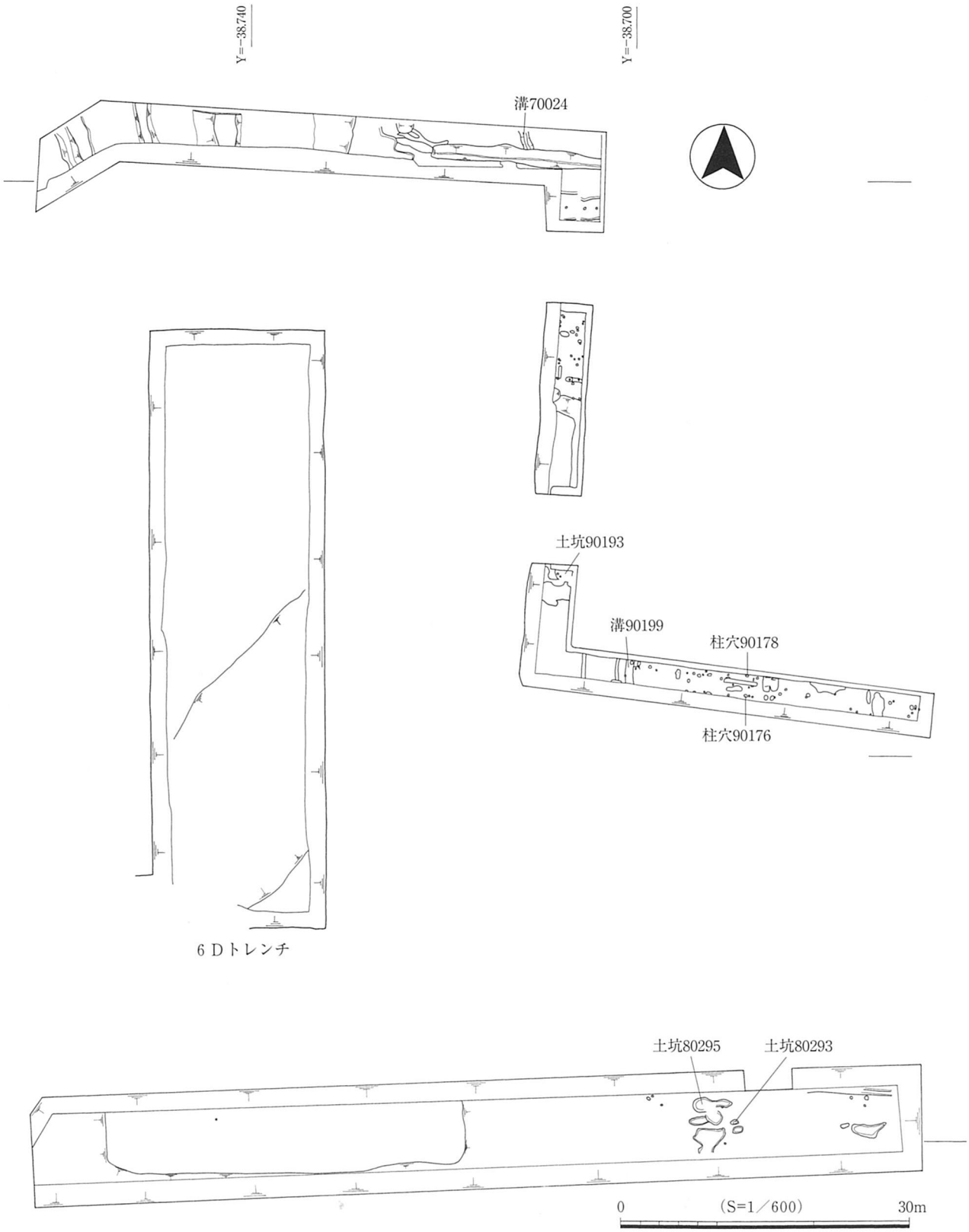
Y=-38.800

X=-133.120

X=-133.160



第46图 第IV—3 遺構面全体图

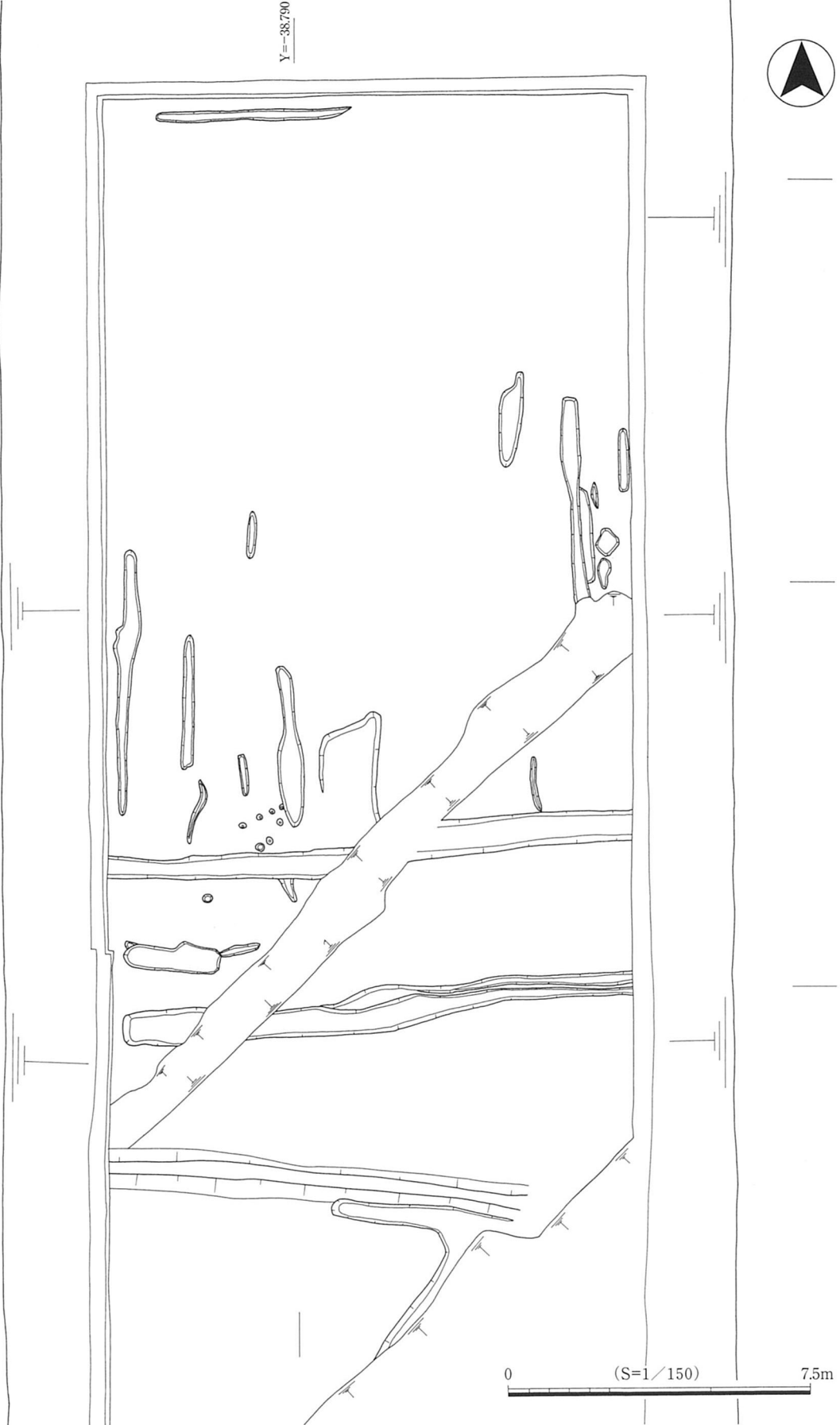


X=-133.080

X=-133.090

X=-133.100

Y=-38.790



第47図 6Dトレンチ北半全体図

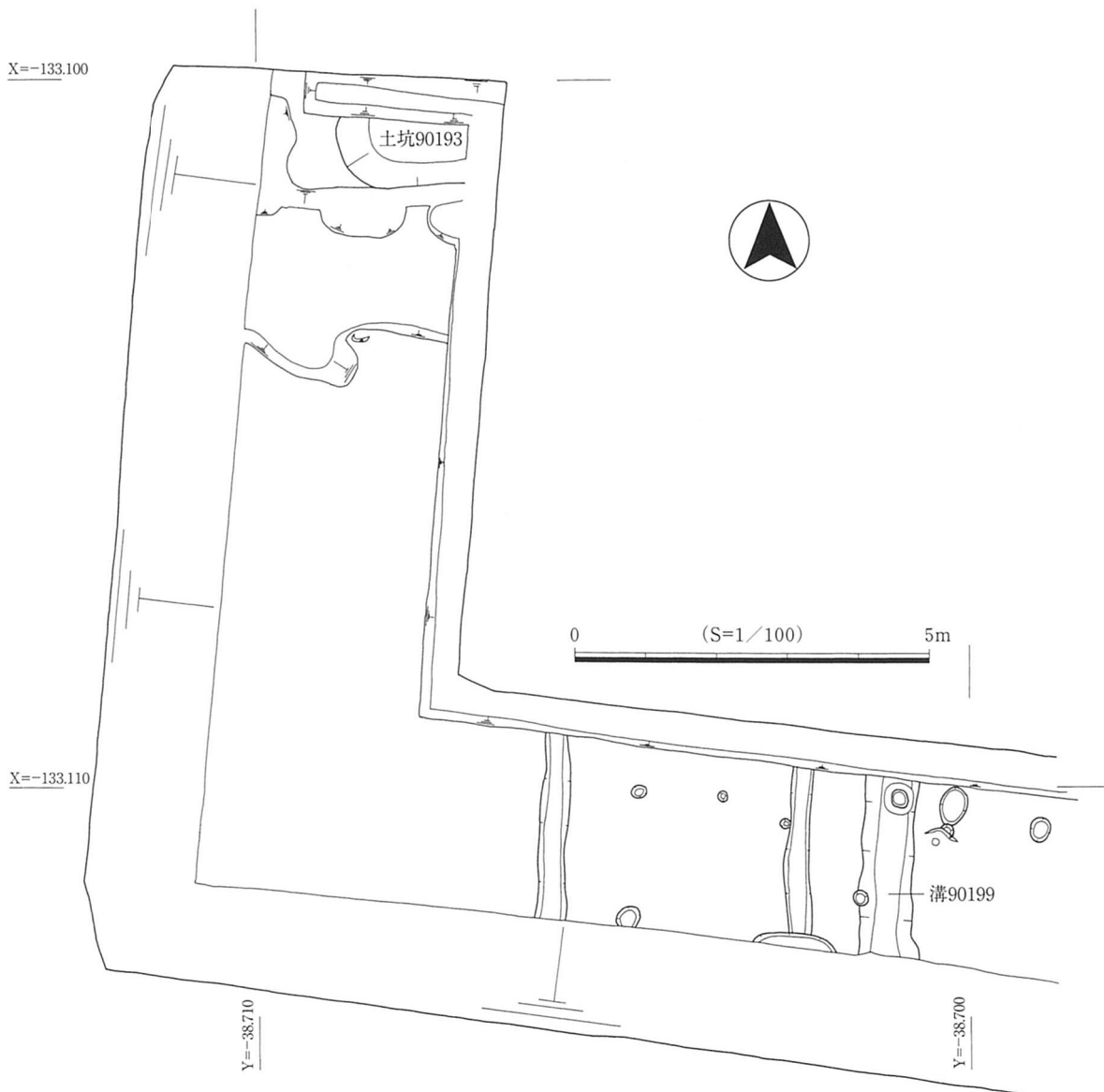
7. 第IV-3遺構面の概要

第IV-3遺構面とは、おおよそ12世紀代の遺構面としてまとめた第IV遺構面の最古段階、いい換えれば中世玉櫛集落の最初期の遺構面である。当期の標高は7Dトレンチが4.7m、1D・9D・10Dトレンチが4.6mであるのに対し、6Dトレンチ4.4m、4Dトレンチ4.3m、8Dトレンチ4.2mを測る。やはり北側が高く南側が低くなる傾向を示し、特に8Dトレンチが最も低くなる。

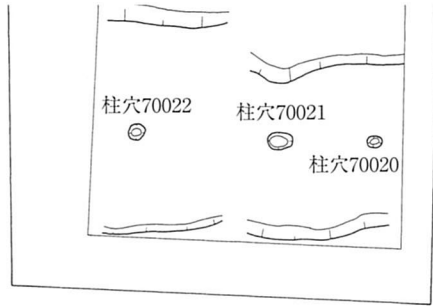
遺構検出できたのは、1D・4D・6D・7D・8D・9D・10Dトレンチである。逆に遺構検出できなかったのが2D・3D・5Dトレンチと、調査地南西部に集中する。以下トレンチごとに検出遺構を略述する（第46図）。

1Dトレンチでは調査地南端付近で柱穴群を、4Dトレンチでは北辺に沿って落込みを検出したが、特に建物を復元できるものでもなく、出土遺物も僅少であった。

これに対して6Dトレンチでは、散漫ではあるが東西・南北方向の耕作溝を検出した。先の第IV-3遺構面が流路に規制された地割だったのとは対照的に、ほぼ正方位を指向することは、少なくともこの遺構面が形成された時点では流路がなかったことを意味する（第47図）。



第48図 9Dトレンチ西端全体図



8 D トレンチでは、東半に不定形な土坑・柱穴など数基を検出したにとどまった。このうち土坑80293 (p.109)・80295 (p.109) から、11世紀後半から12世紀前半の遺物が出土した。

9 D トレンチ・10 D トレンチおよび7 D トレンチ東端では、密度は低いものの柱穴あるいは土坑・溝を確認した。

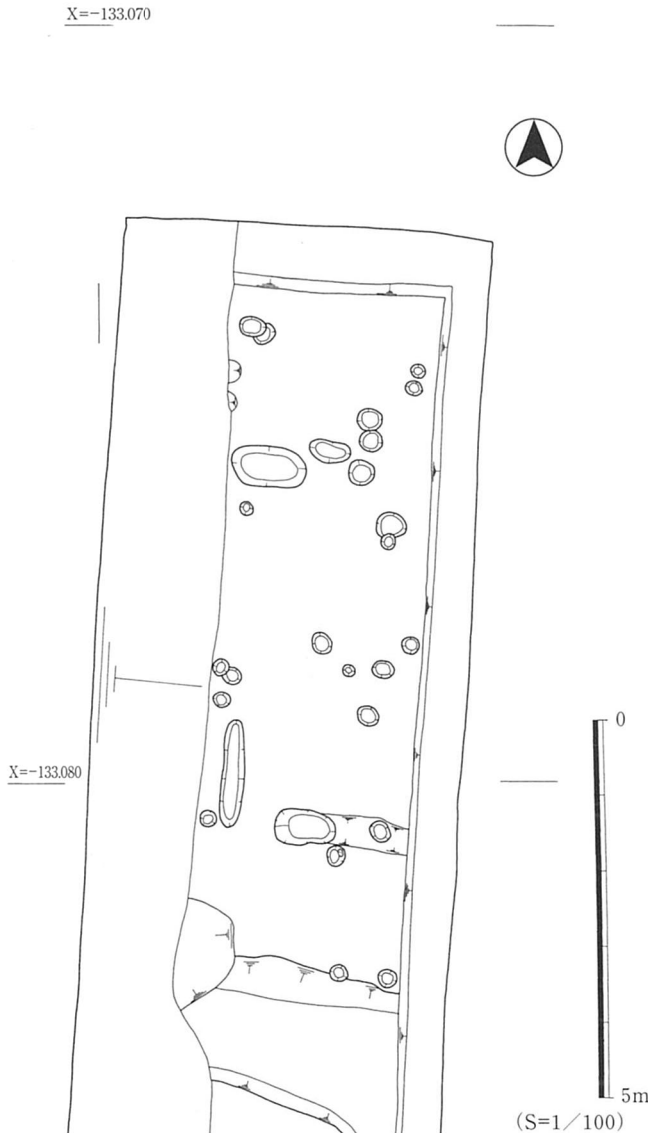
この3箇所のトレンチの中で、9 D トレンチは散漫ながらも調査地全域で柱穴を検出したが、建物を復元するにはいたらなかった。トレンチ西端付近で検出した溝90199 (p.108) あるいは土坑90193 (p.109) から、11世紀から12世紀前半の土器が出土した。また柱穴90176・90178には柱根が遺存した(第48図)。

10 D トレンチも柱穴や土坑がみつかったも極めて散漫なため、建物あるいは柱穴列を見出すことはできなかった。

7 D トレンチの大半では遺構検出できなかったが、東端でほぼ東西方向に並んだ柱穴3基 - 柱穴70020・70021 (p.108)・70022 (p.109) - を検出し、このうち柱穴70021・70022から11世紀後半から12世紀前半の遺物が出土した。ただ検出面が緩やかな段状を呈することから、仮に互いに関連する柱穴だとしても、建物とみなすより柵状の遺構を考慮すべきであろう(第49図)。

また7 D トレンチ東半で、南北にのびる溝70024 (p.109) を検出した。12世紀代の遺物が出土した。

このように第IV - 3 遺構面は、11世紀後半から12世紀前半の時期に比定することができよう。



第49図 7 D・10 D トレンチ 遺構群

8. 第Ⅴ遺構面の概要

第Ⅴ遺構面は、調査地のほぼ全域で検出することができた。ただ第Ⅳ-3遺構面では、調査地北東部に集落の存在をうかがわせるような遺構はみつかったものの、当遺構面では柱穴あるいは土坑といった居住域を示す遺構を確認することができなかった。後述するように、第Ⅱ遺構面から第Ⅳ-3遺構面にいたるまで連綿と続くのに対し、第Ⅴ遺構面とは時間的にいささかひらきがあり、両者の間に土地利用のあり方に大きな変化が生じたようだ（第50図）。

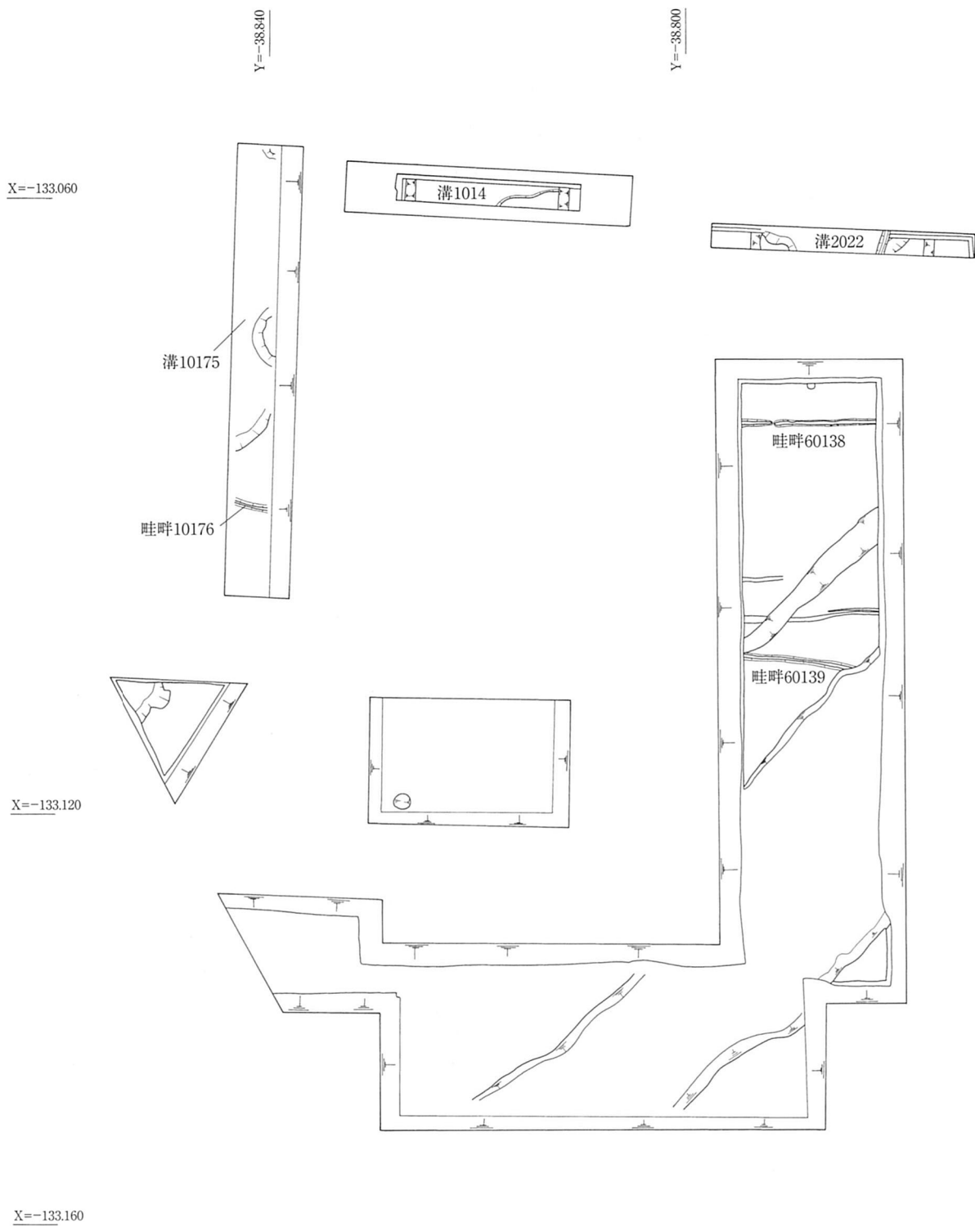
調査地全体の標高は、調査地北西に位置する1Dトレンチの標高が4.5mと最も高く、1C・6D・7Dトレンチといった北端部が4.3mを測る。今回報告する12箇所トレンチで、ほぼ中央から南半に位置する2D・4D・5Dトレンチや9D・10Dトレンチでは4.2mとやや低く、さらに3Dトレンチでは4.1mとなる。最も低いのは8Dトレンチの3.8mであった。つまり当期の地形は、北から南へ向かって緩やかに傾斜しており、8Dトレンチ付近が一段と低くなっていた。

第Ⅴ遺構面で検出した遺構は溝および水田跡である。溝は東西に大きく2条にわかれる。溝10175（1Cトレンチでは溝1014、2Cトレンチでは溝2022と呼称していたが、以下の文章ではこの3者を適宜使い分ける。p.111）は、2Cトレンチから1Cトレンチへ向かって流れ、1Dトレンチ付近で南へ方向を変え、さらには2Dトレンチの西端をかすめて調査地外へと伸びる。いずれの場所でも大量の砂が堆積しており、洪水によって埋没したことがわかる。溝幅は、それを検出した各トレンチとも一部が調査区外に及んだため不明である。深さは1Cトレンチで約60cmを測ったが、1Dトレンチでは溝底が掘削限界以下に及んだため計測していない。また溝10175では、次に述べる溝80305（p.111）・90209（p.111）のように杭を打設したような痕跡は発見できなかった。2Cトレンチで完形品あるいはそれに近い状態の「て」字状口縁の土師器皿が数個体まとまって、さらに1Dトレンチで完形品の黒色土器A類壺が1点それぞれ出土しており、この溝が10世紀前半から中頃に埋没したことがわかる。また1Dトレンチ中央で、残存長約63cmを測る大形の人形代が出土した（第51図）。

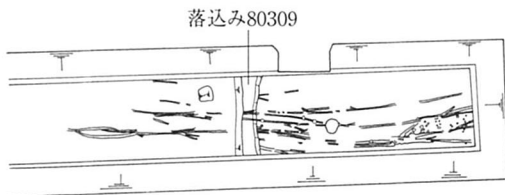
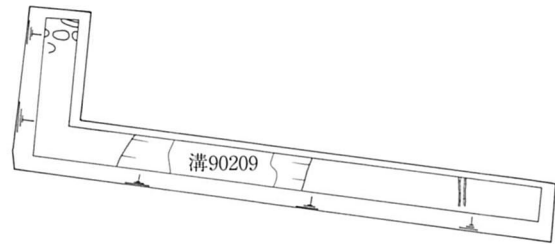
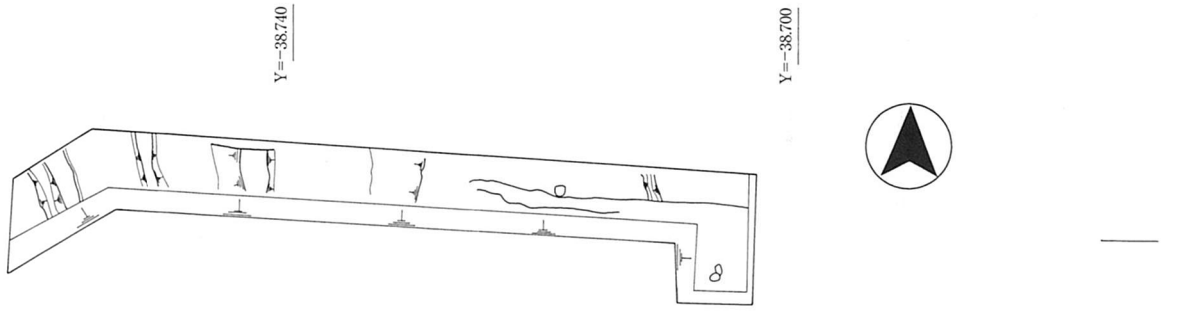
他方の溝は、9Dトレンチ中央部から8Dトレンチ中央やや東寄り検出した溝90209・80305である。この溝は9Dトレンチでは幅約12m程度だったが、8Dトレンチ南辺では約35mを測るまでに溝幅を広げる。8Dトレンチ河床部分には、木杭が大きく2方向にわかれて打設される（第52図）。ただ木杭は丸太の杭のほか角材その他の廃材を利用したものも多く、打設に際しても自然流路30019に比べて小規模なためか、規則性は特に見受けられない。9Dトレンチでも、右岸で溝法面に並行して2列にわたって打設された木杭を検出した（第53図）。9Dトレンチでほぼ完形品の須恵器坏が1点、8Dトレンチでは10世紀前半頃の黒色土器A類の破片が一定量出土した。この溝90209・80305も、先の溝10175・2022と同時期あるいは近接した時期の所産と考えてよからう。

さて8Dトレンチ東半を少し掘り下げると（第Ⅴ-2遺構面）、第54図に示したように緩やかにカーブしつつ東西方向にのびる、幅10cm前後の筋状の窪みが多数みつかった。著しく重複するためわかりにくいのが、一定の幅で並行するものもあり轍と判断した。これを轍とすると、車輪幅は約1.45mを測る。ただ明瞭にその痕跡をとどめたのはこの部分のみで、トレンチ西側では発見することができなかった。

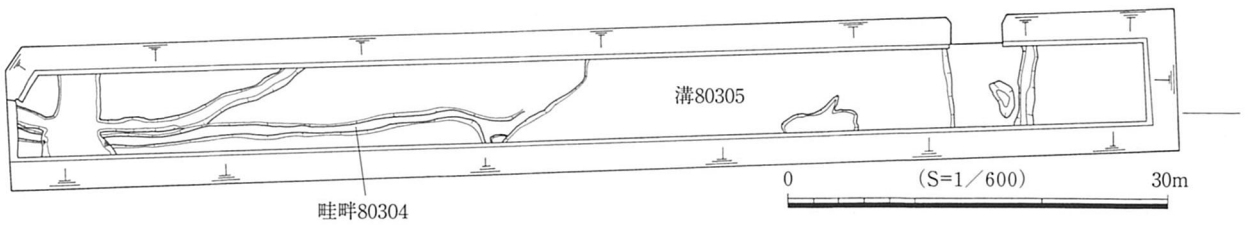
その他のトレンチはおそらく一帯が耕地だったと推察するが、それを明瞭に示す箇所はそう多くない。3D・4D・5Dトレンチでは、入念な遺構検出を試みたにもかかわらず、畦畔あるいは耕作溝といった耕作関連遺構はついにみつからなかった。それらを確認できたのは、1Dトレンチ南半、6Dトレンチおよび8Dトレンチ西半のみである。



第50図 第V遺構面全体図



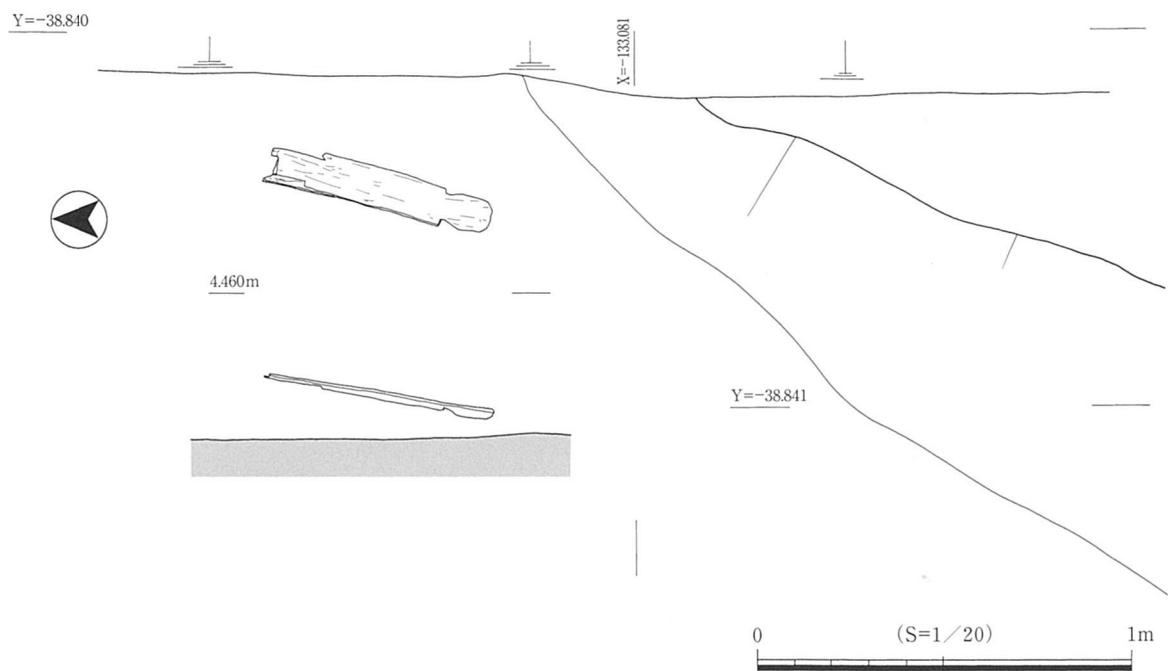
8 D トレンチ東端



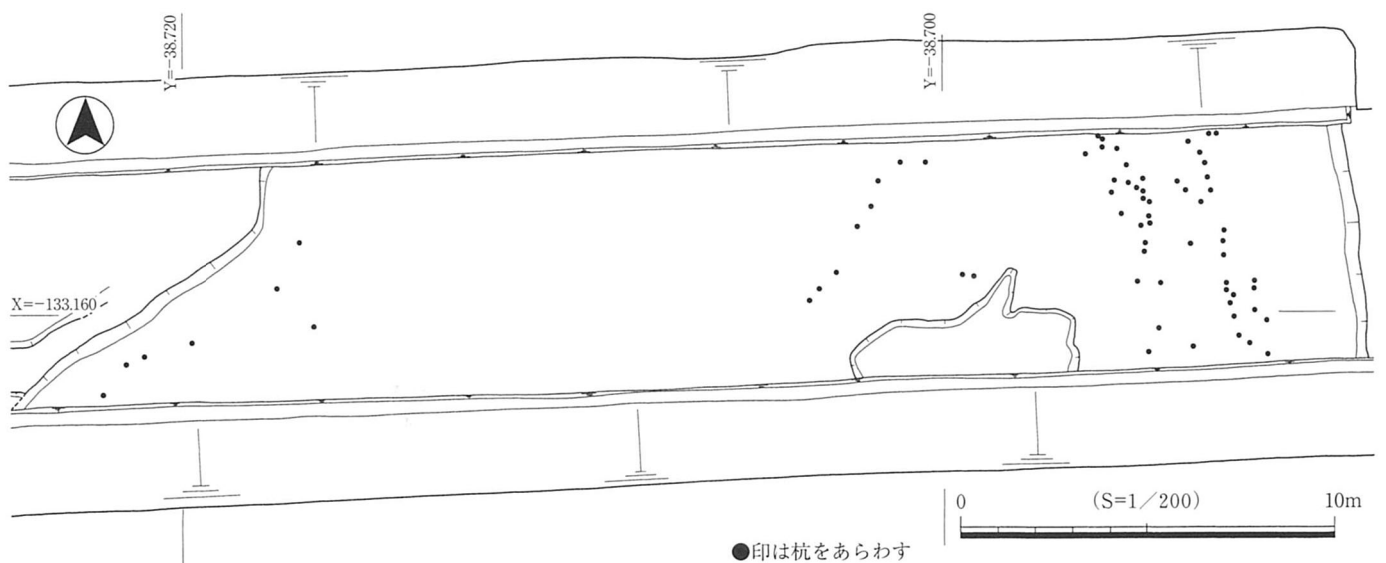
1 Dトレンチ南半では、幅約70cm・高さ約25cmを測るほぼ東西方向の畦畔10176を検出した。直上を溝10175を埋め尽くし、周辺に溢れ出した洪水砂によって覆われていたため、遺存状態は比較的良好であった。

6 Dトレンチでもトレンチ北半にて東西方向の畦畔を2条確認した(第55図)。2条のうち北側に位置する畦畔60138は幅約60cm・高さ約5cmを、他方南側に位置する畦畔60139は幅約50cm・高さ約5cmを測る。ともに遺存状態が悪く、かろうじて畦畔とわかる程度であった。なお6 Dトレンチにおいて、1 Dトレンチ検出の畦畔10176の延長上に位置するような畦畔はみつからなかった。

8 Dトレンチでは、東西方向にのびる畦畔80304を検出した。検出長はトレンチ西端で第II遺構面の溝80102によって分断されるものの約39mあり、幅約1.2m・高さ約5cmを測る。溝80305と接するあた



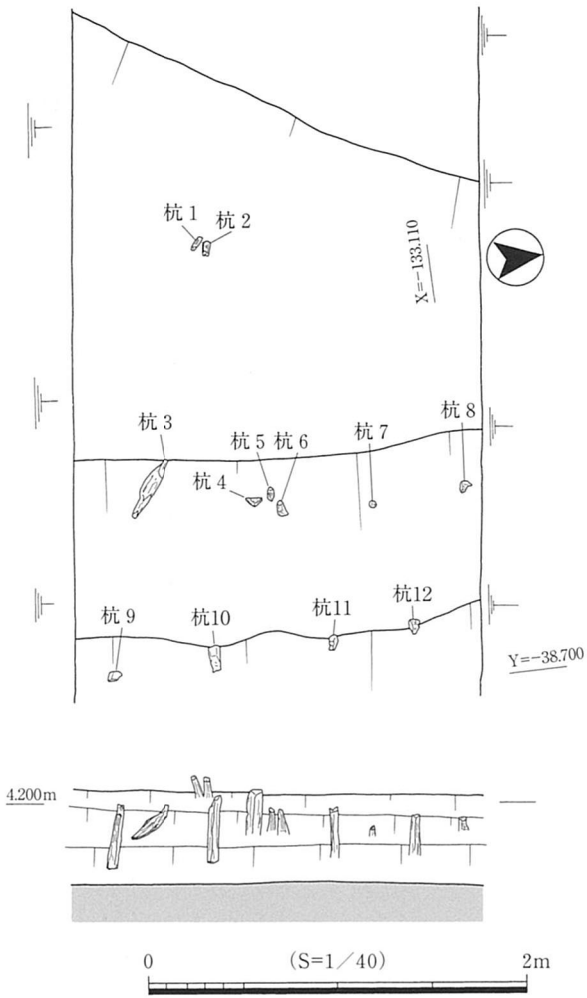
第51図 1 Dトレンチ 溝10175遺物出土状況



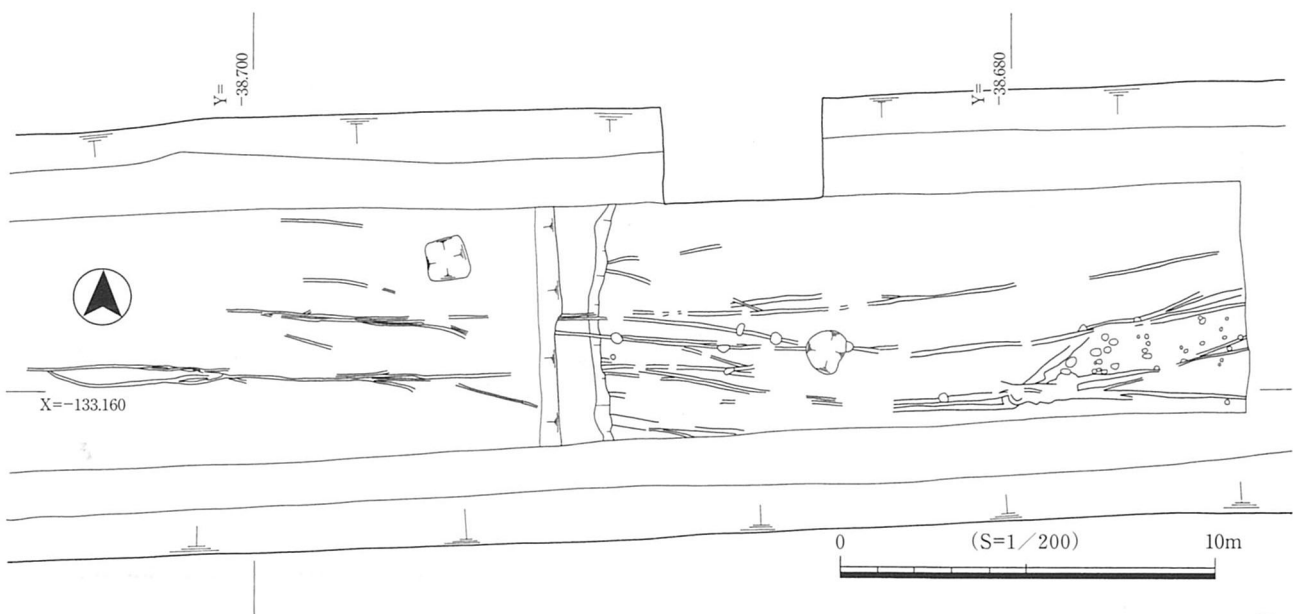
第52図 8 Dトレンチ 溝80305杭検出状況

りでは、畦畔が南へ分岐するようにも観察できたが、溝80305左岸では全く検出できなかった。元々存在しなかったのか、あるいは畦畔がやや南へ振れたためにトレンチ内で検出できなかったのかもしれない。

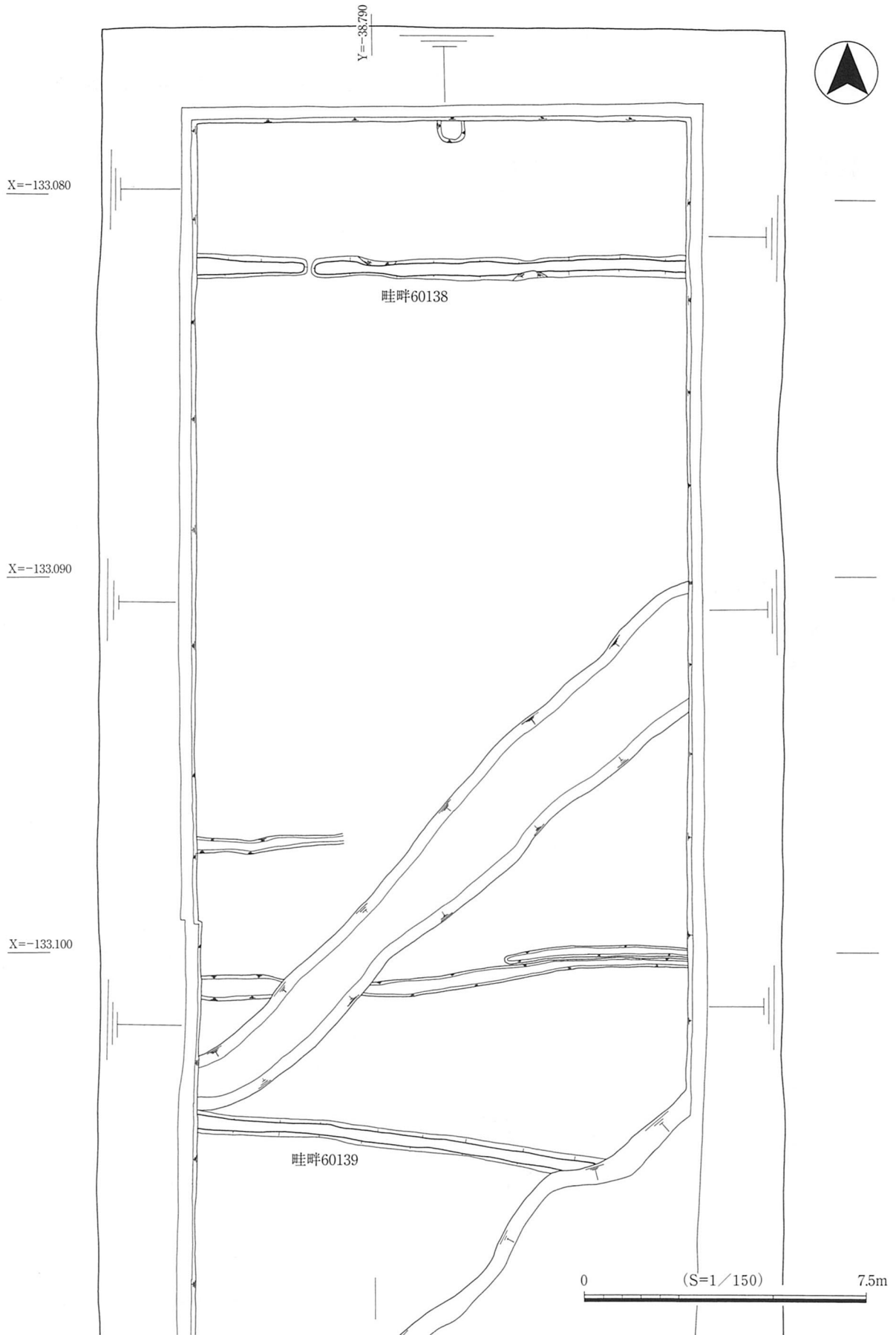
さてこの畦畔80304の北側で、北東方向から畦畔を一部決るように流れ込む溝状の窪みを検出した。粗砂を埋土とするこの溝状の窪みは、同一遺構面で検出していることからみて、溝90209・80305と同一起源あるいは溝90209から分流した可能性が高い。そうすると、少なくとも畦畔80304は溝80305によって一部を削り取られたことになる。



第53図 9 D トレンチ 溝90209杭検出状況



第54図 8 D トレンチ 第V-2遺構面 轍検出状況



第55図 6 D トレンチ北半全体図

9. 第VI遺構面の概要

第VI遺構面は、すでに述べたようにその特徴的なベース層のおかげで、調査地全域で確認することができた。ただこれまでの遺構面とは違って検出遺構が畦畔に限られること、さらに第VI遺構面を覆う第V包含層あるいはベース層たる第VI包含層中に含まれる遺物が極めて僅少なため、遺構面の時期を決する手立てに乏しい。第VI包含層中の遺物に微量ながら奈良時代の土器を含むこと、第V包含層中には時期不明の土師器・須恵器を若干量含むに過ぎず、第V遺構面が10世紀前半の土器を出土することから、8世紀から9世紀の遺構面としておく（第56図）。

各トレンチ間の標高は、6 D トレンチが4.2m、1 D・4 D トレンチが3.9m、8 D トレンチが3.8mである以外、他のトレンチは4.0mである。つまり今回の報告分である12箇所のトレンチ全体として、ほとんど標高差はないとみて差し支えないだろう。

さて第VI遺構面で検出した畦畔は、不定形な形状を示すものが大半で、中にはほとんど痕跡的にしか判断できなかったという不明瞭なものもある。

1 D トレンチでは、第V遺構面の畦畔10176とほぼ同一地点で畦畔10178を検出した。ただ畦畔10176がやや彎曲気味なのに対し、畦畔10178はほぼ直線である。この畦畔10178は痕跡的にしか残らなかったため、高さはほとんどなく、かろうじて幅50数cmを測るにとどまった。3 D トレンチでは、幅50cmのほぼ東西方向にのびる畦畔の痕跡を検出した。同様に5 D トレンチで検出した南北方向にのびる畦畔50022も、かろうじて痕跡をとどめるものであった。幅約60cmを測る。

これに対し2 D・4 D・7 D・8 D・9 D トレンチ検出の畦畔の遺存状態は、先の2例に比べれば比較的良好であった。2 D トレンチの畦畔20038は、幅約60cm・高さ6～7cmを測り、緩やかに彎曲する。

4 D トレンチでは3条の畦畔を検出した。畦畔40067はおおむね北西～南東方向にやや蛇行気味にのびる畦畔で、トレンチ北端付近で北へのびる畦畔40068と分岐する。これに対し畦畔40069はトレンチ中央部をほぼ南北方向にのびるが、畦畔40067とは接しない。この部分が水口なのだろうか。各畦畔の計測値は以下のとおり。畦畔40067は幅50～60cm・高さ3cm前後、畦畔40068は幅20～60cm・高さ3cm前後、畦畔40069は幅80cm前後・高さ3cm。

7 D トレンチでは東半で畦畔70033・70035を発見した。この畦畔は、直上を洪水砂で覆われていたのだからかなり良好な状態で検出できたが、畦畔の間のベース層は洪水砂で深く抉り取られていた。また畦畔70035の北端部分には瘤状の膨らみがある。畦畔70033は高さ15cmを、畦畔70035は高さ10cmを、幅はともに80cm前後を測る。

8 D トレンチでは、トレンチ西半の第V遺構面検出の畦畔80304とほぼ同一場所に畦畔80310を検出した。検出長は9m・幅1m・高さ10cmを測る。この畦畔には北側から流入した洪水砂が堆積しており、第V遺構面同様付近を深く抉っている。

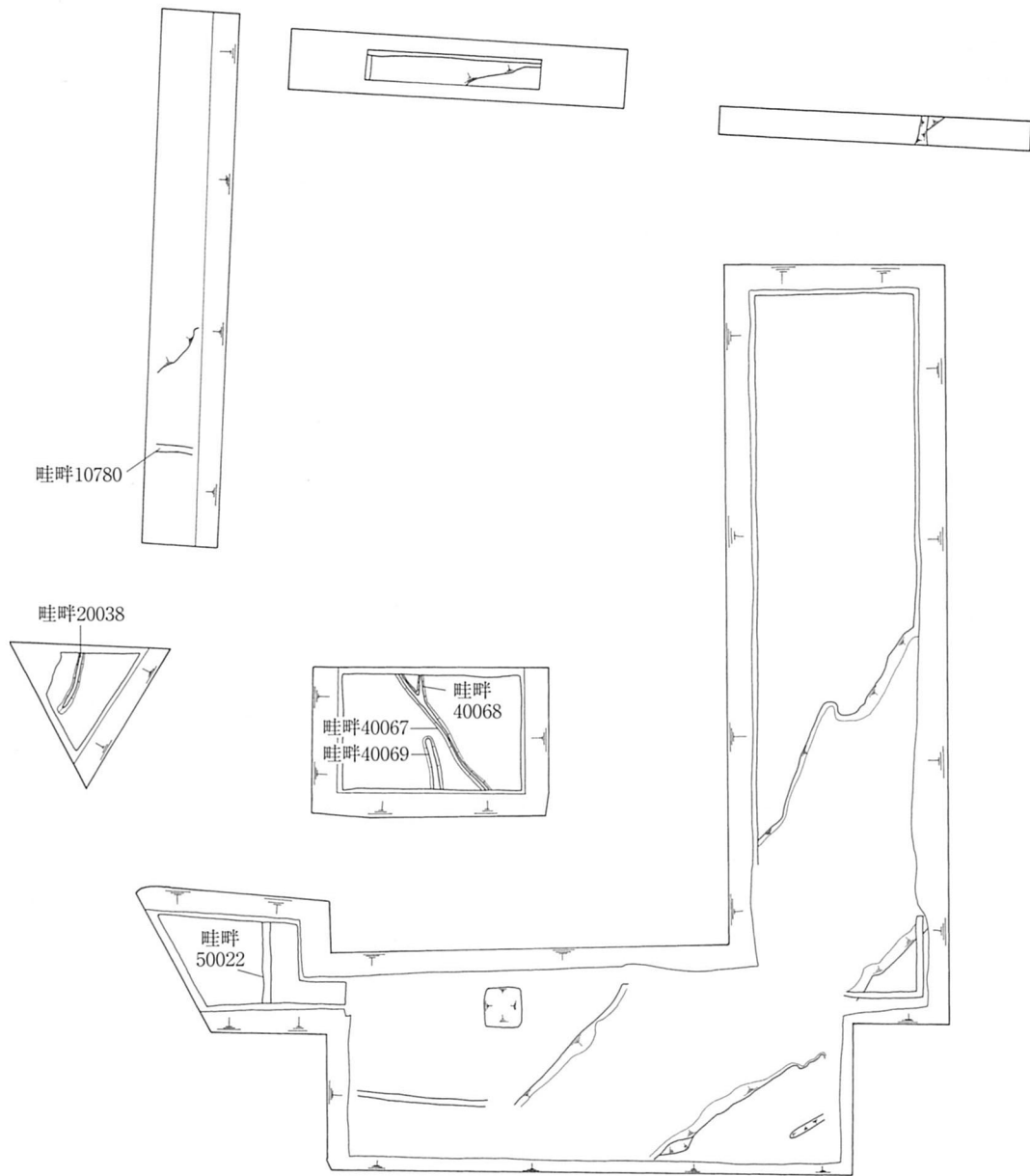
9 D トレンチ検出の畦畔は、トレンチ西端付近で東西方向にのびる畦畔90211を検出。幅80cm～1m・高さ10cmを測る。

ところで6 D トレンチは、自然流路30019以北の第VI遺構面を若干掘り下げた際、東西方向の畦畔60141・60142の2条を検出した。ともにほとんど高まりをもたない痕跡的な畦畔である。畦畔60141は幅約80cm・高さ約3cm、畦畔60142は幅約60cm・高さ約3cmを測る。

X=-133.060

Y=-388.00

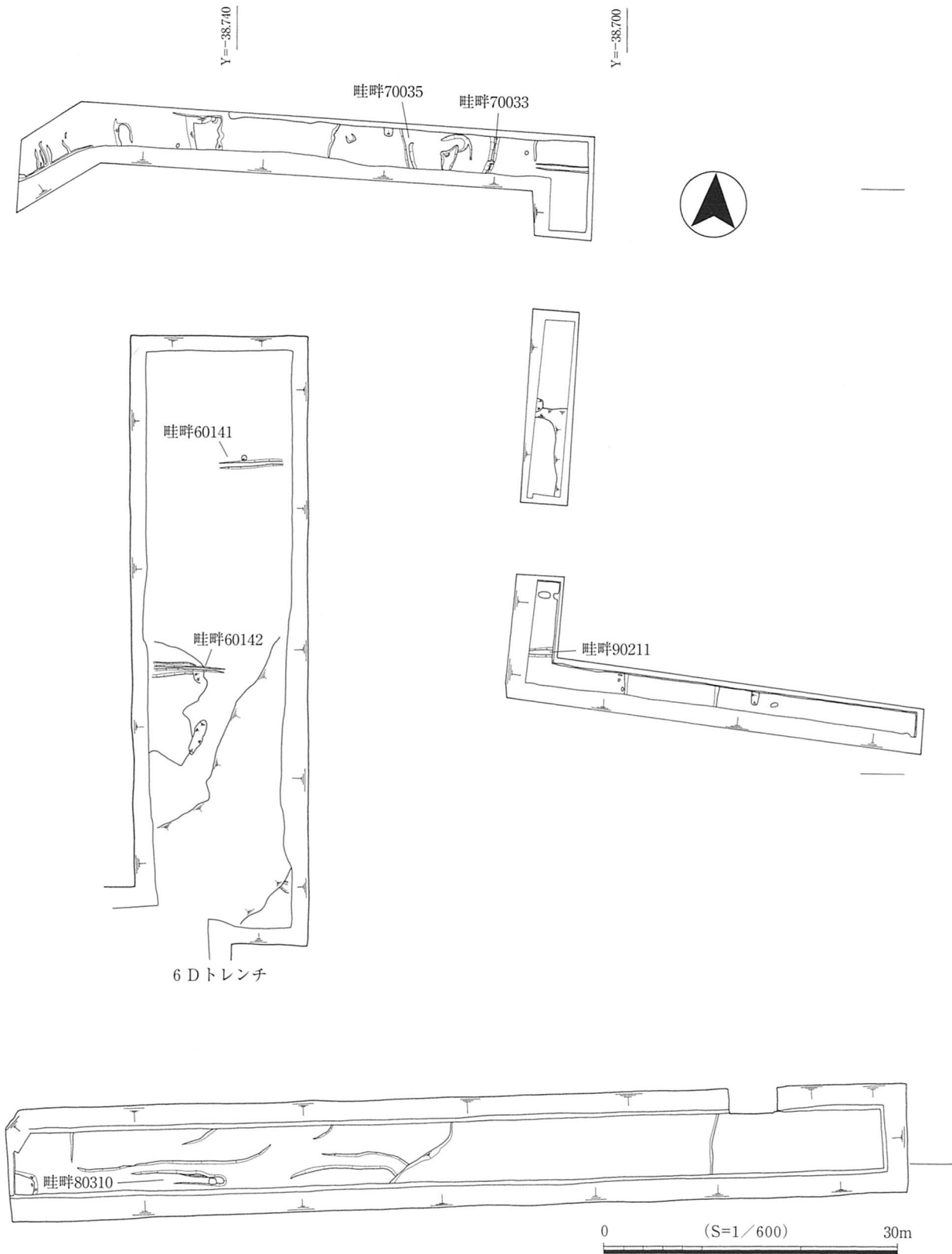
Y=-388.00



X=-133.120

X=-133.160

第56图 第VI遺構面全体図



X=-133.060

Y=-38.840

Y=-38.800

溝10236

柵状遺構60170

柵状遺構60194

柵状遺構60207

柵状遺構60228

柵状遺構60240

柵状遺構60284

柵状遺構60347

柵状遺構60318

柵状遺構60419

柵状遺構60316

柱穴40130

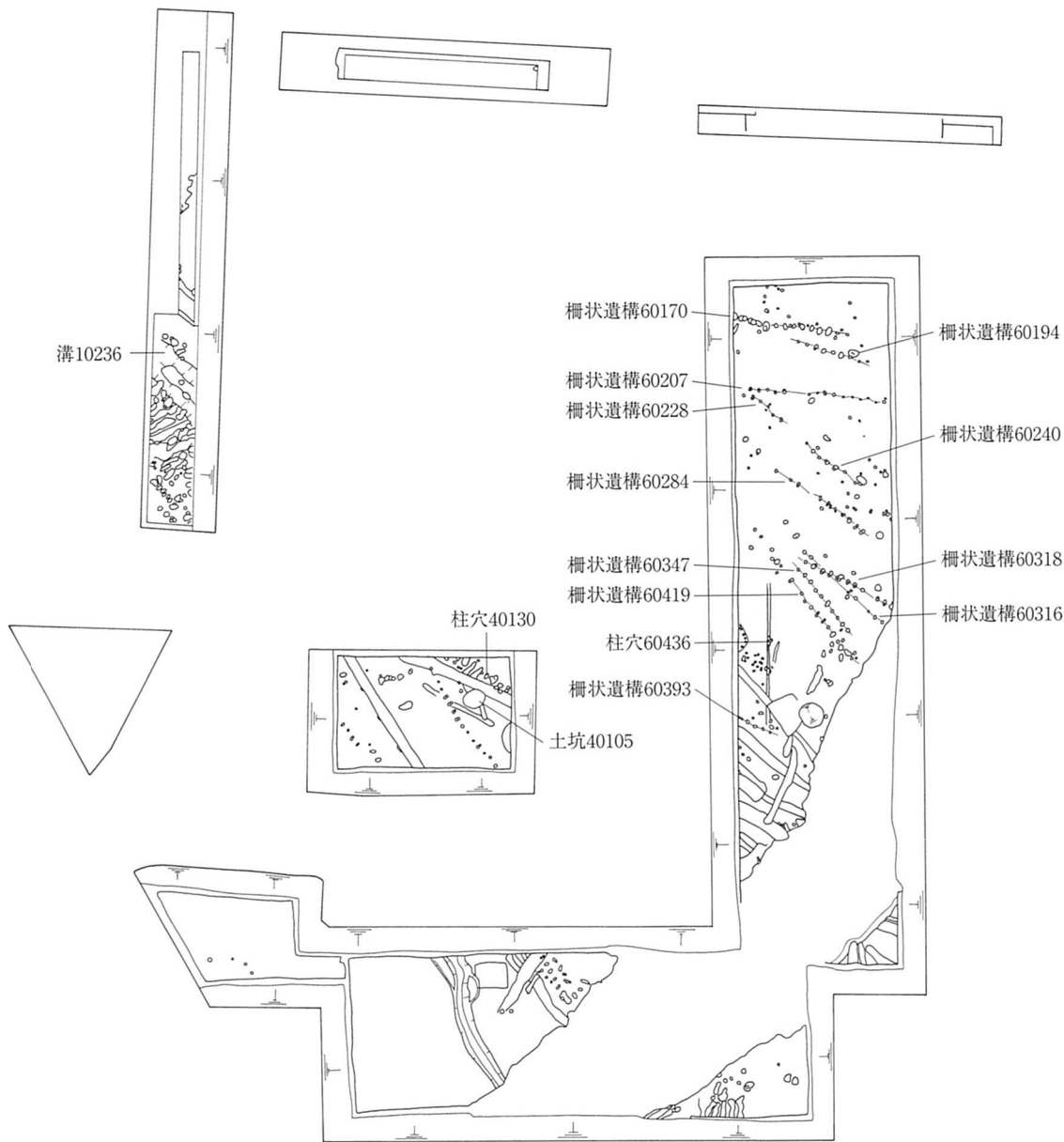
柱穴60436

柵状遺構60393

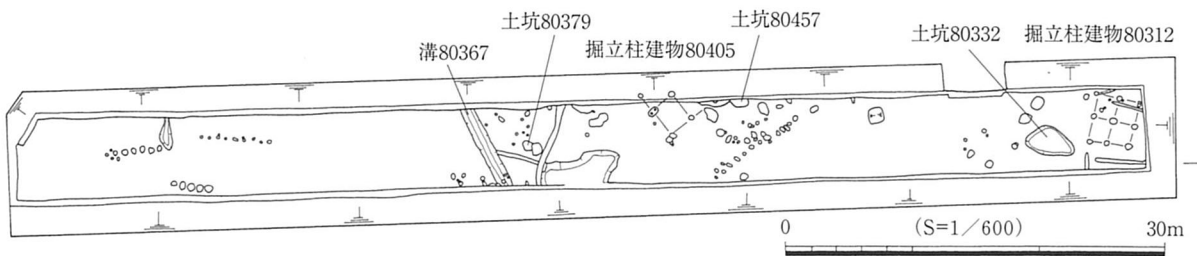
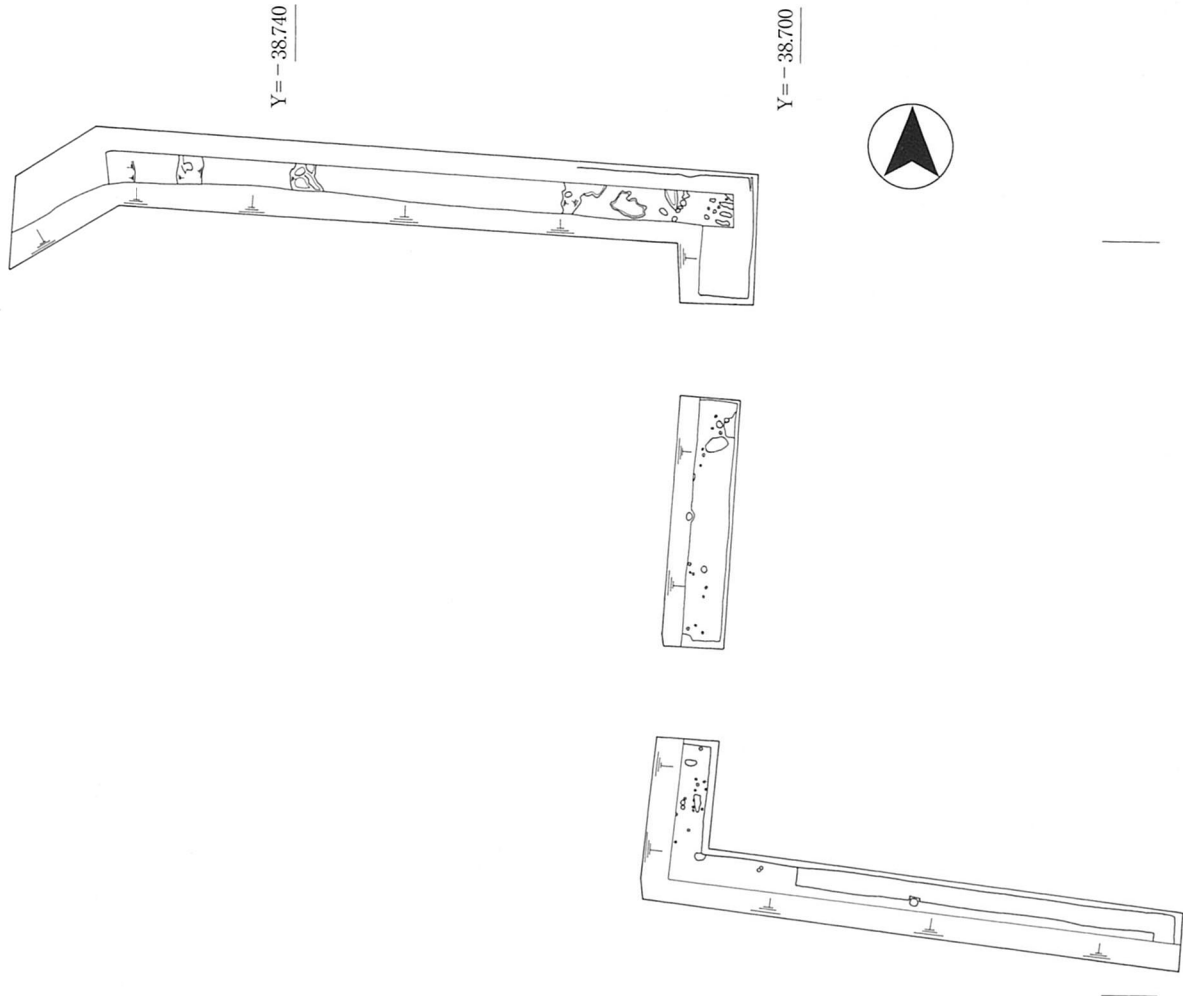
土坑40105

X=-133.120

X=-133.160



第57図 第七遺構面全体図



10. 第Ⅶ遺構面の概要

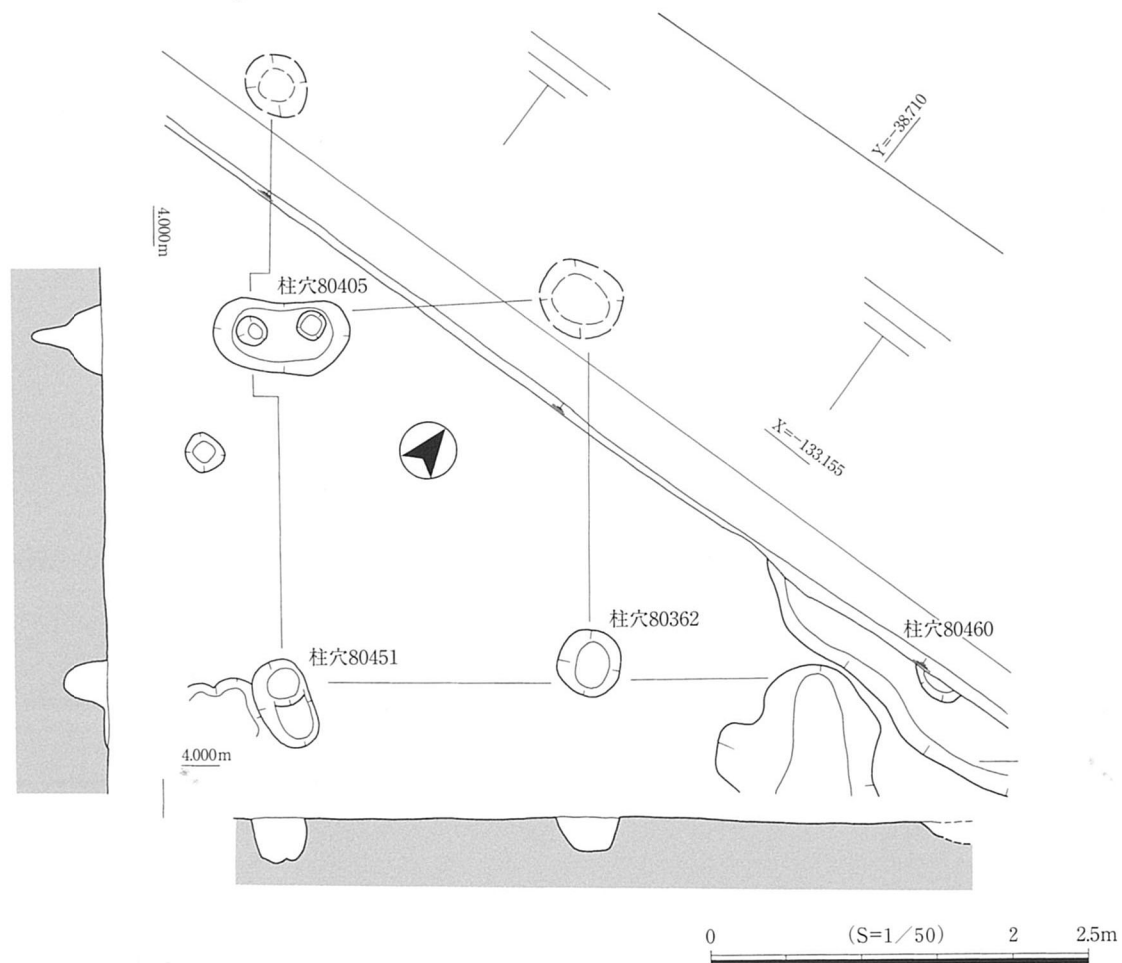
第Ⅶ遺構面は、掘削限界を超えた2Dトレンチを除く全域で検出することができた。この遺構面のベース層も若干の違いはあるにせよ、第Ⅵ遺構面同様特徴的な土層なので比較的容易に認識できた。

標高は調査地中央から南部にかけてが高く、北部は概して低い。つまり3D・5D・6Dトレンチが3.8m、4Dトレンチが3.7m、8D・9Dトレンチが3.6mを測るのに対し、1Cトレンチは3.3m、2C・1D・10Dトレンチは3.4m、7Dトレンチは3.5mである。遺構密集地は、この標高の高い微高地に集中する傾向にある(第57図)。

第Ⅶ遺構面で検出したのは、溝・土坑・掘立柱建物・柵状遺構である。当初は6Dトレンチ南半部の溝が集中するあたりで、竪穴住居跡らしき直線的な埋土の差異を見出し掘り下げたが、結局住居跡とはならず溝跡となった。溝は1D・3D・4D・6D・8Dトレンチで検出した。溝幅・深さはそれぞれに差異があるが、北西から南東へ向かって流れるという共通点がある。特に6Dトレンチに集中傾向があった。

畦畔あるいは耕作溝といった明瞭な耕作関連の遺構は皆無に近い。1Dトレンチ南端では、溝10236に直行する畝状の凹凸を6～7条検出したが、果たしてこれらが畑か否か判断しかねる。

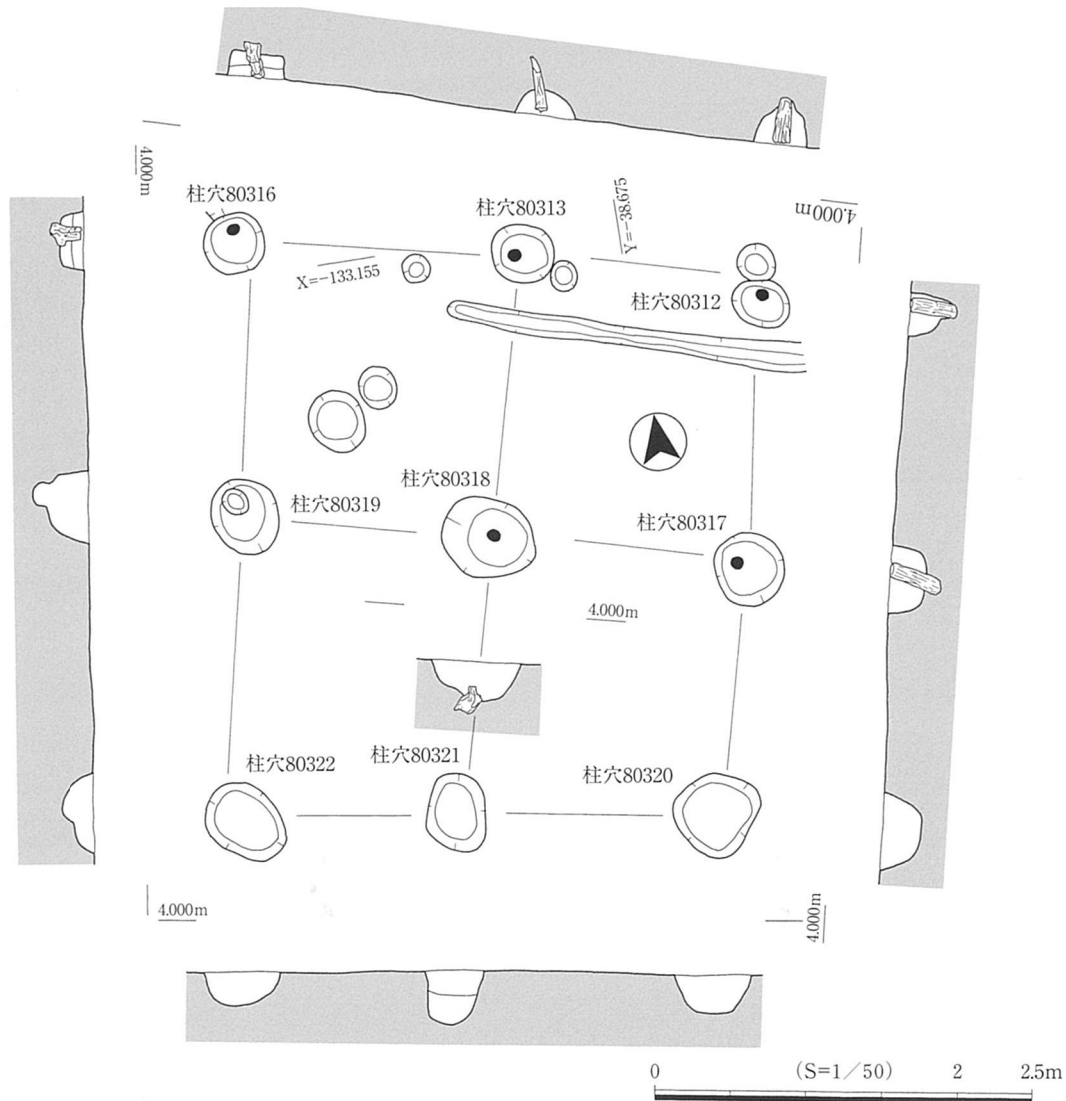
土坑は各トレンチで検出したが、実際に遺物を含むものは少ない。4Dトレンチ東半で検出した土坑40105(p.112)は直径1.5mの円形を呈し、6世紀初頭の須恵器が出土した。また8Dトレンチ中央東寄り検出した土坑80457(p.112)からは有蓋高坏蓋が出土した。



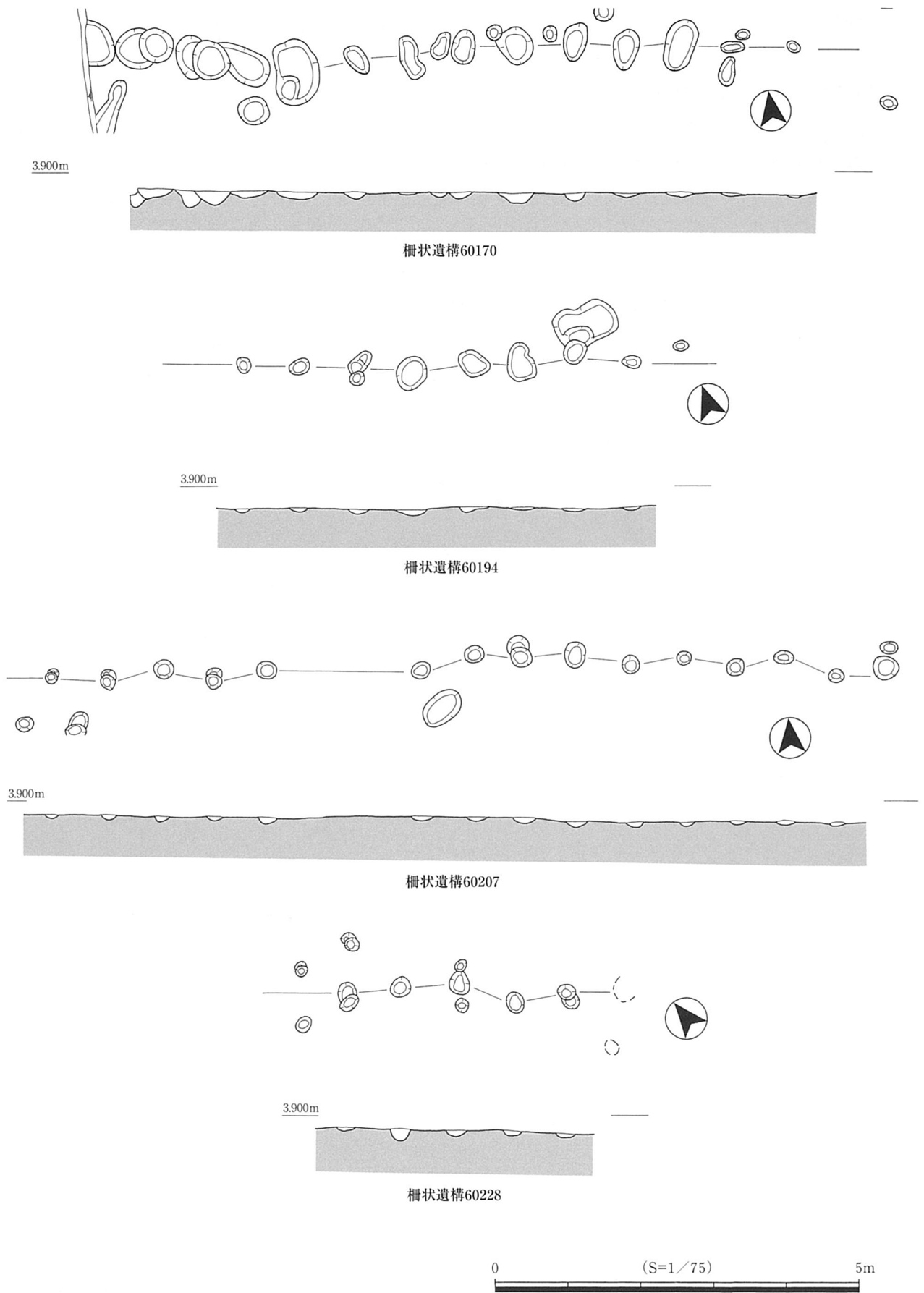
第58図 8Dトレンチ 掘立柱建物80405

建物は8 Dトレンチでのみ検出した。トレンチ中央東寄りで確認した掘立柱建物80405は少なくとも桁行・梁行ともに2間ずつあり、その他は調査地外にのびる。北壁に東柱がみつき、総柱構造であった可能性が高い。柱穴80405はどうやら2つの柱穴が切り合っていたらしく、建て替えがあったようだ(第58図)。掘立柱建物80312はトレンチ東端で検出した。桁行・梁行ともに2間の総柱構造の建物で、一部の柱穴は建て替えを示唆する。建物を構成する9基の柱穴のうち、第59図に示したように5箇所柱根が残存したが、柱穴80313の柱根は先端を尖らせた杭状を呈していた。前者の掘立柱建物80405の柱穴から出土した遺物がないため、詳細な時期はわからないが、後者の掘立柱建物80312は柱穴80320(p.112)から出土した遺物より、7世紀初頭の年代を想定する。

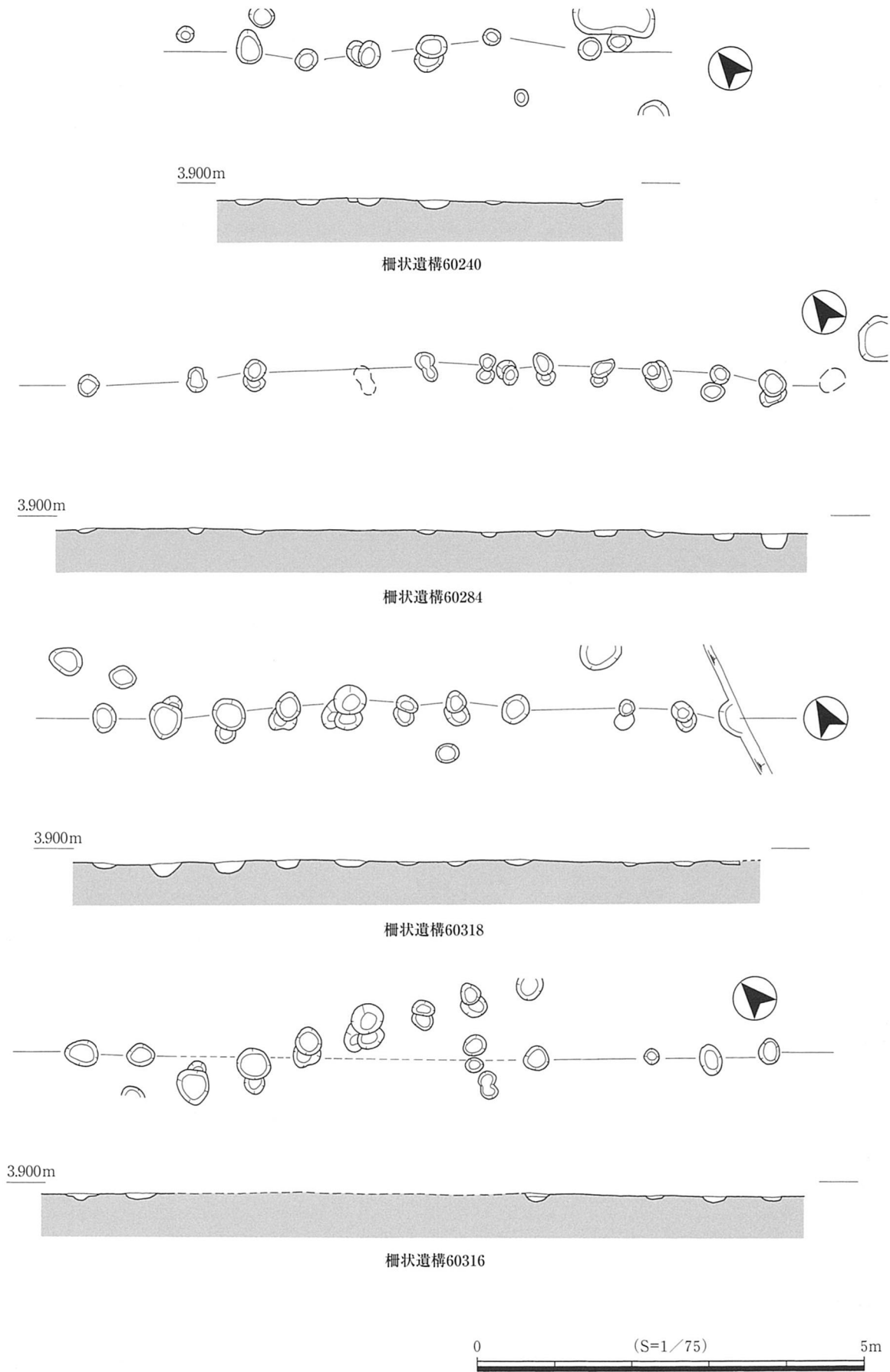
今回の調査では、第Ⅶ遺構面で柵状遺構を多数検出し、このうち幾つかを第60図～第62図に図示した。この柵状遺構とは、直径あるいは長径20～70cm前後の「柱穴状の窪み」が数個～十数個ならんだものをいい、特に6 Dトレンチに集中していた。その他の特徴として、①柱穴状の窪みは平均十数cmの深さしかない。②柱根が残ることはなく、断面を断ち割っても柱痕跡を見出すことはない。③あるものは「柱穴状の窪み」が重複するものもある。④一部に例外はあるが、基本的に北西～南東方向に検出することが多い。⑤埋土はいずれも第Ⅵ包含層と同一で、意図的に埋めたものではない。⑥遺物は必ずしも包含



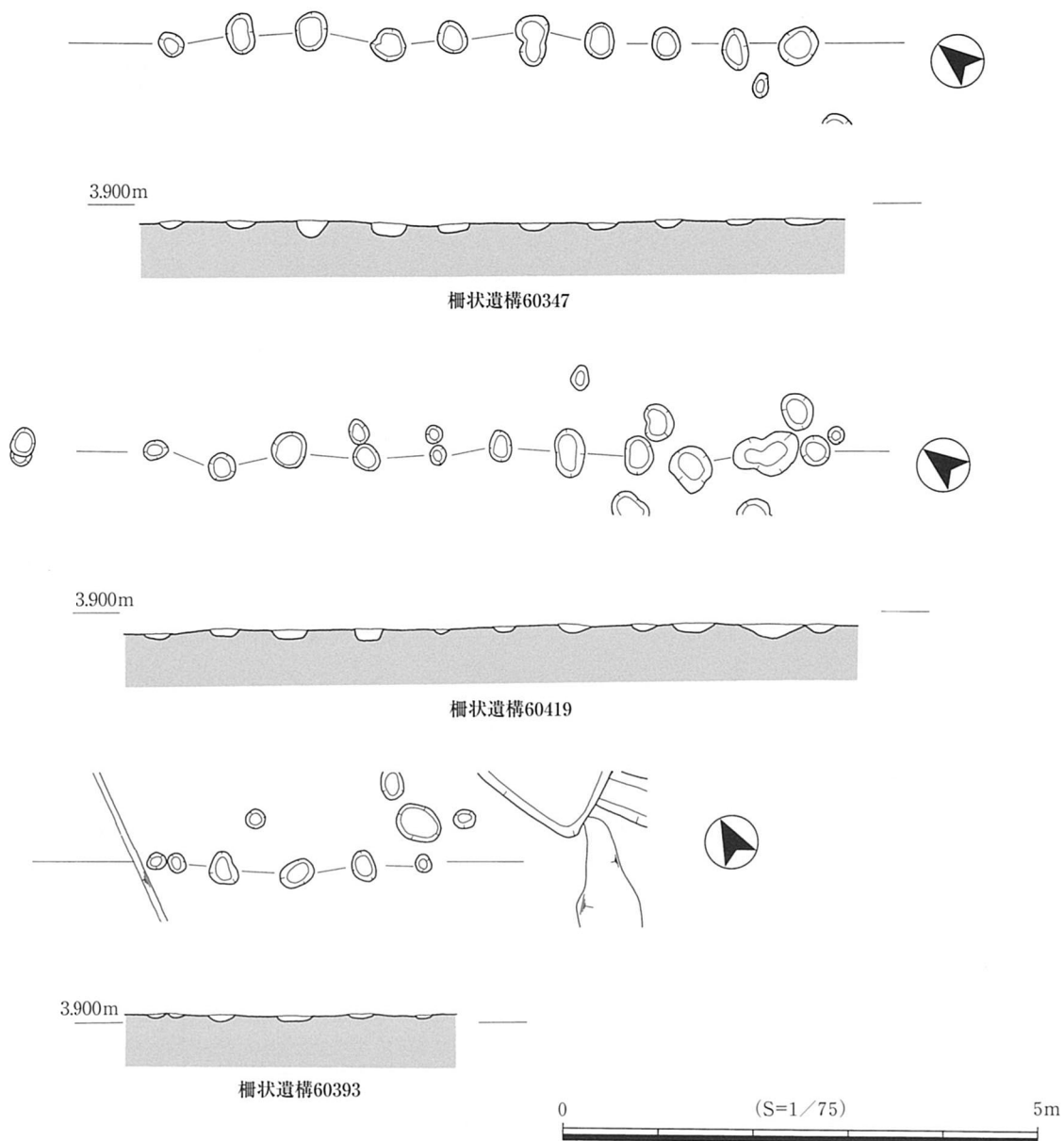
第59図 8 Dトレンチ 掘立柱建物80312



第60図 6Dトレンチ 柵状遺構(1)



第61図 6Dトレンチ 柵状遺構(2)



第62図 6 D トレンチ 柵状遺構 (3)

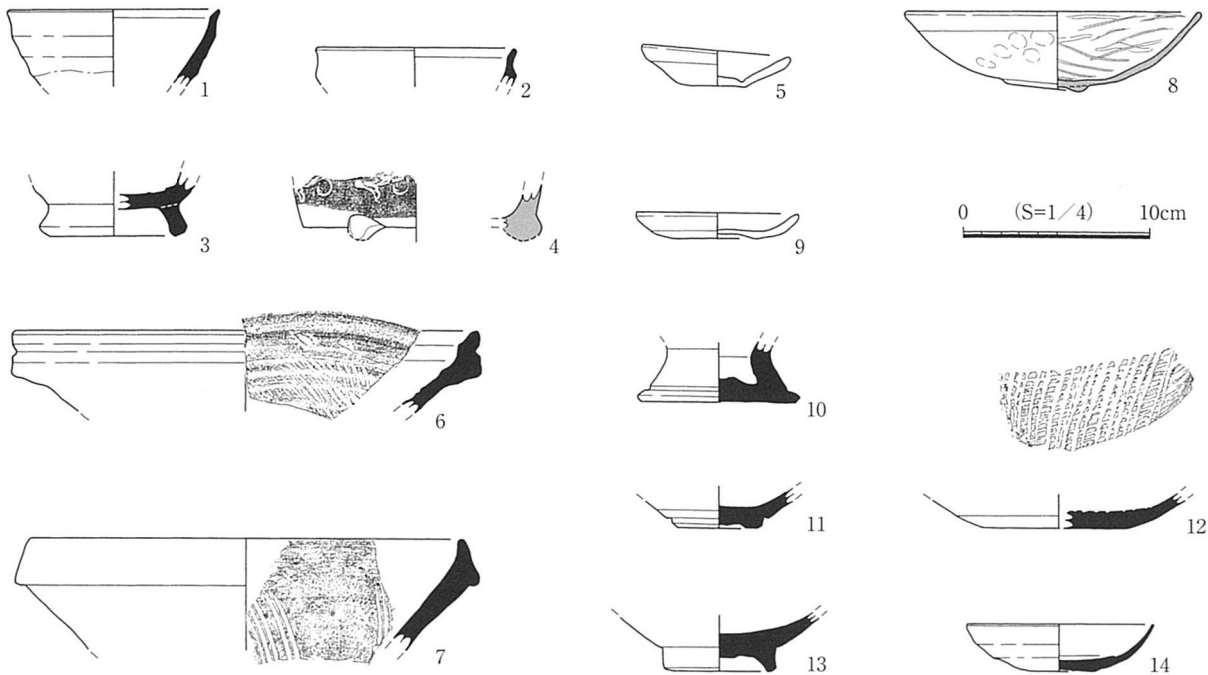
するわけではない。このようにみると、一連の柵状遺構が人工的な構造物である可能性は低いように思う。なお同様の遺構は、3 D・4 D・8 D トレンチでも確認した。

その他、掘立柱建物あるいは柵状遺構とはならない単独の柱穴も多数検出した。4 D トレンチ柱穴 40130 や 6 D トレンチの柱穴 60436 (p.112) もその一つである。前者から石庖丁が、後者から土師器が出土した。

追記

脱稿後、井上智博より自然流路30019の木杭は、壁面の検討から形成された砂洲の流失を防ぐために打設された可能性が高いという教示を得た。

第5節 出土遺物



第63図 第0、I包含層出土遺物

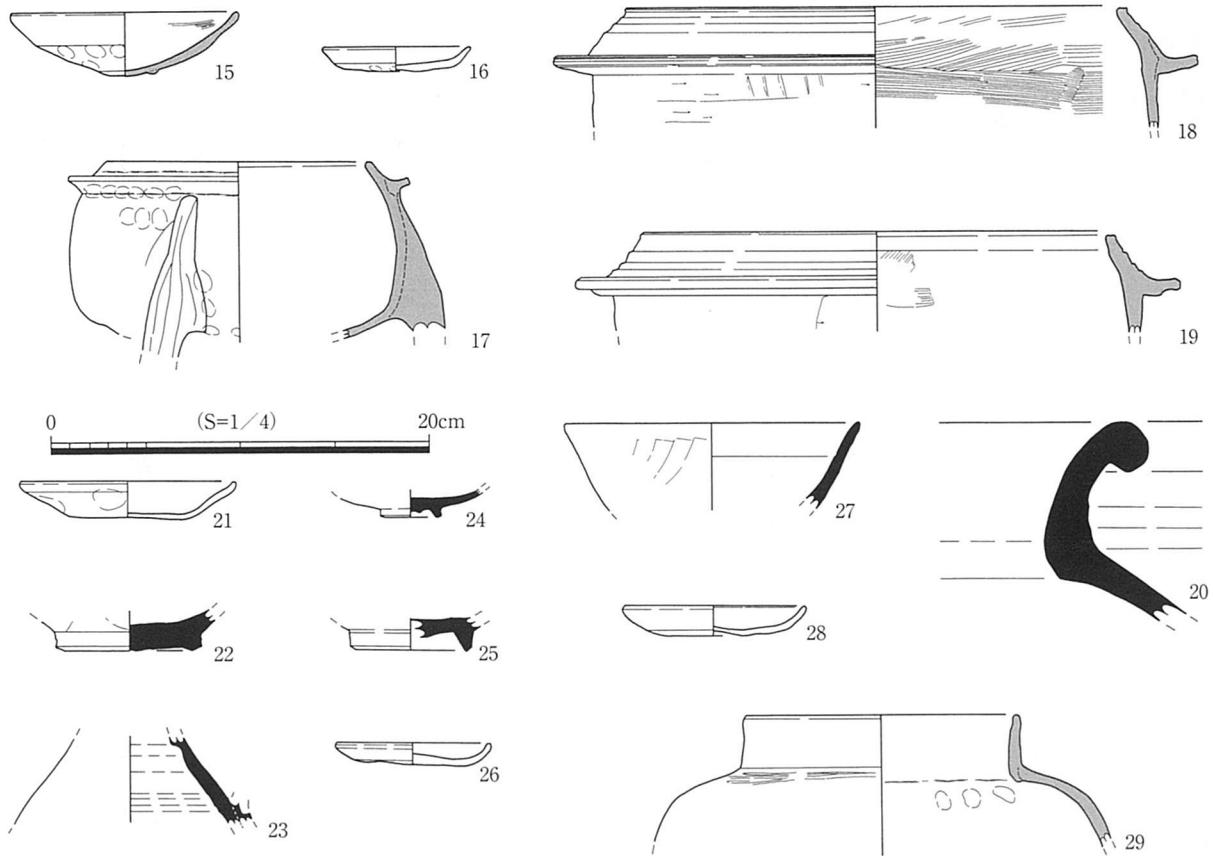
1. 第0、I層包含層出土遺物

この層は盛土・近世以降の旧耕作土で構成されており、機械掘削時に取り上げられた遺物がほとんどである。6D・7D・8D・9D・10Dトレンチからの出土量が多く、第Ⅱ遺構面より下層の遺物が多く混入している。出土遺物は、中世以降の瓦器埵・土師器皿が全体的な数量も多く、それらの多くは近世における耕作で巻き上げられたと思われる。したがって、明らかに原位置を遊離した状態であるため省略し、ここでは図化できる国産・輸入陶磁器を中心に掲載する。

一方、1Dトレンチと7D・8D・9D・10Dトレンチで第Ⅰ遺構面として遺構を検出したが、いずれの遺構も近世の耕作に関するものであり、出土した遺物は少なく図化できるものがなかった。

第0包含層（1～6）1・2は瀬戸美濃天目茶碗で16世紀の所産。口縁端部を薄く仕上げ、鉄釉を施している。3は古瀬戸四耳壺の底部である。12世紀末頃から13世紀に相当しよう（古瀬戸編年前期）。4は瓦質香炉である。先端を巻き込ませた草花文を横位にスタンプし、脚がつく。15世紀から16世紀の所産と思われる。5は土師器皿である。白色系の精良な胎土で、内面見込み部に凹線状の圏線をもち、口縁端部に煤が付着する。15世紀の所産で灯明皿であろう（平安京Ⅷ期）。6は備前焼播鉢で16世紀の所産である（間壁編年Ⅴ期）。

第Ⅰ包含層（7～13）7は備前焼播鉢で15世紀中頃（間壁編年ⅣB期）。8は和泉型瓦器埵で、内面に粗い渦巻き状暗文を施し、13世紀前半（尾上編年Ⅲ-3期）。9は13世紀の土師器皿（平安京Ⅵ期）。10～12は古瀬戸である。10は花瓶で、外面と内面一部に施釉がみられ、底部は糸切りする（古瀬戸後期・花瓶Ⅲ類）。11は平埵底部で、高台は削出しする。12はおろし皿の底部である。口縁部は欠損しており、底部は糸切りする。13は青磁碗で全体的にシャープさを欠く器形である。釉は青味がかかった灰白色を呈し、胎土がやや粗いことから15世紀の所産であろう。14は白磁皿で、口縁部が内彎し内面見込み部に段をもつ。釉は黄色みがかかった灰白色を呈する。15世紀中頃の所産であろう（山本分類ⅢⅥ-1類）。



第64図 第Ⅱ遺構面出土遺物（1）

2. 第Ⅱ遺構面出土遺物

溝30016（15・16）15は和泉型瓦器碗で口径12.0cm・器高3.4cmを測り、ヒモ状の高台を貼りつける。口縁部内面にわずかなヘラミガキが残っており、13世紀後半（尾上編年Ⅳ-2期）。16は土師器皿で、口縁部は1段凹みナデを施し外反する。口径が8cmを割り、縮小化がみられる（平安京Ⅵ期新～Ⅶ期古段階）。いずれも13世紀中頃から後半の所産である。ほかに須恵質土器・磁器が出土した。

溝80015（17～20）瓦質羽釜や、備前焼大甕が出土した。

瓦質土器（17～19）17は小形の三足釜で口縁部が短く内傾する。残存する2本の脚は、一度折損した面を整えており、高さをそろえて再度使用したと考えられる。18・19は羽釜で、口縁部が内傾したのち上方に立ち上がって水平な端面をもつ。口縁部外面に段をもち、内面は横方向のハケ、胴部外面は横方向のヘラケズリを施す。外面のヘラケズリなど、河内系の羽釜にみられる要素がはいっており、14世紀以降の所産か。19には脚部接合痕跡があり、三足釜の可能性はある。

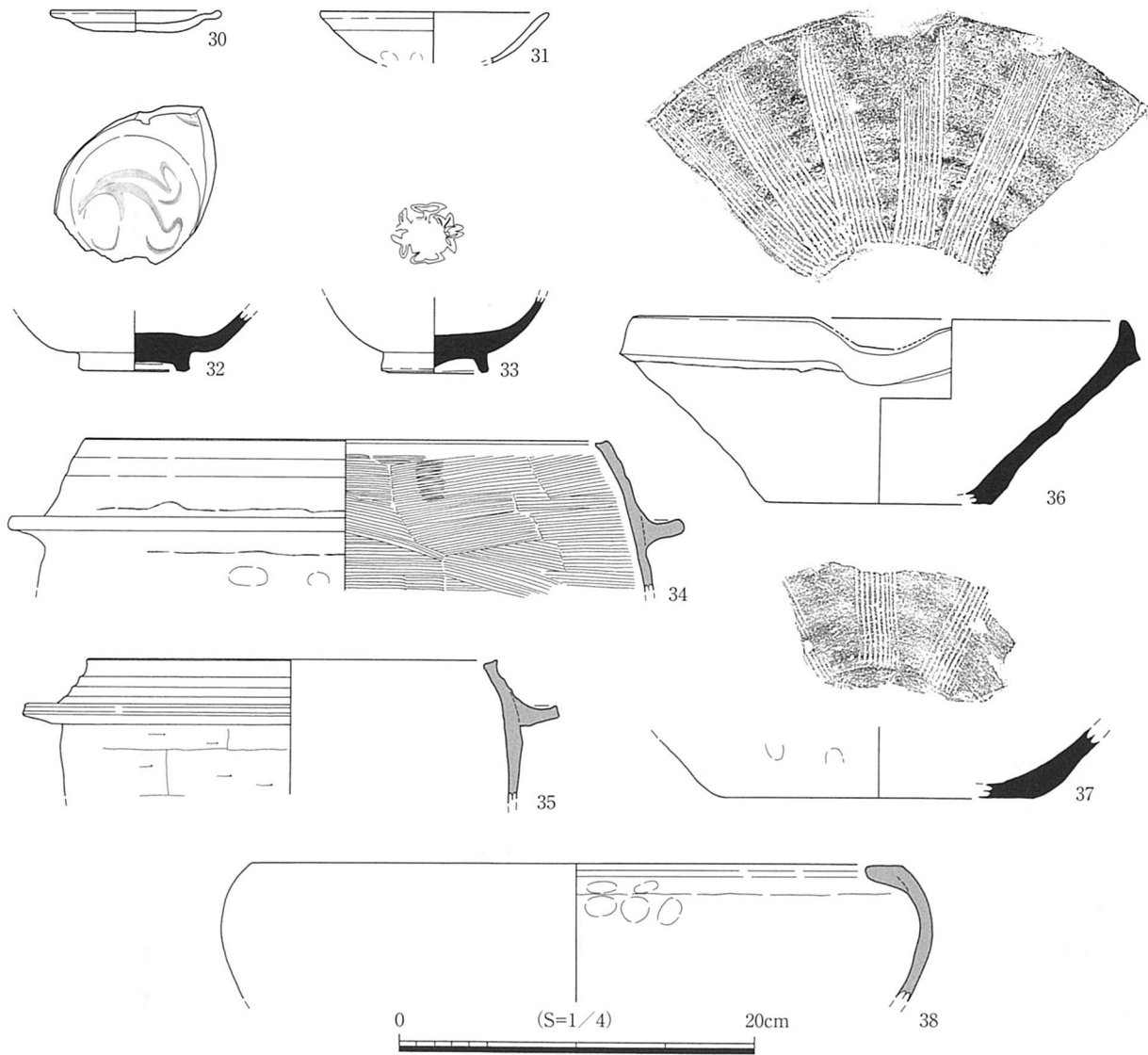
国産陶器（20）備前焼大甕。口縁部に自然釉が付着する。14世紀前半の所産である（間壁編年Ⅲ期）。

溝80044（21）土師器皿で、口径11.4cm。底部から口縁部の立ち上がり部の器壁がやや薄い。口縁端部内面にヨコナデ、外面にユビオサエを施す。14世紀初頭から中頃の所産である（平安京Ⅶ期中段階）。

溝80102（22）白磁碗である。削出し高台で、露胎する（山本分類碗Ⅳ類）。

溝80142（25）白磁碗で、内面見込み部は蛇の目状に釉を掻き取る（山本分類碗Ⅶ類）。

溝80143（23・24）23は青白磁で、把手がつくことから水注の頸部と考えられる。内面は一部釉が付着する。断面に漆の付着痕があり、一度補修されたものか。24は白磁皿で、高台と底部の一部が露胎する。胎土に鉄分を多く含んでおり、14世紀から15世紀の所産である。



第65図 第Ⅱ遺構面出土遺物(2)

溝80147 (30~38) 14世紀が主体と思われる多様な遺物が出土した。

土師器 (30・31) 皿である。30は厚手の「て」字状口縁をもち、11世紀後半(平安京Ⅳ期)。31はやや深い坏形を呈し、口縁部は外反する。13世紀から14世紀(平安京Ⅵ~Ⅶ期)。

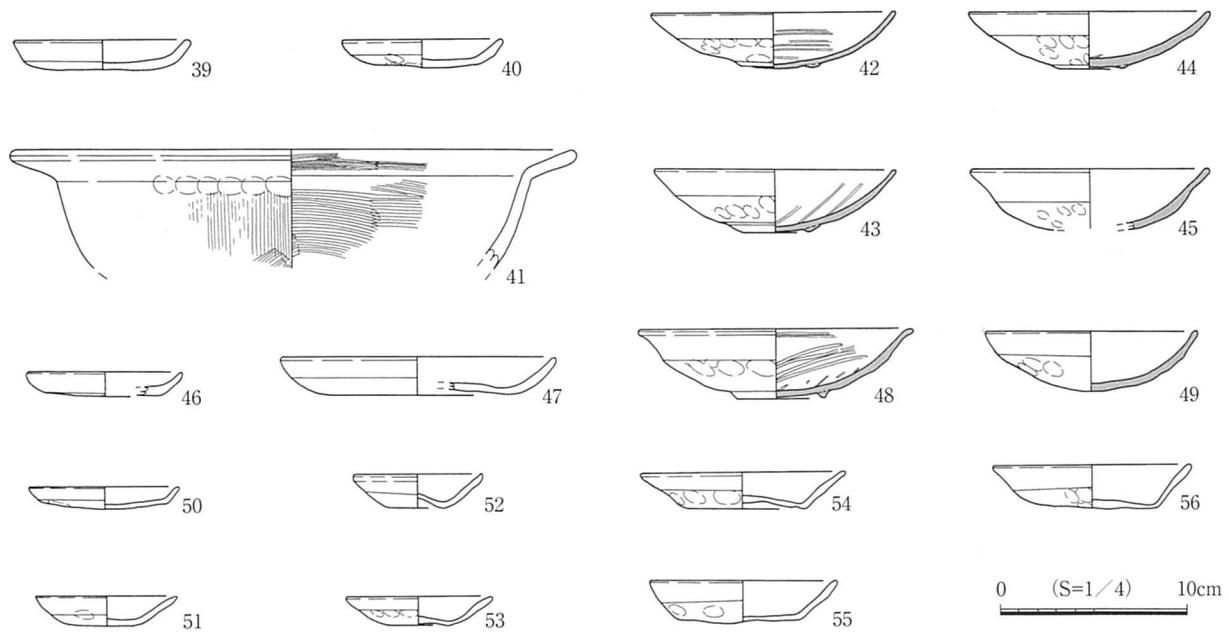
瓦質土器 (34・35・38) 羽釜。34は口縁部が内彎し、端面をもつが、口縁部外面に浅い凹線文がめぐる。胴部外面は粘土の接合痕に沿うように指圧痕が残り、内面は斜め方向のハケを施す。35は口縁部が内傾し、端部は面をもつ。口縁部外面は段をなし、胴部外面に横方向のヘラケズリをする。38は瓦質火鉢である。

国産陶器 (36・37) 備前焼播鉢である。36は、14世紀末頃から15世紀初頭(間壁編年ⅣB期)。

輸入磁器 (32・33) 32は龍泉窯系青磁碗で、内面に片彫連弁文を描く(山本分類碗Ⅰ-2類)。高台豊付けとその内部まで一部施釉されたようだが、ほとんど磨耗している。12世紀から13世紀の所産である。33は青磁碗で内面見込み部に花文をスタンプする(山本分類碗Ⅳ類)。

落込み80105 (27・28) 27は白磁碗。外面に縦篋花卉文とみられる文様があり、釉が黄色味を帯びており表面がざらついている(山本分類碗Ⅴ類)。28は土師器皿で口縁部にナデを施し、13世紀(平安京Ⅵ期)。

落込み80145 (29) 瓦質茶釜か。口縁部は直立し肩部が張る。焼成が堅徴で、外面に丁寧なヘラケズリを横方向に施す。



第66図 第Ⅱ遺構面出土遺物(3)

落込み80146 (26) 土師器皿。口径8.2cmを測り、口縁部外面を1段凹みナデする。13世紀(平安京Ⅵ期)。
 土坑80103 (39) 土師器皿。口縁部をヨコナデし、底部外面はユビオサエのみ。13世紀(平安京Ⅵ期)。
 土坑90032 (40~44) 13世紀中頃から14世紀中頃の土師器・瓦器碗、輸入磁器、環状の金属製品、宋銭(641)が出土した。

土師器(40) 皿。口縁部にヨコナデをする。13世紀後半の所産(平安京Ⅵ期新段階~Ⅶ期)。

土師質土器(41) 鍋である。口縁部内面と体部内外面にハケを施したあと、頸部から口縁部外面にユビオサエをする。

瓦器(42~45) 和泉型瓦器碗で口径は12.4~12.8cm・高さ3.0~3.3cmを測る。ヒモ状の高台が中心よりずれた位置につく。口縁部にヨコナデ、口縁部内面に渦巻き状暗文と見込み部内面に粗い平行線状暗文を施し、13世紀後半の所産(尾上編年Ⅳ-2期)。

土坑90033 (46~48) 13世紀の土師器皿・瓦器碗・輸入陶器が出土した。

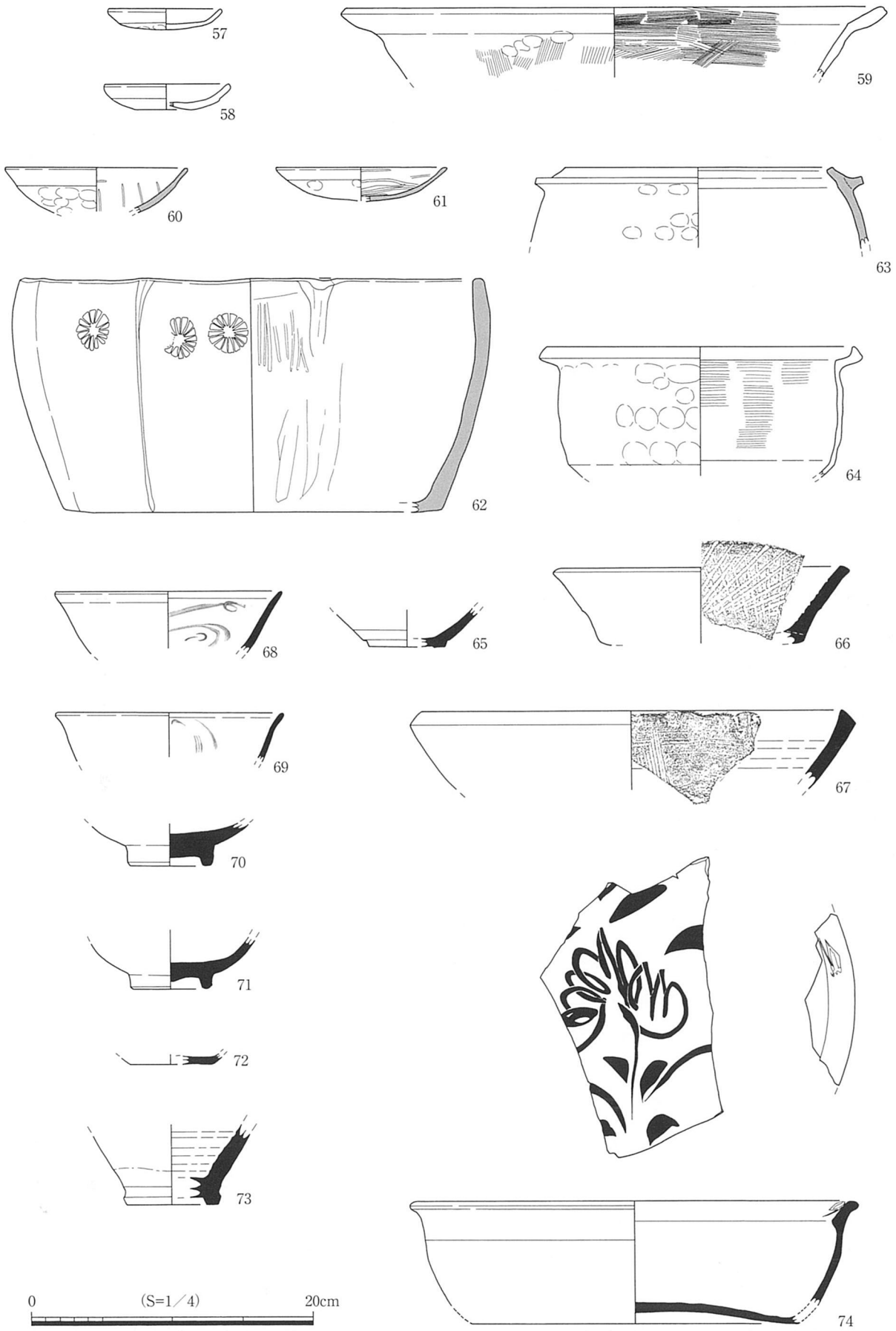
土師器(46・47) 皿である。46は口縁部と口縁端部にヨコナデをする。46は口径14.6cmで、口縁部が緩やかなカーブで立ち上がりヨコナデを施す。いずれも13世紀の所産である(平安京Ⅵ期)。

瓦器(48) 和泉型瓦器碗で、口径14.4cm・器高3.7cmを測る。口縁部にやや強いヨコナデを施す。口縁部内面に渦巻き状暗文のあと、見込み部に平行線状暗文を施す。ヘラミガキの太さが異なっているのは、同じ原体を角度を変えて用いているためであろう。13世紀前半のものである(尾上編年Ⅲ-3期)。

土坑100001 (49~56) 土師器・瓦器碗の他、須恵質土器や、瓦質羽釜が出土した。14世紀前半の遺物がまとまっている。

瓦器(49) 和泉型瓦器碗で、口径11.2cm・器高3.2cmを測り、高台はない。内外面のヘラミガキは省略され、体部外面に若干指圧痕が残る。14世紀前半の所産であろう(尾上編年Ⅳ-3、4期)。

土師器(50~56) 皿である。口径8cm前後の皿小(50~52)と口径10~11cmの皿大(53~55)がある。皿大小は口縁部が外反し、底部から口縁部にかけて器壁が薄く、口縁端部は丸みをもつ。14世紀前半(平安京Ⅶ期)。52は14世紀中頃の所産であろう(平安京Ⅶ期新段階)。皿はいわゆるへそ皿が出土していて、図化できなかった破片の中にも、底部から口縁部の立ち上がり部が薄くなっているものも多くみられた。



第67図 第Ⅱ包含層出土遺物

3. 第Ⅱ包含層出土遺物

ここで掲載した土器（57・58と陶磁器を除く）は7 Dトレンチから出土しており、遺構は検出していないが、周辺に集落があったことがうかがえる。

土師器・土師質土器（57・58・59・64）57・58は皿である。12世紀末頃から13世紀中頃の所産（平安京Ⅵ期）。59は鍋で体部外面に煤が付着する。64は鍋。口縁部が一度水平になり端部が立ち上がる受け口状を呈する。在地産か。表面は被熱により剥離する。

瓦器・瓦質土器（60～63）60・61は瓦器埴。60は口径12.5cmを測り、内面に平行線状暗文を施す。61は口径12.2cmで高台がない。いずれも13世紀末頃から14世紀前半の所産である（尾上編年Ⅳ－3、4期）。62は瓦質の深鉢で「奈良火鉢」と呼ばれるものである。平面が輪花状を呈し体部外面に花文をスタンプする。内面に縦方向のヘラミガキがみられる。63は羽釜で口縁部が内傾し、断面方形の罫がめぐる。

国産陶器（65～67）65は古瀬戸平埴で、底部糸切り後高台を削出しており、15世紀前半。66は産地不明の陶器で、褐色の胎土に1mm以下の砂粒を多く含む。内面に斜格子状のヘラがはいることから、播鉢とも考えられる。67は備前焼播鉢である。褐灰色で口縁部が肥厚しておらず、13世紀後半（間壁編年Ⅱ、Ⅲ段階）か。

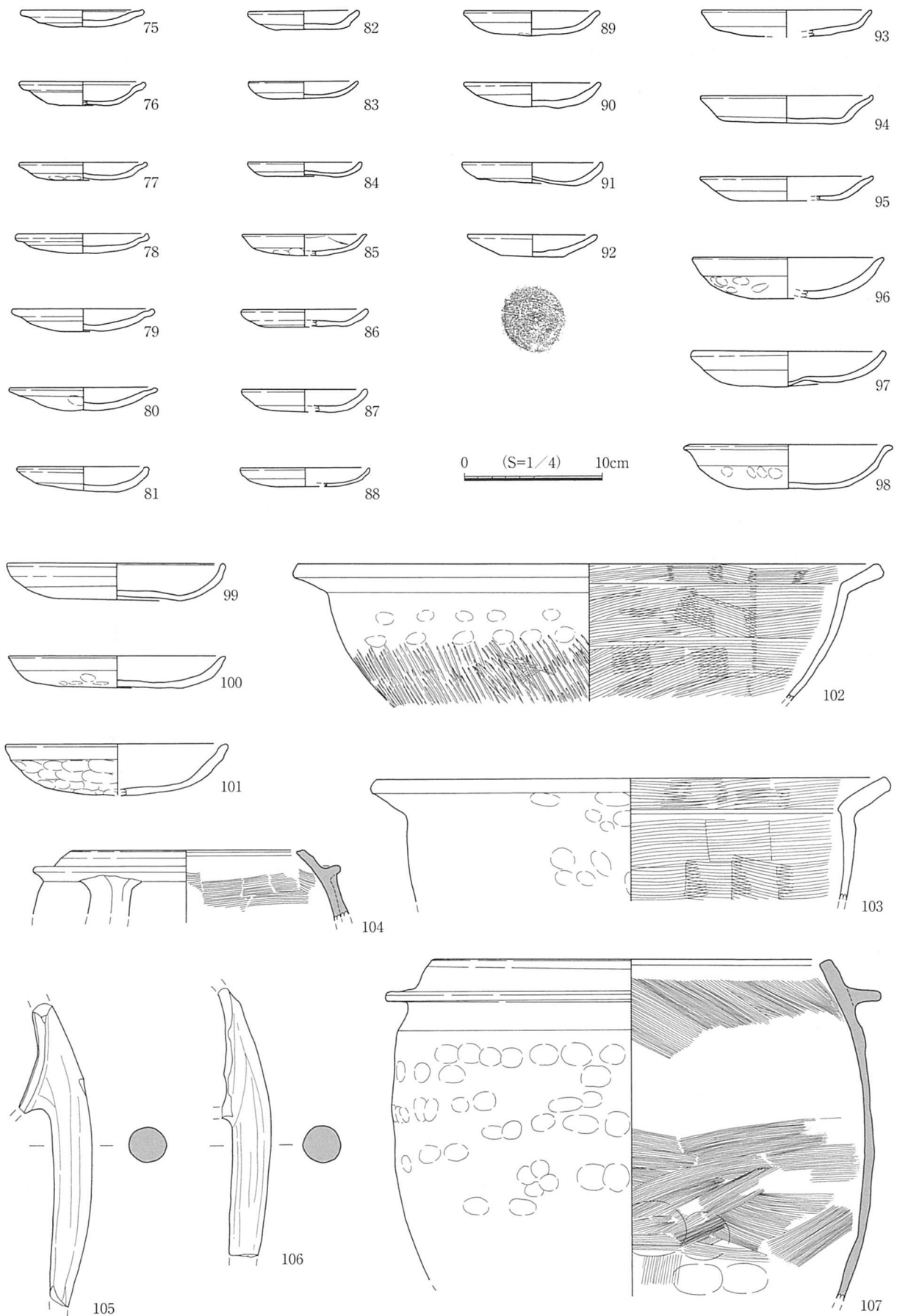
輸入陶磁器（68～74）68～71は青磁、72・73は白磁である。青磁は龍泉窯系の碗で内面に片彫蓮花文をもつ68（山本分類碗Ⅰ－2 a類）と、内面に分割線を施す69（山本分類碗Ⅰ－4類）がある。70・71はシャープさを欠いた器形で、胎土も粗いことから15世紀以降の所産であろう。高台の内部まで施釉する。72は白磁皿で底部まで施釉する。73は白磁四耳壺底部で、内部まで釉がかかる。74は福建省晋江市磁窰窯産の黄釉鉄絵盤（山本分類盤Ⅰ－1 b類）。この盤は尼崎市大物遺跡^{だいもつ}で出土した例があるが、京都・奈良・博多など限定された場所以外で出土する稀少な例である。黄釉を内面全体に施釉し、口縁部・口縁部直下・外面は露胎する。口縁部は重ね焼の目跡がある。口縁部は「く」字状に外傾するが、今回の調査では口縁部が短く断面が方形をなす613（山本分類盤Ⅰ－2 b類）が出土しており、2個体以上あった可能性がある。底部内面には鉄絵で花文を描くが、簡略化されたものであることから、13世紀初頭に相当するだろう。

4. 第Ⅲ－1 遺構面出土遺物

第Ⅲ－1 遺構面はもっとも遺物量が多い面である。特に3 D・6 D・7 Dトレンチをまたがって検出された自然流路30019からは多くの遺物が出土した。

自然流路30019（75～140）図化した土師器皿・瓦器埴、土師質・瓦質の煮沸具・陶磁器類のほかに須恵器・弥生土器・砥石など多くの遺物が出土した。中世遺物は12世紀と、13世紀後半から14世紀初頭にピークがみられる。調査では上層・下層とに分けて掘削したが、層による時期差はみられない。

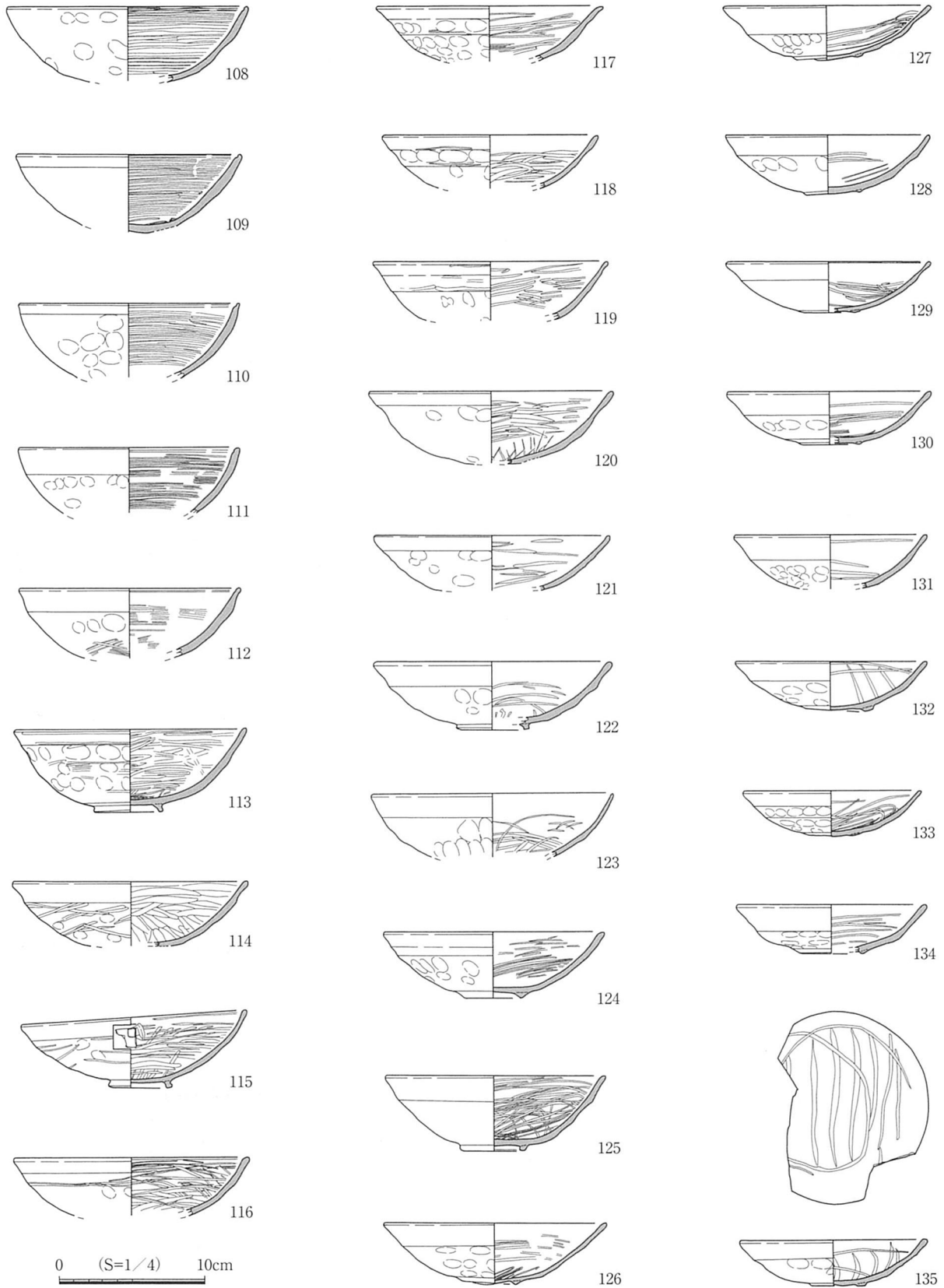
土師器（75～103）皿（75～101）くずれた「て」字状口縁皿と、やや時期が新しい皿が出土した。皿は口径から大と小に分けられ、それぞれ時期的に対応する。「て」字状口縁皿（75～80）は口径が8.8～10.0cmと縮小しており、器壁の厚さは3～4mmである。時期は11世紀後半から末頃に相当する（平安京Ⅳ期新段階）。皿小（81～91）は口径9.0cm前後が多く、口縁端部にもヨコナデを施し断面三角形におさめる87・91（平安京Ⅵ期中段階）のものもみられるが、12世紀から13世紀のものが主体である。皿大は口径12cm前後（93～95）と、15～16cm前後（96～101）があり、前者は外反する口縁部の特徴から13世紀後半、後者は12世紀末頃から13世紀のものと考えられる（平安京Ⅵ、Ⅶ期）。回転台成形の土師器皿



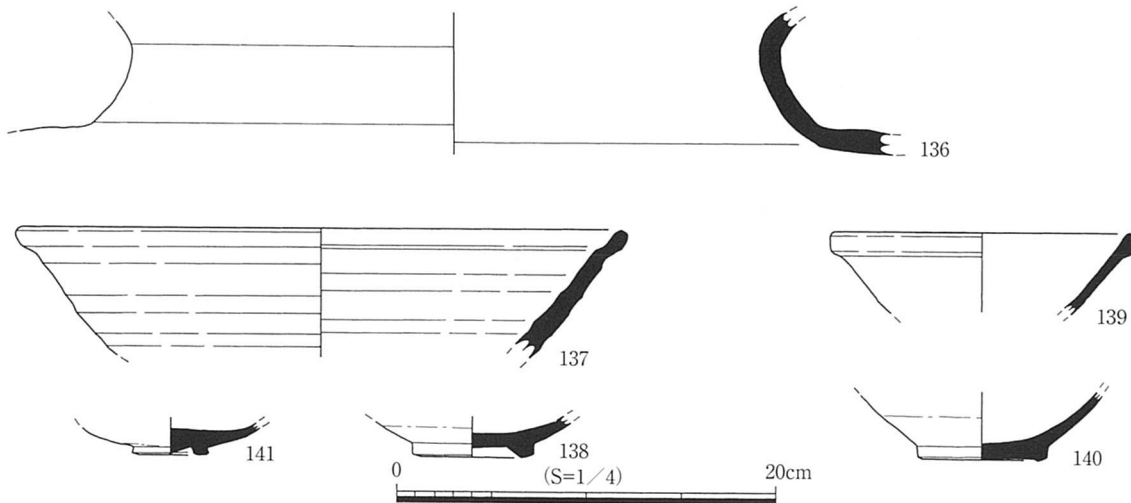
第68図 第三-1 遺構面自然流路30019出土遺物(1)

(92) は底部を糸切りしており、ピンク色の精良な胎土である。

土師質土器 (102・103) 鍋。口縁部と体部内面に横方向のハケを施し、体部外面の調整はユビオサエである。102の下半にはタタキを施す。



第69図 第三-1 遺構面自然流路30019出土遺物 (2)



第70図 第三-1遺構面自然流路30019出土遺物(3)

瓦器(108~135) 壺が多く出土した。楠葉型と和泉型の両方が出土したが、12世紀代の瓦器壺では楠葉型瓦器壺が多くみとめられた。和泉型瓦器 壺は12世紀初頭から13世紀末頃まで断続的に出土している。

楠葉型瓦器壺(108~112) 口径が15.0~16.2cmを測り、口縁端部内面に沈線をめぐらす。口縁部内面のヘラミガキも密なことから、11世紀末頃から12世紀代の所産であろう(橋本編年Ⅱ期)。なお、外面のヘラミガキは磨耗のため不明瞭である。

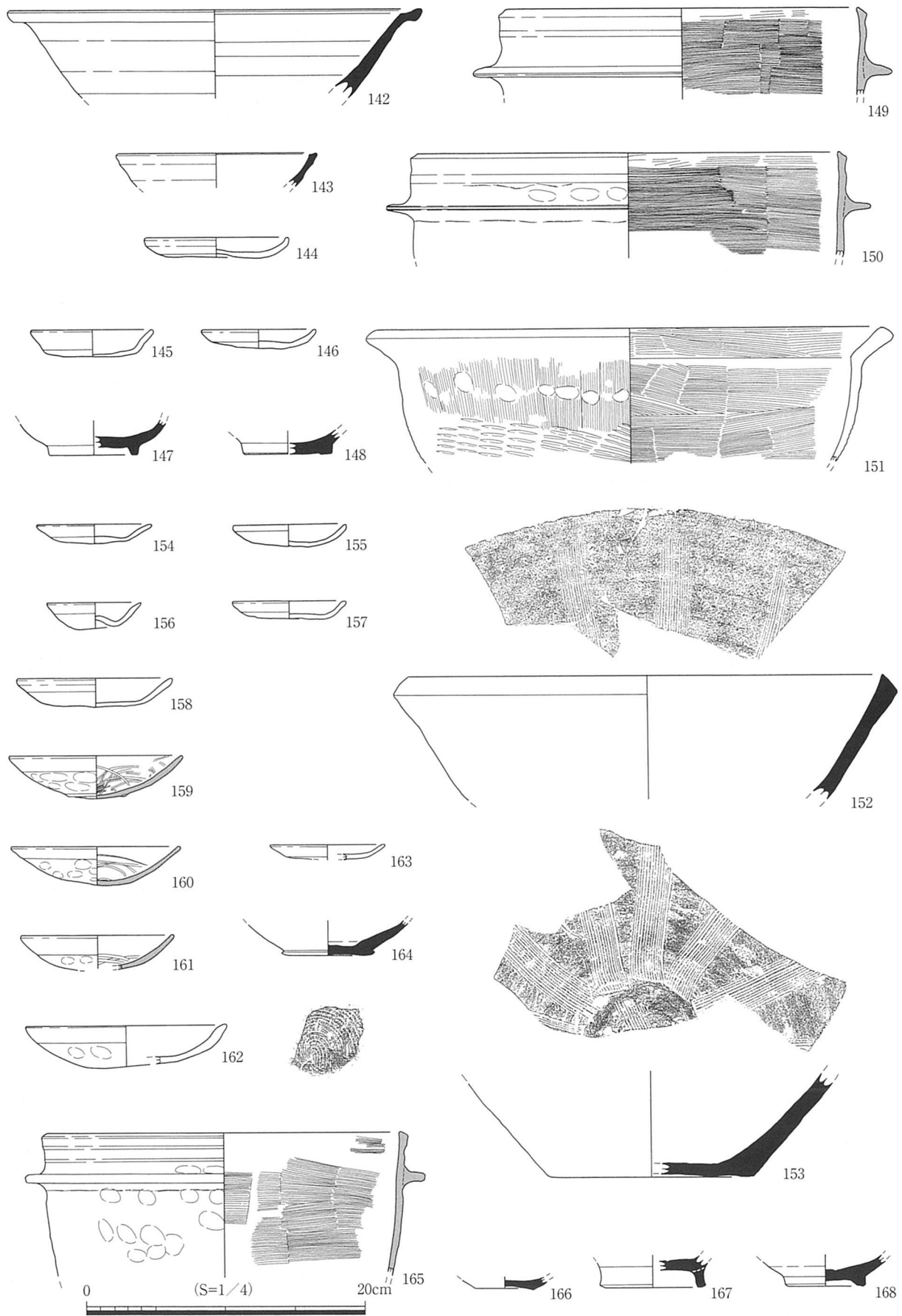
和泉型瓦器壺(113~135) 12世紀前半から13世紀末頃まで断続的に出土している。113~119は口径が15cm以上あり、内面のヘラミガキが密で、外面にもヘラミガキを施している。内面のヘラミガキは圏線状と、乱方向のもの、短い単位で施すものがあり、さまざまである。外面のヘラミガキは114・115のように分割性を残しており、上半部のみ施す。高台は欠損しているものもあるが、しっかりしておりやや「ハ」字状に開く(113・115)。これらの特徴から12世紀前半(尾上編年Ⅱ期)。120~126は、口縁部外面のヘラミガキが省略されユビオサエのみ施す段階で、内面の調整も粗く、見込み部に平行線状暗文を施す程度である。12世紀後半から13世紀初頭に相当する(尾上編年Ⅲ-1、2期)。127~132は口径が14cm台を保っているが器高が3~4cmと低くなり、高台は断面三角形状、あるいは粘土ヒモを貼りつけた程度である。内面のヘラミガキは粗い渦巻き状暗文となり、見込み部の平行線状暗文が口縁部上半まで施される(132)。外面はユビオサエのみで、13世紀前半(尾上編年Ⅲ-3期)。133~135は、口径12.5~13.0cm・高台3.5cm以下で、内面のヘラミガキも簡略化される。高台も退化しており、13世紀後半から末頃に相当する(尾上編年Ⅳ期)。

瓦質土器(104~107) 羽釜である。104は三足釜で、口縁部が内傾し水平な面をもち、短い鰐がつく。体部内面は横方向のハケを施す。三足釜の脚部も数本出土しており(105・106)、煤が付着する。107は底部が欠損するが口縁部と体部は全周する。口縁部は内傾し、水平方向の短い鰐がつく。体部内面はハケ、外面はユビオサエを施し、体部外面全体に煤が付着していた。

国産陶器(136・137) 136は常滑焼大甕で、口縁端部は欠損する。残存状況から口縁部が肥厚しない13世紀のものであろう。137は古瀬戸折縁深皿で、13世紀末頃から14世紀前半(古瀬戸編年前、中期)。

輸入磁器(138~140) 138・139は白磁碗で、139は玉縁状の口縁をもつ(山本分類碗Ⅳ類)。138・140も碗の底部と思われる。140は高台内部の削込みが浅い。

溝60098(141) この遺構は、自然流路30019の最終埋積層である。瓦器壺や土師器が20点近く出土し



第71図 第三-1 遺構面出土遺物 (1)

たが、破片ばかりである。141は青白磁皿の底部である。

溝70001 (142～153) 土師器・瓦器以外に陶磁器や瓦が十数点、砥石が1点出土した。土師器・瓦器に対する陶磁器の割合は5%で同時期の他の遺構に比べると多い。備前焼や常滑焼の破片が目立った。

土師器・土師質土器 (144～146・151) 皿 (144～146) は、144が口縁部2段凹みナデを施しており、やや古く、他は13世紀前後(平安京Ⅵ期)のものが多い。151は鍋で、口縁部が「く」字に屈曲する。口縁部、体部内面はヨコハケ、体部外面は上半にタテハケとユビオサエ、下半にタタキを施す。

瓦質土器 (149・150) 羽釜である。149は口径25cm、150は口径30cmを測り、短い鍔がつく。口縁端部はやや外側に肥厚し、外端面にヨコナデを施す。口縁外面に2段のヨコナデをめぐらし、口縁部と胴部内面に非常に細かいヨコハケ、体部外面にユビオサエを施す。14世紀以降か。

国産陶磁器 (142・143・152・153) 142は古瀬戸折縁深皿で14世紀前半。143は古瀬戸おろし皿の口縁部である。152は備前焼播鉢で、口縁部が肥厚せず、細かい砂を含む胎土で色調が赤紫灰色を呈することから、13世紀後半の所産である(間壁編年Ⅱ、Ⅲ期)。153は胎土や播目の単位が152と類似することから同時期のものであろう。

輸入磁器 (147・148) 147は青磁碗で、内面見込み部と高台内部は露胎する。14世紀以降に下るか。148は白磁碗底部である。高台内部の削込みは浅い。

溝70006 (154～163) 溝70001と同一と考えられる遺構である。

土師器 (154～158) 皿。154～157は底部から口縁部への立ち上がりが強いが、器壁の厚さが極端に薄いものではなく、13世紀後半から14世紀初頭に相当しよう(平安京Ⅵ期新段階～Ⅶ期古段階)。155は底部外面に板状の圧痕があり、これは土器に調整を施す段階で板などを下に敷いたものと考えられる。154・155・157は口縁部を1段凹みナデするもので、13世紀(平安京Ⅵ期)。156はへそ皿で14世紀中頃に相当するだろう(平安京Ⅶ期)。

瓦器 (159～161) 瓦器壘である。口径11.0～12.0cm・器高3.2cmを測り、内面に粗いヘラミガキを施す。160は高台がなく、14世紀前半に相当する(尾上編年Ⅳ-2、3期)。

溝70023 (162～165) 溝70001・70006と同一の遺構と考えられる。162・163は土師器皿。164は須恵質こね鉢で底部は糸切りする。165は瓦質羽釜で、口縁部に浅い凹線をめぐらせ、口縁端部はわずかに肥厚する。体部内面はヨコハケ、外面はユビオサエを施す。

溝80083 (166) 白磁皿底部である。残存部は露胎している。

溝90144 (167・168) 167は国産陶器である。灰白色で一部に釉が付着し、内面の調整がなされていないため壺類であろう。東海産か。168は白磁碗である。ほかに瓦(684・685)が出土した。

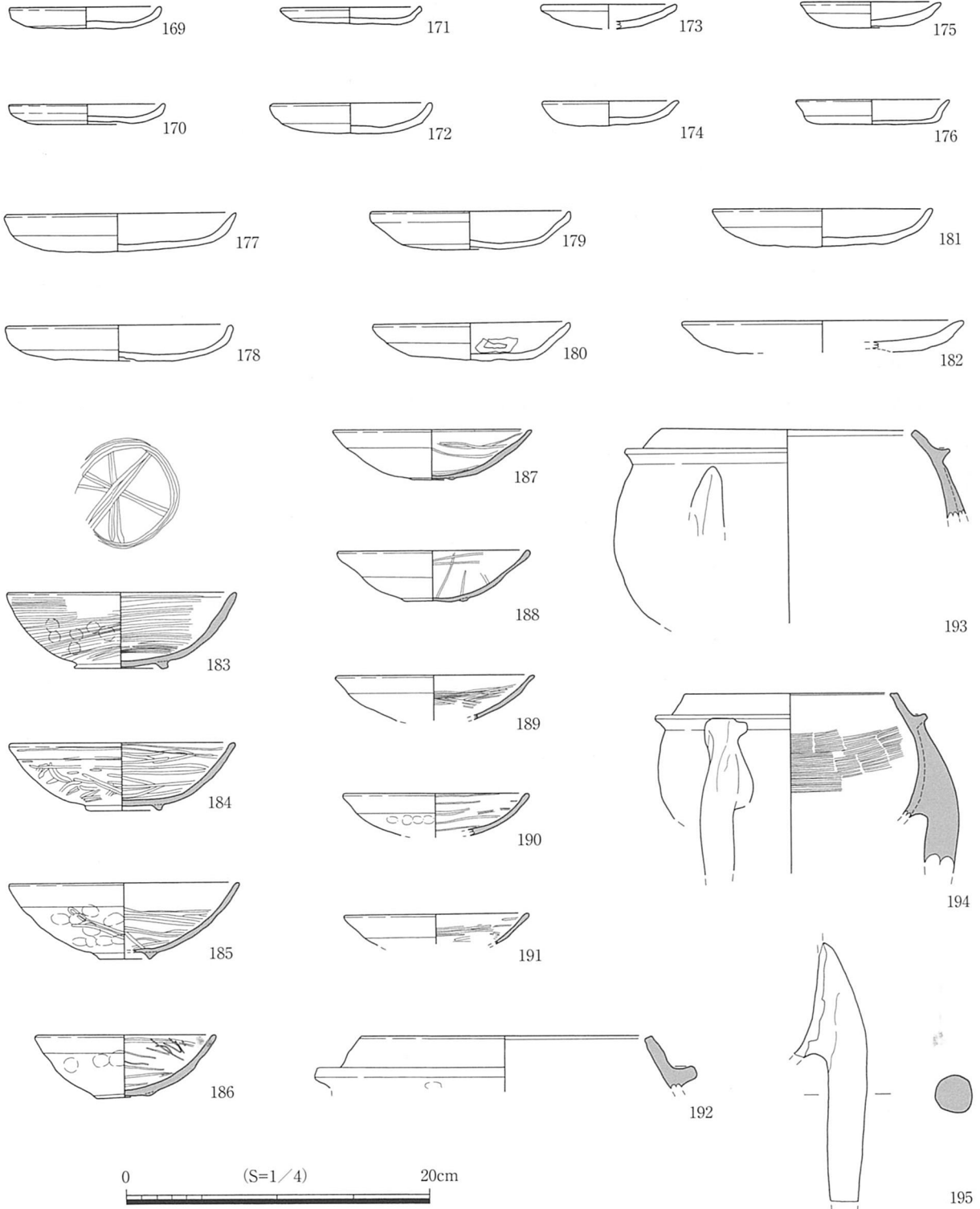
溝100041 (169～195) 土師器・瓦器壘・瓦質釜をはじめ、瓦片8点を含む1000点以上の土器片が出土した。陶器片は1点のみで、先述の溝70001とは対照的である。12世紀前半から14世紀初頭まで時期幅がある。

土師器 (169～181) 皿 (169～181) である。口径が9.0～10cm前後(169～176)と、13cm以上(177～181)の大小がある。169・170は口縁端部を2段凹みナデするもので、12世紀後半(平安京Ⅴ期中、新段階)。171～176は口縁部のナデが1段で外反することから、12世紀末頃から13世紀後半(平安京Ⅵ期)。177・178・181は口径が15cmあり、口縁部のナデが1段で、その直下にユビオサエを1周させて、ナデ状の凹みを表しており、169・170に時期的に対応する皿と考えられる。179・180は口径が13cmと縮小しており、171～175に対応する。179は口縁部のナデと、端部面取りのナデをし、180は口縁部に内側か

ら外側に向けての穿孔がある。

高坏 (182) 底部中央が欠損している。焼成が堅緻であるため古代以降の所産と思われる。

瓦器 (183~191) 瓦器碗 (183~191) 土師器と同様に2つの時期に分かれよう。183は器形は和泉型に近いが、楠葉型に似た暗文を施す。口径15.0cm・器高5.1cmを測り、内外面ともに密なヘラミガキ、内面見込み部に「*」形の暗文を施す。11世紀後半か。184・185は内外面ともに粗いヘラミガキを施し、12世紀中頃から後半に相当しよう (尾上編年Ⅱ-2、3期)。186は口径11.8cm・器高4.1cmを測り、器



第72図 第三-1遺構面出土遺物(2)

高の割に口径が小さく、底部がすぼまる器形である。内面に粗いヘラミガキを施す。187～191は口径が12～13cm、器高も3.5cmを下回っており、法量が縮小化したものである。内面に粗いヘラミガキ、または平行線状や渦巻き状の暗文を施しており、13世紀後半の所産である（尾上編年Ⅳ－2、3期）。

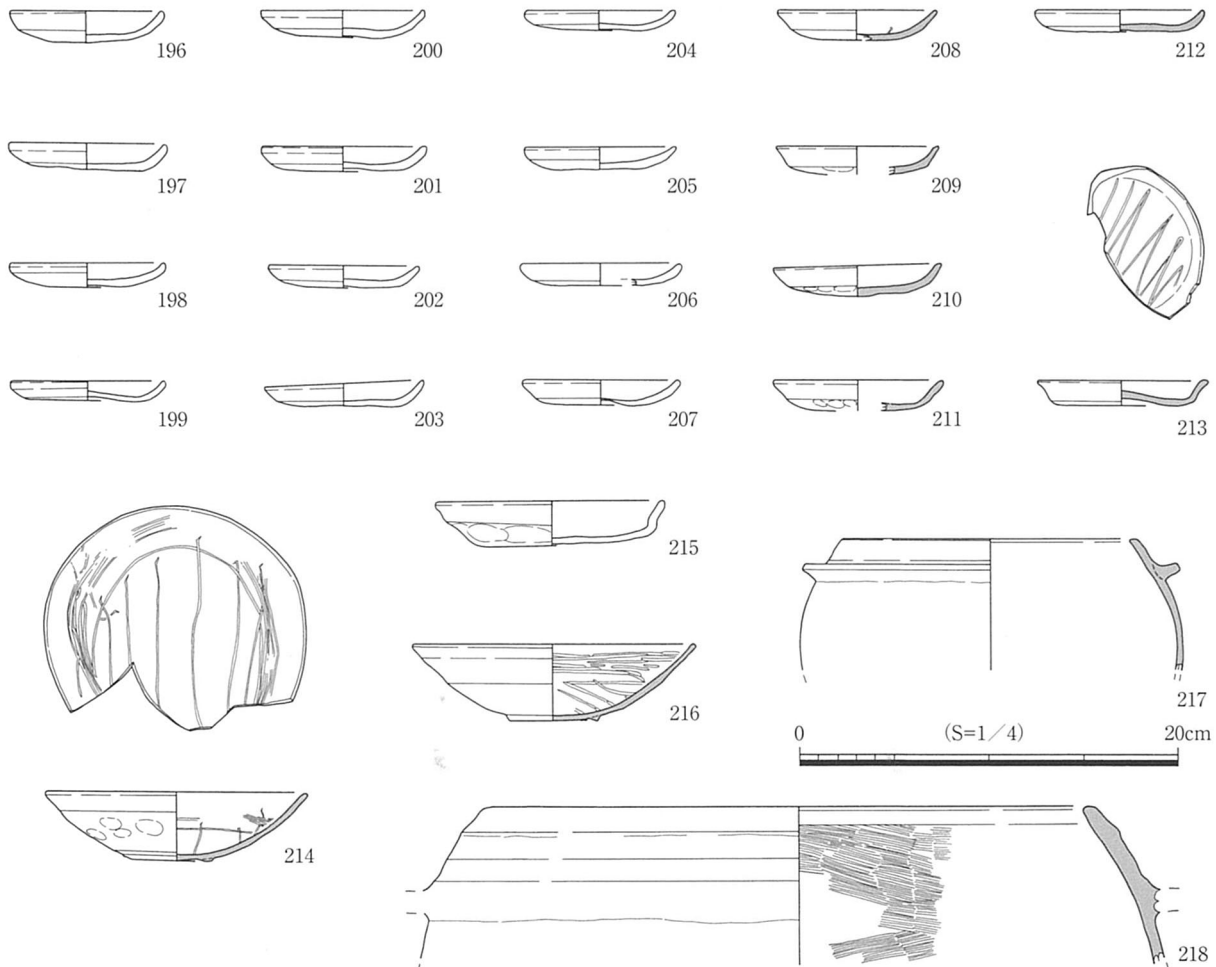
瓦質土器（192～195）三足釜である。192は断面方形の鐙がめぐり、口縁部は2段のナデを施す。193は口縁部が内彎し、短い鐙がやや上向きにつく。194は口縁端部に水平な面をもち、内面に横方向のハケを施す。195は脚部である。

落込み40034（196～218）13世紀後半を中心とした遺物が出土した。

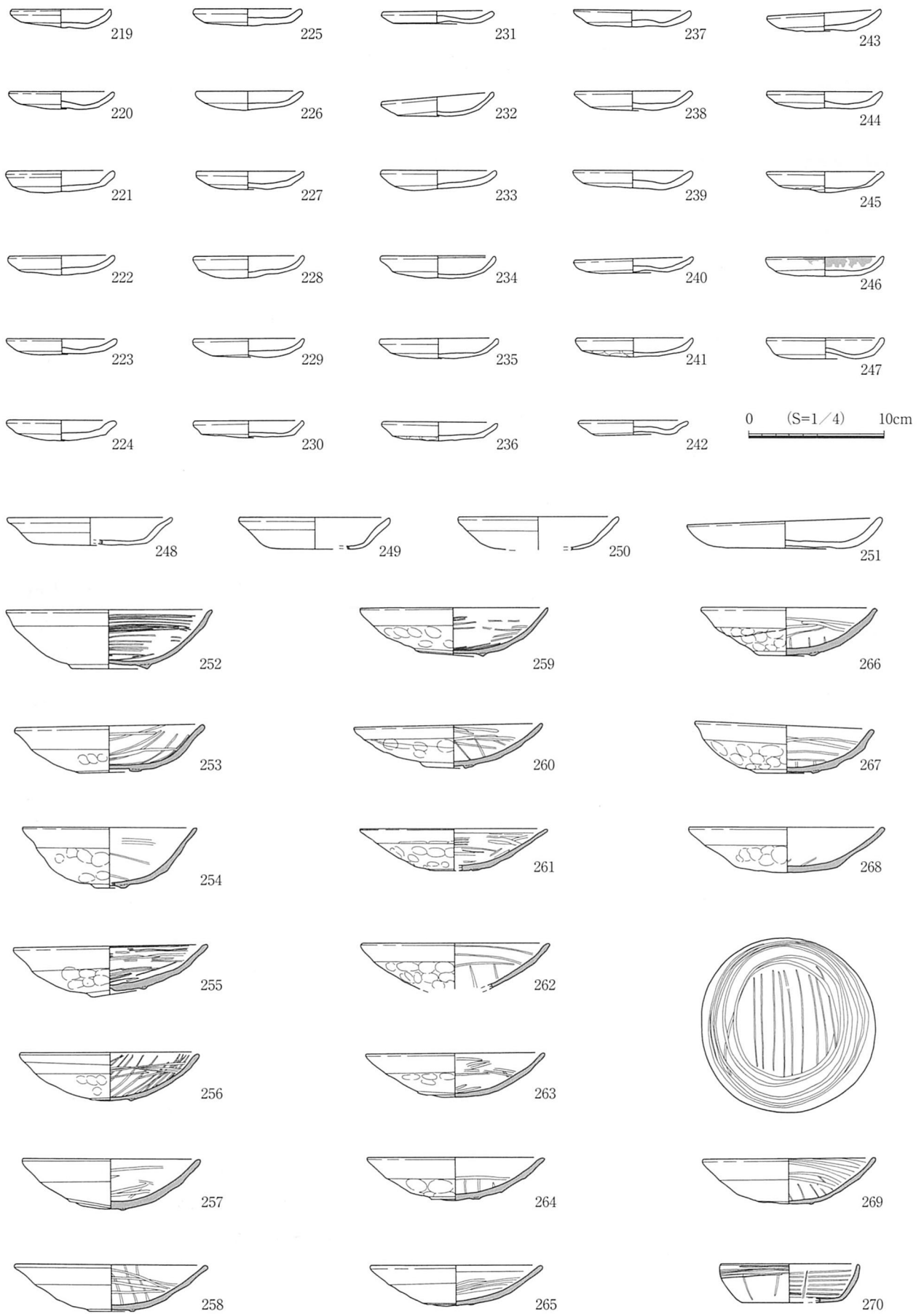
土師器（196～207・215）皿である。口径8.0cm前後で、口径の縮小化がみられる。いずれも口縁部はヨコナデし、底部外面はユビオサエのみである。196～201は口縁部をヨコナデしたあと口縁端部を面取りしており、やや古い（平安京Ⅵ期）が、202～212は端部の形態がさまざまである。また、213は口縁部の立ち上がりがきつく、13世紀（平安京Ⅵ～Ⅶ期古段階）。215は口径12.0cmで、13世紀後半である。

瓦器（208～213）皿（208～213）口縁部がヨコナデにより外反し、内面見込み部にジグザグ状暗文を施す。

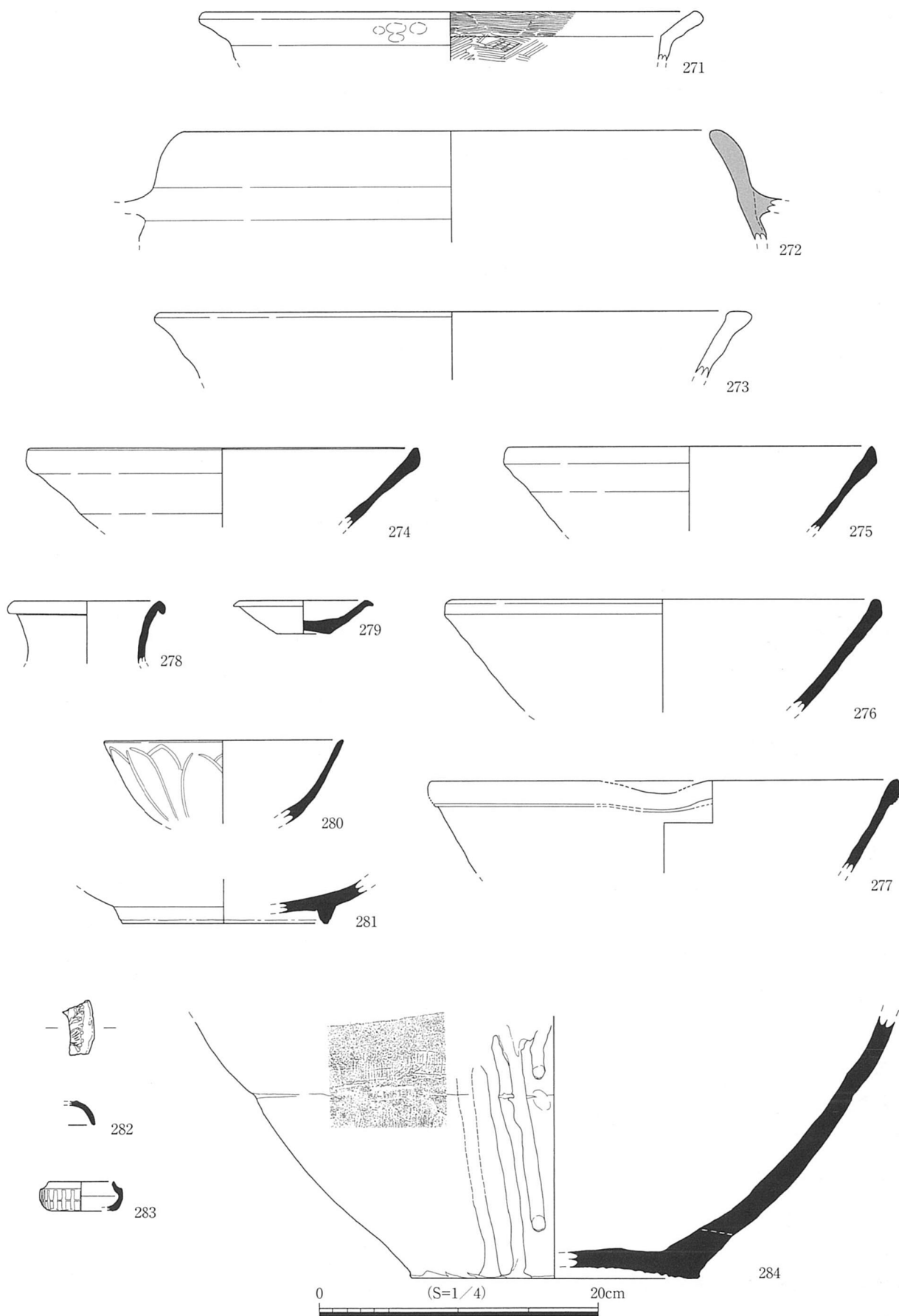
瓦器碗（214・216）和泉型瓦器碗。214は、口径13.8cm・器高3.7cmを測り、口縁部内面に粗い渦巻き状暗文と見込み部に平行線状暗文を施し、退化した高台がつく。13世紀中頃（尾上編年Ⅳ－1期）。216は口径15.0cm・器高4.2cmを測る。外面のヘラミガキは省略され、口縁部内面に粗い横方向のヘラミガキと見込み部に平行線状暗文を施す。高台は断面三角形のものがつき、13世紀前半から中頃（尾上編年



第73図 第Ⅲ－1 遺構面出土遺物（3）



第74図 第三-1遺構面土坑90062出土遺物(1)



第75図 第Ⅲ-1 遺構面土坑90062出土遺物(2)

Ⅲ-2、3期)。

瓦質土器(217・218) 217は小形三足釜である。口縁端部が水平な面をもち、断面方形の短い鑿がつく。内面はヨコナデするが、外面は全体に煤が付着するため調整は不明である。218は羽釜で、口縁外面に浅いヨコナデを2段めぐらす。

土坑90062(219~284) 土師器皿・瓦器塊・東播系須恵器・陶磁器類のほかに瓦・砥石・石鍋・金属製品など、多様な遺物が出土し、総破片数は3100点以上になる。特記すべき遺物として、瓦器輪花塊、常滑焼大甕、白磁・青白磁の合子がある。時期は13世紀後半から14世紀初頭が中心である。

土師器(219~251) 皿。口径の大きさに大小に分けられる。皿小(219~247)は口径が7.2~8.7cmで、口縁端部を面取りして断面三角形におさめるものや、口縁部を1段ナデで外反させ、端部は丸くおさめるものがあり、13世紀中頃から14世紀前半の所産である(平安京Ⅵ期中、新段階~Ⅶ期)。皿大(248~250)は口径が12.0~14.0cmで、底部から口縁部にかけて器壁が薄く口縁部が外反する13世紀後半(平安京Ⅶ期古段階)以降の所産で、皿小と時期的に対応している。

瓦器(252~270) 塊(252~269) 252は口径14.9cm・器高4.2cmを測る和泉型瓦器塊で、内面のヘラミガキが比較的密であることから12世紀後半であろう(尾上編年Ⅱ-3、Ⅲ-1期)。253~269は口径が14cm以下・器高3~4cmと縮小したものとなり、内面のヘラミガキが粗雑である。特に見込み部から口縁部近くまで平行線状暗文を施し、その上から粗い渦巻き状暗文を施すものが多い。また、高台は粘土ヒモを貼りつけただけの粗雑なもので、245のように高台がないものも含まれることから、13世紀後半から14世紀初頭に相当する(尾上編年Ⅳ-2、3期)。270は輪花塊で、口径10.1cm・器高2.9cmを測り、口縁部がわずかに内彎する。内面と口縁部上半に細いヘラミガキを横方向に施し、口縁部内外面が対応する位置に縦ヘラをいれる。高槻市上牧遺跡出土輪花塊に比べ、図面上でみる限り簡略化されており、相伴する瓦器塊から13世紀後半の所産と考えられる。

土師質土器(271・273) 271は鍋である。口縁部・体部内面にハケを施し、外面はユビオサエのみ施す。273は鉢あるいは甕の口縁部であろう。

瓦質土器(272) 羽釜で、口縁部が内彎し、端部は丸くおさめる。鑿は欠損する。

須恵質土器(274~277) 東播系須恵器のこね鉢あるいは片口鉢である。底部は欠損するが、体部は直線的に伸び、口縁部がわずかに肥厚する。12世紀後半の所産であろう。

輸入磁器(278~283) 白磁(278・279・282) 278は四耳壺口縁部である。279は皿で口縁端部が横方向に屈折し、底部がわずかに反る。282は合子蓋で、内面と口縁部外面が露胎する。青磁(280・281) 280は片彫蓮弁文の碗、281は龍泉窯系の盤である。281は畳付けが露胎する。青白磁(283) 型押し合子である。12世紀末頃か。

国産陶器(284) 常滑焼大甕である。体部下半と底部の50%が残存する。体部外面下半までタタキを施し、一部に釉が垂れる。

井戸70004(285~292) 瓦器塊・土師器皿・瓦質羽釜と常滑焼片が数点出土。残存状況はよくない。

土師器(290・291) 皿。口縁部1段凹みナデ、口縁部を外反させており、13世紀前半(平安京Ⅵ期)。

瓦質土器(285~289) 285・286は瓦質三足釜で、口縁部が内彎し短い鑿がつく。287は口縁部の高さが低く、口縁端部に外傾する面をもつ。288・289は瓦質羽釜で口縁部が直立し、口縁端部がわずかに肥厚する。口縁部外面に浅い凹線2条をめぐらし、調整は内面にハケ、外面にユビオサエを施す。285~287は13世紀、288・289は13世紀末頃から14世紀前半の所産であろう。

柱穴90065 (293~297) 293~296は土師器皿で口縁部を1段凹みナデしさらに口縁端部を面取りする。13世紀前半の所産である(平安京VI期)。297は瓦器皿。内面に平行線状暗文を施しており、外面には粘土の接合痕が顕著に残る。

柱穴90067 (298) 瓦器輪花塀である。口縁部内面と外面の端部近くに細い横方向のヘラミガキ、口縁部外面に縦ヘラをいれ、見込み部内面には波文状の暗文を施す。270に比べ若干丁寧に作られている。13世紀前半か。

柱穴100060 (299) 和泉型瓦器塀。口径15.8cm・器高4.4cmを測り、断面逆台形の高台がつく。内面にやや密なヘラミガキを施すが、外面のヘラミガキは省略しており、12世紀中頃(尾上編年II-2、3期)。

5. 第三-2 遺構面

第三-2 遺構面は2D・4D・7Dトレンチで遺構が確認され、主に13世紀後半の遺物が出土した。

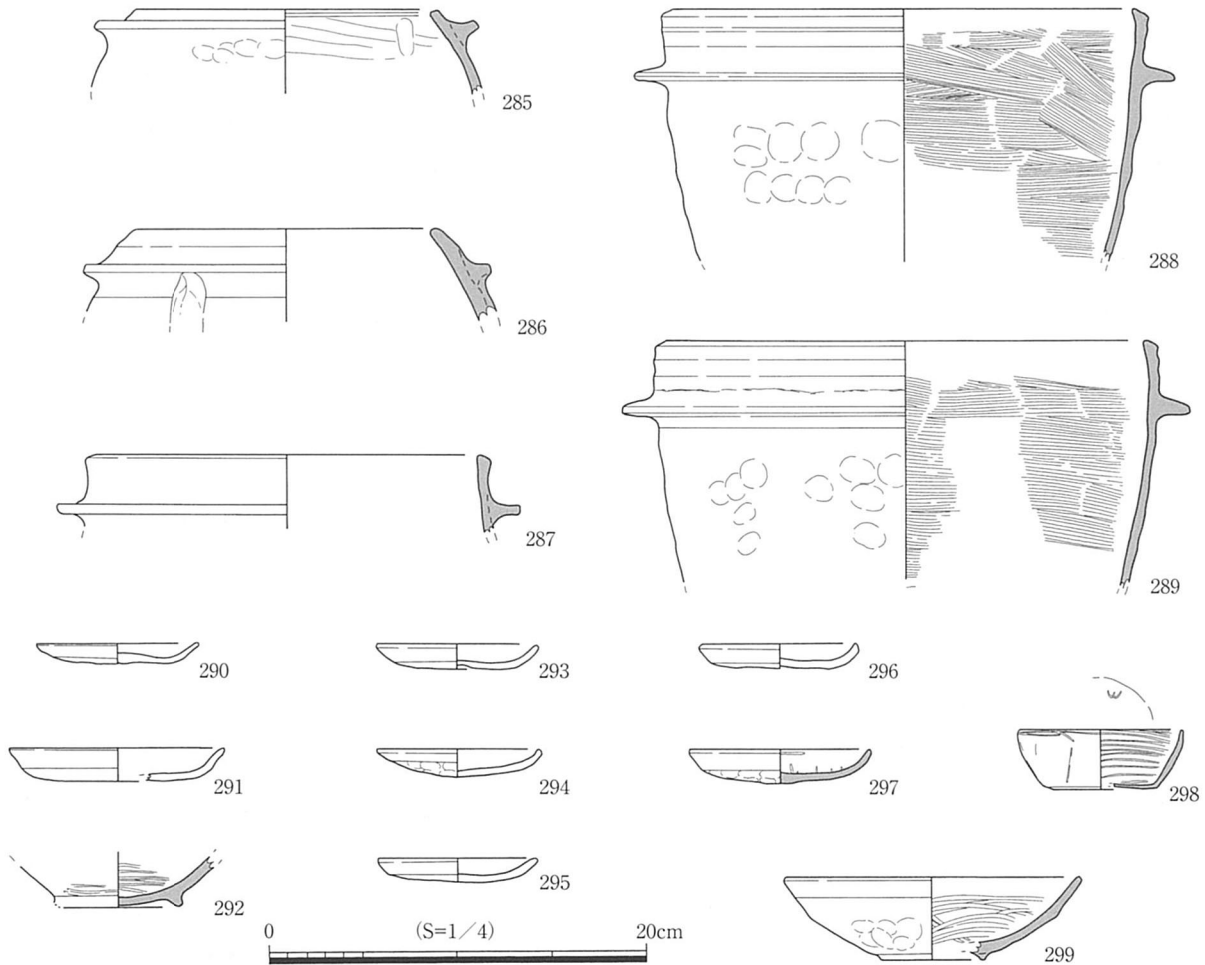
溝40035 (301~304) 土師器皿・瓦器塀が出土したが図化できるものは少なかった。瓦器塀は12世紀と思われるものが和泉型・楠葉型ともに出土した。

土師器 (301) 皿である。口縁部をヨコナデし、13世紀の所産である(平安京VI期)。

瓦器 (302・303) 皿である。口縁部ヨコナデ、内面にヘラミガキを施す。

瓦質土器 (304) 羽釜である。口縁部外面にゆるやかな凹線2条をめぐらし、短い鏝がつく。

溝70005 (305~308) 土師器・瓦器の破片がそれぞれ100点近く出土した。



第76図 第三-1 遺構面出土遺物(4)

土師器（306～308）皿である。306は口縁部の立ち上がりが強く、器壁が薄い。口縁端部が尖り気味であることから14世紀後半（平安京Ⅷ期中段階）か。307・308は口縁部を2段凹みナデする土師皿大小で、12世紀前半から中頃の所産である（平安京Ⅴ期古、中段階）。

瓦質土器（305）羽釜。直立する口縁部に緩やかな凹線がめぐり、口縁端部に面をもつ。胴部外面に煤が付着するため、調整は不明瞭である。13世紀後半か。

土坑40039（300）13世紀の土師器皿である（平安京Ⅵ期）。

6. 第三-3 遺構面

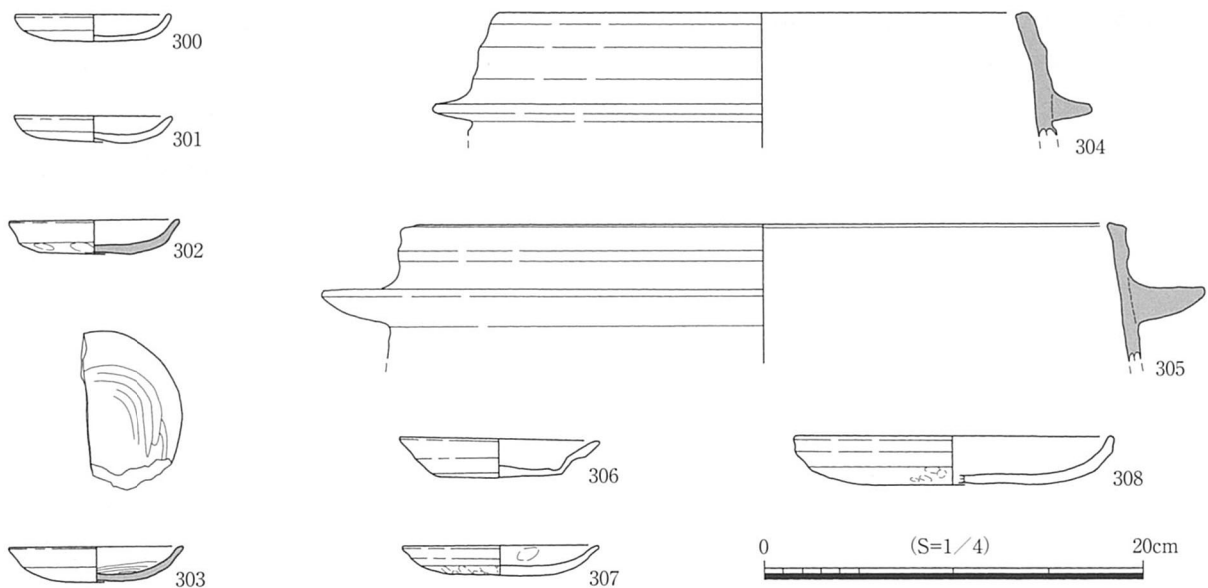
土坑40036（309～311）「蘇民将来」札が出土した土坑である。

土師器（310）皿。口縁部1段凹みナデで13世紀の所産（平安京Ⅵ期）。

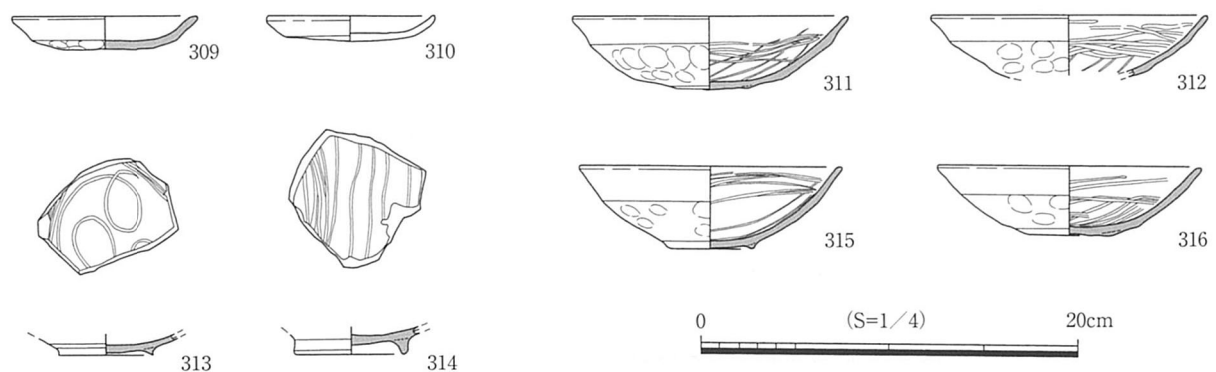
瓦器（309・311）309は皿である。311は和泉型瓦器塊で口径14.6cm・器高3.9cmを測る。外面にヨコナデとユビオサエ、内面に平行線状暗文、渦巻き状暗文を施し、粘土ヒモ状の高台がつく。13世紀前半（尾上編年Ⅲ-3期）。

土坑40044（313）瓦器塊の底部である。内面見込み部に連結輪状暗文を施し、断面三角形の高台がつく。13世紀前半の所産か（尾上編年Ⅲ-3期）。

以下の柱穴40049・40051・40054・40060は建物40046を構成する柱穴である。



第77図 第三-2 遺構面出土遺物



第78図 第三-3 遺構面出土遺物